
真・恋姫†無双～悪魔の右腕を得た男～

くせっ毛のキタロー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜悪魔の右腕を得た男〜

【Nコード】

N36220

【作者名】

くせつ毛のキタロー

【あらすじ】

猫を助けたがために死んでしまった北郷一刀の友人である主人公。しかし、寿命を待たずに死んでしまった主人公の魂は輪廻の輪から外れてしまう。神は魂を輪廻の輪に戻すという建前の元、異世界に送られた一刀のハーレムを食い止めさせるために、主人公に能力を与えて異世界へと送りこむ。主人公の運命やいかに・・・！？

第一話 プロローグ

ふむ、こやつはどうじゃろうか？…。んん、運動神経は悪くなさそうじゃし、頭もそこそこ良いようじゃな。見た目はわりかし普通じゃが、人当たりは良さそうじゃが……。どこか心に闇を抱えているようじゃな……。よし、決めたぞい！ふおっふおっふお、こやつを異世界に送ったら、どんな風に儂を愉しませてくれるのかのう・。。。

老人は、まるで子供が新しい玩具を得たときのような笑みを浮かべ一人の少年を観察することに決めた。

この時、一人の男子学生の死と転生が、彼の意思に関係なく決まってしまった……。

「一本！！そこまで！！」

いつものように、放課後の剣道場には竹刀と竹刀が激しくぶつかり合う音がけたたましく鳴り響く。部員同士での試合を終え、一刻も早く面を外したいと焦る気持ちを抑えつけ、丁寧に紐を解き、独特の暑苦しさから解放される。

「ふう、つかれた〜。」

「何言ってるんだよ、お前大して動いてないじゃんか。」

「動いてないかわりに、一刀の動きに全神経集中させて見切ってるの。」

「まったく、どんな運動神経してんだよ邦祐は…。そんなの、爺ちゃんに稽古つけてもらってる俺でもできねえっての。なんで他の部員の半分しか顔出してないのに、こんな強いんだよ…。さては、お前隠れて練習してるな!? 吐け! 吐くんだ! 邦祐!」

「ええい、やかましい!! 部活出ない日はバイトなんだからそんな暇あるわけないだろ。」

事実、一人暮らしの俺に稽古の時間など無い。道具だって、死んだ親のお古だし…。

「だいたい、一刀は勝負を急ぎすぎるところがあるし、太刀筋も素直すぎるのが悪いんだ。爺さんにも言われてるんだろ? もっと虚実を織り交ぜろって…」

「そうなんだけど…。でも実際、虚実を織り交ぜるってどうすりゃいいんだ?」

「…ちよつと構えてみ。一応防具は全部付けとけ。」

そう言っただけは竹刀を持ち、一刀に構えるように促す。聞いてもわからない場合は、直接身体に覚えさせる。そのおかげかどうかは知らないけど、一刀は大会では俺以外には負け無しの状態だった。

「よしっ…。邦祐、準備できたぞ!」

「それじゃ、始めるか…こっちは防具付けてないから、一刀はひたすら防御な。いろいろフェイントかけるから、騙されんなよ?」

「わかった。…引つかかるのが3回以内なら帰りに何か奢りな？」

「いいぜ。こちらら一人暮らしなんだから、バッチリ買い物代を浮かせてもらおうとしますか！」

そう言つて、部活が終わるまでの残り約30分間、俺達はひたすら打ち合い続け…。

結果的に、一刀は5回ほど引つかかったため、しっかりと夕飯の買い物代を浮かせてもらった。

その後、たわいない話をしながら帰り、家のすぐそばで一刀と別れた。…ふと、何かの音が聞こえたような気がした。

「ヤー、ニヤー、ニヤー」

…どうやら聞き間違いじゃないらしい。多分、近所に捨てられた捨て猫がお腹を空かして鳴いているのだろう。ここで知らんぷりも出来ないし…。

この行動こそが俺の人生を決めるなんて、この時は知る由もなかった…。

「おかしいな。たしかに近づいてるはずなのに、なかなか見つからない…っと見つけた。」

そう言った俺に気付いたのか、鳴き声の元凶は俺を見つけるなり、交通量の激しい大通りの道路の方へと勢いよく駆け出していった。それにして…。

「よりもよよつて黒猫かよ。でもまあ、仕方ないか…これで轢かれてたりでもしたら、それこそ余計に寝覚めがわるいし。」

黒猫の後を追って大通りへと駆けて行く…。

「いたいた。まったく、やっと見つけたよ。」

俺自身、ホツとした心境で、猫を抱きあげたが…。正直、猫を見つけた時に気を緩めたのがまずかったんだと思う。猛スピードでこっちに突っ込んでくる居眠り運転のトラックに気が付けなかった。

このままじゃ俺も猫も助かりそうにない。なら、最後に一つくらい善行でもするとしますか！

覚悟を決めた俺は、歩道に向かって猫を投げ飛ばし、それからすぐにトラックに撥ね飛ばされてこの世を去った…。

俺、たしかトラックに轢かれて死んだはずなんだけどな…。

死んでいるという実感はあるのに、生きているという実感もある。漠然と考えれば変な話だ。いよいよ何たらの納め時ってやつかもな。

「その若いの、何勝手に自己完結しとるんじや。」

…なんか、やたら長い白髭をこさえた変なお爺さ「変なお爺さんじゃないわい。俺はお前から言うところの神じゃ!」…訂正、長い白髭をした何だかイタいお爺さんに話しかけられた。

「お主、神に向かってイタいとは何じゃ?まったく、これからお前

を魔法で生き返らせてやろうというのに……。」

……今なんつった、このリリカル爺さん。俺を生き返らせるとか言わなかったか!?

「本当に…本当に生き返らせてくれるんですか!?!」

「勿論じゃとも。儂はお前の人となりを観察していた。そして出した答えが、異世界へのお主の転生じゃよ。」

「異世界?元いた場所じゃダメなんですか?」

「ダメじゃ。お主は本来、あの世界では死ぬはずじゃない年齢で死んだ。これによってお主の魂は輪廻の輪から外れてしまったのじゃ。魂を正しい輪廻へと戻すのに、最低でも50年は必要となる。そこで、お主には異世界へ転生してもらって、正しい輪廻の輪に戻るまでの時間稼ぎをもらいたいんじゃないよ。儂の暇つぶしのためにもな。」ボソツ

最低50年か……。なんだか、大それた話になってきたな……。そもそも異世界なんかに行って、俺まともに生きてられんのかな?外国にでも送られたら、即アウトだぞ!?!それにどう考えても一番最後が本音だろ……。

「その辺に関しては心配無用じゃ。異世界と言っても、ゲームや漫画の世界じゃし、言葉も普通に通じるわい。…何、タダでは言わん。お主の願いを最高5つまで叶えてやろう。ただし、不死は無しじゃ。あと、人外の能力は多くても3つじゃ。これ以上はサービスできんぞ?」

5つもか…悪くない。とりあえず自衛くらいの力は貰うとしますか。考えに考えた結果……………。

「ならお爺さん、まず1つ目は、デビルメイクライ4のネロと、容姿以外は“右腕”も含めて全く同じで。2つ目は、ボストンバックの形をした 次元ポケットをお願いします。3つ目は、多少俺の容姿を上方修正してもらえると助かります。あまり女性に好かれなかったのは、この容姿のせいな気がして…。4つ目は、頭の良さを生きてた頃の3倍にしてください。多分それだけあれば、諸葛亮に多少劣るくらいになれると思います。最後の5つ目ですが、やっぱり…俺は最低でも20歳までは生きてかったです。でも、それはもう叶わないこと…。ならせめて、本来生きていたら20歳だったであろう時まで、ここで体を慣らす意味あいも兼ねて、修行をさせてもらえないでしょうか？」

「…あい、わかった。1つ目と4つ目はお主の望み通りにしてやる。2つ目の願いじゃが、某ネコ型ロボットの道具と、神話に出るような武器は出せんからの。それで良いなら用意しよう。」

「それでもう十分です。」

「うむ。3つ目の願いじゃが、10人中7人が振り返る程度でいいかの?」

「それをお願いします。」

「最後の願いじゃが…。ぶっちゃけ、簡単にやられたら儂の愉しみが無くなってしまふしの…。良いじゃろう、特別に師匠付きで願いを叶えよう。」

うわー……。この爺さんなんかさりと聞き捨てならないことぶつちやけたよー！でもまあ、生き返られるのなら、この3年間はせいぜい有意義なものにさせてもらいますか……。そうと決まれば、師匠は誰にやってもらいましょうかね……？

…そつだ！あの人にしよう。きっと学ぶことがたくさんあるはずだ。善は急げと言うし、

「お爺さん、それならでダンテさんでお願いします！！」

それから3年間、俺はダンテさんから、剣と銃の扱いについて教わった。

「さて、約束の3年じゃ。これからお主には異世界へと転生してもらう。行先は『真・恋姫十無双』の世界じゃ。そこには、お主の友人である北郷とやらも飛ばされておる。魏の御遣いとなってハーレムになるはずじゃから、お主には呉に士官してもらい、ハーレム阻止と魏の三国統一を止めてもらいたい。」

「魏の方は別に構いませんけど……。別に異世界なら、一刀がハーレムになつても構わないんじゃない？」

「馬鹿もん！！どこの世界に、優しい以外は能無しのお女たらしが、ハーレムを築けるって言うんじゃない！！普通はめちゃくちゃ強かったり、頭が誰よりも切れたり、何かしら突出すべきものが前提としてあるじゃろ！！なのに奴が突出してるのは、女を誑かす才能だけ。これじゃ、女一人も守れんじゃないが！！そんな男に、ハーレムを築く資格はない！！」

この爺さんは、どうも一刀が嫌いなようだ。でも、女の子一人守れないやつに、ハーレムを築く資格が無いという爺さんの言い分も分からなくはない。だって、一刀は可愛い子に、呆れるくらい見境が無いから……。

「でも、何だつて一刀が異世界へ？それに3年間修業してたから、一刀も20歳で送られたんですか？」

「誰があ奴を送ったかは知らん。それと、ここでの1年はお主の世界の1日じゃ。つまり、お主がいなくなってから3日後に送られたことになる。それに、3年経つて、お主の顔つきも変わったから、自分から名乗らん限りわかりはせん。」

「そうですか。…それじゃあ、俺をそろそろ異世界に送ってください。」

そして俺は異世界へと送られた…。

第一話 プロローグ（後書き）

はじめまして、くせつ毛のキタローと申します。小説を投稿するのは初めてなので、いささか文章に稚拙な部分やキャラ崩壊が起きたりしますが、楽しんでいただけるように頑張りますので、コメントやアドバイス等ありましたら、よろしくお願いします。

第二話 孫呉との邂逅（上）

……目が覚めると、俺は森の近くにある川のほとりにいた。

「ここが恋姫の世界……。ここに一刀も来てるのか。まあ、ここにいたって何も変わらないし、近くに村があるかどうか探してみるか。つと、その前につと……」

神からもらった 次元ポストンバックから、護身用の武器を出すことにしたんだが……。

「……何このバック。現代だったら、一代で大富豪の仲間入りできるようなものとか入っちゃってるけど。とりあえず武器はつと……」

とりあえず、バックを漁り10分が経過した……。

「やっぱり、レッドクイーンとブルーローズじゃなきゃね……。さてと、武器も用意したし……。おっと、“右腕”に包帯巻かないと……」
包帯も巻いたし、村を探しに……。行く必要はないみたいだ。

もの凄い勢いで立ち上る黒煙と、悲鳴が聞こえた。

悲鳴が上がった村と思える場所に着いた……。

「これは……。酷いな。よくここまで略奪だの虐殺だの出来るもんだ。」

俺の見た光景は、まるでこの世のものとは思えなかった。両親の亡骸に縋りつき泣き続ける子供・出血によって出来た大きな赤い水たまり・目の前で子供の命を奪われたと思われる両親・無力であったが故に大切な人達を連れて行かれた大人・火が飛び移り、次々と燃え崩れて行く民家……。

「いいから早く来い！！もつてめえらは黄巾党の物なんだからな！」

「いやああ、放して！！誰か、誰か助けて」

あの男が女性を連れて行くこととしてる理由は想像つくけど、一応聞いてみるか…。

「ダメですよ、無理やりだなんて。どうして連れて行くことしてるんですか？」

黄巾党の一員と名乗る男は下卑た笑みを浮かべながら

「決まってるだろ？やりたい時にこいつらを使うんだよ！この村には割と上玉な女が多いからな。」

…うん、決めた。こいつら一方的に虐殺決定。とりあえず、こいつらの潜伏先を聞きださないと…。

「そうでしたか。実は、俺の方でも何人が容姿の良い女性を匿っているんですけど、もし良かったら、あなた方の拠点を教えていただけますか？このまま旅を続けるにも、足手まといなもので…。」

男は先ほどと変わらぬ下卑た笑みを浮かべ、簡単にこちらの策に乗ってくれた。

「ここから南西の方角へ5里程行った所に、使われてないちよつとした古城があつてなあ。そこを俺達が根城にしてるのよ。にしても、てめえは善人面のわりに考へてることは悪人と一緒だな。俺達が何やってんのか聞いた上でいらねえ荷物（女）を引き渡すつてんだからな。」

ここから南西に5里か…さつそく行くとするか。その前にまずは…。

「わかりました。それじゃあ…。」

賊に背を向けて気付かれないようにホルスターからブルーローズを引き抜き……。

「消え失せる、この屑が。」

賊の頭に向けて構えた。一切の容赦すらくなく引き金を引かれた銃は、賊の頭を軽々と吹き飛ばしていった…。

まずい、少しやりすぎたか……？

さすがにこれはトラウマになるだろう光景を見せぬように、銃を仕舞つて、もう安心だということを伝える様に軽く抱きしめながら頭を撫で、

「安心してください。もう大丈夫ですよ。」

「そ、そんなこと言って…私をあいづらの所に連れていくつもりなんでしょう!?!?」

「あれは全て嘘ですから、そんなことはしません…。その代わり、いくつか質問に答えてくれませんか？」

「質問って…何を聞きたいんですか？」

「俺はこの国の人間ではないので、ここがどこかわからないんですよ。」

「ここは建業にいらっしゃる孫策様の治める呉よ。」

「そうでしたか、ありがとうございます。出来たら、孫策さんにこの村のことを伝えてください。」

「貴方はどうするの？」

「ほら、”ゴミ掃除”をしなきゃいけないでしょ？それをやりたかね。」

「無茶、無茶だと思うなら、早く孫策さんと呼んできて下さい…」
「わかったわ。」

そう言って、村の女性を孫策のもとへと急がせた。

こっちもそろそろ“掃除”しに行かなきゃ。村で馬でも借りて行くこと…。

その頃、呉には近くの村が黄巾党に襲われたという報告が入っていた…。

「孫策様！」

「どうした？何か問題でも起きたか」

「はっ！周瑜様。実は、近隣の村が黄巾党に襲撃されたと村の農民から話を聞きましたので、報告すべく駆けつけました。」

「「!？」」

「その人に怪我は？」

「黄巾党の一員に拉致されそうになったところを、珍しい服装の男に助けられたと……。」

「わかったわ。ご苦労様、下がっていいわ」

「はっ！失礼いたします。」

「冥琳、その男についてどう思うかしら？」

「情報が本物なら、巷で噂されている？天の御遣い？はすでに魏にいる。しかし、雪蓮のことだ、生きているのなら御遣いでなくても、有能ならば連れて帰るつもりなんだろう？」

「さっすが冥琳、わかってる」

「なら、手遅れになる前に兵を出さなくては…。祭！祭はいるか！？」

「なんじゃ、騒々しい……。」

「実はね祭、大分前から使われてない古城が、この辺りの賊の根城になってるでしょ？そこに近隣の村の民を賊から助けた男が向かってるんですって。」

「ほう、そのような男があつた村にしようとはのう。」

「違うのよ、それが！話を聞く限りだと、見慣れない服装だつて言うから、気になって仕方ないのよ。だから、手遅れになる前に連れて来てもらいたい。」

「ふむ、儂もその話を聞いて少し興味が湧いたわ。よし、了解したぞ策殿。今から兵を引き連れて行って来ようではないか。」

そういつて出兵の準備をするために下がろうとする祭の背中に

「…やっぱ気が変わったわ。祭、私も一緒にでる！それじゃ冥琳、後よろしくね。」

「ちよつ、ちよつと待て雪蓮！雪蓮！？」

雪蓮のお転婆に振り回される冥琳なのであつた…。

第二話 孫呉との邂逅（上）（後書き）

コメントやアドバイス等ありましたらよろしくお願いいたします。

第三話 孫呉との邂逅（中）

さあ、今回のロケ地はここ！賊（黄巾党）の根城です。それでは、ミッションスタート！！

ミッション1・門番に直（接攻）撃インタビュー（笑）

「すみません、ここって最近、この周辺の黄巾党の皆さんの根城になってる所ですか？」

「そうだが……だれだあ、てめえ？」

「ただのしがない“掃除屋”ですよ。今日はですね……。」
そう言いつつ、レッドクイーンで門番の首を刎ね上げた。

「……お前たちの掃除に来たんだよ……。」
もの言わぬ屍にそう告げ、大剣に付いた血を払ってから町に侵入した。

ミッション2・残りの賊を断罪せよ

「賊のみなさん、出てきてください。皆さんを倒しに来ましたよ。」

と、わざと叫んでみた。

「ひやはは、あいつ何言ってるやがんだ！」

「こつちの人数わかってんのか？ざつと500人はいるんだぜ！？」

「おい、見てみるよ。あの馬鹿が着てる服と武器、ここいらじゃ見かけねえ。きつと売れば高く付くぜ？」

ぞくぞくと出てくる賊を見て、調子にのったのか、

「今なら許してやったっていいんだぜ？身ぐるみ全部置いて行つてもらうがな。」

こつからは気分一新、本気で殺るとするか…。

「あんまり凶に乗ってんなよ…？」

左手にレッドクイーンに持って、賊へと飛びかかった…。

振るう大剣は、たった一振りでも数人単位の賊を切り刻んでいった。

「この現状を見てもまだ、強気でいられるかな？」

「ば、化け物だぁー！！！」

「何言つてやがる。所詮は一人だ。全員同時に襲いかかれば問題ねえ！！野郎ども、かかれー！！！」

「ちっ！まったく、さっきので戦意喪失してくればよかつたのに…。」

武器を器用に持ちかえ、向かってくる賊共の頭を銃で撃ち抜いたり、

手足や首を斬り落としては標的を変える作業を延々と繰り返していた…。

賊の根城になっっている古城の門の前に着くと、門番らしき賊が倒れていた。すでに息はなかったけど、まだ少し温かい……。

「まだ死んでからそんなに経ってないみたいね…。」

「策殿、門の方も開いてるようじゃし、中から悲鳴の類の音が聞こえるのじゃが…？」

たしかに聞こえてくる。それにしても…。たった一人で圧倒的な数の相手に勝てる人間なんて、呂布くらいしか私は知らない。もし本当に御遣いかもしれない人が呂布くらい強かったら、孫呉の復活だってそう遠くないかもしれない…。

「祭、突撃するわよ！」

「了解じゃ！まずは先に、儂と数人の兵で中を確かめる。それから入ってきてください。」

「わかった。頼むわよ、祭！」

そう言って、祭は数人を引き連れて城へと入り込んだ

城に入っただけですぐに感じられたのは、普通ならば吐き気を催しても不思議ではないほどの死臭と、ばらばらになった賊の体、血で真っ赤に染められた壁や地面…。

何より異形だったのは、大剣を背負い、賊の返り血を全身に浴びながらも、目立った傷は何一つもない、見慣れぬ服を着た男だった。

「この数を本当にたった一人でやりおったのかというのか!？」

非現実としか思えない光景に祭の思考は止まった。

あやつが何者かわかるまでは、策殿を中にお連れするわけにはいかん!

さつきから隠れてる人は誰なんだ?…ちょっと話しかけてみよう。

「あの、すみません。そこに隠れているのはどなたですか?」

…反応が無い。もう少し脅しをかけてみるか…

「あと5秒待ちます。それまでに出て来ないと、襲い掛かりますよ?5、4……」

わざと聞こえる様に大声で数えだすと、銀髪で褐色肌のスタイルの良い女性が出てきた。…やばっ、わからなかったとは言え、女性に襲い掛かるなんて言っちゃったよ…

「…お主、いったい何者なんじゃ?」

「俺の名前は沖原邦祐って言います。あなたの名は?」

「儂か…。姓は黄、名は蓋、字は公覆じゃ。お主は姓が沖、名が原、字が邦祐で良いのか?」

ああ、恋姫って、三国志の武将の性別が一部を除いて逆の世界だったっけ……。

「えーっと、俺の国では字っていう文化が無いんですよ。こちらの方法で名乗るなら、姓は沖原、名が邦祐、字は有りません。」

「ほう、字が無いとな!? お主はどこから来たのじゃ?」

「えっと……信じてもらえるかわかりませんが、俺は天の御遣いと呼ばれてる人と同じ世界から乱世を治めるために送られて来ました……。」

「おお、そうじゃったのか! 実は、お主を探しておったところですよ。会ってもらいたい人がいるんじゃないが、構わんかの?」

「黄蓋さんということは、呉の孫堅さんもしくは孫策さんといった辺りですか?」

「うむ、その通りじゃ。お主には策殿に今から会ってもらいたい。」

呉の人達は優しそうだから、“俺の過去”みたいなことはきつくないよな……。

「良いですよ。最初から呉に行く予定でしたし、こちらとしても孫策さんと話せる機会を設けてくれてありがたいです。」

「そうか、会ってくれるか! それにしても、お主自らが呉を選んでくれるとは、なんと僥倖なことじゃ。」

でも、帰り血が付いたままじゃ失礼だろうし…って、なんか黄蓋さんにどんどん引つ張られてるんですけど…。

「すいません、黄蓋さん。こんな帰り血付いた格好じゃ失礼じゃないですか？」

「なに、そんなこと気にすることはないぞ。それとお主に僕の真名を預けよう。僕の真名は祭じゃ。これからは祭と呼んでくれ。」

真名つてものを許されたけど、一応聞いておくべきだよね……。

「あゝ、祭さん？真名つてなんですか？」

「何じゃ、真名を知らんのか？真名と言うのは、本人が心を許した証として呼ぶことを許した名前のことじゃ。もし本人の許可無く真名で呼べば、問答無用で斬られたとしても文句は言えないのじゃ。」

「とても神聖なものなんですな、真名つて。俺の世界には真名の文化も無いんで。俺の場合だと、邦祐が真名に当たるので、気軽に邦祐と呼んで下さい。真名と違って誰に呼ばれても、斬ったりしないんで。」

「そうじゃったか。…そろそろ策殿が待ってる場所に着くぞ？」

孫策さんってどんな人なんだろう？楽しみだな。

三国志の歴史を少しは知っていても、顔も知らない孫策との出会いに胸の期待は膨らんでいく一方だった…。

第三話 孫呉との邂逅（中）（後書き）

コメントやアドバイス等ありましたらよろしくお願いいたします。

第四話 孫呉との邂逅（下）

祭が城に入ってから、一刻ほど経ったけど……さっきまで聞こえてた悲鳴が途絶えたわね。何か中で動きがあったのかしら？

「孫策様！あの城より賊の数名が逃げ出しているようです。」

「また面倒起こされても困るから、捕まえてちょうだい。それに、城のなかで何があったのかも聞いてみたいから。」

「はっ！ただちに。」

それからすぐ、捕らえられた賊が連れて来られた。

「さてと、あなた達がしたことを許すつもりはないけど、城の中で何があったのかを正直に話せば、処遇について考えてあげるわ。」

「あ、悪魔が……悪魔が現れやがったんだよ！！やたらでかい剣を振る度に何人も殺されちまった。それに、あいつは変な形をした鉄の塊を持ってやがった。なんだか知らねえが、爆発音がする度に仲間が頭から血を流して死んでやがんだよ！知ってることは全部話したんだ。頼む、助けてくれ！」

「あら、普段は命乞いされても無視してるのだから、自分達の命乞いだって無視されるってわかってるんでしょ？」

そう言い放ち、私は捕まえた賊たちを全部斬り捨てた。呉の民（家族）に手を出したことを後悔させるために……。

「誰か！これを片づけておいて。」

「わかりました。それと先程、黄蓋様が見慣れぬ格好の男と共にこちらに向かっているとの報告が。」

「そう、わかったわ。祭の所に向かうから、これ頼むわね。さて、どんな人を連れてくるのかしらね？楽しみだわ。」

邦祐に、疑問に思っていた事を聞いてみることにした…。

「そういえば邦祐、お主の腰にあるその変わった武器は何じゃ？何だかけたたましい音を上げておったが？」

「これは銃といって、小型で持ち運びが楽なのに弓よりも威力がある俺達の世界の武器なんですよ。物によっては、弓よりも射程も威力も数段上のだってありますね。」

「それはすごいおう！冥琳たちが聞いたら喰いつきそんな話じゃ。建業の城に着いたら話してやってくれ。」

「良いですよ。仮にも御遣いと同じ世界の人間ですし、呉の役にも立ちたいですから。」

「祭……！」

やたらスタイルの良い人がこちらに向かってくる。聞く限り、あの人が孫策さんだろう。それにしても……。

「祭〜〜！」

「お〜い、策殿〜！今帰ったぞ。」

「あら、この人がそうなの？…ってなんか、固まっちゃってるけど、どうかしたの？」

「はっ！…さ、祭さん、この人が孫策さんなんでしょうか？」

「そうじゃ。どうかしたのか？先程から顔が赤いぞ？」

「いっいえ、別に…（／／／見惚れてたなんて言えるわけないですよ！？／／／）」

「まあ、いいわ。それよりあなたの名前は？私は孫策、字は伯符よ。」

「俺の名前は、沖原邦祐。字とかの文化がないので、こちら風に言
うと、姓が沖原、名は邦祐、字はありません。ある人からの命令で、
呉に仕えるために来ました。孫策さんさえ良ければ、今日からお願
いします。」ニコッ

（（／／／／／つつつ！？／／／／／））

「あれ、お二人とも顔が赤いですけど、大丈夫ですか？」

「「だ、大丈夫よ（じゃ）／／／／／」」

「それで、孫策さん。話を戻しますが、呉の方に士官してもいいで
すか？ここで、無理とか言われると、劉備さんのところか洛陽にで

も行くしかないんですが……。」

「貴方さえ良ければ、うちに仕えてもらえると助かるわ。」

「では、孫さ「雪蓮でいいわ」…それ、真名ですよ？いいんですか？そんな簡単に真名を許して…？」

「いいのよ。それより私は何て呼べばいいのかしら？」

「気軽に邦裕と呼んでください。俺のところには真名の習慣がないんで、邦裕が真名にあたりますね。でも、この世界みたいに神聖なものじゃないんで、いきなり呼ばれても問題ありません。」

「わかったわ邦裕。それじゃあ、用事も終わつたし、帰りましょうか！」

一行が建業に帰る途中……。

「そういえば、大陸一だとか自称してる管輅が『この地災厄に見舞われんとする時、乱世を鎮める為、天の国から平和の使者が流星と共に現れん…』みたいな予言してたけど、多分それって魏にいるっていう御遣いのことよね？邦裕のことは予言されてなかったけど、どうしてなのかしら？」

「それはきつと、俺がイレギュラーだからだと思いますよ。」

「いれぎゆらー？それって天の国の言葉なの？」

「はい。わかりやすく言えば、ここにいること自体がすでにおかし

な事なんですよ。」

「それは…どういう意味なのかしら？」

「俺は、ここで言う天の国ではすでに死んでいるんです…。」

「「「どういうことなの（じゃ）！？」「」」

「そのまんまの意味ですよ。信じてもらわなくても構いませんが、確かに俺は死んだ。本来死んだ人間の魂は輪廻の輪に戻り、また別の別人として、生まれ変わる…はずなんです。だけど、俺はその輪から理由もわからず外れてしまった。そこに、神が現れた。」

「「えっ！？」「」

「まあ、普通はそんな反応ですよ。神は俺の魂を戻すのに最低でも50年はかかるから、元通りになるまで異世界で過ごすように言われたんです。勿論、その世界で死んでしまつては元も子もないんで、自分の身は守れる程度に力を貰いました…。」

「そうだったの…。でも、力を貰ったんでしょ？なら何で右腕は怪我をしてるの？」

「ああ、これは怪我じゃないんです。刺激が強すぎて、人には見せられないんですよ。」

「うわ〜、見たい見たい！ね、お願い！ちょっとだけでいいから見せて！」

「いや、見世物じゃないですし。…見たら後悔しますよ？」

「小霸王の名に懸けて後悔はしないわ。さ、早く早く」

「はあ、わかりました。……少しだけですよ？」

そう言つて腕の包帯を外し、“デビルブリンガー悪魔の腕”を雪蓮達の前に出した。

「な、に、これ…これは、腕…なの？」

紅い腕に、筋の様に走る青白い魔力光…何より、人の手とは思えない程に力強く発達した指と爪。これを人間の腕とは呼べないだろう…。

「あまり見せたくない理由がわかりましたか？これは人の腕じゃない。悪魔の腕です。」

「じゃ、じゃが、腕以外は何もないんじやろう？」

「ええ、確かに腕以外は人ですけど、この腕を見せただけで人は俺を化け物つて思うでしょうね。やっぱり、貴女方の元へは行けそ…甘くみないで!!」…。

「呉の民を、私の家族を救ってくれた貴方に、恩を仇で返すようなことは絶対にしたりはしない！他の誰が何と言おうとも、貴方は誰よりも純粹で優しい人間よ。嫌われるかもしれないとわかっているのに、私の我が儘を聞いてくれた。この手だつて見た目はびっくりするけど、皆と変わらない人の温もりだつて感じられるわ…。」

そう言つて、雪蓮は俺の右手を握り続けた。

「呉の人達や仲間には私からちゃんと話をするから！だからお願い、呉に、私達に貴方の力を貸して…お願いします！」

「貴女は王なんだから、どこの馬の骨ともわからない俺なんかに頭を下げないでください…。そこまでされて断るなんてできません。雪蓮さん、祭さん、改めてよろしくお願いします。」

「「ええ(うむ)。」」

「ところで策殿。皆に話すのは良いが、何と言って説得するつもりなんじゃ？」

「そうね……いつそのこと、私の旦那様ってことにしちゃう？」

「それなら誰も強く出れんし、良いかもしれんう。」

「ちょ、ちょっと！いくらなんでもそれは「何か文句あるの？」…ありません。」

「うん、それでよろしい」

「さっそく策殿の尻に敷かれてるようじゃの、邦祐？」

「まさか来て早々、こんな綺麗な人を話を合わせるためとはいえ、奥さんにするなんて思いもしませんでしたよ…。」

「さっそく惚気おつて…。若い者は羨ましいのう。」

「何言ってるんですか？祭さんだって十分すぎるほどに魅力的でしょ

「？」

「そ、そうかう？／＼／＼／」

「むう……（私にはそんなこと一言も言ってくれなかったのに）。」

何、この重苦しい感じ……。

なんだか異様な雰囲気にも包まれながらも、一路建業を目指す一行であつた……。

第四話 孫呉との邂逅（下）（後書き）

コメントやアドバイス等ありましたらよろしくお願ひします。

第五話 今更ながらの主人公詳細

名前：沖原 邦祐

年齢：生前・17歳 転生後・20歳

身長：181cm

体重：78kg（戦闘に必要な筋肉の付き方なので、細身）

容姿：10人中7人が振り返る程度の容姿。前髪は目にかかる程度で鬼太郎みたいに右に流す感じで、後ろは肩にぎりぎり届かない長さ。少し癖つ毛で、色は黒。瞳も髪と同じ黒。服装は、白のYシャツに黒のネクタイ、黒のベストを着用し、赤いフードの付いた黒いロングコートを羽織っており、下は黒のストレートパンツに黒のシューズ。

性格：基本的マイペースで穏やか。あまり欲が無いが、気に入った人や物に関しては独占欲が働く。過去にあったことが原因で、本人も気づかぬうちに陰と陽の二面性がある（親しい人達には優しいが、それらに害をなす者・気に入らない者などには冷徹で無慈悲）。自己流の悪・即・斬を持っている。

好き：読書・音楽鑑賞・昼寝・甘いもの・平穏な日常・猫・旅

嫌い：自分勝手な人・考えを押し付けてくる人・紳士的じゃない人・束縛

武器：レッドクイーン・通常の細身の刀身を分厚い曲刀に換装した

大剣。柄の近くにあるバイクのアクセルのようなバーを捻る事で噴射剤が作動する。無理な強化をした推進剤噴射機構は、時折巨大な火炎を噴き、これが銘の由来となった。

ブルーローズ・既存の銃を改造した六連装大口徑リボルバー。片手撃ちで一発の威力がやや高いが、連射性能は低い。バレルを無理矢理二つ備えさせてあり、既に原型は留めておらず元となった銃が何であるのかは判別不可能。縦に並設されている2本のバレルから数十分の1秒という誤差で種類の異なる二発の弾丸を発射する。

閻魔刀ヤマト：「人と魔を分かつ」とも、「闇を切り裂き食らい尽くす」とも言われている日本刀だが、普段は実体がない。一定の条件下でのみ使えるようになる。

ステータス（恋姫風）：統率4 武力5 知力4 政治3 魅力2
く4

得た能力：？DMC4のネロと同じ能力
？ポストンバツクの形をした 次元ポケット（宝具と道具は×）
？知識が諸葛亮と同等（諸葛亮の知識を1/3にした位が、生前の主人公）

技：デビルメイクライ4のネロと一緒になので、そちらを参照してください。オリ技は出す度に説明を加えていきます。

第六話 建業

建業に着いた一行……。

「ここが建業……。良いところですね。」

「そうですね。それに私の家族も良い人達ばかりだから、貴方の事も温かく迎えてくれると思うわ。」

そんなたわいない話をしながら、城を目指していると……

「その人達を放しなさい！！街の人に罪はないでしょ！？」

「うるせえ！！誰か知らねえが、あんたらが会った男のせいであ、俺達の仲間が殺されたんだ！！お前たちにも同じ目に会わせてやる！！！」

「お母さん助けてよ～～！！！」

「あの声は、権姫と街の子供かの？もう一方は、聞かん声じゃが……」

「とにかく、近くに行ってみましょ！」

3人は急いで言い争いの場に向かった。

「おじいちゃん！この騒ぎはいつたい何なの！？」

「ああ、雪蓮ちゃん。なんだかようわからんが、仲間を殺されたと

かで、賊が敵討ちにきたんじやよ。それで、子供が捕まってしまったの。」

「あいつは…。」

賊の根城を襲った際に見逃した賊が、俺達が話している現場を目撃していたのだろう。その報復として、自分達よりも弱い人間を虐げようってのか…。

「雪蓮さん、祭さん。すいません、ちよつと行ってきます」

「ちよ!?!どこ行く気よ!!」

街の人を人質にしてる賊に、手をこまねいていると…。

「おいお前。報復する人間を間違ってたんだろ?」

「て、てめえはさっきの!!」

「…あなた、誰?」

見慣れぬ格好の男が賊に話しかけ、賊の方も敵が見つかったのか人質を邪魔だと言わんばかりに突き飛ばした。

「やっと見つけたぜ。仲間たちを殺された恨み、身を持って味わえ!!」

「…何言ってるやがる。もともと、先に手を出したのはあんたの方だ。俺はただ、襲われてた人を助けたついでにゴミ掃除をしただけ」

だ。」

「うるせえ、くらいやがれ!!」

言い争いを終えて、見知らぬ男に襲い掛かった賊だったが、彼以外は眼中に無かったのか、祭が弓を引いている事に気付かず、そのまま肩を射抜かれて、あっさりと近くにいた兵に取り押さえられた。

「邦祐、大丈夫だった!？」

「姉さまは彼の事を知ってい「ええ、問題ありませんでしたよ、雪蓮さん。」…貴様、なぜ姉さまのことを真名で呼んでいる!!」

「なぜって言われても…許されているから呼んでいるんですけど？」

「嘘だ!貴様のようなどう見ても弱そうな奴になど「蓮華!いい加減にしなさい!」姉さま!？」

…なんか、知らない女の子にいきなり怒鳴られたんですけど。

「雪蓮さん、こちらの方は誰なんですか?なんだか雪蓮さんに似ている気が…。」

「当たり前よ、私の妹だもの。孫権っていうの。蓮華、彼は沖原邦祐魏にいる天の御遣いと同じ世界から来た人よ。ちなみに、彼の实力を知っているからこそ、私は真名を許したわ。」

「なっ!?!それほどまでにこの男は強いのですか?」

「そうねえ。賊の根城に単身で突っ込んで行って、傷ひとつなく賊を倒したくらいだから。」

「あの場で全員倒せていれば、さっきみたいな問題は起きなかった。すいません雪蓮さん、俺が一人見逃したばかりに…。」

「良いのよ、気にしなくて。あなたのおかげで街の人に怪我は無いし、捕まえることもできたわ。ありがとう。」

「いえいえ、俺は何もして「信じられません!!」…。孫権さん？」

「姉さま、やはりこの男がそんなに強いなど、どうしても信じられません。この男と戦わせて下さい!」

「別に良いけど、すぐに負けると思うわよ? 邦祐、構わないかしら?」

「ええ、良いですよ。孫権さんがそれで信じられるって言うのなら…。」

それから城の調連場に向かった…。

現在、お互い得物を持って向かい合うに至る。

雪「それじゃ、いつでもいいわ。」

その言葉と同時に孫権が斬りかかってきたが、

剣の太刀筋が真っ直ぐすぎる。これじゃまるで一刀と一緒だな…。

そう思い、あえて攻撃せずに防御に徹していると…。

「どうした！なぜ攻撃してこない！やはり貴様が強いというのは嘘だったのか！？」

「そこまで言われちゃ、仕方ないですね…。それじゃそろそろこちらから仕掛けますよ？ちゃんと防御してくださいね？せうのっと！」

「っ！？キャツ！？」

最初の一振りで孫権の剣を真つ二つにして、これ以上の戦闘を出来なくした。

「あり得ない、あんな大きな剣を軽々と扱えるなんて…。疑ってしまつてごめんなさい。貴方、本当に強かったのね？っつう！？」

そう言つて立ち上がるうとするが、倒れた時に足を痛めたらしく立ち上がる事が出来なかった。

「すみません、少しやりすぎました。雪蓮さん、城の医務室の場所を教えてもらつても良いですか？孫権さんを運ばないといけないので…。」

そう言つて孫権を横抱き、いわゆるお姫様抱つこで持ち上げた。

「っつ！？／／／／／／」

「ああ、蓮華ずるーい！！私もしてほしい！！邦祐、私も蓮華みたいに抱つこして〜。」

「ちよ、雪蓮さん！？冗談言っでないで、早く医務室の場所を…。」

「／／／／／」

「貴様〜！！蓮華様を放せ！」

…今日だけで貴様呼ばわりされたのは二人目だ…。

「今度はどちら様ですか？早く孫権さんを医務室に連れて行きたいのですが…。」

「蓮華に何をした！？」

「何って、勝負したら孫権さんが足を痛めたらしくて…。」

「蓮華様に怪我を！？貴様、絶対に許さん！！」

まずい、孫権さんを抱えてる状態じゃ…。

「死ね！！」

振り下ろされた曲刀は神のいたずらのごとく、包帯を斬り裂いていた。スルスルと落ちていった包帯は、隠していた右腕を露わにしていた。

「…貴様、その腕は「見ちや駄目よ！！」…雪蓮様！？」

「彼にとってその腕を見せることは、私達の真名かそれ以上の重さがあるの。それに彼の言うとおり、蓮華は勝負で負けて怪我したの。」

彼は悪くないわ…。邦祐、腕は大丈夫？怪我はない？」

「大丈夫です…。これはそんなにやわじゃない。こんな武器じゃ傷一つ付きませんよ。」

「よかったあ。駄目じゃない思春！蓮華に対する忠誠が高いのは良いことだけど、相手の話もろくに聞かずに斬りかかるなんて。もし斬った相手が恩人だったらどうするの？」

「うっ！おっしやる通りです。…済まなかった、私の名は甘寧。字は興覇。雪蓮様の話を聞く限りだと、真名に当たるものを勝手に見ってしまったことになる。ならば、私も真名を許すのが道理だろう。私の真名は「ちよつと待った！」「…何だ？」

「真名は、俺の事をちゃんと信頼できてからでいいですから。それだったら、腕の事は気にしないで普通に接してくれた方が俺は助かる。」

「わかった。本当に済まなかった。」

「良いですって別に。それより孫権さんを運ばないと悪化する一方ですよ？」

「蓮華様……！？…ご無事ですか！？」

クールなのに、どこか抜けてる思春なのだった……。

第六話 建業（後書き）

コメントやアドバイス等ありましたらよろしくお願いいたします。

第七話 着いて早々・・・

城の前に着いた……。

「ここが私達の城よ。」

「すごいな、こんな立派なのは見たこと無い。」

「へえ、そうなんだ。」

「孫策様、お帰りなさいませ。」

「ただいま。皆に会わせたい人がいるから、今から玉座に来るよう
に伝えてちょうだい。」

「了解しました。」

兵士が他の武将を呼びに行ってから一刻ほど過ぎ……。

「よし、皆集まったわね？さっき伝えてもらった通り、会わせたい
人がいるのよ。邦祐。」

「はい。皆さんはじめまして。俺の名前は沖原邦祐って言います。
気軽に邦祐って呼んで下さい。一応、天の御遣いって呼ばれてる人
と同じ世界の人間です。今日からよろしくお願いします。それと一
応、孫策さんと黄蓋さんの真名は預けてもらっていますが、皆さん
は信頼できると判断してからで構いません。」

「そうか、二人とも許しているなら私達も真名を預けよう。私は周

瑜。字は公瑾。真名は冥琳だ。よろしく頼む。」

「私は陸遜。字は伯言。真名は穩です。よろしくお願いします。」

「シャオは孫尚香。真名は小蓮。シャオのことはシャオと呼んで

「私は呂蒙。字は子明。真名は亞莎です。よろしくお願いします。」

「私の名前は周泰。字は幼平。真名は明命と言います。よろしくお願ひします。」

「そう言えば、蓮華様と思春の姿が見えないが…?」

「あー。それはですね、孫権さんに勝負を挑まれて、武器ごと彼女を吹っ飛ばした時に足を痛めたみたいで…。甘寧さんはその付き添いです。」

「そうだったのか。ところで邦祐は武官と文官、どちらで働くんだ?」

「出来れば、武官だけはやってほしいわね。思春と一度勝負してもらえれば、どれくらい強いかわかるんだけど…。先に文官の能力から見せてもらいましょ?冥琳お願いね。」

「この世界で、初めて武以外の能力を見せることになった。」

「それでは、私の後に付いて来てくれ。」

冥琳について行った先には、大量の資料があった……。

「今からこれをやってもraithたい。では、終わったら私の部屋に来てくれ。」

そう言って部屋を出ていった冥琳を見送ったあと、3時間足らずで資料の山を片づけ、それを確認した冥琳に、文官としての能力の高さを知らしめた。

「文官としては文句なしね。じゃあ、武官の方はどうなのかしら？ 思春、準備はできてる？」

「問題ありません。お前の力を見せてもらっぞ邦祐！」

雪蓮さんの一言で、甘寧を相手に始まった模擬戦だったが、攻撃を受けきったあと、突進してからの斬り払いである ストリークを放ったら、孫権と同じように吹っ飛んでしまい、あっさり、勝敗が決まった。

「想像以上だな、お前の力は。…私の真名を預かってくれ。真名は思春だ。」

「確かに預かりました。よろしくお願ひしますね、思春さん。」

「すごかったわね。貴方を単騎で戦場に送り込んだら、どのくらいの戦果を挙げるのかしら？」

「そうですね…。まあ左腕だけだと、呉を相手するのが精いっぱい

「じゃないですか？」

「じゃあ、右も使えたら？」

「まあ、右まで使えちゃったら袁家と魏が一緒に来てもその日のうちに勝ちが決まるくらいですかね…。」

「どれだけ規格外なのよ…。」

「……その右腕には何か秘密でもあるのか？」

「はい。簡潔に言うと、俺の右腕は人間のものじゃない。悪魔の腕なんです。見せても良いんですが、見ても後悔しないって約束してもらえますか？」

「…同じ孫呉に仕える仲間なのだから、あまりにすごいものでなければ、驚きはしてもお前を避けるようなことは無いだろう。」

「その前に、孫権さんを「もういるわ。」あつ、足の方は大丈夫ですか？まだ痛いなら薬ありますけど…？」

「そうね…。まだ少し痛いし、せつかくだから貰おうかしら。それと私のことは蓮華でいいわ。」

「わかりました。これが薬です。それじゃ、皆揃ったみたいなので外します…。」

「……………つつつ！？」

「まあ、流石に始めて見る人は驚くわね。」

「邦祐……。これは、本当にお前の腕なのか!？」

「そうですよ。触ってみますか？」

「ああ。…ふむ、たしかに違和感もないほどにお前の腕だな。これを見たらお前の能力が高いのも頷ける。これ以外に何か天のものとか知識はあるのか? あつたら教えてもらいたい。」

そう言われたので、次元ポストンバツクを漁っていると……。

「なんだこれ？」

入っていたのは、手紙だった。

「この手紙を見ているということは、なんとか無事に生きているよ
うじやの。そんなお前に、褒美をやるう。それでせいぜい儂を愉し
ませるのじゃぞ。一つ目じゃが、お主のために燃料が水でも走れる
バイクを用意しておいたから、有効活用するようにの。二つめは、
孫策と周瑜の死亡フラグ回避の仕方じゃ……。説明は面倒じゃから以
下省略。」

なんかもう俺自身より、道具の方がチートくさいな……。それと、な
んで大事なところで手抜きなんだよ神……。

「その手紙には何が書いてあったのだ？」

「俺専用の馬に変わる乗り物を送ってくれたのと…雪蓮さんと冥琳
さんの……。」

「私と冥琳の…何？」

「二人が死亡する予言と、その回避方法が書いてありました。」

「「えっ!？」」「

「ちょっと、邦祐!姉さま達が亡くなるってどういうこと!？」

蓮華さんが掴み掛ってきた。

「落ち着いて下さい…。まず雪蓮さんですが、曹操との戦前に、命令を無視した魏の兵士が猛毒のついた矢で、お墓参り中の雪蓮さんを暗殺するそうです。冥琳さんは、雪蓮さんを失ったことと、日頃の政務による重度の過労で病を患い、亡くなると…。」

「ど、どうにかならないの!？」

「多分どうにかするために俺が送られたんだと思います。まず雪蓮さんですが、お墓参りに行かないか、俺と一緒に行くだけで大丈夫なようです。冥琳さんは、すでに病の兆候が見られるので、他の人達に仕事を回して、仕事量を減らして休みも取って下さい。あと、これを飲むようにと…。」

「これは何だ…?薬の様だが。」

「それは妙薬です。手紙に書いてある通りの効能だと、冥琳さんの中の病の完全治療・免疫の大幅な向上・疲労の除去らしいですね。」

「それは本当なのか!？」

「ええ、良くなるはずですよ。一応、信頼できる人の物なので…。それに、二人は孫呉の復興に欠かすことは出来ないんですよ。仕事の方は、穩さんや亜莎さんにもう少し分けてください。二人なら必ず期待に応えてくれますから。」

「そうか…。すまないが、穩、亜莎、二人も頼んだぞ。」

「はい!」

「…さてと、これでここでのまずやるべきことは終えた。雪蓮さん、仕えて早々に悪いんですけど、旅に出てもいいですか?」

「えっ!?! な、なんで旅に出る必要があるの?」

「これから先、呉が上手く立ち回れるように仕込みをしに行くんですよ。もし上手く事が運べば、有能な武将や軍師が手に入るし、兵の鍛錬や政務の負担も減らすことが出来る。だから、行かせてくれませんか?」

「ちゃんと帰ってくるのよね? 家族も仲間も助けられたのに、御礼も出来ずに別れるなんて、孫呉の… 私達の誇りに反するもの。」

「必ず戻ってきますよ。それを前提で話があります。」

「その話とは何なのじゃ?」

「あと数カ月ほどしたら袁紹から董卓討伐に参加するようにとの手紙が来るでしょう。その時に一度皆と合流します。そこで袁紹の人となりを見て、もしも自身の利益しか考えてない頭のオメデタイ人間のようなら…」

「……お前、まさか!？」

「ご想像の通り、俺はその戦のみ董卓側に付きます。」

「……………!？」

「心配しなくても、呉に手は出しませんし、出させません。その辺に関しては、その時にお話ししますが、簡単に説明すると、他の軍の人達に気付かれないように、兵を少しずつ建業に帰して行ってください。あくまでも、重症を負って戦える状態じゃないという名目で。」

「けっこうあくどいこと考えたりするのね……。」

「これも孫呉の早期復興のためです。そのためなら泥でもなんでも被りますよ。それじゃあ、ちょっと董卓のいる洛陽に行ってきます。」

「わかったわ。そのかわり、これから敬語で話すの禁止ね。もし破ったら、酷いんだから。」

有無を言わせない笑みで、こちらを見てくる。何だか、あの笑みには逆らえない気がする。

「……………分かった。それじゃあ皆、行って来る。少しの間お別れだ。」

こうして、俺は建業に着いてから一日も経たずに洛陽へと出発した……。

第七話 着いて早々・・・（後書き）

コメントやアドバイス等ありましたらよろしくお願ひします。

第八話 月

建業に来ていた商人に洛陽への行き方を聞き、神から貰ったバイクを、途中小休止をはさみながら走らせ続けること丸一日。さすがに疲れたが、洛陽の近くにまで来れた。あと20分も走れば洛陽に着くだろうし、ちょっとくらい寄り道してもいいだろう。

「それにしても…いつの時代だつて森林浴はいいもんだなあ。この世界に来て日は浅いけど、一瞬でも穏やかな時間を送れたこと」「きやああああ！」「…は無いんだよな。いい加減俺にもものほんとさせてほしいっての…。」

…俺って、デフォルトで誰かを賊から救うみたいなのが設定されてんの？まあとりあえず、声のしたところへ向かうか…。

お仕事で近くの町に寄つた帰りに、ちょっと休もうと思って、森の中に来ただけど…。

「どうしよう、詠ちゃん達とはぐれちゃった。」

ただでさえはぐれない様になって、詠ちゃんに言われてたのに…。よりによって迷うなんて…。

「おい嬢ちゃん、良いもん着てんじゃねえか。良いとこの娘か？」

まるで品定めでもするかのような目つきで、賊は少女のことを口の腫で捉えていた。

「あ、あなたは誰なんですか？」

駄目。詠ちゃんに知らない男の人が来たら逃げなさいって言われてるけど、怖くて動けない！誰か、誰か助けて！！

「見りゃわかるだろ？おれは「はい、邪魔　　！！」「へぶうつつ！？」ズザー、ゴロゴロー、ボタン・・・」

なんか、違う男の人の声がしたけど…。なんだろう、この人は悪い人じゃないってわかる気がする…。

「大丈夫？どこも怪我とかしてない？」

「あ、ありがとうございます！私は董卓、字は仲穎、真名は月です。助けていただいてありがとうございます。」

なんか…この小動物みたいな可愛らしさを振りまくのが、あの董卓らしい。とりあえず、歩きながらこの子の話を聞かなきゃ。

「俺は沖原邦祐、気軽に邦祐って呼んでくれ。それより良いのか、そんな簡単に真名を預けて…？神聖なものなんだろう？俺の世界には真名の文化はないけど、孫策さん達に教えてもらったんだよ。」

「はい、確かに真名は神聖なものですが、あなたに助けてもらったのですから、良いんです。…真名の文化がないってどこの出身なのですか？」

うん、この子は良い子だ。だからこそ、会えて聞いてみよう…。

邦祐さんの、ばいく？つていう乗り物に乗る前にへるめつと？つていうかぶり物を渡されたんだけど…。上手く出来なくて邦裕さんがやってくれたまでは良かった。問題は…こんな近くで父以外の男の人の顔を見たことが無いし、その、つい見惚れてしまって長々と見てたら目があつて…「へう／＼／＼」なんて声を聞かれてしまいました。恥ずかしさで俯いていると急に声をかけられました。

「月ちゃん、そろそろ出発するよ？」

「ひゃ、ひゃい／＼！邦ひりよさん！」

「月ちゃん、わざと？」

「ごめんなさい、噛みました…。。」

「うっそだ〜」

「噛みまみた…。。」

「嘘じゃない!?!」

「神はいた…。。」

チ　　ン、合掌……。

「って、違〜う!?!なんで知ってんの!?月ちゃんもしかして現代っ子なの!?!ん〜、考えるほどに不思議は増すばかりだけど、今は先を急ごう。」

邦祐さんが何か言ってたけど、私には何なのか分かりませんでした…。

「ゆ、月ちゃん…そろそろ行くところか？後ろに乗って。そこそこの速さは出るから、落ちないようにしっかき？まってね。腰の辺りが一番？みやすいから。」

「は、はい／＼／」ギユウツ

小休止をとるつもりで足を運んだ森で董卓を助け、まさか 物語のネタをやると思わなかったものの、無事に洛陽へと出発した。

はい、洛陽に到着しました。バイクはどうしたって？はは！あのネコ型のポケットにはバギーが入ったんだぞ！？俺のバックに、バイクの一台や二台入らなくてどうする？ってなわけで、今はポストンバックの中に入っているであります、はい。

街を見る限り、独裁や暴政をふるっているとは思えない。裏切り者か、内通者か、これは軍に仕官して調べるしかなさそうだし…。

「ここが私の住んでいる城「月」？無事だったの！？」あつ、詠ちやん！邦祐さんが助けてくれたんだよ。だから私の真名も預けてあるの。それでね、なんか私達に大事な話があるからってお城に来てもらったの。邦祐さん、彼女が私の幼なじみの賈馱です。」

「僕は賈馱、字は文和。まずは、月のことを助けてくれてありがとう。早速で悪いけど、貴方の名前と目的を教えてほしい。」

「俺の名前は沖原邦祐。天の御遣いと同じ世界の出身で、今は呉に

仕えているが、訳有りて旅に出ている。勿論、旅の目的はこの洛陽にある。それを話す為にも、ここにいる武将で、月の味方だと断言できる者のみここに集めてほしい。」

「…わかった。誰か、華雄と霞、それと恋達を呼んできて。」

少しして、4人の武将が現れた。

「この4人が、月の仲間って断言できる人達よ。右から、華雄、張遼、呂布、陳宮だよ。」

「そうか。はじめまして、俺は沖原邦祐って言います。今日は董卓軍の人達に話があつてきた。」

「先程詠から紹介があつたが、私は華雄、字は無い。」

「うちは張遼、字は文遠や。月を助けてくれてありがとな。」

「…呂布、字は奉先…。月、助けてくれてありがとう。」

「いいんだよ、別に。たまたま通りかかっただけだし、初めは月ちゃんか董卓だったなんて知らなかったんだから。」ナデナデ……

「ん……//」

「恋殿に触るなです！！ちんきゅ〜きゅ〜っく！！」

「よつと！随分な御挨拶だな、陳宮であつてたか？」

陳宮が飛び蹴りを放ってきたが、とりあえず回避した。それにして

も、まさか頭を撫でていただけで、飛び蹴りをお見舞いされそうになるとは…。

「あつてますぞ。」

「ならよかった。それと君の飛び蹴りはなつてないな。そのうち、本当の飛び蹴りを教えてあげよう。」

「本当ですか！？どんなものなのか、早く知りたいですぞ！」

「俺の世界ではレインボウと言っている。簡潔に言つと、着地のことを一切考えない代わりに、勢いのまま突っ込んで相手に両足の飛び蹴りをぶちかます諸刃の剣だ。会得したいか陳宮？」

「したいですぞー!!」

「なら、教えよう!!だがその前に、本来するはずだった話をはじめめないとな。」

董卓軍の武將と挨拶をすました後、数カ月後に起こるであろう問題について、ようやく本題について話し始めたのだった……。

第八話 月（後書き）

コメントやアドバイス等ありましたらよろしくお願ひします。

第九話 事実と落日の未来

陳宮との雑談を終え、本題に入る。

「今日ここに来たのは、俺の世界の史実だと、数か月後に洛陽が戦火に包まれるという事を伝えに来たからだ。それと、史実での戦の結末と巻き込まれた理由についても話そうと思う。」

「……………えっ!?!」「……………」

「なんで洛陽が…?」

「心苦しいことだけど、言ってしまうえば…月ちゃんが洛陽で暴政を働いているというのでっち上げによつてだ。」

「な、なんでそんなことに!?!」

「原因として挙げられるのは、袁紹・袁術の手柄欲しさによる行動と、ここにいない人達の中で、月ちゃんの地位を欲しがっている奴がいるかもしれないってことだ。」

「じゃ、じゃあ、結末はどうなってしまうのですか?」

「まず、華雄さん…。」

「なんだ、言ってみろ…。」

「?水関で、相手の挑発に乗って討ち死にします。もし、このまま誘われれば突っ込むという猪ぶりを改善できなければ、呂布ちゃん

くらいまで強くならないと、確実に死にますよ？」

「馬鹿な……。」

「これは、俺の世界の史実の結果ですから、皆で変えれば良いんです。次に張遼さんですが、魏の夏侯惇に敗れて魏に下ります。後の4人は、全員蜀の劉備のもとに行きますが、呂布ちゃんと陳宮ちゃんは今将として、月ちゃんと詠ちゃんは、便宜上は死んだことになり、真名以外の名を失って侍女として働くことになる。勿論、必然的に洛陽は失うことになる。」

「「そ、そんな……。」」

「なあ邦祐、なんとかならへんの？」

「その為に来たって言ったでしょ？少なくとも、軍全体の力が上がるのは前提だ。次に、この軍の兵から10人ほど俺に預けてくれなかな？内外問わずに情報収集したり、黒幕を暗殺するための能力に特化した部隊を作りたいんだ。その次は戦の時のことだけど、これは袁紹の頭がどれだけオメデタいによるな。噂通りのお馬鹿さんなら、こちらに付いて、呉以外の兵士を蹂躪させてもらう。もしそれほどでもなかったら、連合には付くけど、何もしないし、呉軍も董卓軍に攻撃はさせない。でも、何よりも最優先すべきことは、華雄さんの猪ぶりを直すための訓練をすることかな。これだけで、籠城戦での守りがより堅固になるはずだ。」

「何を言う。私にそんなものは「必要ないって言えるんですか？」

ああ、そつだ！」

「…華雄さん、貴女には武将としての立ち位置をきちんと理解して

もらつたためにも、俺と模擬戦をしてもらつ。」

「いいだろう！私はお前程度などには負けはせん！！」

「慢心が自分を滅ぼすつて、なんで分からないのかな？」

知っていたらそれはそれで違和感があるが、あの某金ピカも、慢心が原因で負けてつて言うのに……。

調連場にて……。

「準備はできたか？」

「ええ。ですが、華雄さんに大怪我を負わせるわけにはいかないの
で、素手でやらせてもらいますよ……。」

「貴様、私の武を愚弄する気か！？」

「別にそんな気はありませんよ？今見せているのは、貴女に対する
絶対的強者の余裕つてやつですよ。剣があれば簡単に勝てますけど、
頭に血が上っている今の貴女くらい、素手で十分なんですよ……。ほ
ら華雄さん、いつでもどうぞ。」

くっ！馬鹿にしおつて……この金剛爆斧の錆にしてくれる！

「私の武を愚弄した罪、その身で償ってもらつぞ！でやああ——
！」

「ほらほら、大口叩いてるわりに掠りもしてないですよ？それとも、

貴女御自慢の武は、片腕しか使えない相手にすら勝てないんですか？」

「くそおっ！避けてばかりいないで攻撃して来い！！」

強気な発言をしてはみたものの、正直言っただけでここまで強いとは思っていなかった。どんなに攻撃しても、当たる気配が感じられん……。

「いいんですか？それじゃあ、最初は右脚で蹴りますよ？」ガンツッ！

宣言通りに右脚の蹴りが来たが、なんだこの一撃の重さは！？手が痺れて武器が……。

「次は左脚行きますよ！ちゃんと防御しないと、負けちゃいますよ？」

くそ……。このままでは負ける……。

「ほらほら、戦闘中に考え事なんかしてる余裕あるんですか？そんなに余裕なら……ハアツッ！」「ガンツッ！……バキッ…カラン、カラン……」

「しまっ…!？」

「はい、止めえ…!！」

「くっ…!！」

私はその瞬間、間に会う筈もない防御を取るしかなかった。……しかし、いくら待っても私を襲うはずの激痛は来なかった。

「俺との力の差が理解できましたか？華雄さん」

「ああ、嫌でも思い知った。済まなかった、お前の話を認めたくなかったんだ。殊更、武においては自信があったが、気付かぬうちに慢心していたのだな……。だが、ここまではつきりと見せつけられたおかげで、私自身の慢心は消えた。これからは今まで以上に精進しなくては……。」

ここまで圧倒的な武を見せつけられたのは、恋以来のことだった……。

華雄さんとの模擬戦を終え、部屋に戻ってきた……。

「自分の立ち位置がわかったようですね。そこで華雄さん、もう一度訊ねます。」

「訓練のことだろう？ぜひともお願いしたい。この程度では、誰かを守ることも叶わん。」

「わかりました。それと月ちゃん、兵の方は大丈夫かな？無理だったら、5人くらいでも良いんだけど……。」

「大丈夫なの、詠ちゃん？」

「うーん、変わらないとは思っただけど、まだ分からないから、やっぱり最初は5人でも良い？」

「十分だよ、ありがとう。さて、それじゃあ早速やるとしようか。張遼さ「霞でええよ。あんたは会ったばかりの月達のために動いてくれとる。なら、信頼の証としてうちの真名を預けるわ。」…わかりました、確かに預かりました。」

「…恋つて、呼んでいい。…くにひろは、良い人。」

「恋殿…！？そんな簡単に真名を預けるな」…ねねも、預けて「恋殿」…。仕方ないです…。真名は音々音ですぞ、ねねと呼ぶです。」

「恋ちゃんに、ねねちゃん。確かに預かった。なら俺も真名に当たる物を見せなくちゃね…ちょっと驚くと思うから、気をつけてね？」

そう言つて包帯を外し、皆に見せた。

「これは…腕、なんですか？」

「そつだよ。見た目こそ悪いけど、これは腕だ。悪魔のだけど…ね。」

「悪魔のつて…。何か特別な事とか出来たりするの？」

「出来るけど、今は秘密つてことので…。」

そう言つて、包帯を腕に巻き直した。

「わかった。今回はそれで良いけど、いつか必ず教えてもらつからね？月、行くよ？」

それだけ言って、月ちゃんと一緒に残った政務を片づけに部屋に戻っていった。

「さてと、霞さんとねねちゃんが兵の鍛錬をしてるんだよね？当面は、これに書いてある方法で鍛錬してもらえないかな？訓練の内容もちゃんと教えるから、大丈夫だと思う。」

やり方：兵の両手両足に重りをつけた状態で訓練させる。まずは鉛の板一枚ずつ付けて訓練する。兵が慣れてきたら、徐々に重りの量を増やしていく。以上。

「なあ、こんなんでええの！？なんかもつところ、パーっと天の世界の道具で出来たりせえへんの？」

「俺は便利な機械じゃないんですから、そんなこと言っても何もありませんよ？」

「んなこと言わんとお、助けてや！くにえも〜ん！」

何この軍……。なんで現代っ子のネタが分かるの！？コアじゃないだけマシだけど……。

「とにかく、兵の強化は地道が一番です！華雄さん、やっぱり訓練は明日から始めましょう。その時に壊してしまった武器の代わりを渡しますから、今日は体を休めてください。」

「わかった。明日から頼むぞ？武器の方も期待しているからな。出来れば斧を頼む。」

「分かりました。相応しい物を用意しますよ。」

それだけ約束して、なんだかどっと疲れたので、その日はもう休むことにした……。

第九話 事実と落日の未来（後書き）

コメントやアドバイス等がありましたら、よろしく願いします。

第十話 地獄の特訓〜邦祐特製 ジュース〜

今日から邦祐による鍛錬が始まる。一体、どのような方法で私達を強くしようというのか、楽しみでならない…。

「今日から一週間で、新しい訓練方法を覚えてもらうことにします。それじゃあ、霞さんとねねちゃんの方の兵士の皆はこっちの重りを、霞さんと華雄さん、それと俺専属の5人はあっちの重りを両手足に付けてください。ちなみに、外していいのは、風呂と寝るときのみですから、それ以外で外している人がいたら何かしらの罰則を与えます。個人だとサボるかもしれないから、5人一組を組んでください。連帯責任だから、その組全員で罰を受けてもらうことになります。」

「なあ邦祐、これってどの位の重さなん？」

「兵士の皆は、重り一つにつき一貫(3.75kg)なので、合計四貫(15kg)、霞さん達は一つにつき一貫弱(約5kg)なので、合計五貫弱(約20kg)を付けたまま訓練してもらいます。勿論、これじゃ楽かなと判断した場合には重りの重さを二倍にするか、武器の重さを3〜5倍にしますよ。」

「ホントに地道やな。何か他に特別な決まりとか無いん？」

「あ、聞いちゃいます？訓練中たまに長距離走をしてもらいますが、それで、一定時間内に到達できなかった人全員に罰として俺特製の飲み物を飲んでもらいます。体に良いものしか入れませんから大丈夫です。」

「それなら、罰にやらんではないか。健康に良いものどことが罰なんだ？」

「なら、試してみます？……ちょっとこれ飲んでみて？」

そういつて飲み物を兵の一人に渡した。

「じゃあ、いただきます。…普通に美味しそうな色とかしていますけど…っ！？」
　　っ！？ぐはっ……」
「バタンッ

「お、おい！大丈夫か！？衛生兵！衛生兵！！！」

「とまあ、飲めばあんな感じになります。」
「ニコッ

「『あんな感じになります。ニコッ』、やないやろ！！！！なんてもん飲ませようとするんや！？」

「平気ですよ。時間に間に合えばいいんですし…。」

「…それってもしかして、うちらも飲むん？」

「ええ、武将も含めて誰一人例外はありません。そのためには、月ちゃんや詠ちゃんにも協力してもらいます。要は、鍛錬以外でも自主的に訓練して、体力をつけられただけの話です。ちなみに俺はこの訓練を、条件をどんどん厳しくしながら3年間（神の所で）やり続けましたけど？」

「さ、3年間もこれを…。」

「恐ろしすぎて考えたくもないが、飲みたくなければ身心共に強くなれということか…。そうだ邦祐、私の新しい武器はどこだ？」

「実はですね、候補がいくつか拳がったんですけど…これなんかどうですか？」

そうやって渡されたのは、今まで使っていた武器とあまり変わらなかった。変わったと言えば、先端に槍が取り付けられていることくらいだろう…。

「ふむ。あまり見ないが、この武器は何というのだ？」

「それはハルバードっていう武器です。今までの大斧じゃ、斬るしか選択肢がありませんでしたけど、突き加わること、選択肢が増えるでしょう？どんなに華雄さんの攻撃が速くても、斬る事しか出来ないならある程度予想が付けられます。けど、突きは距離感が掴みづらいから回避が難しいんです。そうですね霞さん？」

「そやなあ。うちもここぞと攻め立てる時は突きを主体にして、確実に決められるって思った時に斬る方に変えるからなあ…。」

「だ、そうですね？それに、武器自体が前よりも少し重いんで、今まで以上に扱うには身体能力の向上が必然なんです。この訓練をちゃんと乗り越えられれば、恋ちゃん位の腕が立つ武将じゃないと太刀打ち出来ないくらいに強くなれますから、頑張ってください。」

「私の武が…恋に一步でも近づける。…よし！さっそく始めるぞー！」

あの人中の呂布に近づけることに浮かれすぎていたのか、この後に

地獄が待っているなど考えもしなかった…そして身を持って体験した。『美味しい話には裏がある』と…。

訓練が始まった。ここからは、甘く見られないためにも、口調とかを少し変えないと…。

「全員重りは付けましたね？じゃあまず、建物の周りを10周走る事から行きましようか。ちゃんと足を揃えて下さい。揃ってなければもう1周追加しますから。」

「なっ！？そんな理不尽な！！」

「理不尽で結構。守りたいものを守りきるためには、理不尽でも何でも強くならなきゃいけない。勿論、死んでしまうなんて以ての外だ。大事なもののためなら、意地汚くても構わないから生に縋りつけ！！」

「っ！…わかりました！！」

「それじゃ、外周いつてらっしやい。…霞さん、何いきなりサボろうとしてるんですか？」

「ぎくっ！？」

「これは…お仕置き決定ですかね？ねねちゃん、ちょっと来て。」

「何かありましたか？」

「うん。そろそろ、ねねちゃんに技を教えようと思ったんだけど…。でもその前に、霞さんが鍛錬をサボろうとしたから、何かお仕置きをしなきゃと思って。何か無いかな？」

「ん〜。霞殿はお酒好きなので、禁酒が良いと思いますぞ？」

「なら月ちゃんに、霞さんは禁酒一カ月の刑に「行って来ま〜」す！！」本当にお酒好きなんだな…。」

二刻ほど経ったところで様子を見ると、全員の足並みが揃っていた。普段からの調連がきちんと身につけているのだから、良くて分かれる。

「ご苦労様。少し休んだら、一対一での戦闘訓練を一回ごとに相手を変えてやってもらう。もし戦闘訓練で一度も勝てなかったら、問答無用で『あれ』を飲ませる。一度勝ったからと言って手を抜くやつには2杯飲ます。そのかわり、全勝した人には、一度だけ『あれ』を免除できる権利を与えよう。死ぬ気でやるように。霞さんと華雄さんは負けることは許しません。負けた時点でお仕置き決定です。全勝しても免除はありませんからね…。」

「ええっ!?!？」

「当たり前です。貴女達は將軍でしょう？兵に負けるなんて許されない。負けるってことは、戦場じゃ武将相手にじゃなく、ただの一般兵に負けるってことですから。」

それを聞いてがっくりと肩を落とす二人…。

「でも、俺もそこまで鬼じゃない。流石に二人ともとはいきません

が、訓練で二人が勝負して勝った方の願いを一つ叶えてあげます。何が良いですか？」

そう言うと、霞さんはたちまち元気になり、華雄さんは悩み始めた。

「うちは、天の国のお酒が飲んでみたいわあ。」

「私は、決まったらで良いか？」

「良いですよ。」

それから三カ月、何人か『あれ』の犠牲者は出たものの、兵の一人一人が他の軍の兵士にはまず負けない強さにまで成長した。専属の兵たちは…。

「少しやりすぎたかな…。」

5人全員がそこそ立派なアサシン集団へと生まれ変わっていたりした。まあ、戦力はあるに越したことはないし、そろそろ黒幕を探し始めるとしよう。洛陽に3人くらい常駐させておけば、ここを離れたとしても、月ちゃん達を守れると思うし…。

「アインズとツヴァイ、二人には呉に戻った時に着いてきて欲しい。ドライとフィーアは洛陽で情報収集と、黒幕を見つけ次第連絡してくれ。フュンフは月達を陰から守ってくれ。危険分子と判断でき次第、処分するように。」

「……御意。」「……」

さて、残るは華雄さん達だけ…。

「はぁーーーーー!!!」

ガキイン、ガン、ガン、キイン……

「…華雄、すごい、強くなった。…勝てるけど、相手するの、大変…。」

二人がかりだとはいえ、恋ちゃんをかなり手こずらせるまでに成長していた。霞さん自身も恋ちゃんに肉薄しているし、ちよつときついかもしいれない。華雄さんの猪対策は挑発に乗る度に『あれ』を飲ませることで、自身に対する一切の悪口が効かなくなった。あとすることは…。

「華雄さん、あれから何か願いは決まりましたか？」

そう、訓練での試合で華雄さんが辛勝したのだ。願いを叶えなくてはい…!

「それなら、真名をつけてくれ。」

「それで良いの?」

「ああ、今の私にはこれくらいしかない。」

「わかりました。……柳花なんて、どうですか?」

「柳花か…。悪くない。これから私の真名は柳花だ。皆にも真名を預かってほしい。」

良かった、気に入ってくれたみたいだ。さて、ここでもやるべきこともとりあえず一段落ついた。

「皆、聞いてくれ。こっちでの準備は整ったし、一度呉に戻ると思う。」

「戻っちゃうんですか？」

「大丈夫、すぐに会えるよ。ちょっと顔あわせに行くついでに、噂の御遣いの面を拜んで来るだけだから。それじゃあ、行って来るね！」

「いつてらっしゃい、邦祐さん。」

目指すは建業。皆は元気になっているのか気になりつつもバイクを走らせて行った……。

第十話 地獄の特訓〜邦祐特製 ジュース〜（後書き）

本来はないはずですが、華雄の真名を勝手に考えて付けさせていた
だきました。途中に出てきたアインスだのツヴァイなのは、【PH
ANTOM OF INFERNNO】の登場人物に付けられるコー
ドネームみたいなものです。

コメントやアドバイス等がありましたら、よろしく願います。

第十一話 帰還

邦祐が洛陽へ向けて出発してから、もう3ヶ月が経った…。あれから思春に頼んで稽古に付き合ってもらった時間を増やしてもらった。それで今は休憩中…。

「邦祐は今頃何をしているのかしら？」

「気になりますか、蓮華様？雪蓮様と気の合うあいつのことですから、自由に過ごしているんじゃないですか？…そろそろ休憩を終えて、鍛錬を再開しましょう。あいつとの差を少しでも縮めたいのでしょう？」

「そうね、思春。さ、再開するわよ！」

強くなるほどに彼との距離を感じてしまう…。思春も感じていたりするのかしら？

蓮華様から鍛錬に費やす時間を増やすように頼まれてから3ヶ月。少しずつではあるものの、太刀筋が鋭くなってきているのがわかる。だからこそ感じているはずだ。強くなるほどに、あいつの背中が遠くに感じるのを…。事実、私もそうだった。あいつとまともに戦うことすらできずに負けた。負けるはずなど無いとさえ思っていた。慢心がなかったとは言えない…。どこの軍も強い武将は女だったのだから、所詮あいつだって良くてそこそこできる兵隊ぐらいだと決めつけていた。…結果は逆だったがな…。

「思春？何か考え事でもあるの？」

「…蓮華様と鍛錬をするほどに、あいつに負けた時の己の未熟さと、あいつとの距離を感じるのです。蓮華様も感じているのではないですか？」

「ええ。でも、思春も感じているとは思わなかったわ？」

「私だって武人ですから。相手が自分より強ければ、そう思います。」

「邦祐に稽古をつけてもらったら、私達はどのくらい強くなれるのかしらね？」

「全くです…。もしや、なかなか帰って来ないのはそれが原因では？」

「その通り。さすがの洞察力だね、思春。」

「っ！？何者だ！！」

何者だって…。声くらい覚えててくれよ…。

「ただいま蓮華、思春。予想以上に洛陽が過ごしやすかったし、兵の皆に稽古をつけてたから帰ってくるのが遅くなっちゃった。」

「本当につけてたのか…。それで、どんな感じになったんだ？」

「それは、皆が集まってから話すよ。…董卓のことも含めてね。あと一刻くらいしたら玉座に集まるように伝えておいて。」

「わかった(わ)。」

一刻後……。

「皆久しぶりだな。洛陽のほうも出来る限りの準備はしてきたから、これから世話になるよ。」

「そうね。それで洛陽のほうはどうだったのかしら？」

「そうだな……。一言でいうなら平和だな。俺は洛陽に行く途中で寄り道したら、賊に襲われそうになってた女の子を助けたんだ。そしたら、その子が董卓だった。」

「えっ！？董卓って、いかにも暴君って感じの脂ぎったオヤジじゃなかったの!？」

「……俺も最初は信じられなかったがな。それから客将として、3ヶ月、董卓の下にいたけど、暴政どころか、街の誰からも好かれるような善政しかしていなかったよ。」

「そうだったか。と、なると雪蓮……もし反董卓連合に参加したら、不利益しか残らない。善政をしている都を数の暴力で襲うなど、その辺にいる賊と何一つ変わらなくなってしまう。」

「冥琳、その辺は大丈夫だ。董卓軍には、呉に対して攻撃しないように言っている。その代わりに、こちらも攻撃しないことが条件だ。呉だけなんだから、それだけでも十分な利益だよ?」

「もしそうだとしても、曹操あたりが見破りそうだな……。何か策で

もあるのか？」

「あるよ？アインス！ツヴァイ！」

「はっ！」

「な、なんじゃこやつら！？どこから入ってきたんじゃ！？」

「大丈夫だよ祭さん。紹介するよ。右の女性がアインス。左の男性はツヴァイ。あとは洛陽に3人いる。俺自らが洛陽で育てあげた、情報収集から敵軍の偵察、対象に気付かれずに行う暗殺などをする、隠密集団の一員だ。元は普通の兵士だったけど、今じゃ斥候は完全に無力化出来る。雪蓮位の武将なら4人がかりでなら何とか無力化できると思うけど、もしかしたら、雪蓮の勘には勝てないかもしれない。」

「嘘っ！？そうだとしても、たった3ヶ月で？」

「ああ、ちなみに董卓軍自体も俺が鍛え直した。約十数万の兵士の一人一人が、さすがに武将は無理だけど、どこの軍の兵にも負けないう強さにまでは成長した。武将も人中の呂布に、その呂布に肉薄するほどに強くなった神速の張遼。そして華雄の成長が大きいだろうな…。」

「えっ！？華雄って母様に負けたあの華雄？」

「その華雄だ。彼女も昔は猪だったけど、今の華雄はどんなに罵っても効き目はないし、個人の武では、思春じゃまず勝てないかな。過去に俺もやった訓練を乗り越えたんだからな。今じゃ二対一でだけど、張遼と組んで呂布を手こずらせるほどだ。」

「戦力を簡潔に言うと、十数万の屈強な兵士、人中の呂布に、二人がかりとはいえ呂布を手こずらせる張遼と華雄、斥候を完全無力化する隠密ということか…。それに邦祐まで加わったら、連合の勝機はないと思えるな。」

「そういうこと。だからこそその董卓達との秘密裏の協定だ。あたかも戦闘による死傷者が大勢出ているように見せかけることで、お互いに損害は無く、こちらは疲弊した袁術から独立を測るって算段だ。」

「ですが、見せかけると言っても、大勢の人が動くわけですよね？ やっぱり気付かれたりしないんですか？」

「平気だよ。例え他の諸侯が情報戦のために斥候を出しても、この二人が誰一人陣地に帰らせやしないし、皆以外に顔は知られてないから…。そういう事なんだけど、頼めるか？」

「「御意。」「サッ

「すごいよね…。うちの軍でも洛陽と同じ訓練をやってくれないかしら？」

「良いけど、それはこれを飲んでから決めた方がいい…。向こうでは強制だったけど、出来ればこれは使いたくないんだ。明命、飲んでみてくれ…。」

「了解です！……つつつ！？」

！？ ……お

ね、こ、さ…ま…」ガクッ

「明命！？邦祐、一体何を飲ませた！？」

「健康に良い物をひたすらに注ぎ込んでいった結果、体にはすごく良いが、絶望的としか言えない味の飲み物だ。でも、飲んで何も得しないとさえ思えばそうでもない。これを飲めば、体中の毒素が消え、翌日は嘘のように疲れが取れてるし、肌にも良いことがわかってる。」

「それだけ素晴らしい効能なのに、味の方は絶望的で気絶してしまふと…。」

「ああ、いくら健康に良いとはいえ、飲むたびに明命のようになりたくはないだろ？だからこれは、罰として飲ませるんだ。」

「どんなことをしたら、それを飲ませるの？」

それから、月ちゃん達のところで行った訓練方法を詳しく話し、同じ訓練を特製ドリンク以外の罰に変えて実施することになったのだが…。

今日もいつも通りの訓練が始まる。そう思っていた…。

「黄蓋様、調連の準備が完了しました…って、あんた誰だ？怪我人なんだから、こんなところにいんなよ。」

「俺は、今日から訓練を担当することになった沖原邦祐だ。」

「何言ってるやがる！普段から調連を担当しているのは黄蓋様なんだから、部外者は邪魔すんな！…こんなやつ放っておいて、早く訓練

を始めましょう。」

「…祭、ちよつと下がって。おい！この中で己の武に自信があるやつ、全員まとめて前に出る。俺と勝負だ。誰にケンカ売ったか解らせてやるよ？」

「はあ！？生意気言っでんじゃねえぞ、この野郎！！おい！」

そう言つと、6人ほど新たに兵が前に出た。

「7人相手じゃ勝ち目もないだろ？素直に謝つたら許してやるよ。」

「祭さん、右腕使つて「それは駄目じゃ！！」「じゃあ剣は使わせてもらいますね。さつさと来いよ、戦力が勝敗を分ける決定的な差じゃないことを、その身で味あわせてやるよ？」

「くっ、かかれー！！！」

…この後のことは想像がつくかと思うが、人生で一番の失敗は、邦祐殿にケンカを売ってしまった事だここに記しておこう…。

「お前らのその足りない頭でも、俺の強さが理解できたか？出来たなら何か言つことは？」

「ハ、ハイ！ホントニ、スイマセンデシタア！！！」

「わかつたんならそれで良い。じゃ、早速訓練始めるぞ？今日からやり方変わるからな。とりあえず、全員この重りを両手足につけて。」

それから始まった訓練は今までの比にならないほどに苦しいものだった。兵だけではない。参加した黄蓋様達でも辛そうにしていたのだ。体力作りに戦闘訓練、最後は一人ずつ邦祐殿と組手を行う。口にするのは簡単だが、いざやってみたら、何度も死ぬ思いをしたくらいだ。聞けば、洛陽の兵士達はこれを三カ月も続け、邦祐殿がいない今でも続けているという…。我々の訓練も、これが続いて行くと思うと気が重い…。

兵士の不安は的中し、連合召集までの数カ月間、この訓練は続いた。続いた……。

第十一話 帰還（後書き）

コメントやアドバイス等がありましたらよろしくお願いします。

第十二話 行軍くまさかのデレデ蓮華く

洛陽から帰って来てから2ヶ月が過ぎた。ここ1月くらい前から、兵の鍛錬が終わった後、思春と共に蓮華の剣の鍛錬に付き合っている。初めて会った時に比べるとかなり様になったけど、問題も出て来た…。鍛錬中は平気なのに、普段の生活や休憩中に視線が合うと話はしてくれるけど、何故か蓮華に目を逸らされることだ。顔が赤くなっている気がするから、嫌われてはいないと思うけど…何でなんだ？

最近…邦祐と目を合わせることが出来ない。理由は…何となく分かる。ちよつと足を痛めただけなのに、悪化させないように横抱き（邦祐の世界ではお姫様抱っこって言うんだったかしら？）で医務室に運んで行ってくれたりもしたし、ちよつと体調が優れないだけで、額と額をくっ付けたり…／＼／＼／＼。今思うと…『蓮華』
としては、あまり女の子らしい扱いを受けて来なかったから、彼のさりげない優しさに惹かれたのかもしれない。彼は、どう思っているのかしら…？あれを試してみる価値はあるかも…。

そんなこんなで、建業での生活が3ヶ月を過ぎた頃、袁紹から董卓連合の参加要請（と言っても、断れば他の諸侯と共に攻め込んで来るので、ほぼ強制だったりする）が来た。洛陽で過ごし、月ちやんたちと接して来た俺は、このでっち上げとしか思えないような理由に内心憤慨していた。

そして今から向かうのは、？水関近くに構えた野営地。そこに着

き次第、他にも参加した諸侯達と顔合わせをすることになる。…一
刀は、元気でやっているのだろうか？他の諸侯も会ってみなきゃわ
からないだろうけど、目の前の事だけ信じてこの戦いに参加してい
るようなら、全員揃ってお灸を据えてやる必要があるかもしれない
な。

「さて、と。俺もそろそろ出るか。」

建業にいる間、ずっと乗馬の練習を欠かさずにして来たから、野営
地までは馬で行くことにした。

その途中での出来事と会話記録だ…。

「どうかしたの邦祐？」

「ああ、蓮華。最近さ、けっこう忙しかっただろ？疲れが溜まって
るのが、体調が芳しくなくてね…。」

絶好の機会…蓮華はそう思い、考えていたことを決行した。

「そうね…。もしかしたら、熱でもあるんじゃないかしら？」「ピトッ

「れ、蓮華、何やってんの!？」

「何って、貴方と同じ熱の測り方を実践しただけだけど？」「ニヤッ

「うわぁ…俺こんなことしてたんだ。ごめん蓮華、これは恥ずかし
かったよな？次からは違う方法」このままで良いわ!」「…そ、そ
うっ。」

「ええ、邦祐の驚く顔も見れたし、この方法も割と気に入ってるのだから、このままでいいわ。」ニコッ

「…そこまで言うならそうすることにするよ。」

「その代わり、他の人達にはあまりやらないでね?」

「あら、いつの間にかすごい仲良いのね、あなた達。蓮華、これで行き遅れる心配は、無くなっただんじやない? 貰い手がいなかったら、邦祐に貰ってもらえばいいんだし。」

「ね、姉さま!?!?!?!?!」

「嘘よ、冗談冗談。でも、実際良いと思うわよ? 御遣いと同じ世界の人の血が入るし、腕も立つし、頭だって切れる。こんな人、なかないないと思わない?」

「そ、それはそうですけど?!?!?!?!」チラッ

「邦祐はどうなの? 身内鼻頂で悪いけど、とても良い子よ?」

「形だけとはいえ、雪蓮の旦那って名目で呉に連れて来たのに、そこで蓮華まで嫁に進めるのか? それより、ここは一夫多妻が認められてんのか?」

「…どういうことですか、姉さま? 少なくとも私はそんな話は聞いてません。それに姉さまには冥琳っていうちゃんとした恋人がいるにも拘らず、邦祐にまで手を出したのですか…?」黒いオーラを纏い中

「話す、話すから！だからその纏ってる黒いのを消して！！……初めて邦祐に会った時にどうしても天の国の血を呉に入れたくて、出来心でつい形だけでも良いから……。」

「では、姉さまは邦祐を本格的に夫にはししないと？」

「それはわからないわ。冥琳とは恋仲だけど、二人とも女だし、結婚にだって興味位はあると思うわ。あとは、英雄色を好むかってことくらいじゃない？どうなの、邦祐？女性の好みとか……。」

「俺の好みか……。うーん、あまり考えたこと無いかな？」

「じゃあ、私達姉妹の中で選ぶなら誰なの？……やっぱり姉さま？」

「雪蓮は確かに綺麗だけど、冥琳って恋人がちゃんというし、シャオはまだ色々とそういうのは早い気がするから……やっぱり蓮華かな」。

「理由は？」

「やっぱり、雪蓮の手綱は冥琳にしか握れないし、俺自身も親友とかなら雪蓮もシャオも大歓迎なんだけど、たぶん俺じゃあ天真爛漫な二人は抑えられない。蓮華は可愛いし、しっかり者だけど、一人で問題を抱え込む時があるから、たまには甘えたり頼ってほしいかな……なんて……。」

「えっ！？／／／／／カァー」

「よし、決まり！！蓮華、呉の王として、姉として命じるわ！邦祐

を横から掠め取られないように、しっかりと捕まえときなさい！！私じゃなく蓮華の『旦那』として、正式に孫呉に招き入れる準備をするのよ！！」

「はい！！／／／／／」

「それと邦祐。あなたもその気でいてね？妹を泣かしたりでもしたら、ただじゃおかないから…。それと、ここは実力さえあれば、一夫多妻も許されるのよ？それがわかったんなら、早く蓮華と二人きりの時間を作ってあげなさい」

「…了解。」

「あら、蓮華と二人きりじゃ、何か不満でもあるのかしら？」ニヤニヤ

「いやいや、本人いる前でこんな告白みたいな暴露話させられたうえに二人きりになれとか、流石に恥ずかしいって／／／。…だからって蓮華、そんな今にも泣きそうな目で見ないでくれ。今まで感じたことのない罪悪感に潰されそうになる…。」

「そ、そんな風になんか見てないわ！ただ…そんな強く拒否されたら、私と二人きりになるのは嫌なのかなって思っちゃったから…その…」グスツ

「邦祐、貴様あ！！蓮華様を泣かせたな！？覚悟しろー！！」シャキンツ

「思春、待て…。話せばわかる。だから剣を納めて「問答無用！！」だあゝゝ、思春ストップ！ストップ！」

「すとつぷ？なんだその言葉は！？私は知らん！蓮華様を泣かせた罪、その身で償え〜！！！」

野営地に向かつてる最中に、仲間によられるとか全然笑えない…。何か方法は…あった！！

「雪蓮！！大事な妹の旦那になるかもしれない人間が危…っておい！何揃いも揃って、目を逸らしてちゃっかり笑ってんだよ！？こうなったら…いや、まだ手段はある！」

最後の頼み…蓮華にかけるしかない！！

「蓮華、もう君だけしか頼りになる人がいないんだ！頼む、助けてくれ！！」ガシッ

「私だけ？…邦祐の頼りは私だけ…。」

「そ、そう！蓮華だけだから！！」

「私だけ…えへへ／／／／」ポ〜、ホワ〜ン

トリップしちゃった〜！？

「ふっ、自爆したな邦祐？蓮華様は自らより実力のある『同性』からは頼られることはあっても、『異性』から頼られたことは全くの皆無だった。だから異性に頼られる抵抗がお有りにならない。それを知らずに蓮華様に頼ったお前の負けだ！！」

「思春…。それじゃ、丸つきり蓮華は異性に人気が無かったみたい

に考えられてもおかしくない言い回しになるぞ？」

「なっ！？どう説明すればいいんだ？ごによごによ……………」

蓮華もトリップから立ち直り始めたし、思春が動揺して考え込んでる今がチャンスか…。

「蓮華、たまには思春なしの二人きりでいろいろ話すとうちよいか？」

「ふ、ふえっ！？……………うん／／／／／」

「それじゃ思春、俺達は二人きりで話してるから、一人でゆっくり考え込んでくれ。」

それから二人で何を話そうかと考えていたところ、蓮華が俺と一刀のいた世界のことを聞きたがっていたので話すことにした。その時に何か見せてほしいと頼まれたので、前から好きだった歌を、次に二人で過ごす機会が出来た時に聞かせる約束をして、その日は休むことにした。

ちなみに…。翌朝、寝ぼけ眼のところを、昨日の制裁という名目で思春に襲撃され、壮絶な八つ当たりを受けてボロボロになったところを蓮華に見られたことも、ここに記しておく……………。

第十二話 行軍くまさかのテレテ蓮華く（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等ありましたら、よろしくお願いします。

第十三話 顔合わせ（上）

ようやく野営地に着いた。辺りを見渡せば、それぞれの軍や諸侯の旗が風を受けて柵引き、あちこちにそれぞれの軍の兵士がいる。無駄に壮大な光景だな…。

それにしても、長い行軍だった。俺達には馬があつたから良いけど、兵達の顔からは疲労が見られる。早く案内してもらいたんだけど…。

「失礼します！どちらから参られた諸侯の方々でしょうか？」

「建業から来た、孫伯符が率いる呉の軍勢よ。兵達を早く休ませたいの。私達の陣へ案内して貰いたいんだけど…。」

「失礼致しました！こちらになります。」

「ようやくか。皆あと少しよ。頑張つてちょうだい。」

少し歩くと、ようやく呉の陣をかまえる場所に見えてきた。

「こちらになります。？水関への侵攻は明後日以降となりますので、今日は休んでください。明日の正午に本陣にある天幕で、各諸侯の顔合わせとなります。」

それだけ伝えると礼をして袁紹軍の方へと去つて行つた。無駄に煌びやかな軍服なので、間違いないだろう。

「ひとまず、私達もゆっくり休むとして…。顔合わせには私と邦祐

だけでいいのかしら？」

「あまり大勢で行くのもあれだし、後は冥琳がいれば十分だと思うぞ。」

「そうだな。それぞれの軍の軍師も参加するだろうから、その方が良いだろう。」

「じゃあ決まりね。…ねえ、邦祐は董卓軍に付くかもしれないでしょ？どう名乗るつもりなの？」

「そうだな…普段は一人で旅をしている『楊昴』ってことにしとくか。武器もこのままだと怪しまれるし、天幕に行く時だけ兵士が使うような剣を貸してもらえりゃいいだろ。」

「そうね…。さてと、休みたいところでもあるんだけど、やっぱり少し様子見程度で他の諸侯に挨拶にでも行きましようか？」

「そんなこと言って、本当は何もすること無くて、退屈なだけなんでしょ？」

「だってえ、落ち着かないんだもん…。ほら、行くわよ邦祐！！」
グイッ

「ちよっ！？行くから首元掴むな！首絞まるだろ！？」

そのまま、強引に他の諸侯への挨拶回りへと駆り出された…。

反董卓連合に参加した諸侯達と軽く挨拶するために出歩くと…人

きたいことでもあるのか？」

「は、はい！あの、楊昴さんは洛陽で過ごしたって仰ってましたけど、何か董卓さんの噂とか聞いてませんか？」

「噂？董卓さんのか？…何一つ聞いてないけど、例えばどんなのだい？」

「…例えば、民を無視して暴政を振る舞っていたりだとか、過剰に税を課して私腹を肥やしてるとか…。」

「…あの悪いことなんか何一つ出来なさそうな子が？冗談は止してくれ。洛陽の民は誰一人として虐げられちゃいなかった。…もしかしてこの連合ってのは、そんなでっち上げなんかで召集されたのか？」

事実を知っているとはいえ、我ながらひどい演技だと思うが、ここはやり通すしかない…。

「」「」「」

「…勘弁してくれよ。あんた等は罪の無い人達を今から戦争に巻き込もうってのか？」

「だ、だけど！噂が起こるってことは、洛陽の人達は実際に苦しんでいるかもしれないじゃないですか？」

「そ、そうだ！火のないところに煙はたたないって言うじゃないか？」

「じゃあ劉備ちゃんに聞くけど、君が目指しているものは何だ？」

「みんなが仲良く、誰も傷付く必要のない世の中です!!」

「…じゃあ次に、君達の聞いた噂の出所は本当に洛陽だったか？」

「えっ！？そ、それは、洛陽ではなかったですけど…。」

「当たり前だ。そんな噂を流す奴なんか、あの都にはいない。いるとすれば…。」

「董卓さんの権力や地位が欲しい為に噂を流したか、天の御遣いの存在が邪魔だから、おびき寄せるためだけにありもしない罪を擦り付けた人…ですか？」

「そう考えるのが定石だろ…。たしかに、火のないところには煙は立たないだろう。でもそれは、董卓に見せかけた別人だって考えも、諸葛亮ちゃんみたいな軍師にはあつただろ？それと…そこで盗み聞きしてる諸君？」

何だか面白そうなことを話しているものだから、無粋とは思いつつも立ち聞きしていたけど…。話以上に私たちに気付いたあの男に興味が湧いたわ。一刀みたいな天の知識は無くても、ブ男だとしても、私の覇道に良い意味でも悪い意味でも影響を与えるかもしれない。ここは直に話をしてみるべきね…。

「別にしたくてしたわけではないわ。たまたま聞こえてきたのよ。それはいけないことかしら？」

「いや別に。それと…その覇気からして、貴女は乱世の奸雄である曹操であっているかな？」

「ええ、そうよ。私は曹操、天下を取る者よ。こつちが夏侯惇、こつちが…。」

「天の御遣いの北郷一刀…だろ？」

「…その口ぶりからすると、知っていたようね？」

「まあな、これでも旅をしていたんだ。情報は、旅をしていく上で武器になるからな。」

「わかつてるじゃない。…それで、さっきの話の続きを聞かせて貰いたいんだけど？」

「耳聡いですね。まあ、聞いていたとおりですよ。洛陽の現状も、黒幕の存在の可能性も。さすがに貴女は考えたでしょう？なんたつて、洛陽には貴女の嫌いな宦官達がいるのだから…。」

「貴方…それをどこで知ったのかしら？」

「風の噂ですよ。言ったでしょう？情報は武器になるって。」

「そうだったわ…。ねえ、この私に仕える気はないかしら？」

「か、華琳さま！？何をおっしゃるんですか！？こんな弱そうな奴を士官させたところで役には立ちませんよ？」

「…俺が弱いと？戦ってもないのにか？」

「当り前だ！自他共に魏武の大剣と称する私が、たかが旅程度で怪我をするような男に負けるはずがない！」

普段は少々じゃじゃ馬な感じもするが、こつこつという相手の力量を推し量る時は本当に助かる。

「そこまで言うならかかって来いよ？ほらどうした、怖気づいたのか？」

「くっ！！私を侮辱したことを、後悔して死ねえーーーー！！」

繰り出される斬撃は、徐々に激しさを増しながら襲いかかったが…。

「そんな大振りじゃ、いつまで経っても当たりっこねえよ、この雑魚が！！」

春蘭の腹部に強烈な一撃が叩き込まれることで動きが止まり、放たれた回し蹴りで勝敗が決した。

「がはっ！？……うう……。」

「うそ…。春蘭が、負けるだなんて…。」

「その程度で俺にケンカ売るとか、お前…今すぐ死にたいのか？」

その太刀は一度も掠ることすら許されることはなく、目の前の男の力量を見極められずに、地に伏せられた……。

第十三話 顔合わせ(上) (後書き)

コメントやアドバイス・誤字など、何かありましたらよろしく願います。

第十四話 顔合わせ（下）〜迷家（袁家）に会わずに終了〜

春蘭が負けた。確かに慢心はあったかもしれないけど、こんなに簡単にあしらわれるなんて…。今この男を私のものにするかどうかで、霸道へ大きな一歩となる。逆に言えば、我が霸道の前に立ち塞がる脅威になるかもしれない。…いや、そんなことを考えている暇はないはずよ！欲しいものは必ず手にいれるのがこの私、曹孟徳なのだから…。

「気に入ったわ！貴方、私に士官しなさい。それだけの力がないながら根なし草なんて宝の持ち腐れよ！我が霸道の一助となりなさい！」

「…その霸道がどのようなものは、少しは想像が付きまます。大した権力もなく、衰退の一步を辿る王朝では、この国の民を救うことは出来ない。そして、ここに民を救わんとしてこの場に揃う劉備ちゃん・孫策さん・曹操さんは、目指すものは同じだけど、確実な違いがありますね。劉備ちゃんは痛みを嫌い、皆が仲良く暮らす未来を。孫策さんは呉の民が安寧であればそれでいいけど、平和であるに越したことは無い。曹操さんは、変革に痛みは付き物だと知っているからこそ、多少の犠牲とはいえ、それに裏打ちされた平和な世の中を作るうとしてしている。どうです、近からず遠からずってところでしょう？」

「そうね…。当たってもなければ、そこまで外れてもいないってところね。それで、返事はどうなのかしら？」

「その前に一つ。話を聞いていたのならわかると思いますが、洛陽の太守である董卓さんは、暴政を振るうような子じゃない。それで

もなお、貴女は己の覇道のために洛陽には犠牲になってもらおうと
か考えてますか？」

「……ええ。もしそうだとしても、私は立ち止まる事は許されない。
その代わり、私が董卓以上にこの洛陽を民が安心して暮らせるもの
にしてみせるわ。」

「たしかに、貴女のように何でもこなせそうな人なら出来るとは思
います。でも、だからと言って貴女に仕官しようとは思わない。な
ので、答えはいいえです。」

「あら、何でかしら？貴方のように高い能力があるのなら、それを
完璧に使いこなせる人間に仕えるのが普通だと思うけど？」

「まあ、普通ならそうするでしょうね……。」

「そんな風に言うのなら、どうしてなのか説明してもらえるかしら
？」

「一体、どんな理由で私の誘いを断ろうと言うのかしら……？」

彼女は、月ちゃんを傷つける道を選んだ。なら、連合で袁紹の考
えを聞く必要もない。どうせここにいるのは雪蓮達、呉の人以外…
敵なんだから。

「説明なんて必要ありません。ただ俺は、貴女の覇道の手助けをす
るよりも仲間を助けることを選んだ。それだけのことです。」

「それは、董卓のことかしら？止めときなさい……。この戦で、あの

都は落とされる。そんなところで命を無駄にする必要は「無駄じゃない!!」「っ!?!」

「あそこには、真名を預かった仲間が、友がいる。俺の右腕が怪我じゃないことも知ってる。大事な人たちを守るために戦うんだ。何一つ無駄じゃない…。」

「だからって!この人数差で董卓軍に勝ち目があるわけないだろ!俺達のいる連合の兵の数は、向こうの3倍はある。どう転んだって負け戦だ!」

「…お前は何一つ変わってないな。剣道部にいた頃と一緒だ。違うとしたら、種馬ってことぐらいか?」

「お前、何で俺が剣道部にいたって知ってたんだよ!?それも風の噂か?」

「さあな、知りたかったらこの戦で勝って、俺を捕まえてみるからだ。それと、捕まったとしても、魏には仕官することはないから。」

完全に敵対する意思を宣言し、仲間のいる都へと帰ることにした…。

一方…ここ最近、洛陽の月達にとっては深刻な変化が起きていた…。

軟禁されているのは、二人の少女。別の部屋には一組の夫婦が捕らえられている。

「どつしよつ詠ちゃん、このままじゃお父さん達が…。」

「まさか、人質を取って月を脅すなんて。十常侍達だけならまだ問題ないけど、最近になって現れたあの‘二人の道士’の方が、色々厄介だわ。しかもこんな大事な時に限って、あいつがいないだなんて…。」

不意に二人に近づく足音…。徐々に近づくそれと扉を軽く叩く音は、月達にとって不幸の始まりそのものでしかなかった。

「失礼しますよ董卓様、賈馱。おやおや、どうかしたのですかな、私をそんなに睨んだりして。…ああ、董卓様の御両親のことですか？安心してください。部屋から出られないだけで、後は何も変わりません。」

「月とおじさん達を、どうするつもり!？」

「別にどうもしませんよ？ただ、董卓様には…我らの傀儡として、そして身を隠す際の身代わり人形となってもらうだけですよ。」「このっ!!」「おっと、反抗しようものならどうなるか…軍師である貴女なら分かるでしょう、賈馱?」

抵抗すれば月の両親の命はない…。わかってはいた。だが、それでも体が動いてしまった。

「それでいいのです。それでは、董卓様には都合の良い操り人形になってもらいましょう。‘人形’に感情など不要ですからね、頼みましたよ于吉…。」

張譲と入れ替わりに現れた長髪の痩せ細った男、于吉は月にしか聞こえないほどの大きさの声で月に話し始めた。

「可哀想に……。計画の為とはいえ、貴女はここで散ってしまうのです。でも大丈夫ですよ？消える時は全員一緒ですから。お友達も、両親も、あの男も、そして貴女の待ち人も、この世界も……。クククッ……。」

それだけ言うと、術を掛け始め、月は特定の人間の言いなりになる‘人形’へと変貌を遂げた。その目には、意思も光も存在しなかった。ただ、一点の光を除いて……。

（邦祐が呉に戻ってから3ヶ月。その間、月とその周辺の守りが薄くなってしまった結果、今まで身動きの取れなかった十常侍の筆頭で、皇帝に仕える宦官の張讓が暗躍し、素性もわからぬ道士の左慈・于吉と結託して、月の両親を誘拐していた。両親を人質に取られてしまった月は、于吉の術と放った白装束の軍団によって、“暴君”や“悪逆非道を働いた奸賊”として、仕立て上げられることになってしまい、それが運悪く袁紹の耳に入り、反董卓連合が旗揚げされる運びになったのだった。

張讓の思惑は、月を利用し、自らの持つ洛陽の実権をより強固にすること。道士二人の思惑は、この世界という存在が許せず、原因の一端である、異世界から飛ばされて来た一刀と邦祐を、この外史から完全に消すこと。

しかし、三者の思惑は、この戦で脆くも崩れ去ることになるうなど、本人たちでさえも知る由もなかった……。）

雪蓮達の視界から消えた後、バイクで洛陽に帰って来た。馬と違

つてスタミナ切れとか起きないから、こういう時には本当に楽だ。さて、3ヶ月ぶり位に戻って来たけど…なんだか嫌な予感がする。月ちゃん達に何か遭ったのかもしれない。とにかく今は皆のもとに急がないと!!

賑やかで多くの人が行きかっていたはずの大通りには、人の姿をあまり確認出来ない。話を聞いてみないと…。こういう時は、情報を多く持つていそうな行商人が何か知ってそうだな。

「すみません、何だか人が少ないみたいですけど、何かあったんですか？」

「ああ、あんた旅人かい？何でも、最近この街の太守が、急に税の徴収を厳しくしたんだとさ。」

「そんな馬鹿な！この街は、民を苦しめるような徴税はしていないかったはずなのに。」

「ああ。だが、おかげでこっちも商売上がった。こんだけ大きい街ならいつもより稼ぎが出ると思って来たつてのに、着いたらこの有様だ…。」

行商人の荷物を見ると、荷が解かれたような形跡は見られなかった。本人の言う通り、今この街で商売をすることは、事実不可能だろう…。って、そんなこと気にしてる場合じゃない!!早く戻らなきゃ…。

「きつと、日を改めて行商しに来れば大丈夫ですつて。今日は、たまたま運悪くそういう時期に来ちゃっただけだと思いますよ?」

「そ、そうかあ？…まあ、今日はツイてなかったってことで引き上げるとするか。お前さんも、早く出て行った方が良いと思うぜ？こっちは見えても、商いで悪い予感の当たりにくいんだが、身の危険に感じちゃ虫の知らせってのが働くのかね、何となくわかるのよ。いつまでもここにいちゃ、危ねえってな…。」

「ご忠告ありがとうございます。でも、やらなきゃいけないことがあるので…。次にこの街に来た時は、行商が成功すると良いですね。それじゃ、失礼します。」

行商人に別れを告げ、月達のいる城へと急ぐ。異様な気配を感じる様になってきた。何か近づいて来ている。これは人、なのか？

疑問を拭い切れないでいると、突然現れた白装束を身に纏った軍団が邦祐の周りを囲い始めた。5人、8人、11人……。次々と建物の陰や屋根の上からぞくぞくと集まり、最終的には50人程度にまで膨らんでいた。

「お前ら、何者だ？人間じゃなさそうだけど…。」

「…沖原、邦祐、見つけたぞ、諸悪の根源の一人…。」

「俺が諸悪の根源だ？いったいどういふことか説明してもらおうかな？」

「…知る必要はない。悪を正すは、正義を背負う者の責務。潔く消えてもらおう。」

「話す気無しか…。なら、吐かせるまでだ！！（久々にミッションかな、こりゃ）」

久々に使う自分の得物に手を掛け、感触を確かめるように2、3度振り回した後、白装束の集団へと突撃していった……。

第十四話 顔合わせ(下)〜迷家(袁家)に会わずに終了〜(後書き)

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

どんなものでも良いので、上手な戦闘描写の仕方を教えていただけると助かります。

第十五話 開戦前へ覚醒への片鱗とおバカの片鱗へ

さて、早速だけど始めるか…。

ミッション3・白装束を倒し、情報を聞き出せ

周囲を囲む白装束達は、剣だの槍だの鉄爪だの弓だの、無駄にいろいろ持っていた…。そこまでしてでも、俺達には消えてもらいたいのだろう。

自分が有利になるような場所に移動しながら、次々と襲いかかってくる白装束の攻撃を受け止め、はじき返して斬り付け、時には避け、弓から逃れるために奴らの仲間を盾にも使い、銃で撃ち落としたりした。二方向から敵が突撃してくれば、当たる寸前で回避し、共倒れも狙った…。それでも数は減る気配を見せなかった…。

「次から次へと…一体どれだけいんだよ？何だか最初の時より増えているし、体力が持つかどうか怪しくなってきたな。」

だが、どうにも怪しい。何だか、どこかへ誘導されている気がしてならない。それにこの先は…。

「っ…！」

いつの間にか城の前へと誘導させられていた。場所が場所だけに、月ちゃん達の身が心配だ…。こればかりは、畏だとしても飛び込む他なかった。

城の中は、静寂に包まれていた。見知った顔は誰一人として見られ

ず、すぐに玉座のある部屋に辿り着いた。

「誘い込まれたってことか…。そうなんだろう？」

そう言うと、玉座の後ろから二人の男が出てきた。一人は銀髪で、線は細いが格闘を主体にしていそうな男。もう一人は、黒髪の長髪に眼鏡、どう見ても頭脳戦を得意としそうな男だった。

「ええ、そうですよ。全ては「俺達を消すため…ってか？」その通りです。早速で恐縮ですが、早々に舞台を降りてもらいたいですよ。」

「嫌だね。俺にはまだやることがたくさん残ってる。だから、まだ死んでやるわけにはいかないんだよ。」

「そうですか…。これはあまりお見せしたくは無かったのですが、貴方の気が変わるのなら、それで良しとしましょう。」

玉座を隠していた白装束達が横にずれると、普段の柔和な表情の月ではなく、意思が全く感じられない人形のように無表情の月がそこにいた…。

「…その子に何をした？」

「取引をしたまでだ。お前の両親を助けたければ、俺達の言うことを聞いてもらうと…。」

「それは脅迫って言うんだよ、取引じゃねえ。」

「そうかもしれませんが、貴方だってそんなこと言ってい

られないのですよ？連れて来なさい！」

連れて来られたのは・・・詠だった。しかも、しゃべれないようにご丁寧に口を塞がれていた。

「え、詠ちゃん!？」

「んーーーー!!んーーーー!!」

「さて、では取引と行きましようか。こちらの望みは、貴方がこの外史から消えること。そちらの望みは、彼女たちの解放。どうです？貴方がこの世界から消えるのならば、彼女達は助かるのですよ？」

「……本当に解放するのか？」

「ああ。異世界から来た貴様達さえ消せば、もうここに用などない。」

「……わかった。あんたらの要求を呑もう。その代わり、約束は果たしてもらおうぞ。」

「思ってたよりもあっさり決めるのですね。ですが、聞き分けが良くて助かりますよ。約束の方もきちんと果たしますから、安心して逝って下さい。それでは、さようなら……。」

月の周りにいた白装束達が一斉に槍を構え突撃し、構えていた槍は俺の腹部と右脚・左腕を貫通していく。そしてそのままの勢いで、身体は槍ごと、壁にはり付けられ、おまけと言わんばかりに、銀髪の道士の蹴りもお見舞いされた……。

「ぐうつ、あぁつ、がふつ……」

「それだけの傷では時間の問題でしょう。ですが、念のため地下牢にでも入れておきなさい。」

俺が玉座の間から地下牢へと連れ出される途中、朦朧とした意識の中で見たものは、無表情を崩さないまま零れ落ちて行く、月ちゃんの大粒の涙だった…。

（よかった。感情までが無くなったわけじゃないみたいだ。辛い思いさせるけど、必ず助けるから待っててね。その前に、少しだけ休ませて…。）

包帯で巻かれていたため、道士達ですら気付かなかったが、禍々しい光を放ち始めた“右腕”の、真の力を解放する時がすぐそこまで迫っていた…。

野営地に着いてから一夜明け、洛陽の城ではそんな事件が起きているとも知らず、反董卓連合の面々は本陣の天幕に集まっていた。集まったところで、大したことはしていない…というより出来ない状況だった。理由は…。

「さて、今回集まっていたいたのは、何を隠そう、逆賊董卓を討つためですわ。しかしそのためには、華麗で効率よく兵を動かせる総大将が必要ですわ。何よりその人物は、総大将たりえる家柄があり、兵力や装備・軍資金においても、ずば抜けたものを持っている。これらが全て揃ってこそ、連合の総大将たる人物に相応しいと思いませんこと？」

連合内でも、陰では二強と囁かれている袁紹が、偉そうにずっと話し続けていたからだっただけだ…。

二強といっても、強いという意味での二強ではなく、袁術と袁紹ともに二人揃って頭のオメデタさが、他の諸侯と比べて、群を抜いていたからこそその二強だったりする。良い意味にも捉えられる言葉なら、袁家にばれることはない、密かに連合内で付けられたあだ名だった。

「はいはい、そんなにやりたいのなら、麗羽がやればいいんじゃない？」

「そうね、私もそういうの面倒だからお願いするわ。」

「そ、そうですか？華琳さん達がそこまで言うのであればこの袁本初、この連合の総大将になって差し上げますわ。」

誰一人として、この決定に何も言わない。反論するだけ時間と体力の無駄だからだ。

「それでは最後に、誰が先陣を努めるかですけど…。劉備さんの軍が先行して、攻め落とせばいい話ですわ。」

「そんな！？私達は義勇軍だから、大した武器とかもないし、どこよりも手勢が少ないんですよ？」

他のどの諸侯よりも兵力の乏しい劉備達は、納得する訳がない。だが…。

「総大将は貴女方が決めたことですのよ。その総大将の命令ですわ

「！」

傲慢としか言いようのない言葉で、劉備の反論を掻き消した。

同じ連合の仲間同士なはずなのに、何だよその一方的すぎる決め方は！？

「ちょ、ちよつと待てよ袁紹！！」

反抗しようとしたところを華琳に止められた。

「一刀、静まりなさい！…言いたいことはわかるわ。それで麗羽、貴女は総大将なのだから、何か策があるのでしよう？」

「勿論です。今、ちよつとそれを発表するところでしたの。」

「それで、それはどんな愚策なのかしら？」

「それはですわね…って、愚策などではありませんわ！！こほん…。ずばり、『雄々しく華麗に前進』ですわ！！」

「私達の想像の斜め上に行く、言葉を失うような愚策ね。これじゃ、私の可愛い部下達が可哀想だわ。こっちはこっちのやり方でやらせてもらうから、せいぜい足を引っ張らないでちよつだけいね、麗羽。」

袁紹にそう言い放ち、俺達は魏の天幕へと引き上げて行った。帰り際に、「きい〜、華琳さんの分際で〜！！」とか聞こえた気がする。

天幕に着き、？水関攻略のための軍議が始まった。

「桂花、もし貴女が？水関を攻略するならどんな方法を取るかしら？」

「はい…。私なら華雄を挑発して飛び出して来た所を、偃月陣で行させた部隊を正面から一当てし、銅鑼の合図と共に一旦後退させます。華雄は春蘭と似通っている所がありますから、隊長が殿を務めて後退すれば、食いついてくることでしょう。その時に敵軍は、縦深陣になると思われます。そこを先行部隊は、反転・二分して横撃をしかけ、合流した本隊と共に敵を二つに分断して迎撃します。」

「待て！それでは私が、いかにも単純馬鹿みたいに聞こえるではないか！！」

「……」

「秋蘭…華琳様まで…。」

春蘭はすっかり落ち込み、秋蘭はそれを愛おしそうに見つめながら慰めていた…。

「華琳様。推測ではありませんが、劉備のところには諸葛亮や鳳統がいますから、同じような策を取ると思われます。」

「そう、わかったわ。ありがとう桂花。」

？水関の開戦もまた、すぐそこまで迫っていた…。

第十五話 開戦前〜覚醒への片鱗とおバカの片鱗〜（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

第十六話 前哨戦〈これが作者の真・華雄〉

？水関での戦いが始まるうとしていた。関を護る将は、己の武に人一倍誇りを持つ華雄と、武だけでなく指揮能力も高い張遼の二人挑発すれば華雄の方は飛び出してくると読んだのか、劉備軍がやるうとしていたことは、どうやら桂花の策と同じものらしい。

「桂花、どうやら貴女の策と同じようね。」

「そのようですね。私が劣るとは言いませんが、諸葛亮なら、これ位はすぐに考え付くことでしょう。これは、呉の周瑜にも言えることですが…。」

「そう。だけど貴女は、この曹孟徳の下にいるのよ？貴女が存在は私の霸道に不可欠なのだから、自信を持ちなさい。…それと、兵たちに出撃の準備をするように伝えてちょうだい。劉備の軍が劣勢になるようなら、恩を売るついでに救援するわ。」

「華琳様あゝ…。ぐす、御意。」

桂花は歓喜のあまり泣きながらも、兵の準備のために下がって行った。

「それにしても…あの男が敵にいることだけが、唯一の不安だわ。誰が見ても使える人材だし、どうにかして手に入れられないかしら…？」

叶わぬ願いと解りながらも呟いた言葉は、誰にも聞かれることは無かった…。

?水関の城壁の上から、連合の様子をしてみることにした…。

「うわゝ、次から次へとよう来るなあゝ。そう思わへん、柳花?」

関の前には、連合の兵士や将達が終結し始めていた。色取り取りの揺らめく旗は、仲間としては心強く、敵としては恐るべきものだった。邦祐と出逢う前ならば…。

「そうだな。確かに数は多いが、戦では、兵が多ければ良いというわけではないだろう。あれだけいても連携が取れなければ、所詮は烏合の衆に過ぎん。私達は連合に比べれば少数だろう。だがこれまですつと、あの訓練を続けてきたんだ。簡単にここを落とされては、月にも邦祐にも、見せる顔がないだろ?」

「そつやな。…せめて少しでも時間を稼がなあかんねや…。」

月の両親が人質になっていることも、人形のようになってしまった月のことも、霞達は全て知っていた。だからこそその時間稼ぎだ…。自分達に味方してくれた男が、月を救い出し、自分達の前へ帰って来るまで辛抱し続けねばいい…。

柳花は、城の中にいる兵たちに声を掛け始めた。

「皆聞け。この戦いは今までで最も過酷なものとなるだろう。しかし、今ここで逃げだせば、友を、仲間を、街を、そして皆の大事な人達を、出まかせで集まった連合の奴らに奪われることになる。お前達はそれで良いのか?!いや、良いわけがなかるう!ならば、その手に武器をとれ!!そして、あの訓練は何の為だったのかを思い

出せ！あいつも言っていただろう。大事なものを守るためなら、意地汚くてもいいから生に縋りつけと…。それが今この時なのだ！！」

「そや！ただ勝つだけやない。必ず生き残って、皆で揃って勝利の美酒といこうや〜！！」

兵たちの信頼や人気が高い二人だからこそその鼓舞だった。

「うおーーーーー！！將軍達の言う通りだ！！」

「あんな辛い思いしたんだ。こんな所で死んでたまるかーーーー！！」

兵の士気は、否が応にも高くなっていく。月と詠も兵達を影から支え、将達は兵との垣根を無くして同じ訓練を続け、苦楽（訓練中は苦もしくはそれ以上）を共にして来たからこそ、軍全体に固い結束が生まれていた。共に訓練してきた二人からの激励に、昂らない兵など、誰一人としていなかった。

個人の士気も実力も、連合軍を上回る兵士達・その兵士達を束ね、高い実力を持ちながらも、己の武に奢ることの無い猛将達・相手の狙いや手段を知っている事実…。

呉軍はこれらの事実を知らせず、足並みが揃い切れないでいる連合軍。出まかせを大義名分に掲げているような総大将の率いる連合では、落とせるはずのない？水関での戦いが、幕を開けようとしていた。

袁紹さんの命令で？水関での先陣を務めることになった私達は、軍議を終えた後、？水関を攻略するための手段について話し合っ

その結果、朱里ちゃんの策を取ることになったんだ。たしか、愛紗ちゃんと星ちゃんが華雄さんを挑発して、飛び出して来たところを一旦後退して、愛紗ちゃん達と入れ替わる形で鈴々ちゃんが迎え撃つ間に、愛紗ちゃんと星ちゃんが二つに分かれて、私と朱里ちゃんがいる本隊と一緒に横から攻めて分断する…だったっけ？

とにかく！これから作戦を開始するんだけど、楊昴さんの言ったことが本当なら、罪の無い人達をたくさん傷つけちゃうことになる。それが不安で堪らない。

「ねえ、朱里ちゃん…。」

「どうしたんですか桃香さん？なんだか顔色が良くないですよ？」

「うん…。楊昴さんが言ってたことを思い出しちゃって…。今からやることは、もしかしたら私達の理想とは全く逆のことなんじゃないかなって。」

「たしかにそうかもしれません。でも、桃香さんの理想を叶えるためには、一諸侯として名を上げること、力をつけることも大事です。いくら想いが強くて、それを実現するだけの実力が無きゃ、何も出来ません。だからこれは、必要悪なんです…。」

朱里ちゃんが辛そうに俯く。自分のことばかりで周りを見てなかった。皆だっけ辛いよね？

「そう、だよ。ごめんね、私がしっかりしなきゃいけないのに…。」

罪のない人達を戦に巻き込む…。もしそうなら、今まで自分達が退

治して来た賊と何も変わらないことになり、守りたい人達を自分達が苦しめることになる。華琳のように、救える人数には限りがあると割り切れず、『皆仲良く』を指す桃香にとって、心苦しいことだった。それでも、一度廻り始めた歯車を止めることは出来ない。悩み続ける桃香の下に、愛紗が現れた。

「桃香様、そろそろ作戦決行の時間です。…まだあの男の言葉をきにしてらっしゃるのですか？」

「うん…。どうしても気になっちゃって。」

それでも考えれば考えるほど、自分の理想と聞かされた事実とで、桃香は葛藤し続けていた。

「忘れるなどは言いませんが、桃香様はお優しいのか、何でも一人で抱えてしまう嫌いがお有りになります。遠慮などせず、私達を頼って下さい。ここにいる者達は、貴女の目指す理想に賛同し、共に叶えようと付き従う者ばかりです。主の期待に応えてこそその将なのですから。」

『一人で悩まずに、皆で悩もう』と言われている気がして、桃香は自分の心が少し軽くなるのを感じた。その表情を見て、愛紗もどことなく安心することが出来た。

「それでは桃香様、言って参ります。」

軽く頭を下げ、愛紗は星と共に？水関の前へと出発した。

？水関の前に着いた。城壁に見えるのは、華・張の旗。？水関攻

略の鍵は、私と星が華雄を挑発して上手く引つ張り出せるかにかかっていると言っても良いだろう。

「準備は良いか、星？」

「もちろん、いつでも行ける状態だ。」

星の返事を聞き、華雄への挑発を始めた…。

「聞こえるか華雄！！我らは貴様が武勇に優れた将である聞き、その武が噂に違わぬものなのか、確かめるためだけにわざわざ戦いに来たのだ。にも関わらず、肝心の貴様が亀のように引っこんでいるとはな！！所詮、噂は噂でしかなかったということか。」

「武勇に優れた将だなどと、片腹痛いわ！！本当は逃げ隠れするのに優れた臆病者ということか。こんな奴の下に付いている兵達も、貴様のような者が主で、さぞがっかりしていることだろう。」

「ここまで己の武を蔑まされて、まだ閉じこもり続けるか、この臆病者が！！皆、奴らは我らのことが余程怖いのだろう。あの臆病者を笑ってやれ！！」

関の前で大笑いし始めた劉備軍の兵士や愛紗達の前に、華雄が得物を持ってその姿を現した。俯いているためか、その表情までは確認できない。

「やっと顔を出したか。そんな貴様に贈り物をやろう。有り難く受け取れ！！」

愛紗達はそう言い放つと、二人とも弓を放った。愛紗が射た矢は華

雄の大斧の刃部分に命中し、星の矢は華雄の旗を射抜いた。

ここまで武に対する誇りを侮辱されたのだから、華雄は激昂するだろう…。連合軍の誰もが信じて疑わず、誰もがその予想を裏切られた。

「…誰が騒いでいるのかと思えば、馬鹿な連合の将共ではないか。貴様達のような小娘ごときの戯言程度で我を忘れるほど、私は愚かでは無い。私を引きずり出したいのなら、少なくともこの3倍の量の罵詈雑言を用意することだな。それとだ、悪いが贈り物は謹んでお返しさせてもらおう。」

連合軍、取り分け華雄を挑発していた愛紗と星は、華雄のあまりに冷静すぎる態度に混乱し始めていた。そこに追い打ちをかけるかのように、華雄が意趣返しに火矢を二つ射った。放たれた矢が、別々に軍旗の中心を貫いたことよって、関・趙の軍旗はどちらも真ん中の字の部分から燃え上がり、鎮火した頃には、大きな穴の開いた布切れへと変わっていた。

「き、貴様！私の軍旗をこんな風にして、ただで済むと思うか！！」
軍旗は神聖なものであり、奪われたり傷つけられることは、名を掲げている将の恥辱に繋がる。ましてや自分達の目の前で、大きな穴の開いた布切れにされてしまったのは、相当の屈辱だと言える。

「おやおや、何を言い出すかと思えば…。先に手を出したのは貴様等だろう？私は一発ずつ、お返ししたただけなのだが？」

「くっ！華雄、下りて来い、私と決闘だ！その首、我が偃月刀で撥ね飛ばしてくれる！！」

顔を真っ赤にして怒りを露わにする関羽と、大人な対応を取り続ける華雄の、攻撃による？水関での前哨戦は、もう少し続くことになる…。

第十六話 前哨戦〈これが作者の真・華雄〉（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

第十七話 決着く史実通りにいかない事実く

私は華雄との口戦を続けていた。

「いい加減下りて来て、私と一騎打ちをしる華雄!!」

当初の目的を忘れ、完全に華雄を倒すことで頭がいつぱいだった。

「さつきからそればかり口にし続けているが、私達は籠城戦をしているのだぞ？敵の前にこのこと飛び出す馬鹿がどこにいる？もしいるなら、どこの誰か教えてもらいたいものだな。」

余裕な笑みのなかはどこか妖艶さを仄めかす華雄の笑みが癪に障る。戦場で敵にあのような笑みを見せるなど、私をなめているとしか思えん!!

「そつちが来ないのなら、こちらが行くまでだ!!そこで大人しく待っている!!全員、進軍開「ちよつと待て、愛紗!!」何だ、星!邪魔をするな!」

「どうやって華雄のもとへ行くつもりだ？相手は、親切に開門などしてはくれないんだぞ?」

確かにそうだ。なら、どうやって華雄のもとへ行けばいい…。

星は、愛紗の暴走を制止することに努めたが、それを許す華雄ではなかった。

「関羽よ。そんなに私と戦いたいならば、一本だけ紐を垂らしてや

るから、それを使って登って来い。なに、登っている所を襲うなど、せこい真似はせんさ。」

華雄は部下に言つて、紐を一本城壁に括り付け、愛紗が登って来れるように垂らした。

「私と一騎打ちがしたいのだろう？ 貴様がここまで登って来れば、こちらは籠城したままで、貴様の望みを叶えられる。… 関羽が来ても手出しは無用だと、霞と兵に伝えておけ。」

「了解しました。」

そう言つて、華雄の隣にいた兵は姿を消した。

「どうだ関羽、ここまで粹な計らいをしてやったにも関わらず、貴様はそれを無碍にするか？」

その言葉で星の制止を振り払い、？ 水関の城壁を登り始めた。

華雄の逆挑発に乗り、せっせと城壁を登っていく関羽を見て、雪蓮は若干呆れていた…。

「あゝらら、私の勘通り、ほんとに登り始めちゃったわよ、あの子？」

「姉さま、何か気になることでもあるのですか？」

不思議そうな顔で雪蓮を見つめる蓮華。

「前に母さまと戦った時の華雄はね、ちょっと蔑まれただけで頭
血が登るような武将だったの。だけど今あの場にいる彼女は、どん
なに蔑まれても動じてないどころか、相手を逆上させる位に落ち着
きはらっているのが、ね。」

「そうじゃな。あれではまるで、堅殿と華雄が戦っている場面を再
び見ているようじゃ。まあ、今回は関羽が華雄の役みたいじゃがな。」

祭の頭の中では、猪の攻撃を軽々といなししていく、今は亡き主の姿
が思い浮かんでいた。

「それにしても、あの猪とまで言われた彼女をあれほどの将にする
なんて、さすが蓮華の旦那様候補ね。」

「ね、姉さま、何をいきなり…／＼／＼／＼／」

そう言われ、顔を真っ赤にする蓮華。

「そうじゃ権殿。物は相談なんじゃが、邦祐が帰って来たら、たま
にで構わんから貸してくれんか？初めて会った時に言ったことが本
当なら、儂が相手しても構わんはずじゃし…。」

「あ、そういうえば祭は言われてたわね。私には言ってくれなかつ
たけど。蓮華は…似たようなことは言われたけど、聞かない方が良
いかもしれないわ。」

「祭は何て言われたの？」

「うむ。会って間もないのに、十分すぎるほど魅力的と言われたん

「じゃ」

「…帰ってきたら、邦祐（の体）にOHANASHIしなくちゃ…。
」ゴゴゴッ…

本当にここは戦場なのかと疑いたくなるほど、のんびりした空気に
呉軍は包まれていた。

関羽が本当に登って来た。頭に血が上つてるとはいえ、普通はし
ないだろう。だが、前の自分があんな感じだと思つと、愚かさと思
ずかしさのあまり、何だか無性に泣き出したくなるな…。

関羽が城壁を登り終わり、こちらに武器を構えた。

「華雄、私は登って来た！さあ、勝負してもらおうぞ！！」

「いいだろう、かかって来るがいいさ。そのかわり、この場で負け
るようなら、お前は相当な恥晒し者になるぞ？」

「その心配は無用だ。貴様に負ける私ではない。はあー！ー！！」
ガキーンッ

関羽との一騎打ちが始まった。一撃が霞のように鋭く、そこその
重さも兼ね備えている。冷静さを欠いていてもここまで戦えるとは、
流星は未来の可能性の一つとはいえ私を倒した武将だ。あくまで猪
状態の私をだがな…。

「なかなか良い一撃を放つじゃないか、関羽。だが…その程度では
何年かかっても私の首は持ち帰れんぞ？」

一度己の武を褒められ良い気分の所を、それを帳消しにして余りあるような挑発をされる。過去の訓練で、邦祐に言われたことと全く同じことを、そのまま関羽に伝えた。武人にとって、お前では勝てはしないと宣告されるのは、屈辱だろう。事実、何度も苦汁をなめさせられた。

「何を言うか！？必ずやその首討ち取ってきてくれる！！」「ヒュンッ！

こうやって再び頭に血が上ると、力任せで単調な攻撃と、決定的な隙を生み出すことになる。何合も打ち合う度に怒りは徐々に焦りへと変わり、さらに単調な動きとなっていく。そしてそのうち、負の連鎖に耐え切れなくなり、戦意が喪失していく。一兵士ならまだしも、関羽は隊長。不安は兵達に感染し、やがて軍全体の士気をずたにする。

「ほらどうした、何時になったら私の首が刎ね飛ぶんだ？首どころか、こちらは切り傷すらまともについてないというのに。」

「くそ、なぜだ！？なぜ、倒せない…。」

焦りから身体に無駄な力が入り、武器の握りも甘くなった。下にいる兵士達に目をやると、関羽の敗戦濃厚な雰囲気を見せつけられ、表情が曇っている。そろそろ時間的にもいい頃か。さて、あいつ流の追い打ちと行くでしょうか…。

「自分から一騎打ちを申し出ておいて、その最中に考え事とは…。随分と余裕なのだな？だが、こちらはいい加減飽きたのでね、終わらせてもらおう。でやあぁー…！！！」

動揺する関羽の鳩尾を石突で突き、無駄のない動きで大斧を振りかぶり、偃月刀での防御の上から大斧での一撃で浴びせ、関羽ごと城壁へと吹き飛ばした。関羽の手から離れた偃月刀の前に立ち、槍先を喉元のところで止めた。

「これではつきりしたな関羽。お前では私には勝てないのだ。それがわかったのなら、さっさと兵を連れて陣へと帰るがいい。」

「そんなことは出来ん。私は主の期待に応えられないどころか、独断専行までして負けたのだ。会わせる顔が無い。早く止めを「くだらんし、止めを刺す気も無い。死にたいのなら、邪魔にならないところで勝手にするがいいさ。強い者と戦うのは好きだが、生憎弱い者苛めはしない主義なのでな…。」何だと…?」

「もう一度言つてやろう。弱い者苛めはしない主義だ。これ以上言われたくなければ、鍛錬し直して出直すことだ。…私を後悔させるほど強くなつてな。」

「…いいだろう、今回はお前の好意に甘えさせてもらう。だが、次はこうはいかない!」

「そうか。下にいる劉備の軍に告ぐ。今からこいつを放り投げるから受け止める!」「え、ちょ!?!」「行くぞ?そら!?!」「きゃああー!ー!」しまった、力加減を間違えた…。」

高々と宙を舞った関羽は、何とか兵に受け止められた。

その後、また誰かが登つて来れないように紐を斬り落とし、関の中へと戻つていった。

柳花と関羽の一騎討ちは、柳花の勝利で終わった。それにしても、何であんな楽しそうな顔しとるんやろ…？

「おう、おかえり柳花。ずっと見とったけど、一騎打ち楽しそうやったなあ〜。」

「ああ。霞や恋との鍛錬みたいに、単純な武だけで競うのも良いが、精神的に相手を追い詰めながら戦うのも、たまになら楽しめるものだ。病みつきになりそうなくらいにな…。」

そう言う柳花の顔は、先程の一騎打ちを思い出しているのだろうか、普段彼女が見せないような、うつとりとした表情をしていた。

「そ、そうか。そりゃよかったな〜（恨むで邦祐…。）。」

「それはそうと、奇襲の準備とその後の準備は出来たのか？」

「それについては問題あらへん。奇襲部隊の兵ならもう休ませたわ。まあ、どちらかっていえば奇襲じゃなくて夜襲なんやけどな。今は奇襲に参加しない兵達に荷物の準備させとるとこや。」

「奇襲だの夜襲だの、細かいことは良いではないか。…それよりも、呉にだけは仕掛けるなよ？私達も強くなつてはいるが、邦祐には敵わんし、何より『あれ』を味わうのは避けたい…。」

「そこについても問題なしや。うちやって『あれ』は飲みたないし、兵達だって同じこと考えとる。今んところは順調や。」

「なら良い。連合も今日の戦いを見て、より慎重にならざるを得な

いだろう。最小限の被害で最大限の損失を相手に与えるのが、戦の基本だからな。」

連合軍と董卓軍の戦は、まだ始まったばかり。この戦の行く末がどうなるのか、その結末は、神と作者のみぞ知る…のか？

第十七話 決着く史実通りにいかない事実く (後書き)

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

第十八話 真夜中の襲撃／主人公より目立つ部下

一刀は一人混乱していた。この世界に送られて来て、日常の出来事こそ予想がつかないものの、これまで起きた戦・これから起こる戦・これから先に起こる戦。これらの戦は、全て予定調和のごとく、自分の知る限りでの史実通りに再現されると思っていた。しかしその幻想は、ガラスが割れた時の様な音を立てて、脆くも崩れ落ちた。落とせるはずの？水関・勝つはずの関羽・負けるはずの華雄。これらがすべて逆方向に展開している。あり得ないことだった。

「何が起きてるってんだよ！？この世界は、武将が女の子になつて
る以外は何も変わらないはずなのに…。関羽だつて華雄に勝つて、
？水関だつてここまで苦労するほどのものじゃなかった。」

「一刀、ちょっと天の知識について聞きたいのだけど、良いかしら
？」

「……ああ、入って来てくれ。」

華琳が来た。いつもと雰囲気が違うのは、？水関での一件が主な原因だろうな。それにしても、華琳は俺の知っている史実のことを今まで聞こうとはしなかったのに…。

「それで、何が聞きたいんだ？…と言っても、あれしか無いよな。
史実では、関羽が華雄を討ち取って、？水関は攻略出来る筈なんだ。
この後に控えてる虎牢関の方が、よっぽど辛い戦いになるのに。」

「そう。とりあえず一刀が知ってるのは、それだけなのね？」

そう言われて、もう一度考えてみる…。たしか、董卓軍に楊昴なんて武將いたっけか？

「…楊昴…。そんな名前の武將は、董卓軍にはいなかったはずだ！もしかしたら、あいつが何か関係してるのかも。」

「…もしかなくてもそうでしょうね。春蘭を素手で倒すほどの武勇に、あの猪をあそこまでの武將に変えた手腕をもつ可能性も否定できないわ。華雄と楊昴は、我が軍にいたべき人材よ。あの二人の顔を歪ませることが出来たら、どれほど気持ち良いことか…。良かったわね一刀、また種馬としての仕事相手が増えるかもしれないわよ?。」

「やめてくれ華琳。華雄に手を出してみたい気持ちもあるけど、手を出そうとした時点で、俺の人生が永久に終わっちまう気がする…。」

その後は華琳と他愛無い話を交わし、夜は更けて行った…。

深夜、董卓軍が動き始めた。連合軍に奇襲をしかけ、士気をさらに下げるためだ。

「皆、準備はええか？」

霞の声に頷く兵士たち。全員弓矢を携えていた。

「最後に確認するで。この奇襲は、連合軍の兵糧庫を焼き払って、甚大な被害を与えることが狙いや。兵糧庫の場所はもう隠密達に調べてもらったから、問題ない。それじゃ、あとは頼むで。」

やることは単純。深夜に火計をしかけ、敵兵糧を削るというもの。自分達の食糧が無くなれば、新たに補給されるまでの間、確実に敵軍の士気が低下する。莫大な兵力を持つ軍になればなるほど、一回の被害は大きく、兵糧がたくさん残っている諸侯が新興やあまり力を持たない所だけだと、膨大な量の兵糧全てを賄いきれないため、士気も戦力も下がる。攻め方ひとつ変えるだけで、ケチな諸侯を中心に、内部分裂を狙えたりもする。

奇襲部隊の隊長を務めるのは、邦祐が洛陽に待機させていた隠密のドライ（女性）とフィア（男性）だった。彼らは部隊を先導するため、虎牢関に続く道の門から出撃した後、？水関をはさむような地形になっている小高い丘を、二手に分かれて迂回し、連合軍の野営地を見下ろせる場所に到着した。

二人は梟を使い、離れた相手と連絡を取る。しばし梟便での会話。

「兵糧庫の周りには見張りがありますが、人数が少ないですね。用心なのか、夜襲されることはないかと高をくくっているのか、馬鹿なのか、全く理解できません。」

「いや、まず深夜に何千人も起きてる方がおかしいだろ。籠城戦は、一種の我慢比べのようなものだ。体力の浪費は避けたいのだから。…たしかに、拍子抜けではあるがな。」

二人は梟便での会話を止め、兵達に隠れながら、それぞれの指定した配置に移動させた。それから丘を下りて、二人は合流した。

「まずは見張りを片づけて、兵達にどこを狙えば良いのか、松明で分かるようにしましょうか。」

「何だか、呆気なく終わりそうですね。」

その言葉通り、見張りの兵達は大した抵抗すら出来ずに殺された。首をへし折られた者、頸動脈を斬られて失血した者、心臓を一突きされた者、絞殺された者……。様々な方法だった。その後、兵糧庫の周囲に松明を設置して、兵達の所へ戻った。

「これなら上出来だろ……。全員、弓を構えて、布に油をしっかり含ませたか？大丈夫なら鏝に巻いて点火しろ。」

上から見下ろすと、狙いが松明の明かりではつきりとわかる。これなら外すことはない。いい加減眠いし、終わらせるとするか。

「皆、さっさと帰って寝たいだろ？……斉射用意、放て！！」

掛け声がかかり、連合軍の野営地を数百もの火矢が次々と降り注いだ……。

放たれた火矢は、各軍の兵糧を少しずつ燃やし始め、その火はさらに他の兵糧へと引火し、凄まじい勢いで燃え広がった。突然の奇襲と燃え広がる赤い壁に、どの兵たちも慌てながらも消火活動を始め、その作業は明け方まで続いた。

消火活動を終えた早朝、麗羽の怒りが爆発した。

「見張りの兵は、一体何をしていたんですの！？袁家の名に泥を塗るようなことをされたのですから、ただじゃおきませんわ！！」

「ひ、姫…。それが、見張りの兵が皆やられたらしくて、相手はやりたい放題だったみたいなんだ。それで…あゝ、駄目だ！！斗詩いゝ、あとお願い！！」ダダダッ！！

文醜は逃げ出した。しかし、顔良に回りこまれてしまった。

「ずるいよ文ちゃん！私だって言うの嫌だし、麗羽様が聞いたたら、絶対怒るもん！！一人だけ説教から逃れようだなんて…。そんなことさせないからね。」

「いったい何があったって言うんですの？」

「姫、絶対に怒ったりしない？」

「ええ、連合の総大将たるこの私の心の広さを信じなさいな。袁家の名にかけて、怒ったりなどしませんわ。」

「絶対の絶対？」

「絶対の絶対です。」

「絶対の絶対の絶対」ああもう、さっさと言いなさい！！」怒ったじやん、姫…。」

「い、今のは、猪々子さんがくどいのがいけないんですわ！！それで、何か遭ったんですの？」

「麗羽様、実は…董卓軍の奇襲で私達の軍と袁術様の所の兵糧が殆ど駄目になってしまつて…。節制をしていたただかないと、兵も合わせて、持つて2日が限界の量しかありません。今から冀州に早馬を

送って、新しく兵糧を送ってもらっても、早くて3日かかるんですよ。私達このままだと丸一日飲まず食わずで過ごさなくちゃいけないんです。」

「それなら、総大将の命令で他の方達から貰えば良いことではありませんの？」

「それが出来ないから困ってるんだよ、姫。どこも結構な被害だから、軍の食糧を賄うだけで精いっぱいだよ。だから、姫には我慢してもらおうしか。」

「むきいいー！！名家であるこの私に、民と同じ質素な食事をしろとでも言うつもりですか！？冗談じゃありませんわ！！斗詩さん、今すぐ早馬を送るように兵に伝えなさい！猪々子さんは斗詩さんが戻り次第、どんな方法でも構いませんから、質素な生活をしないで済む最低限の食糧の確保をして来なさい！！」

「だから、それが無理だから姫に我慢するようにお願いしてるんだよ！！それに結局怒ったじゃ〜ん！！姫の嘘つきー！！」

「それとこれとは話が違いますわ！私に害が無ければ、怒ったりなどしていません！！ですが、この私が民と同じ生活を少しでも送るという、その事実が許せませんの。」

「で、ですけど！今回ばかりは、麗羽様にも贅沢を我慢していただかないと、兵達が「城に戻れば兵の変わりなど、いくらでもいますわ！！」麗羽様！？」

「いいですか！？私は名家なのですよ！！その私が節制？冗談も休み休み言いなさいな！！兵に回す食糧をこちらに回しなさい。少し

くらい減った所で、痛くも痒くもありませんわ!!」

「朝の散歩中に、騒がしいと思って来てみれば……。朝一から聞き捨てならない台詞ね。」

現れたのは…華琳ではなく、どこか興奮した様子の雪蓮だった。

「民が減っても、痛くも痒くも無いですって!?!あなた、自分を何だと思ってるの?」

「私は名門、兵は民。上に立つ人間が下の人間よりも、良い暮らしをするのは当たり前のことですわ。そういう貴女だって、帰れば裕福な生活を送っているのでしょうか?」

「ええ、否定はしないわ。でもね、私とあなたは根底の部分が決定的に違うのよ。あなたは民を食い潰しても代わりがいるから問題ないみたいなこと言ってるけど…。私にとって兵達、民は家族なの。私がこうやって自由に振る舞えるのも、支えてくれる家族のおかげなの。だからこそ、戦になれば私は家族を守るために剣を取る。この考えの違い、分かるかしら?分かるわけないわよね?あなたは、民のありがたみを知らなさすぎるもの。上に立つ者として、そんなことすら知らないあなたは…ただの屑よ!!」

昂揚した自分を落ちつけ、最後にもう一言だけ…。

「あなたには、上に立つ者の器も資格も無いことを…よく覚えときなさい。」

それだけ言い放つと、麗羽の何か言いたげな顔を見向きもせず、天幕から颯爽と出ていった。麗羽に同じことを言っただけだった。

華琳と、言いたいことを躊躇いなく言える雪蓮に対して、羨望の眼差しを向ける桃香が、威風堂堂たる小霸王の背中を見送っていた…。

第十八話 真夜中の襲撃〜主人公より目立つ部下〜（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

第十九話 復活く前菜扱いの白装束達く

早朝、董卓軍は夜襲に続き、またしても動いていた。次の策は…
…。

「ちゃんと、私達の軍旗と偽の軍旗をすり替えて来たか？」

「はい、すり替えは完了しております。こちらが“本物”の華雄將軍の軍旗で、“本物”の張遼將軍の軍旗は、ただ今別の兵士が持っております。」

「そうか。荷物の方も準備は万全か？」

「はい、我々はいつでも出発できる状態です。」

「よし、ならば兵士たちに伝える。我々はこれより虎牢関へと移動する。ドライとフィーアには、？水関に留まり、ここに送られた呉軍以外の斥候を排除するように伝えておけ。」

「了解しました。」

今からやるのは、兵法三十六計の第四計、以逸待勞。これは、こちらが動かない時には敵が動かかねばならないように仕向け、こちらが少し動く時には敵は大きく動かかねばならないように仕向ける。こちらが主導権を握り、敵を振り回すようにして敵兵の疲弊と物資の浪費を誘う戦術の一つだ。…と言いたいけど、やるのはこれまた時間稼ぎにすぎず、大それた策の一つもない。

霞がドライ達に軽く声を掛ける。

「敵に悟られないように、出来るだけ時間稼ぎするんやで、二人とも？」

「私達を誰だと思ってるんですか？お気になさらずとも、ご期待に応えてみせますよ。」

「これまた偉くでたまんやな。ならば、虎牢関か洛陽で再会しようか！…開門！！」

重々しい音をたて、裏門が開かれる。こうして董卓軍は、隠密の二人と偽物の軍旗二つを残して、虎牢関へと下がって行った。連合軍の総大将が、いかにも『私達、籠城してます』と見せる董卓軍の意図に気づき攻城して来る日は、他の諸侯が呆れるくらい後のことになる。

ただ今、城の中にある地下の独居房に重傷のまま、絶賛放置中…。それにしても、よく寝たな。こんだけ刺されてなお眠るとか、『踊大捜線 HE O V I E』の島刑事じゃあるまいし、あり得ないかと思ったけど、あり得たね…。まあ、どうせ放置しておけば、そのうちくたばるとでも思ったんだろう。やるならきっちり息の根止めなきゃ…。」

陰険メガネの詰めめ甘さにほとほと呆れながらも、現状把握する。

「そろそろ狩りの時間だし、“右腕”の包帯も外すか。」

巻かっていた包帯は、ハラハラと床に落ちていき、真っ赤な腕と発達した爪が、再びその姿を現した。

「それにしても、地味に痛えなこれ。まずはこの傷をどうにかしなくちゃだけど…。バッグも武器も牢屋の外か。なら、バレない程度に殴って牢を壊すとするか。」

右腕を振りかぶり鉄柵に叩きつける。力が強すぎるのか、腕自体の防御力が高すぎるのか、殴った感触すら湧かなかった。

「よし、脱出成功!…あ。」

牢から出た瞬間、俺の生死を確認しに来ていた白装束と目?が合った。

「き、貴様!!まだ生きていたのか!?急ぎ伝えに行かな…グヘエッ!?!」ぐちゃっ!!

面倒だから黙ってもらおうと思って、肩を掴んで振り返らせた後、顔面に右ストレートかましたら…なんか嫌な音したな。折角そのフールド?付き白装束を使いたかったのに。自前のあるから構わないけどぢゃ。

「さてと、武器も荷物も取り返した。あとは、月ちゃん達を取り戻すついでに、落とし前をつけさせてもらおうとするか。その前に、冥琳にもあげたチートな妙薬を飲んでおかなくちゃ。」

チートな薬で傷も塞がったし、バッグから同じような白装束を取り出して、それを纏う。これで俺も、立派な白装束の仲間入りだ。まずは目の前で倒れてる白装束になり済ましとこう。月ちゃんは玉座にいるだろうから、とりあえず巡回するふりして、人質になつてる他の皆の場所を確かめに行かなくちゃ…。

ミッション4・人質を探しつつ、目障りな白装束を減らせ

城の中を探索し始める。城の造りをかなり簡単に思い出すと、一階部分は、玉座・調連場・風呂場・食堂など、人が集まるような場所や皆が使用する場所が多くて、侍女達の大部屋もあつた気がする。二階部分は、基本的に城に勤めている文官の私室や仕事部屋、資料や木簡の保管場所になっていたはずだ。世話になっていた時は二階の空き部屋を使つてたけど、何となくしか覚えてない。三階部分は、月ちゃん達の私室と空き部屋が一つある。以前：霞さんに酒飲み相手として付き合わされ、その度に酔つて霞さんの部屋で寝てしまい、翌朝皆に見られて気恥ずかしい思いをしたことは今でも忘れられない。

とりあえずは、三階を目指すことにしよう。次は邪魔な奴らをどう片づけるかだ。

「すぐに出せるのは……短剣とモーニングスターくらいか。なんか隠密とはかけ離れてる装備だけど、別に気にするほどじゃないか。」

一旦、得物を仕舞つた後、新しく出した武器を装備して、一階へと上がった。

さっそく巡回しようとしたら、侍女達の大部屋前に白装束が3人立っていた。

「侍女達が、閉じ込められてるんだろうな。」

周囲を確認……。よし、誰もいない。最初の被害者はあの3人に決

定だ。まずは一人だけおびき寄せよう。

近くにあった壺をわざと割り、そこに佇んで、じっくりと獲物を待つ…。

「何か音がしたが、何があった？」

狙い通り、一人だけが誘き出された。

「ああ、躓いた際に壺を割ってしまったな。気にせず持ち場に戻れ。」

こちらの狙いも分からず、持ち場に引き返すために背を向けた瞬間、背後に忍び寄り、持っていた短剣で喉元を掻つ切った。死体を隠し、俺が代わりに持ち場に戻った。

「結局何だった？」

「巡回してる時に、躓いて壺を割ったんだと。」

あまりのつまらないネタばらしに興味を失ったようだ。

「代わりに、俺が面白いことを教えてやろう。実はな…。」

新たに振られた話に食い付いてきた馬鹿な奴らに…死刑宣告を下す
としよう。

「お前ら、今から死ぬんだぜ？」ガンツ！！

片方の見張りの頭に仕込んでおいたモーニングスターを叩き込んで

おいた。頭潰れてるし、こりゃ助からないな。最初から助ける気無
いけど。突然のことに動けないでいるもう片方の白装束は、死なな
い程度に首を握りしめた状態を維持する。勿論、尋問するために。

「答える。人質のいる部屋はどこだ？まだ死にたくはないだろ？嘘
を吐いたらどうなるかわかるな？」

「さ、三階、の、空き部屋、だ…。は、早く！！ぐ、ぐるしい…。
だず、げて…。」

人質を取るわ、人の体をぶッ刺すわ、月ちゃん操るわ、好き放題や
つてくれた割に、自分は助けてくれか…。こういうやつにはお仕置
きだな…。

「おいおい、まだ死にたくないだろとは聞いたが、誰も助けるなん
て言っていないぞ？それに、質問に答える間の時間分、長生き出来た
じゃないか？そもそも俺は狩る側、お前達は狩られる側、OK？こ
れで、一つ賢くなれたな。それじゃ授業料は、お前達の命で払って
くれ。」ギョツ…ゴギョツ！

有無を言わず首を握り潰す。悪魔の腕なら造作もない。それにし
たって、汚いゴミだな。とりあえずその辺に捨てておくとして、中
にいる侍女達は大丈夫だろうか？

大部屋の中に入ると、怯えている彼女達が一箇所に固まって、励ま
し合っていた。侍女の一人がこちらに気付き、大声を上げた。

「う、嘘！？皆、邦祐様が生きてたわ！」

「よくぞ御無事で！…重傷を負わされた後、地下牢に入れられたと

聞かされていたのですが、傷の具合は？」

その後も、次から次へと質問が途絶える気配が無い。答えようとしても、侍女の声に掻き消される。不安によって張り詰めた緊張の糸が切れたのか……。3人寄れば姦しいって言うけど、十数人もいたら姦しすぎる！！

「はいはい、静かに、静かに！！後で全部教えるから。それより、扉の前の見張りを処分した。誰でもいいから代表者3人、これを纏って白装束の奴らになりすましてくれ。奴らに見張りが入れ替わってるのがバレると、後でまた面倒だ。」

「わかりました。邦祐様はこれからどちらへ？」

「とりあえず今から、詠ちゃんと月ちゃんの両親が捕まってるらしい部屋に乗りこんで来る。」

「場所はおわかりですか？」

「ああ。三階の空き部屋って聞いたから大丈夫だ。それより、フュンフ知らないかな？」カタッ

「よっこいしょつと。天井裏から失礼しますぜ、御主人。それより、いつ帰って来たんで？」

「半日くらい前に着いたんだけど、地下牢で仮眠を取ったら寝過ぎてね。今さつき起きたところだよ。そんなことより、今回の黒幕は誰なのか、調べは付いてるのか？」

「へい、犯人は宦官の張譲って野郎です。道士を引き込んだのも、

そいつの仕業ですぜ。黒幕は俺がしょっぴいておくんで、御主人も… いったい頼みますぜ？」

「任せとけて。全てにおいて、格の違いを見せつけてやるよ。相手と同じ射程距離での戦いでな…。」

部下に黒幕を捕まえに行かせ、こっちも人質を救出するため、再び動き出すことにした。

… もう隠密みたいに、こそこそしないでいいよね…？

第十九話 復活〜前菜扱いの白装束達〜（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

第二十話 暗き過去〜ご都合的だと解決も早い〜（前書き）

戦闘パートを入れる予定だと、質問で答えたのですが・・・全然入
れられませんでした。次回こそ、必ず入れます。

第二十話 暗き過去と都合的だと解決も早い

白装束から聞いた通り、詠ちゃん達が捕まってる(らしい)三階の空き部屋に向かった…。この城の三階は所々に空き部屋があるから、探すの大変かと思っただけだな…。

「こらあ!! いい加減に、ボク達をここから出せえ!!」ドンっ!
ドンっ!

詠ちゃん…。それじゃあ『ここに監禁されてます』って言ってるよ
うなもんだよ。もし変なおじさんとかが、何も知らずに来ちゃった
らどうするんだ…?

「詠ちゃん?この部屋にいるの?」

「邦祐!?刺されて今は地下牢にいるはずなのに…。わかった!あ
んな、声だけ似せた偽者ね!!ボク達を始末しに来たんでしょ
う!」

「いや、違うからね!?俺は本物だから。…ちよつと扉から離れて
もらえないかな?」

「…わかった。…はい、離れたよ。」

「それじゃあ、遠慮なく蹴破らせてもらっね…。」バアンツ!!

部屋の中には、詠ちゃんと月ちゃんの両親と思われる夫婦がいた。

「ちよ、ちよつと邦祐!!そんなに大きな音立てたら気付かれちゃ

うでしょ!？」

「大丈夫、大丈夫。今さら見張りが来ても遅いから。」

扉が蹴破られる音なのか、さつきより部屋の外に響くようになった詠ちゃんの声なのか、どっちが原因なのか分からないけど、白装束が数人こつちに来た。

「貴様、死んだはずじゃなかったのか!？」

「いや、死んだはずじゃって言われても…。俺は生きてるって、言うしかないだろ?」

「一度は運よく死ななかつたみたいだが、二度目はないぞ。今度こそ、諸悪の根源の一人である貴様には消えてもらおう!！」

何を思ったのか単身で飛び掛かってきた白装束に、ホルスターから抜いた愛銃を左手で構え、撃鉄を起こし引き金を引く。刹那にも満たない時間差をつけ、二つの砲門から弾け飛んだ弾丸は、白色的を深紅に染め上げた。

「何、今の音!？もしかして、邦祐が持つてるその鉄の塊から出た音なの?」

「あゝ、そういえば皆には俺の得物を見せてなかつたっけ?これは銃って言って、こつやって狙いを定めて……。」「ダダーン! ダダーン!」

銃から来る反動などものともせず、玩具の銃でも使っているかのように振る舞う。繰り返し何度も放たれた弾丸は、その場にいた白装

東達全員の頭を貫通し、痛みで狂うことすら許しはしなかった…。その後一度部屋を綺麗にし、改めて3人と向き合った…。

現在：詠ちゃんと中年の夫婦一組の3人と向かい合っている。この2人が、月ちゃんの両親のようだ…。

「え」と。そちらのお二人は、はじめまして。俺は沖原邦祐って言います。一応、天の御遣いと同じ世界の人間です。娘さんには、城においていただいたり、色々とお世話になってました。」

「そうだったか。天の国の人間だったとは驚きだ。私の名は董君雅、こっちは私の妻だ。しかし、天の世界の武器は凄いのだな。その小ささであれだけの威力を誇るのであれば、今頃では天の御遣いがいる魏軍で普及していてもおかしくないと思うのだが？」

「いえ、御遣いの方は、これの知識も実物も持ってないんで。なのでこれは、董卓軍と呉軍の一部の人しか知らない企業秘密なんですよ。」

「なぜそこで呉が出て来る？君は、我が娘のところに行ったのだろうか？」

「いえ、最初は呉にいたんです。ですが、かくかくしかじかの事情がありました、ここでお世話になっていたんです。」

「そうだったか。ところで…、その腕はなんだ？」

「これ…ですか？これは、神様からの貰い物です。詠ちゃんには見せたことあるけど、これを貰った理由までは話してなかったね。」

「うん。たしかにボク達は聞いてなかったし、教えてもらいたいんだけど……。」

「なら、この腕を貰うまでの経緯を話します。全部聞き終わってからの方が、色々と分かりやすいと思うから、質問は話し終えた後で、まず最初に……。」

一度雪蓮達に説明したことだから、簡潔に説明した。揃って信じられないって顔してるな。

「……とりあえず、これがこの腕を貰うまでの経緯です。それじゃ、何か質問は？」

「一つ、質問しても良いかな……？」

「ええ、どうぞ。」

「君にはどこか、影があるように見えてならないんだが、それも理由の一つなのかね？」

痛いところを突いて来たな……。

「……鋭いんですね。いつも通り、隠し切れていると思っていただけですが……。」

「これでも、子を持つ身なのでね。よかったら、話してもらえないだろうか？」

「分かりました……。そのこともお話ししましょう。」

家族のこと・10歳の頃に父親の不倫がバレて、家から出ていったこと・残った家族が俺の話の聞かなくなったこと・虐待に近いものを受け続けたこと・それが原因で、長い間心に仮面を被り、自分を偽り続けて生きてきたこと等……。今まで誰にも話すことはなかった、影の部分を初めて誰かに話した。

「そんな……。貴方はそれで辛くなかったのですか!？」

「気の許せる友人と音楽のおかげで何とか……。特に音楽は、酷い言葉や暴力で傷付いた俺に、何度も救いの手を差し伸べてくれました。」

「そうか……。だが、もうその仮面を被り続ける必要は無いのではな
いか?君が虐げられることは、もう無いんだ。そろそろ、自然体の君で生きてもいい頃だろう。それと出来れば、守るべき人を作ることを、お勧めさせてもらう。」

「守るべき人……。ですか?例えばどんな?」

今まで重苦しかった空気が、董君雅さん達によって一変することになる……。

「誰かと恋仲になるなり、誰かを娶って家族を作るなり、色々あるだろう?」

「はあ……。ですけど、前の世界で女性にモテた記憶はありませんし、これと言った相手も、俺にはいませんよ?」

「それは良いことを聞いた。そこで……。君の相手に、うちの娘が

お薦めなんだが、どうだ？今でこそ洛陽の太守なんてやってはいるが、本来あの子は献身的で一途な子だ。ちよつと自虐的な所が玉に瑕だが、それでもきつと良い夫婦になれるぞ？…まあ、私達には少し劣るがな。」

月ちゃんは可愛いし、良いなとは思っけど…初めて会った男に、自分の娘を恋仲、ましてや結婚相手として、簡単に薦めるか普通？

「ちよ、いきなり何言い出すんですか！？奥さんも、黙ってないで何とか言ってくださいよ！？大事な娘さんのことなんですよ？」

「嫌だわ、奥さんだなんて。これから私のことは義母さんって呼んでちょうだいな？」

「なら、私のことも義父さんと呼びなさい。」

「おいしい！！二人して何言い出してんだあ、この夫婦ー！！？」

「何かおかしな事を言ったかね？どこぞの金に物を言わせるだけの無能な貴族や、高官の馬鹿息子なんかに大事な娘をやるくらいなら、人の痛みが分かり、腕も立つ君を選んだほうが、娘のためになるというものだ。」

「そうですね。それに私自身、男の子が一人欲しいとずっと思っていました。貴方がうちの娘の婿になってくれれば、義理とはいえ、私達家族の間に念願の息子ができるのですよ？どちらにしてもお目出度いことではありませんか？」

駄目だこの人達…。完全に親バカモードになってる。

「それだけじゃない。華雄と張遼がいるだろ？洛陽には、彼女達に
つり合うような男が、誰一人としていないんだ。武人とは言っても、
やっぱり女性。結婚にだって、多かれ少なかれ興味はあると思うの
だ。」

「まあ、あるでしょうね。それで、まさか許可さえ貰えれば二人も
娶れ…なんて言いませんよね？」

「なかなか察しが良いじゃないか。ここじゃ実力さえあれば、一夫
多妻も許されるのだよ。」

これ、なんてデジャヴ…。

「まあ、冗談はこれくら「いや、冗談に聞こえませんでしたから。」
…ともかく、話は逸れたが、ここは天の国ではないんだから、自分
を偽って生きる必要は無いんだ。言いたいことは分かるね？」

董君雅さんの言葉で、何だか過去の呪縛から解き放たれていく気が
した…。

「…そうですね。俺はもうあそこに戻らなくて良いんだし、本心を
隠していくのは、止めることにします。この腕にだって、ありの
ままを受け入れてくれる人を探すための道具じゃなく、ちゃんと俺
の体の一部なんだって、見てやれるような気がします。俺が貰った
この力が悪魔のものだとしても、俺が人間であることに変わりはない
んだから…。」

右腕から、不思議な魔力みたいなものが流れて来る。今まで以上に
力が湧いてくるみたいだ。

「…もしかして、これは閻魔刀なのか？」

「やまと？ 邦祐、それはいつたい何なの？」

「そうだな…。まだ何とも言えないけど、あの陰険眼鏡と足癖の悪い脳筋から、月ちゃんを助け出せることだけは確かだよ。」

「その言葉、信じてもいいんだよね？」

「勿論。それじゃ、今から月ちゃんを助けに行って来るから、大人しく待っててね。」

目指すは、あの道士達がいる玉座。絶対に負けられない戦い（一方的すぎる過剰なお仕置き）が、そこにはある……。

第二十話 暗き過去〜ご都合的だと解決も早い〜（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

第二十一話 死合い〜死はふいに来る狩人にあらず〜

何だか先程から、上の方が騒がしいですね。あの人間達の仕業では無いようですし、一体誰がこんなことを…。

「も、申し上げます！！あの男が「邪魔だ、失せろ！！」ぎゃあああ！？」ドサツ……

その場にいたのは…たしかに止めを刺したはずの男が巨大な片刃の剣を担いだ姿だった。

「よお。お前らを狩り尽くすために、復活してきたぜ？感謝の一つもしろよ、この野郎。」

「信じられませんね…。あれだけの傷を負わせたというのに、まだ生きていたとは。」

「そんなこと、気にしなくてもいいことだ。今度は俺達が直々に手を下せばいい。そうだろ、于吉？」

「それもそうですね。今度こそ確実に不安要素を取り除けるのですから、その点だけは感謝しましょう。」

「そうか。なら感謝ついでに、教えてくれよ。誰がやられたら、月ちゃんに掛けられてる術は解けるのか？」

「誰がそんなことを」「どうせここで消えるのですから、教えて差し上げましょう。もし私を瀕死にまで追いやる事が出来れば、あの術は解けます。まあ、無理な話ではありますがね。」「おい、于吉！

余計なことを言うな。」

「そうかい、ありがとよ。それじゃそろそろ、始めるとするか…。」「
二ヤリ……」

あの不可解な笑みが気になりますが、所詮は人間…。私達、外史の
管理者に勝つなど不可能なこと…。

「ここにいるのは、傀儡の中でも精鋭と呼ばれる者達です。これ
はいくら運が良かった貴方でも、一溜まりもないでしょう。」「

十数人も白装束達が、それぞれの武器を構える。

「今度こそ、お終いです。傀儡達よ、かかりなさい!!」

その言葉で、傀儡達は一斉に襲い掛かっていった。

良いことを聞いた。あの陰険眼鏡を瀕死にすれば、月ちゃんの術
が解ける。やろうと思えばすぐできるけど、借りを返す意味でも、
どうせならあの憎たらしい顔を絶望で染め上げてやるのも悪くない
な。

「…傀儡達よ、かかりなさい!!」

白装束達が飛び掛かって来た。こいつらをギリギリまで引き付けて、
悪魔の引き金を引けば、お楽しみが始まりだ。

「……やるぜ!」

悪魔の右腕の力を解放したことにより、自分を中心に暴風のような衝撃波が発生し、それに巻き込まれた白装束達は、全員壁に叩き付けられ、そのまま気を失った。

「へえ、これが“真の姿”か…。なかなか楽しめそうだな。」

目は赤くなり、腕が青白い気のようなものに包まれ、俺の背後にも青白く光る魔人（イメージ的にはジョヨのスタンドみたいなもの？）が出現した。魔人の手には、巨大化した閻魔刀が握られているけど、俺が使いたい時には、日本刀と同じ大きさに戻るみたいだ。どんな風に動くのかも、ちょっと確認してみようか。

「へえ」。俺の動きからワンテンポ遅れて攻撃したり、同じタイミングで攻撃したり、結構自由なんだな。」

「貴様、それは何だ!!」

「何だつて言われても、あんた等を断罪するための切り札みたいなものだけど?」

「俺達、管理者を断罪だと?笑わせてくれる。于吉!!」

「ええ、分かっています!~~~~~、はあっ!!」

陰険眼鏡（于吉）が何だか分からない術を唱え、体の動きを封じられた。でも、魔力を封じられたわけじゃないし、とりあえず演技して、図に乗らせておくか…。

「か、からだがつごかない!？」 棒読み

「貴方の自由を奪わせてもらいました。これなら、左慈の手を煩わす事も無いでしょう。私が引導を渡して上げます。良いですよ、左慈？」

「ふん。ならもう一人の方は、俺がやらせてもらうぞ。」

人生最後のまともな会話を終え、剣を鞘から抜き、俺に突きつけた。

「そんな幻影をだしたところで、動けなければ意味が無いのですよ？あの時素直に死んでおけば「もういい。お前の長つたらしい戯言はもう飽きた。幻影刀、同時展開…。」な、何ですか、それは!？」

魔人と同じ青白い色をした魔力の刃が、回転しながら次々と具現化されていた。

「何だつていいだろ？お前には、もうじき関係なくなることだ。…斬り裂け!！」

幻影刀が于吉に襲い掛かる。剣で防御しようとしたが、たった数合で折られてしまい、術を唱える暇もない。身を守る術を失った于吉は、ただ逃げに徹するしかなかった。無論、それが許されるほど甘くはない…。じわりじわりと身体の至る所に切り傷を付けられ、痛みから動きも鈍くなっていた。

「ほらほら、ちゃんと逃げないと。止まったら体中から剣が生えるぞ?」

それを聞いて怖気づいたのか、逃げ急ぐあまり、自分の足に躓いてこけた…。

「ひい！！左慈、助け…あ、あ、ああー！！！」

せつかく忠告してやったのに…。足癖の悪い脳筋（左慈）に助けを求めるときに、すぐ逃げ出さないから…。手足と腹部が、床に串刺しだ

これで陰険眼鏡は、片付けたも同然だ。次は脳筋だと思ったら、向こうから声を掛けてきた…。

さて、第一声はどんなものなのやら…？

「ほう、あまり腕に覚えが無い于吉が相手とはいえ、人間如きが奴を退けるとはな。面白い。この俺が于吉の代わりに、貴様に引導を渡してやるう。」

こいつに褒められても、何も嬉しくない。こういう自信過剰な奴は、一回煽ってみれば面白い反応する奴が多いし、わざと頭の上で手を叩きながら、遊び相手に過ぎないという意味を込めて、軽くおちよくってみよう。

「ハハツ！…楽しめそうだな。…なんなら、武器無しで戦ってやるうか？」

「その言葉、後悔す」させてから言えよ、脳筋。「いいだろう。必ず後悔させてやる！！！」

なかなか殺気の込められた蹴りが、引っ切り無しに放たれて来る。でも当たりもしなければ、掠りもしない。

「…やる気あんのか？」

「何故だ！？たかが人間相手に、何故俺の蹴りが当たらない！！」

「蹴りつてのはなっ！！」

後方に飛んで距離を開けた後、脳筋目掛けて全力で駆け出す。その勢いのまま、脳筋に向かって渾身のドロップキックをかました。これで蹴られた借りはチャラにしよう。…利子付きだけだな。

「がはっ！？」「ミシミシ、バキッ……」

「こっやってやんだよ…。蹴った感触から推察すると、肋骨辺りが何本か逝ったか？」

「くっ！人間如きに…。いや、ここまでくれば、最早人間ではあるまい。貴様の力は…悪魔そのものだ…。」

NGワードを言ったので、さらにお仕置き追加決定しました、おめでと。そして…さようなら。

「俺は悪魔じゃねえ、人間だ！！」

ドロップキックで吹っ飛んだ脳筋を、『スナッチ』（腕を伸ばして、離れた相手を掴み引き寄せるアクション）で引き寄せて、『バスター』（右腕で掴んだ相手に対し、様々なバリエーションの攻撃をするアクション）をお見舞いする。今回は、リリルじじいと同じものをチョイスすることにした。

「はぁぁー！ー！！」

力を解放した右手でボディブローを放ち、体が少し浮き上がったところを、床に落とさぬように左右の拳を幾度も放ち、追い打ちをかけ続けた。勿論、幻影刀も忘れずに放ち続けている。二十発近く放ったところで打つのを止め、腹部に数本の魔力刃を生やしたまま、膝を付いてぐったりとしている左慈の頭を左手で掴む…。

「悪魔はてめえらの方だろうか!!」

シメに、顎に全力のアップパーを叩き込んで、真上に打ち上げた…だけじゃ終わらせない。さらに幻影刀を射出し、宙にいる左慈を攻め立てる。幻影刀の最大の利点は、牽制・追撃と、空中にいる相手でもその場に固定化させる有能さだ。相手が落ちてくるまでの時間稼ぎをしている間に、こっちも準備を進める。

日本刀に形を変えた閻魔刀と、本来の得物であるレッドクイーンの間で、連続斬りを行う絶技『ショウダウン』。威力が高い分、隙もでかいため、普段は使わない大技だけど、今回は特別サービスだ。時間稼ぎで使った幻影刀の魔力が尽き、ちょうど良い時に、既に虫の息の左慈が落下して来た。こんな茶番、さっさと終わらせて、月ちゃんを連れ出さなきゃ…。

「踊れ、マヌケ!!」

レッドクイーンと閻魔刀、二刀の斬撃が舞い、切り刻んでいく…。

「塵は塵に…!!」

二刀を交差し、二方向からの袈裟斬りで切り捨てた…。勝負が付き、

月ちゃんを連れて玉座の間から出ていく。

その場に残されたのは、自らの血で出来た、真っ赤な水溜りの真ん中で、顔を絶望に染めたまま、息を引き取った于吉と、体に深々と走る、深紅の斜め十字が刻まれた、左慈の亡骸だけだった……。

第二十一話 死合いゝ死はふいに来る狩人にあらずゝ(後書き)

無理やり戦闘シーンを一話に収めてみました。

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしくお願いします。

第二十二話 仲間との再会、軍議から一転、婚活へ

月ちゃんを連れて、3人の待つ三階の部屋に戻った。道士達のことを知らせ、これからの行動について話し合った結果、連合軍を虎牢関で迎え撃つために、霞さん達との合流を最優先することになった。

「俺はもう虎牢関に行くけど、月ちゃん達はどうする？」

「ボク達は、洛陽で待ってる。皆が帰って来た時の準備とか、色々しておかなくちゃいけないし…。」

「わかった。じゃあ、ちょっと行って来るね。」

「あ、あの…邦祐さん、待って下さい!」

部屋から出ようとした時、二両親と話していたはずの月ちゃんに呼び止められた。何だか、月ちゃんの顔が赤い…。

「あの、少し屈んでくれませんか?」

「これ位で良いかな？」

月ちゃんの視線より、少し上の高さまで屈んだ。

「は、はい。邦祐さん…い、行ってらっしゃい」

ふいに、柔らかいものが頬に当てられた。頬を手で抑え、月ちゃんを見ると、さっきよりも顔が真っ赤だった。…もしかして、月ちゃん

んにキスされたのか、俺？

「へう／＼／＼／＼」

月ちゃんは慌てふためいた様子で、詠ちゃんを連れて両親の元に戻って行った。何だか月ちゃんの両親が、してやったりな顔をしていた気がするけど、あまり気にしないようにして、決戦の地である虎牢関へとバイクを走らせた。

さすがバイクだ。もう虎牢関に到着した…。皆がどんな顔をするのか楽しみだけど、普通に行っただんじゃ面白くない。どうするか…？誰もバイクのことは知らないけど、この服装は見慣れてるし…。つて、洛陽の一件で、俺の服ボロボロじゃん！！たしか教団コスが入ってたはず…。

「……着てみると、なかなか新鮮だな」

人目に付かない場所で着替えた新しい服は、黒のYシャツに黒のパンツ（ここは一緒）、ベルトの付いた黒のブーツ、裏地が赤で、肩口に赤と金のちよっとした刺繍の入った、膝下まで丈のある白いトレンチコートのような上着だ…。何で神様がこの服を知っているの不思議だけど、気にいったから別にいいか。

改めて、虎牢関の門前に立つ。あの見張り、こっちから敵が来ないからってサボってやがる。話しかけて驚かせてみるか…。

「お〜い、この門を開けてくれないか？」

「誰だ！？ここは今、董卓軍が戦の準備をしている場所だ。部外者

を入れることは出来ん。」

「俺が部外者ね〜。俺の声、覚えてないのか？覚えてないなら、せめて顔を見る。」

「声？顔？つたく、一体誰だつて…。」

見張りの表情が凍り付いていく…。自分の振る舞いに後悔している顔だ。

「よお、誰だか理解したか？あと30秒以内に開けないと、全員に『あれ』飲ませるぞ？」

「は、はいいい！！開門だ、全速力で開門しろー！！！」

「何だつてんだよ、いきな「きよ、教官が帰って来られた。すぐ開けないと、また『あれ』が待ってるぞ！！」みんな急げ、急ぐんだ！！！」

重々しい音を立て、ゆっくりと門が開き始める…。

「…27、28、29、おお、やっと開いたか。あいつら、これから戦場になる場所だつてのに、氣い抜いてやがったな？」

中に入ると、緊張した面持ちの兵士達が整列していた。この辺りは、訓練の賜物だろう。

「お帰りなさいませ、邦祐教官。」

「ああ、出迎えご苦労さん。それで、霞さん達はどこに「邦祐！！！」

霞さん、ちよつど良かった。他の皆は？報告しなきゃいけないことがあるんだよ。」

「全員部屋の中や。…その報告つてのは、月達のことなんか？」

「そうですね。なので、出来るだけ早くと思つて…。」

「うちらもその方が助かるわ。これから軍議やから、とりあえずそこで話を聞こか。」

「ちよつと待つて下さい。…さつきサボつてた見張り、こつちに来い。」

部屋に向かう前に、見張りの兵を呼びつけ、霞には聞こえない大きさで命令する。

「さっきのは、水に流しておいてやる。その代わり…今から宴の用意をしておけ。兵士の方も含めてだ。わかつたらさつさと行動しろ。」

首をかしげていたが、叱られずに済んだためか安堵の表情を浮かべたまま、宴の準備をするために見張りの兵は立ち去つて行った。

「すみません、霞さん。さ、部屋に行きましょう。」

「なあ、さっきあの兵と何を話してたん？」

「後のお楽しみなので、今は秘密です。」

その後何度も聞いてくる霞の追及を、適当にあしらい続け、皆のい

る部屋に着いた。

これから軍議だというのに、霞のやつ、どこで油を売ってるんだか…。

「……なあ、うちだけ先に教えてくれたってええやん。」

「駄目です。一人だけ先に聞いておいて、後から聞いた皆の驚く顔が見ただけなんでしょう？…皆、久しぶりだね。」

「何故ここに邦祐がいる！？」

「その辺りも含めて、大事な話があります。とりあえず座ってください。」

「まず初めに…俺は、連合軍に敵対する意思を伝えてきたので、改めてよろしく。」

邦祐が加勢してくれるのであれば、軍全体の士気も高まるだろうし、こちらの勝機も見えてくるだろう。しかし、董卓様の安否が確認できてない以上、安心は出来ない。

「さて、ここからはさらに大事な話だ。もしかしたら、こっちの方が軍全体の士気に関わると思う。」

「その話とは一体何なんだ？」

「洛陽で月ちゃんが、詠ちゃん達を人質に取られて操られていたのは知ってた？」

「知ってたも何も、知ったのは邦祐よりずっと前やで？で、それがどうしたん？」

「知ってたのか！？まあ、俺はそれを知らずに玉座に行ったら、二人の道士に月ちゃん達を人質にされちゃってね、解放するって約束の上で、右脚と左腕、それと腹部を槍で貫かれたんだよ。しかも、その後は武器取り上げられて、地下牢に放置されたし。」

「えっ！？」

信じられん…。それだけの傷を負いながらも生きていたというのか。

「でも、安心してください。傷は塞がってるし、こうやって生きてますから。話を戻すと、その後牢から脱出して、白装束達を消しながら、まずは月ちゃん以外の人質を解放していったんですよ。」

傷を負った箇所を見せてもらった。どこにも傷跡らしいものは見られなかったが、上半身だけとはいえ、普段見ることのない邦祐の体を見て、不覚にも頬を染めてしまった…。

「どうかしたんですか、柳花さん？何だか顔が赤いみたいですけど…。」

「い、いや、大丈夫だ…って、ええい、霞！！私の顔を見て、ニヤけながら肘で小突くのはやめろ！！／＼／＼／＼…それで、助けた人質の中に、董君雅様という方はいらっしやっただか？」

「ええ、いましたよ。あの方と話したおかげで、俺は救われました。」

「救われた？助けたんは邦祐なんやる？」

「俺は幼い時から、ある事情から自分を偽って生きてきたんです。それを董君雅さんがお見抜きになって、もうそんな生き方をする必要は無いんだって言って下さったんです。それでやっと、俺は元の自分を取り戻せました。…ただ…」

「なんや？せつかく素でいられるようになったのに、何か問題があったんか？」

「会って早々、月ちゃんを嫁か恋仲にどうかと薦めてきました。それだけじゃありません。洛陽には、霞さんと柳花さんにつり合うような男がいないから、二人さえ良ければ、3人まとめてどうだとも言われました…。」

「「ぶふっ!?!」」

ついつい飲んでた茶を、二人揃って吹き出してしまった…。それにしたって、私と霞が邦祐と恋仲や夫婦の関係だと!?武人として生きてきた私に、乙女心などあるかわからんし、どんなものなのかもわからん。しかし、この話を逃したら…確実に行き遅れになって、下手をしたら一生独り身か、興味も湧かなければ、自分のことを大事にもしてくれないような男の婚約者で終わってしまう気がする…。どうやら、霞もそれを強く感じ取ったようだな。

「急いで決めることじゃないので、そんな話もあつたな程度で覚えれば良いですよ…って、なんか凄く真剣に悩んでる…。」

「…柳花と二人きりで話してくるから、ちょっと待ってな、邦

祐
「

そう言い残して、戦闘中と変わらないくらいの真剣な顔つきで、私達は部屋から出て行った…。

第二十二話 仲間との再会、軍議から一転、婚活へ（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

第二十三話 約束と条件〜猛将だつて女の子です〜

二人が部屋を出ていき、ねねちゃんと恋ちゃん、そして俺の3人が残された。

「そついえば邦祐殿、前に約束していた技はいつ伝授してくれるのですか？」（第八話参照）

「そつだな〜、ちょうど今時間あるし、今からやろつか。動きやすい服は持つてる？」

「ねねは軍師ですぞ？あまり運動はしないので、そついった服は持つていないのです。」

「そつか…。なら服を汚さないように、これに着替えて来ると良いよ。」

そつ言つて、体操着とジャージを渡す。…ブルマじゃないのかつて？ロリっ娘にブルマとか、それどこのイリだよ。彼女のロリブルマキャラを壊さないためにも、ねねちゃんにはジャージを着てもらおう。この場で知つてんのは、俺だけなんだし…。

「分かつたのですぞ！！」

ねねちゃんは、ジャージ一式を持って、部屋に着替えに戻つた。すると、恋ちゃんが服の袖を引っ張つて来た。

「恋にも、何か、無いの？」

珍しく恋ちゃんのご機嫌が斜めだ…。

「例えば…何が良いかな？」

「…美味しいものとか、恋の家族達にあげられるものとか…。」

「美味しいものか…。なら、ケーキでも食べて待つてようか？」

「けーき？それ、美味しいの？」

「うん、美味しいよ。俺のいた所でも、凄く人気があつたんだ。」

バッグから、カットされたケーキと紅茶を取りだす。いつも思うが、本当に何でも入ってるな…。とりあえず恋ちゃん用に、ケーキはちよつと大きめだ。フォークの使い方などを軽く教えて、ねねちゃんが出るまでの間、二人だけのお茶会が始まった。

「これ、美味しい」

食べ始めてから、どこかの騎士王のように、アホ毛がびよこびよこ動いている。どうやらお気に召したらしく、さっきとは打って変わつてご機嫌のようだ。美味しいものを食べている時の恋ちゃんの観察ほど、この世界で心癒されることはない。ついつい食べかけにも関わらず、自分の分を差し出してしまいそうになる。

「邦祐殿、着替えて来ましたぞ…って、その食べ物は何ですか！？二人だけずるいですぞ！！」

「あちゃ〜、見つかつちやつたか〜。これは天の世界の食べ物でケーキっていうんだよ。はい、これがねねちゃんの分のケーキ。…他

の皆にはまだ内緒ね。」

「了解ですぞ。…はむ…、んんんん、甘くて美味しいです。」

「どこの世界でも、女の子は甘いものが好きなのは、共通なんだな。」

また恋ちゃんに袖を引っ張られた。

「恋もねねも、くにひろから見たら、女の子？」

「俺からすれば、恋ちゃんほどの武将よりも強いけど、本来は動物好きな可愛い女の子だし、ねねちゃんは、軍師だけど、飛び蹴りをかまして来るぐらい活発な女の子だよ。」

「…なんか、あまり褒められた感じがしないですぞ？」

「そ、そうかなあ？」

誤魔化すように二人の頭を撫でると、気持ち良さそうに目を瞑っていた。手を放したら、ちょっと残念そうな顔をしてくれたのが、なんだか嬉しかった…。

それからまた少しお喋りした後、ねねちゃんの技の練習をするため、部屋を出た…。

所変わって調練場。丸太に藁を巻き付けた練習器具を二つ用意し、準備体操を終えたねねちゃんに、技の伝授を始めた。

「良いかい？この技は前にも言った通り、諸刃の剣だ。失敗すれば、自分が痛い目に遭う。その覚悟はあるかい？」

「ありますぞ！！」

「なら、まずは見本を見せよう。」

二つあるうちの一つに向かって、全力で駆け出す。その勢いを保つたまま、両脚での蹴りを放った。練習器具の丸太は真つ二つに折れ、壁にぶつかった。

「近くで見ると、凄まじい威力です。」

「さすがにここまでは要求しないよ。この技自体に慣れて、やり方を覚えてくれれば、十分だと思う。」

それからというもの、ねねちゃんは何度も何度も練習器具を蹴っては起き上がるを繰り返した。しかし、なかなか思い描くような結果が出ることはなかった。体力的にも、あと一度が限界だろう。

「うう、なかなか理想通りに行かないのです。邦祐殿、何か良い方法は無いですか？」

「…仕方ない。あの方法を使おう。ねねちゃん、ちょっと待っててね。」

バッグの中から、一刀の顔写真を実物大に拡大したもの（何でこんな物まで？）を丸太に貼り付けた。

「ねねちゃん、この男の顔をよく見るんだ。こいつは、ねねちゃ

んから恋ちゃんを奪おうとしている悪い奴だと思え。そして自分の中で生まれた怒りを、全力でぶつける気でやってごらん?」

「ねねから恋殿を…。この男、絶対に許さんですよ!!! たあー
ー!!!」ベキイツ!!!

恋ちゃんへの思いが、不可能と思われたことを可能にしてみました。慣れてくれれば十分だったにも関わらず、丸太を真つ二つにしてしまった。恋ちゃん大好き軍師に、限界は無いのかもしれないと思わされた瞬間だった。

「や、やったの、ですよ、恋、殿…。」

相当疲れたのか、そのまま眠ってしまったので、ねねちゃんの面倒を見ておくように、恋ちゃんに頼んで、俺は軍議をする予定だった部屋に一人で戻った。…また恋ちゃんにケーキを食べさせるという交換条件付きではあったけど…。

部屋を出てから、かれこれ数時間。あれこれと話し合っていた私と霞は、ある二択を迫られていた…とは言っても、実質一択みたいなものだが…。

「結局のところ、柳花は邦祐の話、どないするん? さっきの反応を見る限り、聞くまでもないかもしれんけど…。」

「…私自身、あの話を断る理由が見つからない。そういう霞こそどうなんだ?」

「うちも別に断る理由はないんやけど、条件付きやな…。部屋を

出てから、けっこう時間も経つとることやし、早いとこ部屋に戻って話し合いといこか？」

私達が部屋に戻ると、邦祐しかいなかったが、好都合だと思い、さっきの話の返事を返すことにした。しかし、ただ返事するだけだといつのに、戦の前以上に緊張してしまう…。

「邦祐、さっきの話だが…。私には断る理由がない。武以外に、たいた取り柄というものはないが、その…よろしく頼む／＼／＼／」

「は、はい!!こちらこそ、よろしくおね「ちょい待ちい!!」ど、どうしたんですか霞さん!？」

「何あんたら二人で、勝手に良さ気な雰囲気出してんねん!!まだうちの返事を聞いてないやろ!？」

「…ごめんなさい。何だか、いじらしい様子の柳花さんを見てたらなんか…。」

「ったく…。とりあえず、うちも返事はしとくわ。邦祐の話は断らんけど、条件付きや。」

「どんな条件なんですか？」

「まず一つ、うちかて女やから、恋仲にしても夫婦にしても、それなりにちゃんと構ってもらわんと嫌や。二つ、やっぱり武人やから、戦には参加させてもらう。もし、うちに子供が出来たとしても、出る限りは行かせてもらうし、育てるのもちゃんと手伝ってもらうで。三つ、いくら実力があれば一夫多妻が許されるとはいえ、うち

らの身内以外で関係を持つてええんは、我慢できて2人までや。これが、うちの出す条件。それと、出来たら敬語使うのやめれへん？ 堅苦しいし、なんだか他人行儀に感じるわ。」

「…わかりま…じゃなくて、わかった。二人とも、改めてよろしく頼む。」

邦祐が言い終わると同時に、霞が腕に抱き付いていた。…私には簡単に出来んことを、あっさりやってのけるとは…。そして何故か、一度こつちを見た。

「…うちらのこと泣かせたら、許さへんからな？」

「もちろん。俺を選んでくれた以上、二人に後悔はさせないし、泣かせないように努力するよ。」ニコッ

「こっ！？／＼／＼／＼／」

この不意打ちは、反則と言っても良いんじゃないだろうか…。

「おお、こりゃ大きく出たな。そこまで言うんやったら、必ず幸せにしてもらわなあかんわ。な、柳花？」ドンッ

「うわっ！？おい霞、何をす…る…？」

背後に回って来た霞に突き飛ばされた弾みで、邦祐に抱き付く形になってしまったが、そのまま抱き締めてくれた。せつかくだから、目論見が外れて拗ねてる霞を横目に、邦祐の腕の中を堪能し続けるとしよっ…。

その後ねね達に、邦祐に抱き付いてる所を見られて、これでもかと
揶揄われた……。

第二十三話 約束と条件、猛将だって女の子です、（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

第二十四話 下戸く酒は飲んでも、飲まれるな（前書き）

今回は少し長めです。

第二十四話 下戸く酒は飲んでも、飲まれるな

紆余曲折はあったものの、邦祐殿の報告が再開されました。あと残っているのは、月殿のことと、黒幕達のことです。

「さてと…最後に話すのは、月ちゃんと道士達のことだ。皆にとつては、特に重要な事だから、単刀直入に言わせてもらおう。月ちゃんは無事だ。怪我一つない。」

ねねを含め、皆はそれを聞いて、一安心したようです。

「それと、黒幕と二人の道士についてだけ…。道士については、月ちゃんを助け出す“ついでに”、(カづくで)お引き取りいただいてもらった。黒幕の方は、今頃フュンフが捕らえている頃だろう。」

「それは本当なのですか!？」

「本当だよ。…そろそろ軍の士気も下がってくる頃だろうから、今からこの事実を兵達に伝えて、士気を回復するためにちよつとした宴を開こうと思っただけで、どうかな？」

「ええと思うけど…。もしかして、見張りの兵を呼んだのは、宴の準備をさせるためやったんか？」

「その通り。それじゃ、ちよつと兵達に伝えに行つて来るから、皆も宴の準備の手伝いを頼むよ。」

邦祐殿が部屋から出て、兵達の元へ向かって行きました…。しばらく

くすると、室内にいても煩く感じる位の、兵達の大歓声が聞こえてきました。よほど嬉しかったのでしよう。…正直、ねねも叫びだし、そのなのを堪えていたのですぞ。

「なんか、今日は久しぶりに楽しく酒が飲めそうやな。そうや、柳花！…どうせなら邦祐を酔い潰してみいひん？きつとおもろいで？」

「そうだな。攻められっぱなしは性に合わん。溜まった鬱憤を、邦祐で晴らさせてもらおうとするか。まずは…」

何だか楽しそうに邦祐殿を酔わせる算段をしていました。二人とも普段の政務でも、あれくらい積極的に取り組んでくれれば良いのにと、思ったのは秘密ですぞ…。

宴が始まった…までは良かった。誰もが楽しそうにバカ騒ぎをし、宴そのものは、とても盛り上がるものだった。だが、俺には忘れていたことがあった…。

「…うゝ、気持ち悪うゝゝ…。」

俺が、かなりの下戸だということだ。何度か神の所で飲んだことがあったが、缶チューハイでも2/3辺りで、もう飲みたくなくなる。決して不味いわけじゃない。酒が嫌いなわけでもない。俺は、かなりの下戸なんだ。大事なことなので二度言わせてもらった。なのに…。

「ほらほら邦祐、そんなちびちび飲んどらんと、もつと一気に飲まんかい。」

「そつだぞ？男なのだから、もつとこつ、豪快に飲め。」

「ちょ、ちょっと待った！！俺は下戸で全然飲めないから、こつやつて飲んでるんだ。そういう二人こそ、飲めばいいじゃないか？」

「うちらは邦祐を酔い潰した後、その姿を観察しながらゆつくりと飲ませてもらうわ。」

「そう簡単に潰れてくれるなよ？私達の楽しみが無いからな…。」

それから俺は、逃げることも叶わず、ただひたすら飲まされ続けた。

「うう、もう、駄目…。」バタツ

飲まされ過ぎたためか、倒れてからの記憶がなかった。事件があったのは、ちょうど記憶のない部分で起きていたというのに…。

「ん…んうゝ。っ！！頭いてえ…。」

翌朝、二日酔いから来る頭痛で目が覚め、出来る限り冷静に昨日をふり返り、状況を把握し始める。

「俺は倒れてからの記憶がないから分からないけど、誰かが部屋に運んでくれたんだろうな。…あれ、俺、服なんて脱いだっけ？何だか寝台も狭いし、それにこのかすかに感じる匂いは何だ？」

静かに寝台から出る。両サイドが誰だかは確認してないが、とりあえず俺は川の字の真ん中で寝ていたようだ。冴えない頭で匂いが何

だか考えた結果……。匂いの正体は、酒と汗の匂いだった。酒は良いとして、汗は俺のだけじゃない。他の人も混じった感じだ……。ん……。混じった？

「まさか……!?」

布団を剥がすと、霞と柳花が一人分の隙間を開け、向き合うように眠っていた……。寝ているだけなら問題は……。無いとは言えないか。それより問題なのは、二人とも一糸纏わぬ姿だったことと、敷布に赤い斑点があることだ。二人の格好を、見ちゃいけないという自分と、息を呑むような曲線美に、つい見入ってしまう自分がいる。とりあえず、胸の辺りまで布団を掛け直してから、風呂場で汗を流した後、普段着に着替えて部屋へと戻り、二人の様子を見ることにした。

「……こうやって間近で見ると、透き通るみたいな綺麗な肌してるんだな。……体付きだって、普通の女性と変わらないくらい華奢に見えるし。」

「……綺麗なのは（んは）、肌だけなのか（んか）？」

「いや、肌だけじゃなく全部が……。って、うわあ!? 霞、柳花、起きてたのか!？」

「お前が部屋から出ていく音が聞こえてな。その時に起きた。」

「そうだったのか。あゝ、その、何だ……酒のせいで記憶はないんだが、もし嫌々なのにさせてしまったのなら、二人とも済まなかった。」

頭を下げようとしたら、霞に拳骨を落とされた。

「阿呆！！好きな男が相手なんやから、嫌々だったわけ無いに決ま
つとるやる！！」

「仮に、酒のせいだとしてもだ…。女としては、好いた男が自分に
何一つ反応してくれなかった方が傷付くんだぞ？」

「…女性は、雰囲気とか色々大事にするから。酔った勢いでとか、
雰囲気も何も無いだろ？」

「好いた男と共に過ごすのに、雰囲気も何もないだろう。それに、
私達は戦いに身を置く将なのだから、いつ命を落とすのかも分から
ん。少しでも長く、お前に寄り添っていれるのなら、私は雰囲気な
ど二の次で構わん。」

「うちも同じや（なんや、えらい柳花が乙女全開な気がするな…）。
うち相手に雰囲気作りしたいなら、天の国の酒を出してくれば十
分やで」

「まったく、霞はちゃっかりしてんな…。まあ、酒は今度出してあげ
るよ。それと、これは二人の気持ちを聞かせてくれた御礼だ…。」

二人を抱き寄せ、頭を軽く撫でながら軽く触れ合うだけの口づけを
したが、足りないからと目を閉じて口づけをせがむ二人の仕草や姿
がただ綺麗に見えて、もう一度だけ…次は深めに唇を重ね合わせた
…。

虎牢関で宴の準備が進められていた頃、一方の連合軍では、再度

？水関攻略のための軍議が行われていた。

「いくら籠城戦とはいえ、どうしてこんなにも時間が掛かっているんですの！？こうなったら、どこかの軍を偵察（もとい犠牲）として送り、残った全軍で？水関を攻め落とすしかありませんわ。」

「それで麗羽、どこの軍を送るのかしら？」

「そうですね…。劉備さん、心の広い私が、貴女の軍に汚名挽回の機会を差し上げますわ。」

「…それを言うなら名誉挽回でしょ、麗羽？」

「そ、そうとも言いま「言わないわよ…。」とにかく！劉備さんの軍には、もう一度？水関に進軍してもらいます。良いですわね？」

「で、でも！愛紗ちゃんでも勝てないような人がいるんですよ！それに私達はまだ出来たばかりだから、兵も装備も他のとくに比べたら乏しいし…。」

「兵も装備も袁家が貸してあげますから、つべこべ言わずに行きなさい！この袁本初がここまでやってあげるのですから、拒否は許しませんわ。」

「う、うう…。どうしよう、朱里ちゃん？」

「はわわ！これは早く雛里ちゃんと話し合わないと…。」

「…袁紹、貴女は私の言ったことを全く覚えてないのかしら？」

「そう言えば孫策さん、貴女はこの私に向かって、屑だの、上に立つ資格も器もないだの、散々好き勝手に言ってくれてましたわね？」

「あら、覚えてたんだ？てっきり、それすらも忘れてるのかと思っただけけど、流石にそこまでおバカじゃなかったか…。」

「お、おい孫策。それは言いすぎだつて…。」

白蓮が何とか仲介に入ろうとしたが…。

「…劉備さん、やっぱり行かなくて結構です。孫策さん、？水関の攻略は貴女方に一任することにしましたわ。あれほどのことが言えるのですから、勿論行ってくれますわね？」

…気付いてもらえなかった。さすが、普通「だから、普通って言うな！！」

「ええ、構わないわ（うちには何も被害出ないし、手柄も貰える。何より、？水関にいる隠密から、うちにいる二人を經由して籠城のネタばらしをしてもらってるし）。それで、いつから攻め落とし始めれば良いのかしら？」

「そんなの、今すぐに準備して行ってもらうに決まっています！！私には気分が優れないので、席を外させてもらいますわ！！美羽さん、行きますわよ！！！」

「わかったのじゃ…。七乃、後で蜂蜜水を出してたも。」

麗羽が美羽と出て行き、一瞬だけ静寂が流れたが、桃香がそれを破る。

「そ、孫策さん。あんなこと言つて大丈夫なんですか!?!」

「問題ないわ。実際、たった数人で攻め落とせるって、部下の報告から来てるし。」

「「「えっ!?!」」」 「「「やっぱり……」」」

驚いたのは、桃香・白蓮・翠。何となくそんな予感がしていたのは、朱里・華琳・桂花。

「嘘だと思つてるならそれでも良いが、呉の斥候（隠密の二人）はどの軍の者よりも飛び抜けて優秀だね。夜襲を受けた翌日には、とつくに?水関はもぬけの殻だったそうだ。」

「でも、軍旗が残つてる「あれは、よくできた偽物よ。」「ふええっ、そうだったんですか!?!」

「それじゃなに、私達は董卓軍の時間稼ぎに、まんまと乗せられたつてわけ?」

「そういうことよ。」

「それなら、どうしてもっと早く教えてくれなかつたんだい!?!」

「ただで手柄を譲る人なんて、普通いないわ。…それじゃ、これ以上ここにいと総大将さんに怒られちゃうから、私達は手柄を貰いに行つて来るわ。行くわよ、冥琳。」

雪蓮は冥琳と共に天幕出た後、新たに祭と隠密達を連れて、5人で

？水関へと向かった。

？水関に着いた雪蓮達は、潜んでいた隠密達とすぐに遭遇した。

「貴方達も、邦祐の部下の隠密かしら？」

「はっ。私はドライ、横にいるのはフィーアと申します。」

「そうか。それで、貴方達はこれからどうする？こちらに合流するの？」

「いえ。時間稼ぎはもう十分だから、虎牢関に引き上げるようにとつい先ほどご主人から文が届きました。それと…申し上げにくいのですが、建業に戻ったら、董卓様の風評次第によつては、新たに小部屋を5つほど使えるようにしておいてほしいとも…。」

「…何となく想像は付くが、理由は何なんじゃ？」

ドライは文に書いてあったことを全て話した。董卓に関係する一連のこと・現在は虎牢関にいること・そして、恋仲になった人間が一気に増えたことを…。

「…わかったわ。貴方達は邦祐にこう伝えなさい。要望は聞いてあげるけど、帰って来たら蓮華から何かしらお仕置きがあることを覚悟しておきなさい、と。それと祭、偽物の軍旗を燃やして、うちの軍旗を立てていて。」

「…御意。」

隠密達は引き上げ、孫兵は簡単に功績を挙げた。勿論、天幕での話を知らない袁家は、孫策が簡単に手柄を立てたのが、非常に妬ましく思っていたことも記しておく…。

第二十四話 下戸く酒は飲んで、飲まれるな(後書き)

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

第二十五話 呉の離反く口は災いの元

呉軍によつて？水関をあつさりと攻略した、俺達連合軍は、不足気味だった兵糧を一度補給し、現在は虎牢関の前に野営地を構えている。

「さて皆さん、孫策さんがどんな方法を使ったのか知りませんが、（忌々しくも）？水関攻略という手柄を立てたことにより、この虎牢関前まで来ることが出来ました。ここまで来れば、洛陽はもう落としたも同然ですわ。」

「虎牢関には、飛將軍の呂布に神速の張遼、関羽を下した華雄が控えてるのよ？どうしてそんなに樂觀的な考えでいられるのかしら？」

「それだけじゃない。袁紹さんは知らないと思うけど、夏侯惇を素手で倒した楊昴って男もいる。」

「そんなブ男の一人増えた所で、連合の勝ち揺るぎませんわ。その楊昴ってブ男に負けたのだって、もしかしたら夏侯惇さんが弱かっただけかもしれないではないですか？」

「…うちの可愛い部下を貶すのは、止めてもらえないかしら？それに、春蘭の武はこの連合内でも最強の部類よ。それは保障してあげるわ。」

「そこまで言うのなら、そついうことにおいてあげますわ。…それで、虎牢関での先陣は誰が行きます？ちなみに劉備さんの所は、水関での失敗があるので、後局で決定ですわ。」

「…わかりました。」

納得したくないけど事実なんだからしょうがないって、諦めた感じの顔だな。それによく見ると、劉備って可愛らしい顔をしてるんだな…。

「では話を戻して、誰か先陣を取りたい方はいないんですの？」

「そんなに言うなら、貴女がやれば良いんじゃないかしら、麗羽？」

「あら、どうして総大将である私が先陣を切る必要があるんですの？」

華琳と袁紹さんの言い争いが始まるのかと思っただが、孫策さんがそれを止めた…。

「内心、私に手柄を取られて悔しいんでしょう？だから次は、他の諸侯が戦ってる間に自分達が虎牢関を落として、手柄を横取りしようと考えている。違つかしら？適当に言ってみただけ、もしそうだとしたら、とんだ総大将よね。」

孫策さんが、袁紹さんを挑発している。

「そんな口を聞いてると、後悔しますわよ？命令一つで、連合軍が貴女達呉軍に襲い掛かることも出来るのですから。」

急に孫作さんの空気が変わった。何だろう、すごく怖い…。

「…なんかもう面倒だわ。冥琳、頼むわね？」
「コソコソ」

何も言わず、ただ頷いた周瑜さんが、一人天幕を出て行く。一体何
て言ってたんだろ？

「袁紹、今うちを攻めるのだけは止めた方が良いわ。」

「そうですね。美羽さんの所の駒（客将）がいなくなってしまう
ことですし、呉軍と連合が戦ったら、すぐに私達が勝ってしま
い、負けるのが連合だから言っておけるのよ。」「…どういう意味
ですか？」

袁紹さんは、明らかに不機嫌オーラ丸出しだ。連合相手に呉軍が勝
つなんて無理な話だろうに。何であんなこと言ったんだ？

「うちにね、最近凄い腕の立つ人物が仕官して来たのよ。彼がいな
かったら負けるけど、彼がうちにいるだけで、少なくとも負けるこ
とだけはあり得ないわ。…そうね、夏侯惇、一つ質問しても良いか
しら？」

「ああ、構わない。で、その質問とは何だ？」

孫策さんの話は、一番聞きたく無かった男の話だった…。

孫策が話したことは、私の霸道にかなりの影響を及ぼしかねない
ものだった。

「じゃあ聞くけど、少なく見積もってもざっと500人は下らない、
もしかしたら数千人はいるかもしれない賊の根城に単身で突撃して、
全員倒せるかしら？」

「ふん。私は、たかが賊程度に後れを取りはしない。貴様は、そんなことを聞きたかつたのか？」

「いえ、本当に聞きたいことはここからよ。じゃあ、それだけの数の賊を相手にしたとしましょう。貴女は終始、涼しい顔を保っていられるかしら？」

「なっ！？そんなこと無理に決まっているだろ！！」

「普通はそうよね？私だって無理なもの。でもね、それが出来る人が呉にはいる。武は、呂布と互角かそれ以上と考えるのが妥当。今は訳あって呉を離れてはいるけど、うちを攻めようものなら、彼が牙をむくことになるわ。」

呉に戦を仕掛ければ、呂布のような武將を相手にしなくちゃいけない。それに加えて、呉の猛將達と周瑜の策略を乗り越えなければならぬとなると、力のない諸侯では逆に滅ぼされてしまう。仮に勝てたとしても、相当の被害が出て、立て直している間に他の諸侯に攻め込まれてしまう。

「つまり、呉を敵に回すってことは、百害あって一利なしってことかしら？」

「ええ、そうよ。そして、それは連合にいる今も変わらないわ。なぜなら、彼は今……」

孫策の言葉を制するかのように、今一番、敵対することは避けたい名前をあえて出す。

「？水関で戦う前に会った楊昴って男が、董卓軍にいるとか言わな

「いわよね？」

「…勘が鋭いのね。彼は今董卓軍にいるわ。しかも居場所は、私達の目と鼻の先よ。」

「はあ、それは最悪ね。でも今は敵同士なんだから、呉もただじや済まないでしょ？」

流石に、これは大丈夫なはず…。

「…彼も言っていたでしょう？情報は武器だって…。私達はね、連合が結成される前から、董卓の噂の事実も知っていたし、彼のおかげでお互いに不可侵状態なの。だから、私達は董卓軍に攻撃されることはないし、私達も攻撃することは許されない。出来るのは、戦を見守ることと、？水関みたいに誰もいない建物を占拠することだけよ。ちなみに、今頃は虎牢関にいる彼に、袁紹が連合の諸侯に命令して、呉を攻撃しようとして来たことが伝わっているでしょうね…。勿論、この場で私を殺したり、本当に攻め込んで来ようものなら、呉は董卓側に付かせてもらうわ。」

「…麗羽、冗談だったかどうかなんてどうでもいいけど、あなたの迂闊な発言のおかげで、連合軍は窮地に追い込まれかけているんだぞ？この事態、どうやって收拾してくれるんだ？ええ、総大将さんよ？」

（…流石の公孫贇でも、性格がちよつと変わるくらい怒りを堪え切れなかったようね。）

どう転んでも、単純計算で呂布を二人も相手にしなきゃいけないなんて冗談じゃない。そう思った袁家を除いた全ての諸侯は、麗羽の

ことを白い目で見ていた。『皆仲良く』を目指す劉備でさえ、この時だけは、冷やかな視線で見つめていた。

少しずつ、また少しずつと、連合内（袁家との間のみ）に軋轢が生じていった。

「これでわかったかしら？貴女には思慮深さとか、とりあえず一纏めにすると、世間一般の常識が欠けてるってことが…。」

二度も孫策に貶されたことにより、麗羽が止めとも言える暴挙に出た。孫策に剣で斬りかかってしまうという暴挙に…。寸での所で、馬超が槍で受け止めてくれたけど、もう何もかもが遅かった。

「あゝらら、攻撃して来ちゃった…。我慢出来てれば、連合から出て行くことなんて無かったのに…。次に会う時は戦場よ…。じゃあね。」

そう言っつて、孫策は出て行った。天幕の外を見れば、本当に呉軍が虎牢関へと進軍して行ってしまっていた…。

隠密達から、呉が連合から離反して、董卓軍に加わると報告があり、それから数刻後、本当に呉の軍勢が虎牢関に到着した。とりあえず、出迎えに行かなくちゃ…。

「久しぶりね、邦祐！！」

「ああ、久しぶりだな雪蓮。それで…蓮華は？」

「…蓮華なら、後で部屋に直接行かせるわ。きっちりとお仕置き

を受けることね。それで、恋仲になったのは誰なのか紹介してくれないかしら？」

「…わかった。霞、柳花、ちよつと来てくれないか？」

「なんや（だ）？」

「紹介しておく。知ってるかもしれないけど、俺が仕える呉の王、孫策だ。で、雪蓮も知っているとは思うけど、こつちが張遼で、こつちが華雄だ。」

「うちは張遼、字は文遠。真名は霞や。これからよろしくうな。」

「改めて名乗るが、華雄だ。真名は、邦祐に付けて貰った柳花だ。お前の母親には世話になったな。これからはよろしく頼む。」

「ええ、よろしく。二人にも私の真名を預けるから、これからは雪蓮で構わないわ。それと邦祐、華雄に真名を付けたなんて報告は聞いてないわ。それと、なんで二人から蓮華みたいなの…いえ、蓮華以上の余裕が感じられるのかしら？」

笑顔のプレッシャーに負け、雪蓮に大体の内容を話した…。

「つまり、邦祐が一つだけ願いを叶えてくれるっていう権利を賭けて戦った結果、華雄が勝って、願いである真名を付けてあげた。余裕が感じられたのは、酒の勢いではいえ蓮華より先に二人を抱いたからだ…」

「はい、その通りです…。」

「じゃあ、このことは蓮華にも伝えておくわ。それと、呉の王として命令するわ。まず、今日と明日は蓮華と過ごすこと。それと、蓮華を抱いてあげなさい。拒否は許さないから……。」

「…了解。」

それから二日間、俺はずっと蓮華と過ごした。その後、蓮華の姿を見た人達は、誰もが口を揃えてこう言っていた。何だか蓮華が、一回りも二回りも綺麗になった気がする……。

第二十五話 呉の離反〜口は災いの元〜（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

第二十六話 虎牢関一騎討ちのお願い

孫策さんが出て行ってから数日後、改めて軍議が開かれた。

「…ここ数日は予想外の事態がありましたけど、連合軍は今から虎牢関の攻略を始めますわ。そのためにも、決められなかった各軍の配置を決める必要がありますの。」

「それで、どうするつもりかしら？また、劉備の軍にでも先陣を任すとか言わないでよ？」

「そんなこと言いませんわ。…華琳さんの軍に一人、劉備さんの軍にも一人、董卓軍の武将に敗れたのがいるのですから、まず右翼は馬騰さん達西涼の軍に、左翼は白蓮さんの軍に任せます。そして残った二人の軍に、先陣と中央を任せますわ。」

「…一見、うちの春蘭と劉備の所の関羽に、それぞれ仕返しのお機を与えるように見えるけど、それは相手の出方次第じゃ、呂布と楊昴の二人を同時に受け持つことにならないかしら？」

「いくら相手が強いと言っても、所詮は人。貴女方それぞれご自慢の将達で呂布達と戦えば、複数対一でなら勝てるのではなくて？さあ、とつとと配置について下さいな。」

反論は一切させないらしい…。これ以上は面倒事に発展しそうだから、俺達は早々に天幕を出て、配置に着いた。虎牢関に見える軍旗は、呂・張・華、そして離反した呉軍。あの楊昴という男の旗は無いようだけど、必ずいるはずだ。なんであいつが俺のことを知ってるのか、捕まえて（来てもらって）、聞き出さないと…。

袁紹さんの号令が、虎牢関前に響く。

「連合軍の皆さん、雄々しく華麗に前進し、董卓軍と裏切り者の呉軍を蹴散らしなさい！！」

虎牢関の戦いが今、幕を開けた…かに思えた。

俺は虎牢関の城壁から、連合軍の様子を見ていた。

「一刀はどこだ？…いたいた、いくら周りの武将が強いからって、自分の身くらい自分で守れよ…。このままずっと、守られっぱなしでいるつもりか？」

なんだか、一緒に剣道の練習をしていたことを懐かしく思うとともに、俺は力を貰ったとはいえ、今の一刀を見ると情けなく感じる。そんなことを感じながら、右腕に包帯を巻いていた。一応、切り札だし、ね…。

「皆聞いてくれ。今から俺一人で連合の本陣に突撃して、一騎討ちのお願いをしてくる。」

「あんな大人数のとこに突っ込んで、平気なんか？てかまず、そんな要求飲んでくれるんかな？」

「大丈夫だ。俺は、不可能を可能に変える男だぞ？」

「…わかった。邦祐、気をつけてね？」

「了解。じゃ、ちよつと行つて来る。」

仲間達に手を振り、城壁から飛び降りた…。

…着地に成功したのは良いものの、いかんせん足が痺れてしょうがない。こんなことなら、飛び下りずに、正門から出ればよかった…。

「うわあ、めっちゃ見られてるし…。」

前線を受け持つ魏軍と、劉備軍の兵達に、奇妙なものを見るかのような目で見られてる。そこに、3人の武将が現れた。こういう時に限って…。

「楊昴！！華琳様の寵愛を受けるために、大人しく捕まれ！！」

「貴様の発言のせいで、桃香様があれこれ悩まされ、苦しめられた！！直接謝罪をさせるためにも、貴様を捕まえさせてもらうぞ！！
…関雲長、参る！！」

「にやにや、お兄ちゃん強そうなのだ！！鈴々と勝負するのだ！！」

なんでいきなり、夏侯惇と関羽と張飛が来るんだよ…。

「…まず一つ、お前らじゃ俺は捕まえられない。二つ、俺は事実を言ったままであつて、劉備ちゃんを苦しめようとしたわけじゃない。三つめ、お嬢ちゃん、飴玉あげるからお家に帰りなさい。はい、じやあ全員解散！！」シッシッ

手を払い、皆に散らばるように促す…。

「「そうか、それじゃ仕方がない…んなわけあるか!!」「ブォンッ
まさかの息ぴったりな、夏侯惇と関羽のノリツツコミが帰って来た。
レッドクイーンで簡単に防げたけどさ、ツツコミが斬撃ってどうよ？」

「お兄ちゃん、飴玉は「鈴々!!」「いたっ!!」「ゴツンッ!!」

戦の最中に食い気が勝ってしまった張飛には、関羽の拳骨が落ちた。
あれは痛そうだな…。

「…愛紗はすぐそうやって怒るから、嫁の貰い手が無いのだ…。」
ぼそっ

「何か言ったか鈴り「何でもないのだ!!」「…全く…。」

何だか関羽が呆れてため息をついてるけど、呆れてるのはむしろ俺
の方だと声を大にして言いたい。

「…連合の本陣にいる袁紹のここに行きたいんだけど、さっさと行
かせてくれない?それか…。」

懐に手を入れ、事前に書いておいた文を取り出した。

「この文を、総大将に渡してくれない?」

「…内容はなんだ?」

「お互いに数名ほど代表者を出して、その代表者の勝った人数で勝

ち負けを決めないかって提案なんだけど。兵の無駄死には、避けたいんでね。関羽だって、華雄ともう一度戦いたいだろうし、夏侯惇だってあの時の借りを俺に返したいだろ？」

「当たり前だ!!」「」

「ならどうする？俺を本陣まで行かせるか、この文を渡して返事を聞いてくるか、どちらか選んでもらおうか。あと、この一騎討ちは止め刺すのは禁止な？それを破ったら、後悔してもし足りないくらいの光景を見せてあげるから。」

「明日、返事を伝える。今日は下がらせてもらっぞ。」

「うん、さすが関羽。賢明な判断だ。じゃあ、俺は帰って休ませてもらうよ。」

意外に早く帰れそうだ。

「待て!!貴様には素手で負かされたからな。やはり、先に借りを返させてもらおう。」

「…一騎討ちの時じゃ駄目」私が今と言ったら、今だ!!」「…さいですか。」

別に後日でもいいのに、無理やりな感じで私闘が始まった…。

華琳様に仕えてきた中で、あれほどの屈辱は無かった。北郷と同じ男に、それもたったの二発の攻撃で敗北してしまった。それだけならまだ良かった。問題は、自他共に魏武の大剣と称する私が、華

琳様の前で敗れたことだ。この男を倒さぬ限り、華琳様の目指す覇道が、真に達成されることはない。ならば…！！

「武器を取れ、楊昴！私にもう、貴様を男だからと侮りはしない。一切の慢心を捨て、この夏侯元讓、いざ参る！！」

一切加減の無く放った太刀も、片手で持った剣で簡単に防がれる。さっきのは偶然だと思っていたが、今の一合でわかった。この男の実力は、計り知れないものだ…。その後も数合打ち合い、鏢迫り合いによる膠着状態になった。

「…やるな。ここまで叩きのめしがいのある男は、お前が初めてだ。」

「そりゃ光栄だが。…一刀じゃ駄目だったのか？」

「あいつは駄目だ。弱くはないが強くもない。良くて、優秀な兵士というところだな。武将と呼ぶには、少々実力不足なのは否めん。出会った頃と比べて、あまり成長も感じられんしな。」

「その割に、女性を口説き落とす腕だけは、日々上達してるんだろ？あの女たらしが…。あと、一刀が剣の鍛錬をするにも、あんたが相手じゃ強すぎて、鍛錬にならないはずだ。あいつを使い物にしたのなら、あんたは剣の指導だけに専念して、実践の方はもう少し一刀に近い実力の人でやらせるべきだな。」

「ふむ。それは良いことを聞かせてもらった。お前を倒したら、早速華琳様にお伝えするでしょう。」ギギギツ、カアーン

鏢迫り合いの状態から、一度距離を取り態勢を整える。

「…お互いに、少し無駄話が過ぎたようだな。早く文を見てもらいたいし、そろそろ終わらせるとしよう。」

「望むところだ。次の一撃で決めてくれる!!」

七星餓狼を握り直し、決着を付けるための一步を踏み出した…。

「はあああー！ー！！」ブオンッ

「だあああー！ー！！」ザンッ

ギギッ、カーン…。サシユッ…。

吹き飛ばされた得物が地面に刺さり、勝負は決まった…。

「…チェックメイトだ。全力で戦っても倒せない相手がいる気分はどうだ？」

最初の言葉の意味は分らんが、状況的に王手ということなのだろ
う。

「…悪くないな。言っただろう、貴様ほど叩きのめしがいのある男
はいないと。」

「そうかい…。じゃあ、俺は帰らせてもらおう。」

負けたというのに、今この時の私は、もっと強くなれる予感と充足
感に満たされていた…。

第二十六話 虎牢関〜一騎討ちのお願い〜（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしくお願ひします。

第二十七話 仲間割れ〜袁家終了のお報せ〜

私達が持ち帰った文により、本日二度目の軍議が開かれた。

「…代表者同士の一騎討ち？そんなことをして、一体何の意味があるって言うんですの？」

「部下達が死ぬことなく、決着が付くじゃない。それで、他には何て書いてあるの？」

「代表者は5名で、誰と誰が戦うかは、こちらが決めさせてもらうとだけしか、書いてませんわ。」

「向こうの戦力は、呂布・張遼・華雄・楊昴の4人と、呉の将達数人か…。小霸王の噂は耳にするけど、他の武将達の実力がどれほどなのか不明なのが厄介ね。」

「…呂布と楊昴以外なら誰が相手しても、勝てるような人間を選べば良いんじゃないでしょうか？」

「あら、春蘭にしては珍しくしおらしい意見ね。何かあったの？」

「はい。実はこの文を寄こしたのが、楊昴でして…。勝手ではあったのですが、この間の借りを返そうと、お互い得物を持って戦ったのですが、その…。」

「…言わなくて良いわ。で、彼の強さはどうだったのかしら？」

「孫策が言っていたことは、強ち嘘では無いようです。私と関羽が

たまたま同時に放った一撃を、片手で持った大剣で、簡単に防がれてしまいました。」

「本当なの、愛紗ちゃん!？」

「はい。もし夏侯惇ではなく、私が戦っていたとしても、結果は変わらなかったでしょう…。」

悔しいが、彼と私達では勝負にならない…。少なくとも、鈴々もいないと彼が本気になることなど、無いだろう。それに、怪我では無いと言っていたあの右腕も気になる…。

「…楊昴さんって、そんなに強かったんだ。」

素直に驚いている桃香様を尻目に、白蓮殿が他の諸侯達に質問をした。

「…相手の戦力分析も良いけど、とりあえずこの件は承諾するの?」

「そうね。私としては、悪くない話だと思うわ。」

他の諸侯達も口には出さないものの、一騎討ちに賛成のようだが、問題が残っている。

「それで麗羽、どうするの?」

最終的に決断をするのは、総大将だ。少しぐらいは殊勝な判断をして欲しいが…。

「…名門であるこの私が、逆賊の言うことを聞く必要などありません。その要望は却下しますわ。」

「麗羽、貴女分かってるの！？相手はその辺の賊じゃないのよ？あの人中の呂布と、それに匹敵する実力の楊昴。この二人が敵にいる時点で、少しでも被害が少ない方を選ぶのが定石でしょう！？」

「そんなもの関係ありませんわ！！私には大義がありますもの、この袁本初が負けるはずありません。」

流石のすつとんだ発言に、曹操殿はこれ以上掛ける言葉を失ったようだ。

「はあ…もう、好きになさい。その代わり、我が軍は後局に回らせてもらうわ。それ以外の配置に付かせようものなら、呉のように連合軍から離れて、陳留に帰らせてもらうわ。」

「あの、袁紹さん…。私達も、先陣としては参加できません。私は新興の諸侯だし、兵の皆を無駄に危険にさらすことなんて出来ません。」

残る白蓮殿・西涼の両軍も、袁紹に愛想を尽かしたかのようで、先陣での出撃を拒否した。これでもう、総大将自ら先陣を切るしかなかった…。

「きいいいい！！揃いも揃って、総大将である私の命令が聞けないというんですの！？これだから、大した家柄の無い人達は嫌なんですわ！！貴女方には、一片たりとも手柄はあげませんからね！！美羽さん、貴女の所にも先陣として出ていただきますわ。」

結局、袁家二人の軍が先陣を切ることで落ち着いた。翌日、事の経緯を話し、要望は袁紹殿により却下されたことを話したら、「そうか、それは残念だ。徒に兵を減らしたくなければ、興味本位で前に出て来るのは止めておくようにと、伝えておいてくれ。」と、とてもがっかりとした顔で言われた。

皆の元に戻って軍議を開き、関羽から聞かされたことを伝えた。こちらとしては、最悪重傷を負うことはあっても、誰一人として死なない方法で決着を付けようと思って提案したんだが…。まさか、断られるとは思わなかったな。

「ええと、一騎討ちの件なんだけど…。他の諸侯には支持を得たんだけど、袁紹の独断で却下されたって。」

「ちょっと、どうすんのよ邦祐!？」

蓮華が俺の服の襟元を掴み、激しく前後に揺らした。

「ちょ、やめ、ろ、蓮華、まず…。」

やばい。なんか視界が真っ暗になってきて、意識がどんどん遠のいてく…。

「れ、蓮華様お止め下さい!!このままでは邦祐が!!」

「ふえ?…きゃあ!?!どうしたの?大丈夫?誰が邦祐をこんな風にしたの!?!」

いや、お前(蓮華・蓮華様・あんた)だからな(だからね・ですか

らね・やからな」…。

「けほつ、けほつ。蓮華、もう少し力を加減してくれ…。」

「…ごめんなさい…。」

ちよつと不機嫌気味に話したら、想像以上に落ち込ませてしまったようだ。

「話を戻そう…。袁紹が他の諸侯を無視したことで、どこも命令に従わなくなつたらしい。おかげで、次の先陣は袁家の軍が出るそう。畏の可能性も捨てきれないけど、もし事実なら、おいしい話だと思わないか？なあ、雪蓮？」

「…董卓軍は、袁紹を、私達は袁術ちゃんを叩きのめせるってわけね？」

「その通りだ。そのためにもまずは、畏かどうかを確かめる必要がある。そこで今回も、最初は俺だけで出撃する。それで畏が無いことが確認出来たら、皆に出撃してほしいんだけど…良いかな？」

その問いに、全員で話し合う…。あれ、一人で出撃しても良いかどうかを決めるだけなのに、やけに時間がかかってるな…。

「決まったわ。」

やっと話し合いが終わつたみたいだ…。

「とりあえず、畏かどうかの確認は任せるわ。でもね、条件があるの。」

「どんな条件だ？死ぬとか言われても、相手が相手だから、死に様が無いぞ？」

「そんなの分かってるわ。ここにいる全員が、貴方が本気で戦つて
る所を見たことが無いの。だから、邦祐の本気が少しでも見たいの
よ。」

「そんなことで良いのか？」

「ええ。それと、霞と柳花が個人的に手合わせしてみたい相手がい
るから、その人達と戦わせて欲しいって。」

「霞は夏侯惇で、柳花は関羽か？」

「ああ、そうや（だ）！！！！」

「はあ、死なないって約束出来るんなら、二人に任せるよ。」

「と言うより、ここでOKしないと、不機嫌オーラ全開で何日も話す
らしようともしないだろ……。」

「よっしゃあ、腕が鳴るわ！！」

「感謝するぞ、これでちゃんと勝負を付けられる！！霞、この所
あまり体を動かしてないだろ？どうだ、今から少し打ち合わないか
？」

「うちも今言おうとしてたところや。なら、早速調練場に行こか。」

二人は武器を持って、調練場に行ってしまった。強敵と戦えるのが楽しみでしょうがないんだろうな。

「・・・ねえ祭、私達も連合に参加してから一度も戦ってないし、感覚が鈍る前に鍛錬しておかない？」

「そうじゃな。権姫達はどうするんじゃ？」

「行くわ。思春、行きましょ？」

「はい、蓮華様。。。」

皆ぞろぞろと、調練場へと足を運んで行く…。気付けば残っていたのは、お腹を空かせた恋ちゃんと、ねねちゃんの二人だけだった…。

何で俺の周りにいる女性は、こんなにも好戦的な人が多いんだろう…。もし、本気でけんかになったら、武器を振り回して来る姿しかイメージ出来ない。平和なけんかは、もしかしたら望めないのかもしれない。

あれ？そう思ったら、何だか目から大量の汗が溢れ出して来た…。

「皆がこんな風になったのは、きっと袁家のせいだ。そうだ、そうに決まってる！！」

袁家には悪いが、やり切れない気持ちを少しでも解消するために、責任転嫁させてもらうことにした…。

第二十七話 仲間割れ〜袁家終了のお報告〜（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等があれば、よろしく願います。

第二十八話 袁紹軍の頭を落とすにはまず部下から

数日後、ついに袁紹の軍が攻めてきた。兵の数は、10万位だろうか。まあ、本気で戦うなら大して関係ないことだ。

「逆賊である董卓軍と、裏切り者の呉の皆さん。今すぐに開門して無条件で降伏するのであれば、この心の広い袁本初、命だけは助けて差し上げますわ。」

もの凄い勘違い発言をしてるな。あれじゃ、頭のネジが緩むどころか、数本抜け落ちてるって言った方が正しいだろ…。

馬鹿相手には話し合った所で無駄なのだから、さっさと戦うことにした…。

あの楊昴とかいうブ男がたった一人で挑んで来た。

「おーほっほっほ。噂のブ男が、たった一人で来るなんて、飛んで火に入る夏の虫とはまさにこのことですね。斗詩さん、猪々子さん、あの男の首級を挙げて来なさい!!」

「ですが、麗羽様。相手は夏侯惇さんでも勝てないような武将なんですよ？首級を上げるなんて無理ですよ。」

「そうだぜ姫、今回はかりは相手が悪すぎるって…。」

「そんなこと知ったこっちゃありませんわ!!早く行き「失礼します!」…何ですか?」

「報告します！！前線の部隊と両翼の部隊が楊昴と戦闘を開始するものの、あまりの強さに逃げ出す者が多数！！降伏すれば殺しはしないとのことから、降伏する者も続出している状態です！！」

「なっ、何ですって〜！？」

この誇り高き名門である袁家の兵が敵の前から逃げ出すだけでなく、逆賊に降伏するだなんて……。

「あと残っている兵士はどの位いますの？」

「前線部隊は戦死者6割逃亡者3割でほぼ壊滅、右翼と左翼も戦いはしたものの、戦意喪失により逃亡ないし降伏したため、こちらもほぼ壊滅状態。あと残っているのは、撤退して来た前線の兵士、本陣とその付近を護っている兵のみになります！！」

なんてこと……。この私の軍が、たった一人の男によってこんなにも簡単に瓦解してしまうなんて……。

「斗詩さん、猪々子さん、一刻の猶予もありません。今すぐにあの男を討ち取って来なさい！！」

「麗羽さま（姫）！？」「」

「このままでは、連合の笑い者となってしまいます！！そうならないために、早くあの生意気なブ男を倒しなさい！！」

「斗詩、死ぬ時は一緒だからな？」

「文ちゃん…。うん、行く。」

いくら強くても、二人がかりなら倒せるはずですわ…。

敵が想像以上に手ごたえがない。なんだか大勢に囲まれた状態で、素振りしてるのかと勘違いしそうなほどだ…。もう、何人葬ったのか分からない…。

「お前らじゃ、弱過ぎて話にならん。もっと強いのはいないのか？」

そうすると、軽く2メートルを超すような巨体の兵士が現れた。

「この俺は、そこらへんにいるしょぼい奴らとは違うぜ？」

「なら、どれくらい違うのか見せてくれ。」

「へへ。後悔しても知らねえからな！！」

襲い掛かって来たが、大口を叩いた割に攻撃全てが大ぶりすぎて当たらない。

確かに体躯は大きいし、持ってる武器だって他の兵士の物より大きいが、所詮はそれだけだ。この程度の実力、董卓軍の兵士なら誰でも勝てる。

「ご苦労様、もういいよ。」

鳩尾に一撃いれ、崩れ落ちてきた所を、デビルプリンガー悪魔の右腕で頭を掴む。握られている本人もそうだが、それを見ている周りの奴らも、この腕

が特異なものだと感じているだろう。

「その腕は何だ！？こんな、こんなの！？」

「人の腕じゃないってか？そりゃそうだ、人の腕じゃねえし。これはな、罪のない人達をお前らみたい奴らから守り抜くためのものだ。」

「お、俺達だつて、戦いたくて戦ってるわけじゃねえ！！この戦で勝てば、袁紹様が褒賞を下さるって言うから、参加したんだ。俺達みたいな農民はな、課される税が高いせいで、生活が苦しいんだよ！！おかげで、女房や子供にも苦勞を掛けっ放しの奴らが、多かれ少なかれいるはずだ。」

「そうだったのか…。」

まさか敵兵の事情を、こんな戦場のど真ん中で聞くことになるとは…。

「それは本当なんだろうな？もし、助かりたくて嘘を言ったのなら…。」

「本当だよ、信じてくれ！！」

「なら、お前と同じ理由で参加した奴らだけに伝える。どちらにしろ、もうすぐ連合は敗れる。家に帰るか、武器を捨てて降伏するか、どちらか選べと…。ほら、わかったらさっさと行け。」

「わ、わかった。すまねえ…。」

駆け出していく兵を見送り、残った正規軍の奴らには制裁を下す。

「とりあえず木偶の坊、まずはお前から始末させてもらっわ…。」
じわじわと頭を握り潰すために力を加えていった…。

文ちゃんと戦場に出ると、何やら急いでいる兵士を見つけた。

「ちょっと、そんなに急いでって、あれ？」

その兵士は、足を止めずにそのまま通り過ぎた…。

「なんだあいつ、斗詩が話しかけてるってのに!!」

文ちゃんは今のを見て、機嫌が悪くなったみたいだ。

「とりあえず、あの兵士が来た方向へ行ってみよ？」

「おう!!」

そして二人で向かった先で見えたものは、うちの兵士が見知らぬ男に頭を握り潰されそうになっているところでした…。

「その手を離しなさい!!」

私達を見るとその男は、今まで握っていた兵士を片手で持ち上げ、地面に向かって頭から投げ付けた…。

「ひどい…。そこまでやる必要「無かったのか、だろ?」…はい。」

「ちゃんと離れたじゃないか？むしろ、酷いのはお前達の方だ。有りもしない噂で連合を結成して、何一つ悪いことしていない董卓を殺そうとしたんだからな。」

「それは、どういうことですか？」

「どうもこうも無い。そのままの意味だ。」

「私達は、洛陽にいる董卓が暴政を働いているという話を聞いたから、この連合を結成したのであって、決して有りもしない噂でだなんて…。」

「その話の時点で間違ってたんだよ。俺はな、何カ月も前から董卓の元で働いてたんだ。あの子のこともよく知っている。」

「そんな話、信じられるわけないだろ！？行くぞ斗詩！！」

「待つて、文ちゃん！！…今さらですけど、貴方は何者ですか？もしかして…。」

「俺か？連合の人間なら、楊昴って名前くらいは知ってるだろ？」

「「っ！？」」

「どうした？そんなに俺が怖いのか？」

怖いに決まってるじゃないですか！？麗羽様の命令とはいえ、出来れば出会いたくなかった人なんですから。それでも、出会ってしまつたのなら…。」

「行くよ、文ちゃん!!」

私達は、楊昴さんに向けて突撃していった…。

「はあああー!!」ブンッ

「やあああー!!」ブオンッ

私達はいつも、先に攻撃する方が囷と決めている。今回は文ちゃんの攻撃が囷で、私が大槌で決定打を浴びせるはずだった…。

「遅いよ、これじゃ欠伸が出る。」ガキンッ、ガシッ

「「えっ!?!」」

文ちゃんの大剣を受け止めたのは良い。彼も同じ位の大剣を持っていたのだから。問題は、私の大槌を受け止めたことと、それを可能にしたこの右腕だ。

「何ですか、その腕は!?!」

「そこで寝てる木偶の坊にも説明したが、簡単に言うなら、罪の無い人達をお前らみたいなのから、守り抜くためのものだ。」

「それじゃ、まるでうちらが悪者みたいじゃないか!?!」

「みたいじゃなくて、事実そうなんだよ。安穩と暮らしている洛陽の人達を、戦に巻き込みやがって。」

「私達は、巻き込みたくて巻き込んだんじゃ有りません！！話を聞いたから「もういい！！」…。」

「もういいよ…。何を言ったところで、洛陽の民の生活を壊した事実に変わりはないし、お前ら見てると気分が悪くなる。」

懐から何かを取り出したと思ったら、けたたましい音がした。

「うあああ！！！」

「ぶ、文ちゃん、どうしたの!?!」

文ちゃんが太腿を抑えていたので見てみると、丸い傷がありました。

「…次はお前の番だ。」

そう言うとまた、けたたましい音が聞こえ、私の太腿に焼き付くような痛みが走りました。

「っ!?!あうう、いた、い、痛い、よ、文ちゃん…。」

それでも痛みを堪えて彼を見ると、底冷えするような冷たい瞳で、私達のことを見下ろしていて、私達はここで殺されるんだと思った途端、そこで意識を失ってしまった…。

第二十八話 袁紹軍へ頭を落とすにはまず部下から（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

第二十九話 それぞれの評価く知らない方が幸せなことだってあるく

彼の實力の片鱗を、垣間見た気がする。文醜や顔良くらいなら二人同時に来られても、私や星、鈴々ならば対処することは簡単に出来る。しかし、振り下ろされた大槌を素手で受け止めるなんて真似は出来ない。それを可能にしたのは…。

「あの、人のものとは言えない腕…か。桃香様、やはりあの男は危険…って。」

仲間達を見て、私は肩を落とした。それは何故か？

「うわあ、初めて会った時はよくわからなかったけど、楊昴さんって本当に強かったんだね。それにあの腕は何だろう？鈴々ちゃん、楊昴さんのことをどう思う？」

「とっても強いお兄ちゃんなのだ！！鈴々、お兄ちゃんと勝負してみたいな。それで、飴玉いっぱい貰うのだ！！」キラキラッ

「はわわ！？凄かったね雛里ちゃん。それに、最後に使ってたあの武器は何なんだろうね？」

「うん、凄かった。ねえ朱里ちゃん、私達はある武器見たことも聞いたこともないよね？もしかしたら、天の世界の物だったりするのかな？星さんは、どう思いますか？」

「ふむ。それはなかなか面白い考えではあるな、雛里。私も何だかあの殿方に、興味が湧いてきたというものだ。敵とは言え、機会があれば一度酒を酌み交わすのもまた一興かもしれぬな。」

駄目だ…。うちの軍は確かに優秀な人材が揃ってはいるが、どうにも知らないことに関しては、敵だとしても興味深々になってしまってみたいだ。

「桃香様、少なくともあいつは敵なんですよ？感心してどうするんですか！？」

「え！？でも、袁紹さんのところの義勇兵らしき人は見逃してあげてたし、あの二人だって怪我はしたけど、殺されなかったんだよ？」

「ですが、連れ帰った後拷問するために、わざと生かしたかもしれないではありませんか？」

「そ、それは、そうだけど…。」

「と、とりあえず！！今は楊昴しゃん…あう、何で嘔んじやうのかな…？」

「朱里ちゃんが言いたかったのは、あの人の様子見を、もうしばらく続けようってことでしょ？」

「はい、そうです…！」

「だって、愛紗ちゃん？いろいろと決めちゃうのは、もうちょっとだけ待とう？」

「わかりました…。朱里と桃香様が言うのなら、私もそうすることにします。」

この選択がはたして吉と出るか、それとも凶と出るのか…。まあどちらであるかと、桃香様をお守りすることに変わりは無いか…。

何でこの時代で、リボルバーなんて持ってんだよ！？しかも、銃身が二つもある。あれじゃまるで…。

「…どう見ても、ブルーローズじゃねえか…。」

「ぶるーろーず？それも天の物なのかしら？」

「ああ。あれは俺の世界で銃って言われる武器でな。銃ってのは、引き金って部分を一度引くと、一発の弾が出て来るんだ。威力・射程共に弓より遙かに上で、自分が殺したって感触が残らない分、人の命が軽くなるって言われてる…。」

「あれは、そんなに危険な武器だったのか…。」

「ああ。でもな…あいつの持ってた武器は、実際存在してなかったんだよ。」

「そうは言っても、事実あの男の手にあつたじゃない？」

「あんな武器は、ゲームの中でしか存在してなかった!！」

「その、げーむっていうのも天の世界も言葉なのか？」

「ゲームってのは、俺達の世界の娯楽の一つだ。…あいつと同じ腕、同じ武器を持った男が主人公の作り話を、俺は知ってる…。」

あれは確実に悪魔の腕。^{デビルブリンガー}武器も合わせて考えると、容姿は違っても、あいつはまるでネロそのものだ…。ゲームの中だからこそその強さだと思っただけ、現実世界でも春蘭を圧倒するくらい強かったのか…。

「それで北郷、あの腕は一体何だ？」

「あれは悪魔の腕。その名の通り、人間の腕じゃない。…春蘭、あの腕を斬り落とそうとか考えてんじゃないよな？」

「何を当たり前なことを…。人のものではなくても、所詮腕は腕だ。斬り落としてしまえば、何も問題はないはずだ。」

「あれは俺達じゃ、斬り落とすことなんて出来ない！！見ただろ！？顔良の大槌を軽々と受け止めたところを…。あんなこと出来んのも、あの腕が偏に悪魔の腕だからだ。斬る前に、剣をへし折られると思うから諦めろ、春蘭…。」

口には出さないものの、春蘭が肩を落としているのが分かる。すると今度は、季衣が訊ねて来た。

「兄ちゃん、斬るのは駄目でも、せめてあの人の動きを止めることは出来ないの？」

「あるにはあるけど、まず不可能だし、一歩間違えればこっちが危険なんだ。」

「ちなみに、その方法は何だ？」

「あの男を除いた、董卓軍と孫呉の武将全員を捕まえて、あいつを

脅す…。」

「たしかに、それは無理な話だな…。」

「だろ？それに銃を持っているってことは、俺と同じように、天の知識も持っている可能性が高い…。」

「まったく、私としたことが…。逃がした魚は、ちよつとばかり大きすぎたみたいね…。」

魏軍の方はどことなく、重苦しい雰囲気にもまれた…。

袁紹のとこの二人を捕獲した後、一度戻って牢屋にぶち込んでいた。この二人、何か良い使い道無いか？…駄目だ、俺じゃ思い付かない。

「なあ明命、何かこの二人を使った良い案は無いかな？」

質問を投げかけると、ある提案をして来た。

「それならば、あの二人の死体を作ってみて、送り付けるといのはどうでしょう？」

「死体を？本人達で作るわけにはいかないし…。ああ、そういうことか。」

つまりは、る 剣の薫と同じものを作って、袁紹に送り付けて精神的余裕を奪うと…。

「なかなか、えげつない事考えるね？」

「あの、駄目、でしたか？」

「いや、悪くない方法だ。むしろあの思い上がりも甚だしい馬鹿女の鼻を折るのに、ちょうど良いだろう。ありがとな、明命。」

「と、とんでもありません！！お役に立てたのなら私も嬉しいです
／／／／／／」

あまり遅いと、送った時に偽物だと勘付かれてしまいかもしれない
…。すぐに実行しよう。

「アインス、ドライー！！」

「はっ。」

「今さつき牢屋に閉じ込めた二人の死体を偽造してもらいたい。それ
れも、上から下までなるべく精密にだ。一応、着替えも渡しておく。
死体は戦場にたくさん有るけど、五体満足の奴だけを使ってくれ。」

「「御意。」」

これで袁紹の方は一先ず良いとして、次は霞達の方か…。

「霞、柳花、二人ともそろそろ出るのか？」

「その予定やけど、どないしたん？」

「袁紹の軍との戦が早く終わりすぎて、暇を持て余してんだ。だか

ら、どっちかに付いて行こうかって。」

「なら、うちのほうに來いひん？今から手合わせしに行くんは魏やし、天の御遣いもそこにおるんやろ？」

「ああ。じゃあ、そうするわ。」

もし霞が負けたとしたら、曹操が魏に下れとか言いそうだからな。それを食い止めるためにも、俺が行つとかないと…。

「…そうだ、恋ちゃん。」

「…なに？」

「出来れば、柳花に付いて行ってくれないかな？もし柳花が止めを刺されそうになったら、止めて欲しいんだ。お願い出来るかな？」
コソコソッ……

「…恋がそうしたら、くにひろは、喜ぶ？」

「うん。恋ちゃんがそうしてくれたら、誰一人いなくならなくて済むからね。恋ちゃんだって、家族がいなくなると寂しいでしょ？」

「うん、わかった。恋、頑張る。」

「ありがとう、恋ちゃん」「ナデナデ…」

「うん／＼／＼／＼／」

「何をしている！？早く出撃するぞ！！」

「悪い柳花、今行く!!…じゃあ恋ちゃん、頼んだよ?」

「わかった。」

柳花のことは恋ちゃんに任せだし、こっちも出発するのでしょうか。

「悪い、待たせたな霞。俺達も出るとしよう。」

「あゝ、楽しみやなあ 期待させてもらうで、夏侯惇將軍? いや、ここはあえて惇ちゃんって呼んだろかな…。」

今から勝負しに行くっていうのに緊張感が足りない気もするけど、それはそれで霞らしいかなとか思いながら、魏軍に向けて進軍を始めた…。

第二十九話 それぞれの評価（知らない方が幸せなことだった）（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

第三十話 一騎討ち久々にキレる一話前（前書き）

今回も、若干長めです。

第三十話 一騎討ちくく々にキレる一話前

現在、霞をバイクの後ろに乗せ、二百騎ではあるけど兵を連れて魏軍へ進軍中…。

「霞、バイクの乗り心地はどうだ？」

「めっちゃええー！この風を切る感じ、馬とはまた違う気持ち良さがあるわ。」

「そうか。気に入ってくれたのなら何よりだ。」

もうそろそろ魏軍の前に到着する。何か魏軍の兵の度肝を抜くような方法で突撃したいな…。

見張りをしていると、小さい土煙が見える。どうやら、誰かがこちらに近づいているようだ。

「副隊長、見覚えの無い男女二人と騎馬数百騎がこちらに向かっており、男女の方はこれまた見知らぬ何かに乗っています！！」

「見知らぬ何かって…。乗るのは馬しかならう！！」

「いえ、それが馬では無いのです！！どういたしますか？」

馬では無い何かか…。とりあえず、進軍を止めなければ。弓矢を射って、様子を見るか。

「全員、斉射用意、第一波、放てー！ー！！…続いて第二波、放てー！ー！！」

大体百本程度の矢が、放たれていった…。

度肝を抜く方法を考えてたら、二回に分けて矢が放たれて来た。

「どうするんや！？うちは手を離したら落ちてまうし、邦祐かてそのハンドルつちゅうの握ってるから、飛んで来る矢を叩き落とせんやんか！？」

「いや、問題ない。しつかり掴まってるよ？」

矢が降って来た。これを回避し、尚且つ敵の度肝を抜くためには、あれをやるしかない…。

「……やるぜ！！」

悪魔デビルトリガーの引き金によって一気に右腕の力を解放し、まずは降り注ぐ第一波を衝撃波で吹き飛ばした。次は…。

「幻影刀、展開。撃ち落とせ！！」

具現化した幻影刀が、飛んで来る矢を次々と破壊していく。それでも撃ち落としはあるため、数本はこちらに飛んで来たが、背後に具現化してる魔人を操り、魔人の手に持った巨大な閻魔刀ヤマトで、叩き落とした。

「もう飛んで来ないかな？デビルトリガー解除。」

矢が飛んで来ないのを確認して、元に戻った…。

「え、ちょ、今の何！？後ろにおったでつかいのとか、いきなり出て来て飛んでつた剣とか！？」

いきなりあれを見せられたら、混乱しない方がおかしいよな…？

「ちゃんと後で教えるから。ほら、もう到着するぞ？」

徐々にスピードを上げて見張りの兵達に突っ込み、最後は無駄にドリフトしながら停車した…。

魏軍の天幕前に到着。霞を見ると、ほんの数分前とは打って変わり、一秒でも早く勝負がしたくてうずうずしていたので、手っ取り早く魏の将達を呼ぶことにした…。

「たのも〜！！魏武の大剣、夏侯惇將軍はいるか〜？」

やっぱ、正面からと言えばこれでしょ…。

「誰だ、この私を呼ぶのは！？…楊昴！？貴様が何故ここにいる！？」

こちらを警戒するかのように、剣を突き付けてくる。まあ、敵にここまで近づかれたんだから、そら焦るわな…。

「いや実はな、霞、張遼がどうしてもお前と手合わせしてみたいって言うもんだから、袁紹のこの二枚看板をひっ捕らえた後、やる

「こないから付いて来たんだよ。」

「んなこと言うて〜、ほんまはうちのことか心配で心配でしゃーないから、こつやって付いて来てくれたんやろ？」

「ん〜…。まあ、それもあるかな。」

「もう。別に隠さんでもええやん。うちらは、隠すような間柄ちゃうやろ？」ギユウツ

夏侯惇の前でいちゃつくこと数分…。いきなり名指しで呼ばれた後、意味も分からず放置プレイされた夏侯惇の、堪忍袋の緒がとうとう切れた。

「きーさーまーらー！いい加減に、しろー！ー！ー！」

怒りにまかせて叩きつけられた大剣は、轟音と共に高々と土煙を上げた。

「なんやなんや、急に怒り出したりなんかして〜。」

「急じゃないだろ！？お前は私と戦うために来たのに、どうしてそいつといちゃつく必要があるー！」

夏侯惇の怒りの理由を、必死に考える霞。そして行きついた答えは…。

「…もしかして惇ちゃん、うちのことか羨ましいんか？」

霞…。いくらなんでも、それは違うと思うぞ？

「何を馬鹿なことを…。私には華琳様がおられる。男など不要だ！
！さあ、とつとと始めるぞ。武器を取れ、張遼！！それと楊昴、暇
ならお前が見届け人になれ。」

「…止めを刺そうとしたら、力づくで止めるからな？霞、準備して。」

武器を取り、互いに向かい合う。

「はじめ！！！」

合図と同時に、組合せだけは事実上と同じ戦いが始まった…。

天幕で部下達と話をしていると、春蘭の叫び声が聞こえて来た。
何かあったのかしら？

「申し上げます！！夏侯惇將軍が、董卓軍の将と一騎討ちを始めま
した！！！」

「何だと！？相手は一体誰だ！？」

「張遼將軍と聞いております。それと、仲間と思われる男が一人お
りました。現在、3人とも天幕前におります。」

「その男は、何をしているの？」

「將軍達の一騎討ちの見届け人をやっています。」

「分かったわ。下がりなさい…。」

「皆、春蘭の元に行くわよ。それと一応、戦闘の準備をしておきなさい。」

張遼か。どうにかして手に入れられないかしら…。とりあえず、その一騎討ちの場所へ行ってみないといけないわね…。

なかなかの実力だ。用兵術こそ神速と称されているが、指揮する本人もここまでの武人だったとは…。

「想像以上にやるではないか、張遼!！」

「そういう惇ちゃんの方こそ、こんなに強いとは思わなかったわ。」

「惇ちゃん? 一体何だそれは?」

激しい打ち合いをしながら、惇ちゃんとは何かを考えた…。

「何難しい顔しとるん? 惇ちゃんの惇は、夏侯惇の惇に決まっとるやろ?」

「なっ!? ふざけた呼び名を付けるな!…! まったく、これでは本当に勝負しに来たのかわからんな。」

「勝負しに来たんはほんまや。じゃ、そろそろ本気で果たし合つとしよか?」

先程のおちゃらけた雰囲気は感じられない。本気ということか…。

「ならば掛かって来るがいい!!」

そこから、再び激しい打ち合いとなった。どちらかが攻めれば、もう片方が防ぎ、直ぐさま反撃に移る。攻撃を避け、一太刀浴びせようとしても、寸での所で防御され、こちらが避けられて攻撃されても、なんとか防御して態勢を立て直す。そしてまた、大剣と偃月刀による舞が再開される。

「く、なかなか勝負が付かな。それだけ実力が拮抗しているということか…。」

「そんな簡単に勝負付いたら、おもしろいやろ？」

「それも…そうだな!!」

鏑迫り合いから仕切り直すために、力任せに張遼を吹き飛ばす。石突を突いて地面を滑る勢いを殺し、すぐに構え直した。そしてすぐに、周囲から張遼だけに集中する。しかし、それがまずかった。張遼にだけ意識を傾け過ぎたためか、流れ矢に気付くことが出来ず、左目に矢が突き刺さった…。

霞と夏侯惇の一騎討ちに、水を差された。

「ぐうううっ、ああ、ぐあああ!!」

「姉者!? 姉者あー!!」

夏侯惇の悲痛な叫びを聞き、天幕から夏侯淵が駆け寄って来た。

「大丈夫か姉者？気をしっかり持て。」

「うっ…。」

「誰や！？こちらの勝負の邪魔したんは！？はよ出て来い、たたっ切ったる！！」

見回すと、一人の兵が弓を手にしている。理由はどうあれ、一騎討ちの邪魔をしたのだから、それ相応の罰を下さないと示しが付かない。矢を射た兵士に近づき、頭に銃を突き付けた。

「矢を射たのはお前だな？」

「ひいつ！？あの、ゆ、許して「許すか、阿呆…。」がああっ？」「
ダァーン！！」

邪魔をした兵を片づけ、振り返ると、夏侯惇が左目から、目玉ごと矢を引き抜いていた。

「この体は、我が父母から貰ったもの。そして今は、身も心も全て華琳様のもの。その体の一部を、何故許可もなく捨てる事が出来ようか！！我が身から離れたとしても、この眼は我が身の一部に変わりはない。ならばこの眼は永久に、我と共に生きる！！」

そう言って鏃から目玉を取り、それを喰らった…。

「平気か姉者？」

「大丈夫だ、秋蘭。大事には至らん。」

「…だが、せめてこれを…。」

夏侯淵が眼帯を差しだすと、夏侯惇はそれを受け取り、すぐに付けた。

夏侯惇に謝罪する。

「部下が済まないことをした。許してくれとは言わない。だが、せめてこれを渡しておく。」

「これは、一体？」

「秘伝の飲み薬だ。目玉までは治らないが、傷は塞がり、痛みも引くはずだ。」

「…毒じゃないだろうか？」

「夏侯淵、貴女がそう疑うのは至極当然なことだが、俺はこんな時に嘘はつかない。夏侯惇、それを飲めば傷は治るが、一瞬だけ激しい痛みに襲われることだけ教えておく。」

「構わん。…ぐうっ！？…ふう。」

「姉者、痛みはどうだ？」

「問題ない。言われた通り、傷も塞がったし、痛みも引いた。」

「そうか、それは良かった。」

「夏侯惇、改めて済まなかった。今日のところは引かせてもらおう。治っているとはいえ、体力の消耗が激しい筈だ。霞もそれで良いかな？」

「ええよ。うちもちゃんと白黒付けたいしな。惇ちゃん、今度は誰にも邪魔されんようにするから、また今度しような？」

「良いだろう…。片眼を失おうとも、張遼、貴様には負けん。」

「そか、それは楽しみや。それじゃまた「待ちなさい!!」「…ん、誰や？」

現れたのは、魏の軍勢に一刀を連れた、曹操だった…。

第三十話 一騎討ちく久々にキレる一話前く（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

第三十一話 制裁、身内をよこせと言った罰（前書き）

今回も、多少長めです。

良ければ、活動報告のアンケートにご協力していただけると幸いです。

第三十一話 制裁く身内をよこせと言った罰く

春蘭の左目が、董卓軍の兵の射た矢によって失われた。私の可愛い部下を傷つけたのだから、それなりに代償を払ってもらわないと…。

「どこに行くつもりなのかしら？」

「どこについて、惇ちゃんとの一騎討ちは、うちの部下の不手際で御流れになってもうたから、帰るんやけど？」

「なら、部下の不手際の責任は上司である貴女が取るべきなんじゃないかしら？」

「んなこと言われてもな、傷ならもう塞がっとするし…。」

「…本当なの、春蘭？」

「はい、華琳様。楊昴から貰った薬を飲んだら、傷が塞がりました。」

春蘭は嘘をつかないし、塞がったことは本当の様ね。

「そう…。でも張遼、今の話を聞く限りだと、貴女は何もしてないじゃない。そこで、貴女に一つ提案があるのだけど？」

「何なん、その提案って？」

「春蘭が負った怪我の代償として、今すぐ董卓軍を抜けて、私の軍

「に加わりなさい!」

「は!?!何でうちが魏に下らなあかんねん?」

「そんなの、貴女が欲しいからに決まってるじゃない。優れた人材は、この曹孟徳の元にいるべきなの。分かるかしら?貴女をあそこに置いておくのは、宝の持ち腐れなのよ。」

「なっ!?!何ふざけたこと言つて!霞…。…邦祐?」

「曹操、たしかに部下の責任は上司の責任だ。張遼は、君にあげよう。」

まさか本当になれるなんて…。さすがの張遼も動揺してるようね。

「ただし…。」

大剣の切っ先をこちらに向けて言い放った。

「俺を倒せたらの話だけだな。」

「なんでそういう話になるのかしら?貴方達は仲間同士だけど、これは張遼個人との取引なの!?!この件に関しては、貴方は関係ないでしょう!?!」

「いや、関係大有りだよ。霞は俺の女だ。何で女大好き我が儘っ娘と種馬の所なんかに、霞をくれてやらなきゃいけないのか、俺には理解しかねる。はつきり言つて不愉快だ!」

今まで感じたことの無いような殺気が、楊昴からひしひしと伝わっ

て来る。ここにいたのは、こうなることを見越してからだとも言
うの!?

「ちょ、ちょっと待て!!前もさらっと言われたけど、その種馬っ
てのを訂正しろ!!」

一刀が、腰に携えていた刀を抜いて、楊昴に突き付けた。

「これはこれは、失礼した。『万年発情してて可愛い子なら見境な
しの北郷種馬一刀』が正しい名前だったか?どちらにしる、お前み
たいな奴に脅されても、怖くも何ともないぞ?」

「違う!!その、毎日発情だとか種馬だとか、そういうのを訂正し
るって言ってたんだよ!!」

一刀はああ言っているけど、あながち間違いじゃないのだから、自
業自得ね。上は春蘭達から下は季衣達までいるんだもの。まだ手を
出していないのも合わせれば、14人くらいはいるんだっただかしら
?・・・話を戻さなくちゃ。

「ねえ楊昴、貴方に勝てれば張遼をくれるのよね?」

「ああ。でも、女性を抱いた数とかは勘弁してくれよ?純粹に武の
みでだ。人数の指定もしない。それと、体力的に夏侯惇は厳しいだ
ろうから、出さない方が良く。前は元気だったから大丈夫だったが、
今やったら、武器ごと首が吹っ飛ぶぞ?」

「…わかったわ。皆、準備は出来てるわね?…行きなさい!!」

武官が6人も同時に行くのだから、負けることは無いでしょう…。

相手は6人。夏侯淵は弓の名手だけど、残り5人の名前は覚えてないから、武器で呼べばいいや。

「それで、いったい誰から掛かって来るんだ？鉄球か？ヨーヨーか？槍か？双剣か？籠手か？誰でも良いんだぞ？いつそのこと全員で来るか？」

「ならば、私から行かせてもらおうか。我が名は楽進、春蘭様を倒したその手腕、見せてもらうぞ！！」

体術使いか…。洛陽で消した、足癖の悪い脳筋を思い出させるな。

そんなことを考えてると、拳が飛んで来た。気で身体能力を底上げしていたみたいだが、難なく避けると、今度は足払いをして来た。足払いを飛んで避けると、間髪いれずに上段へ回し蹴りを放って来た。空中じゃ、動き回って避けられない。…普通の人相手が相手ならな…。

魔力によって、空中に足場を作り出し、バク宙しながら避ける。言っつてしまえばエア・ハイクだ。

「よつと…。おゝ危ない危ない。楽進だったっけか？悪くない繋ぎ方だったぞ？」

「…空中でもう一度跳躍したように見えたが、何をした？」

「今君が言った通りのことをしたまでだけど？タネ明かしをすると、俺の場合は魔力、君で言うところの気で、空中に足場を作ってさらに高く飛んだだけだ。」

「…なんて人だ。」

「なあ、時間が勿体無いから、全員まとめて来てくれないか？」

「…「なっ!？」」「…「えっ!？」」「…」

「…貴方、私の部下を馬鹿にしてるの？」

「別に、馬鹿にしたつもりはない。でもな、一人ずつ相手にしたら面倒なんだよ。」

「…いいわ。口は災いの元と言うし、私の部下の実力をその身で味わいなさい!！」

今度は、チビツ娘二人が挑んできた。

「「兄ちゃん（兄様）を馬鹿にしてえ!!許さないぞ（しません）!!!」」

「最初は、鉄球娘とヨーヨー娘か。」

「鉄球娘じゃない!!ボクは許緒。力勝負なら、負けやしないからね!！」

「私は、ヨーヨー娘じゃ無くて典韋です!!私だって、力勝負ならそう簡単には負けませんよ?」

「そんな風には、見えないけど……。武器が武器だし、注意しておくか。」

「いくぞおー!!」

許緒が頭上で振り回して突撃してきた。力勝負なら負けなと言っていたけど、どれくらいの力なんだろうか？

「やあああー!!」

飛んでくる鉄球を、剣で受け止めてみることにしよう。

「ぐっ!? 想像以上に重たいな。あの身体のどこにこんな力が…。」
ガキーンッ

「嘘!? ボクの鉄球が受け止められちゃった!!」

「今度は私の番ですよ!!」

振り返ると、典章がヨーヨーを飛ばしてきていた。俺の右腕で、思いつきり殴れば止まるかな？

「おりゃ!!」バキッ!!……ピキッ

六割位力で殴ったら、あっけなく止まった。おまけに、ちょっとだけ罫が入ってた。

「…意外と止まるもんだな。」

「ええっ!? 季衣みたいならともかく、私のは素手で止められちゃったの!？」

二人の武器の長所は打撃なのに飛ばせられること、短所は…。

「うう…。止められたことがないから、回収するのが大変だよ…。

」

許緒は鎖だからまだ良い。典韋は紐というか太い糸というか、とりあえず巻き直さないと本来の威力を発揮できそうにない。この間は、狙われ放題だ…。

「だから言つたる？時間が無駄なの。次は全員で来いよ？」

槍と双剣に関しては全くの初見だけど、別に良いや…。

「うっしゃ！何かお披露目されんかったけど、うちの螺旋槍の威力、とくと見せたる！！それとな、うちは李典や、よう覚えとき！！」

「沙和は于禁なの。沙和だって、あの人に目に物見せてあげるの！！」

今度はちゃんと6人で来た。重量級のチビツ娘二人が時間差で攻撃を仕掛け、避けたところに夏侯淵の放つ矢が的確に心臓を狙っている。銃で撃ち落として対応していると、その隙を突くかのように、楽進達が息の合った連携で襲いかかってくるので、それをどうにか凌ぎ切る。…俺の口元に気付いているのは、霞だけだった…。

邦祐のやつ、苦戦してるかのように見せて、ちゃっかり遊んどるな？孟ちゃんの顔を見たら、めっちゃ機嫌良さそうやったし、これがどんな風に変わんのか、楽しみでしゃくないわ。

…あかん。想像してたら、つい笑いが零れてもった…。

「張遼、何がおかしいの？正直に言いなさい。」

「いやな、邦祐が遊んでんやもん。そりゃ笑うしかないやろ？」

「何ですって!？」

「ほらほら怒らんと、そんなま見ててみ？」

孟ちゃんの面白い顔すんの、期待させてもらうで、邦祐？

霞から、面白くしてくれ的な雰囲気を感じた。なら、ご期待に応えようか？その後でゆっくり一刀とOHANASHIしなきゃだしな…。

「なあ、そろそろ終わりにしないか？」

「ふん。それはお前の敗北でか？」

「いや。…魏軍の敗北でだ。」

そう言つて、レッドクイーンの柄にある、バイクのアクセルのようなバーを捻り、噴射剤を起動させる。この世界に来てから使ったことのないイクシードのお披露目だ。

「何やあれ!？剣が赤くなつとつとる!?!」

「いろいろお披露目してもらったからな。俺も、少し真面目にやる
うと思つてな。」

イクシードのチャージが完了した…。

「今までののはお遊び、そういうことか？」

「そういうことだ。こつからは少しばかり暴れさせてもらう。」

「剣が赤くなつたぐらいじゃ、ボク達は倒せないよ！！」

許緒が鉄球を飛ばしてきたので、タイミングを合わせて斬り上げた。

「クレイジー！！」

剣を振ることで、内蔵されている推進剤噴射機構から巨大な火炎を
噴き出し、その力で自分の体ごと、鉄球を上空へと連れていく。凄
まじい勢いをさらに生かすために、下から上へ斬り上げる形で、上
昇しながら回転斬りを放った。巨大な火炎による爆発的火力の前に、
許緒の鉄球は、三つの鉄屑へと姿を変えた…。

着地して魏の将達の顔を見ると、信じられないという顔をしていた。

「そんな…。ボクの鉄球が…。」

「これで一人片付いたな？来いよ、マヌケ共…！！」

エアギターをしながら、軽く挑発してみた。何をやってるのかは分
からなくても、何を言われたのかは分かっている筈だ。主の前で、マ
ヌケと言いつつ放つてやったのだから…。それでもまだ、魏の将達は放

心し続けていた。

「…来ないなら、こっちから行くぞ？」

駆け出して、最初に狙ったのは于禁。遊びだったとはいえ、双剣の手数は厄介だった。若干動揺していた為か、数合打ち合っただけで剣を弾き落とせた。

「ちよつと眠っててもらおうぞ。」

「あうっ！？…バタンッ

柄の部分で鳩尾を殴り、気絶させた。次は李典に狙いを定めて、ストリークを放ち、槍を真つ二つに破壊しながら吹っ飛ばした。

「ぎゃっ！？…うちの螺旋槍が…！！」

「沙和！？真桜！？よくも二人を…！！」

怒り任せに楽進が突っ込んで来る。我を忘れて攻撃しているのか、攻撃が全てが大振りで、避けやすくしてしょうがない。わざと大振りで剣を振るい、距離をとらせてやると、背後から典章のヨーヨーが飛んで来るのに気付いた。それをぎりぎり回避、目の前を通過していく太い糸を掴んで、思いつき引つ張ると、典章も一緒に飛んで来た。

「今度はお前が飛んでく番だ…！！」

ハンマー投げの要領で回転しながら、典章を投げ飛ばす。一度バウンドした後、そのまま数回転ほど転がった…。

「うう、痛い、目が回るよ……。」

「まさかここまでとは……。だが、華琳様の手前、負けるわけにはいかない！」

夏侯淵が矢を速射してきた。普通は速射したら狙いが定まらないが、さすがは弓の名手。人体の急所を確実に射抜こうとしてくるが、それらを悉く銃で撃ち落としていった。

「速射してるのに、この精度……。流石と言うべきかな。」

「敵とはいえ、お前ほどの武人に褒められるのは、悪い気がしないな。もう少しお前を相手に弓を引きたかったが、生憎もう矢が無いのでな、降参させてもらう……。申し訳ありません、華琳様。相手が悪過ぎたようです。」

夏侯淵は、潔く身を引いてくれた。残るは楽進ただ一人……。

「楽進、残るはお前だけだけど、どうする？」

「……これだけの人数で挑んで勝てなかったのですから、私も降参します。」

これでとりあえず、魏の将を全員下した？ことになった。

「有りえないわ。6人掛かりでも勝てないだなんて……。」

曹操の顔は、幽霊でも見たかのように、顔面蒼白になっていた。霞を見ると、顔を逸らして笑ってた。

「そんなこと言われても、お前の軍は俺一人に敗れたのは事実だ。今回はこの程度だったけど、今後俺の身内が欲しいとかほざくようなら、お前の可愛い部下達が全滅したって構わないくらいの覚悟で来るんだな。」

「…わかったわ。」

全然納得してないようだけどな…。

「それと一刀、以前この戦で勝って俺を捕まえれば、なぜお前のことを知っているのか話してやるって言ったけど、ついでだからここで話してやるよ。」

連合の負けを今から覆すことは不可能だ。この先、魏の動きを抑制するためにもちょうど良い機会だろう…。

「俺の本当の名前は、沖原邦祐。一刀と同じ聖フランチェスカ高校2年、ここでいう天の国の人間だ!!」

一刀が一番知りたかった真実が語られ始めることになった…。

第三十一話 制裁（身内をよこせと言った罰）（後書き）

コメントやアドバイス・誤字などがありましたら、よろしくお願
い
します。

次話は、暴露大会をします。

第三十二話 真実はいつも一つ？どの軍にも苦勞人は付き物（前書き）

進行の都合により、今回に限り、戦闘描写の割カットでお送りすることになりました。

申し訳ありません・・・。

第三十二話 真実はいつも一つ？どの軍にも苦勞人は付き物

ようやく、俺が知りたかったことがわかる。それが嬉しくて堪らなかつた。

「俺の本当の名前は、沖原邦祐。そこにいる一刀と同じ聖フランチェスカ高校2年、ここでいう天の国の人間だ!!」

…今、なんて言った!?

「なあ、聞き間違いじゃなきゃ今、邦祐って、聖フランチェスカって、言った…よな?」

「ああ、間違いなく言ったぞ。それがどうかしたか?」

「どうかしたか?じゃねえよ!!何でお前がこの世界にいるんだよ!?!それにその体、明らかにおかしいだろ!!それと、心なしか年上に見えるし…。」

「今からそのことを話してやるよ。まず、何でこの世界にいるかというと、俺が死んだからだ。」

「はあっ!?!お前、何言ってるんだよ?死んでたらここにいるわけないだろ。」

「じゃあ、この俺の腕や武器、それに強さはどう説明を付けるつもりだ?」

「た、たしかに…。」

普通に生きてたら、ネロと同じになるなんて、まずあり得ないことだしな…。

「俺はトラックに轢かれて死んだ後、自称神様の爺さんによって、この世界に転生させられたんだ。この力を貰ってな。でも、ただ貰うだけじゃ使いこなせないから、3年間だけ修業の時間を貰った。だから、年上に見えて当然なんだよ。」

「ちょっと待て。3年も修行したなら、俺がここに来た時の年齢も二十歳になるはずだろ？」

「俺も同じ質問をしたよ。爺さんが言うには、俺が修行した場所の一年間は、そっちの世界の一日にしかならないんだと。信じられないとは思っけど、本当のことだ。」

「…じゃあ、どうしてその力を貰おうと思ったんだ？」

「別にたまたまだけど？ちょうど頭に浮かんだのがこれだったに過ぎないだけだ。」

「たまたまって…。他に何か理由は無いのか？聞いてみよう。」

「なあ、他に理由は無いのか？」

「そうだな。とりあえず右も左も分からない異世界に送られるんだから、最低限の自衛ってことも関係あったかな。それに、やらなきゃいけないこともあるし…。」

「やらなきゃいけないことって、何なんだ？」

「…魏の三国統一の阻止。個人的なことだと、一刀のハーレム化に歯止めを掛けること。この二つだ。」

「「えっ!?!」」

俺のハーレム化に歯止めを掛けるってのはともかく、魏の三国統一の阻止って。それじゃあ…。

「…華琳の邪魔をする気なのか?」

「ああ。俺の守るべきものに害を及ぼすのならな。それじゃ、俺達は帰らせてもらう。また近いうちに会おう。」

精神的にも肉体的にも、多大な損害だけを残して、邦祐達は虎牢関へと引き上げて行った…。

少し時間を遡り、劉備の所に出向いていた柳花・恋組の方はと言
うと…。

「…やるではないか、関羽。?水関の時とはまるで別人ではないか?」カキイインッ

「あの時の私は、貴様の挑発に乗って我を失っていたに過ぎん。冷静のままではいられるのなら、負けることなど有りえん!!はああー
ー!!」キイインッ

「くっ!…このままでは…。」

「これで終わりにさせてもらうぞ、華雄!!」「ブオンツ!!」

「済まない邦祐、私は戻れそうに「駄目。」なっ!?!恋、どうしてここに!?!」「ガキンツ!!」

「邦祐に、言われた。柳花、危なくなったら、助けてって…。」

「そうだったか…。済まなかったな恋。後で、あいつにも礼をしなければ。」

「まさか、飛將軍の呂布が自ら来てくれるとは…。」

「戦う気、ない。恋は、柳花連れて、帰るだけ。」

「ふざけるな!!そちらから勝負しに来ておいて、一方的に帰るだど!?!?」

「お前、弱い。だから、戦う必要、ない。」

「私一人で勝てないというのなら、仲間と共に闘うまでだ。鈴々!!星!!」

「「おう(任せるのだ)!!」」

関羽・張飛・趙雲の3人が、天下の飛將軍である呂布と戦ったのだが…。

「くう…。これが人中の呂布と言わしめた実力なのか…。」

「うう、こんなに強いとは思わなかったのだ…。」

「たしかに、これは予想外だったな…。」

「お前達、弱い。邪魔するなら、ここで倒す。」

恋が圧倒的な武を見せ、膝を突く愛紗達に止めを刺そうとしていると…。

「まっ、待って下さい!！」

「桃香様（殿）!?!」「お姉ちゃん!？」

恋の手を止めたのは、桃香だった。

「何？お前も、戦うなら、恋は、容赦、しない。」

「ち、違うの!!愛紗ちゃん達を殺さないで!!！」

「どうして？恋は、柳花連れて、帰りたかっただけ。恋と戦おうとしたのは、そっち。」

「…でも、私達は誰か一人でも欠けちゃ駄目なの!!だから、お願いします!！」

「…恋達、追って来ないなら、こいつら、見逃す。そのかわり、約束。」

桃香は何も言わずに頷き、恋達も虎牢関へと引き上げて行った…。

虎牢関に戻った俺は、柳花達の帰りを待つ間、アインス達の作業の進み具合を確認してみることにした。

「二人とも、どれくらい出来あがってる？」

「後は胸の辺りに傷を付けて血を染みさせ、大きな桶に入れれば準備完了です。」

「相変わらず仕事が早くて助かるよ。」

「そのようなお言葉、私達には勿体無いです。」

「じゃあ、早速やるとしようか。」

偽装された死体の胸を剣で突き刺すと、じわじわと血が広がって行き、いかにも刺殺されたかのような。それを大きな桶に入れ、封を閉じた…。

「よし、これで完了だな。ツヴァイ！！ファイア！！」

「何か御用でしょうか（用かい）？」

「この桶を、袁紹の元に届けてもらいたい。これが、袁紹の所の軍服だ。」

「「御意（了解）！！」「ササッ

さて、今度は顔良達の様子を見に行くか…。

地下牢に行こうとすると、何故かお茶会セット一式を手にしている

冥琳の姿があった。

「あれ冥琳、どうしてここに？それとそのお茶は？」

「お前達が出撃してる時に、連合の現状に関する情報を少しでも聞き出そうと思つて、地下牢にいるあの二人の所に一度来たんだ。そうしたら、顔良が意外と苦勞人ということを知つて、意気投合してしまつてな。話が長引きそうだからお茶でも飲みながらと思つて。」

「たしかに、冥琳は雪蓮達によく振り回されてるし、顔良は袁紹に振り回されてそうだしな。」

「まあ、雪蓮は政務が面倒だからやりたがらないだけだし、祭もそこに拍車を掛けるように酒呑みに誘うだけだから、袁紹の馬鹿さ加減に比べたら可愛いものだ。いくら雪蓮でも、籠城する相手に、『雄々しく華麗に前進』だなんて、策と呼ぶこと自体おこがましいような策は取らないしな。」

「それに、冥琳がそんな策を取らせないだろ？」

「当然だ。一軍師として、雪蓮の親友として、あのような愚策を取らせるわけにはいかない。あんな策を出せるのも、袁紹の頭が残念な結果だからだ。」

この毒舌、流石は軍師と言つべきなんだろうか…。

「でもそれを、顔良達の前で言つたりするなよ？」

「大丈夫だ。あの二人も、心の底では同じことを感じていたようだしな。さて、新しい話し相手をあまり待たせるわけにはいかないん

でな、私はそろそろ行かせてもらっぞ？」

「ああ。お互いに良い気分転換になるだろ。楽しんで来ると良い。」

同じ苦労人同士、何か共感できる所があったんだろっなとか思いつつ、人数分のお茶とお茶受けを乗せたお盆を手去っていく冥琳の後ろ姿を見送ることにした…。

第三十二話 真実はいつも一つ〜どの軍にも苦勞人は付き物〜（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等があれば、よろしくお願いします。

第三十三話 投降くそれでも袁家は諦めないく

斗詩さんと猪々子ったら、あの楊昴とかいう男を倒すのに、一体どれだけ時間がかかっていると思ってるんですの!?

「袁紹様、董卓軍よりこのようなものが送られて来たのですが…。」
本陣で待っていた私の目の前に置かれたのは、何だかよくわからないですけど、大きな入れ物。

「一体中身は何なんですの?」

「さあ?開けてみないことには何とも…。」

「じゃあ、さっさと開けなさい!」

何が入ってるんでしょう?楽しみですわ…。

「うっ!!うわぁー!?!?」

「何が入ってたと言うんですの!?!ちよつとどきなさ…う、嘘…!」

入っていたのは…虚ろな目で目尻から頬にかけて涙の跡があり、胸に刺殺されたと思われる傷がある文醜と顔良の死体、それと一枚の手紙だった。

「斗詩さん!!猪々子さん!!いや、嫌ぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

「え、袁紹様、お気をたしかに！！おい、袁紹様を引き放せ！！」
「嫌、放しなさい！！斗詩さん…猪々子さん…どうして、こんなことに…。」

「袁紹様、中に手紙の様なものが入っておりますが…？」

「…何て書いてありますの？」

「『この二人が死んだのは、無能な主を持ったからだ。もし、彼女達が貴様以外の人間に仕えていたのなら、このような非業の死を迎えることもなかっただろう。この二人を殺したのは、戦争でも、敵兵でもない。この二人を死地に送り込んだ貴様自身だ。これ以上君に仕える者達を失いたくなければ、投降しろ。その際、投降した者には一切の危害を加えたりしないことも約束する。』…そう書いてあります。」

斗詩さんと猪々子さんを殺しただけでなく、この袁本初に投降しろですって…！！

「今すぐに、連合全軍を招集しなさい！！二人とも、必ず敵を取って差し上げますわ…。」

緊急招集の命が、連合軍の各諸侯へと伝えられた…。

招集命令が掛かってから二刻後、数度目の軍議が開かれました。
…正直、もう出たくありません。

「それで麗羽、今度はどう私達を驚かせ、呆れさせてくれるのかし

ら？」

「…斗詩さんと猪々子さんが討ち取られ、私の本陣に董卓軍から送り付けられて来ましたの。投降した者には危害を加えないでやるなんて、まるで見下すかのような文書まで付けて。だから、私は宣言しますわ！！二人の弔い合戦を始め「私は嫌よ。」何ですって!？」

「実はさつき、私の所に楊昂が来て、部下達と戦ったの。6人掛かりで攻めたのに、彼には勝てなかった。幸い、武器が壊されただけで済んでくれたから良かったけど…。また彼が攻めてきたら、今度こそうちの子達がやられてしまうわ。」

「私の所は呂布さんでした。愛紗ちゃん達が3人掛かりで挑んだんだけど、それでも勝てなくて…。今にも殺されちゃいそうだったから、必死でお願いしたら、運良く見逃してくれて…。」

「つまり、最初から殺す気だとしたら、桃香の所も曹操の所も壊滅してたってことか？」

「ええ、そうよ。しかもあの男は、一刀と同じ天の国の人間だということも知ったわ。」

「『ええっ!?!』」

「これじゃ、損失ばかりが大きくなる一方だね。麗羽、二人のことは残念だけど、ここは降伏するべきよ?」

「冗談じゃありませんわ!!そんなに負けを認めなければ、勝手に降伏でも何でも好きにすればいいじゃないですの!!さあ皆さん、華琳さんは放っておいて軍議の続きを…って、他の皆さんもどうし

たんですの?」

「ごめんなさい袁紹さん。私達の所も、降伏することにします。」

「悪い麗羽。今私がいなくなったら、幽州の民が混乱するし、うちの兵数じゃ大した戦力にもならなそうだから、うちも手を引かせてもらおうよ。」

「私の所も降伏する方に賛成だから、そうさせてもらおう。」

曹操さん、私と続いて、白蓮ちゃんと馬騰さんも降伏する意を伝えました。

「きいいい!!なら、さっさと出て行きなさい!!貴女方のような臆病者、この連合軍に必要ありませんわ!!」

この一言で、袁紹さんと袁術ちゃん以外は、どこの軍も降伏していききました…。

日が沈んだ頃、袁家を除いた連合軍の諸侯達が次々と董卓軍に投降しに来ているのが、たまたま涼みに来ていた城壁の上から見えた。残る敵は袁家のみ。これでやっと戦も終わるし、呉の独立への第一歩も踏み出せる。そんなことを思いながら、風にあたっていると、城壁にある松明の明かりによって、雪蓮と冥琳の姿が見えた。

「気分はどうだ、雪蓮?」

「最っ高の気分よ。ようやく袁術に、今まで散々こき使ってくれた借りを返せるんだもの。今から、楽しみでしょうがないわ。」

「だからって、雪蓮はこれでも王なんだから、最前線に出るとか言わないでくれよ?」

「ぶうゝ。これでもってどついう意味よ?」

「意味も何も、今邦祐が言った通りの意味だよ。」

「まあ、冥琳まで…。ふんっだ!!二人がそんなこと言っただつたら、今から自棄酒してやるう!!」

雪蓮はいじけて、部屋へと戻って行ってしまった。

「まったく…。雪蓮には、もう少し王としての自覚を持ってほしいものだ。」

「雪蓮は自由奔放だしな。ちょっと難しいだろ。どちらかと言えば、蓮華のほづが王としての自覚を持ってくれるんじゃないか?」

「それでお前は、王の旦那…というわけか?」

「ちょ!?!そんなんじゃないって!!」

「くく、冗談だ。」

「まったく…。軍師相手に、口で勝負するもんじゃないな。特に冥琳が相手だと、勝てる気がしないよ。」

「頭と口で勝負する、それが軍師というものだろ?…っつと、そろそろ雪蓮の元に行かないとな。本当に自棄酒なんかされたら、堪った

もんじゃない。それじゃあな。」

「ああ。よろしく頼むわ。」

冥琳と別れた後、兵士たちに聞いて、董卓軍の皆がいる部屋へと向かった。中に入ると、すでに霞と柳花の二人が泥酔し、恋ちゃんとねねちゃんが困り果てている所だった。

「これはまた、なかなか見ない泥酔っぷりだな。霞はいつもだけど、どうして柳花まで？」

「霞殿に關羽に敗れたことを話したら、『なら、今から飲もか!!』って言い出して…。」

「で、結果がこれか…。」

「ねね達も頑張って止めようとしたんですけど？でも、徒勞に終わってしまいました。」

霞が酒を飲み始めたら、満足するまで飲み続けるからな。当然と言えば当然か…。

「とりあえず、このままじゃ風邪ひくから部屋に運ぼう。恋ちゃん、霞を頼んでもいいかな？」

「…わかった。」

恋ちゃんが霞をおんぶし、俺は柳花をおんぶして、割り当てられている部屋へと運んだ。

部屋に着き、柳花を寝台に寝かせて布団を掛けた後、俺は近くに
ある椅子に腰掛けて柳花の様子を見ることにした。

「目覚めた時に、頭痛がするだろうから水の用意もしておかないと
…。」

部屋を出て、兵に事情を説明し、水を用意して貰って部屋へと戻り、
寝台の横にある台の上に置いておいた。部屋を出る前に柳花の顔を
見ていこうと思って、柳花の方に目をやる。

柳花は、窓から差し込む月明かりによって照らし出されていた。銀
髪は、淡くではあるけど輝きを放ち、柳花の容姿と合わせると、思
わず息を飲んでしまうほど綺麗に見えた。

しかし、どんなに綺麗に見えても、柳花は柳花だった…。

「かんう〜、かくご〜、むにゃむにゃ…。」

夢の中でも戦っているのかと思うと、つい笑ってしまった。

「どんなに綺麗に見えても、やっぱり根っからの武人なんだな…。」

寝がえりを打った際にはだけてしまった布団を掛け直して部屋をあ
とにする。後の俺は語る。最悪のタイミングで部屋を出て行ってし
まったと…。

「あら邦祐、どうして柳花の部屋から出て来るのかしら？」

「あ、蓮華。いやね、柳花が霞と酒を飲んで泥酔しちゃってね。部
屋に運んでた所なんだ。」

「ふうん…？まあ、理由なんかどうだっていいわ。」

「え？」

「彼女達ばかり気にかけて、肝心の私を放っておくだなんて…。これは少し、説教する必要があるそうね。」

後ろ襟を掴まれ、そのまま蓮華にずると引っ張られて行く…。

「え？あの、蓮華さん？」

「何かしら…？」

「い、いえ、何でも有りません…。」

蓮華に引き摺られたまま部屋へと到着し、それから数時間、正座の状態で説教を受け続けた…。

第三十三話 投降くそれでも袁家は諦めないく(後書き)

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

第三十四話 終戦、捕獲、連行、そして戦後対談へ

これで最後になるだろう、連合軍との戦が始まるうとしていた。まあ、袁家しかいないのだから、そこまで苦労することは無いだろう。

「それじゃ雪蓮、俺達は袁紹を捕らえるから、袁術の方は任せたよ。」

「わかってるわ。任せといて。」

「それじゃ、そろそろ出るとしようか。」

まず先に呉の軍勢、続いて董卓軍の軍勢が出撃した。

戦が始まると、袁術の方はこんな簡単に勝敗が決まっていいいのかと言いたくなるくらい、あっさりと勝負は付いた…。兵から聞いた報告によると、雪蓮達は敵軍をほぼ全滅させ、袁術と張勳を捕らえて先に虎牢関へと引き上げたらしい。こっちは、敵の兵数の多さに時間が掛かったものの大した被害も無く、袁紹のいる本陣へと到着した…。

袁紹の周りを固めるのは、たった数十人程度の兵。それに対しこちらには、武将4人に数万の兵。襲い掛かれても、あっという間に敵を肉塊に変えてしまうだろう。

「やあ、袁紹。ここは初めまして、というべきかな？」

「貴方は…楊昴…ですか？」

「ああ、そうだ。俺からの贈り物、お気に召してくれたかな？」

「贈り物…。まさか、貴方が斗詩さん達を!？」

「そうだ。あれは俺がやったことだ。」

仇を確認した袁紹は剣を抜き、俺に向けて構える。

「…二人とも、今仇を討ってあげますわ。」

一度俯きそう呟いたあと、こっちに殺意と憎悪の満ちた視線を送り、手にした剣を振り上げる。そして、真っ直ぐこっちに駆け出して来た。

「覚悟おー！ー！！」「ヒュンッ

「遅い！！」「カキンッ

袁紹が振り下ろした剣を、自らの剣で受け止める。受け止めた剣は、今まで戦って来たどの武将の攻撃よりも遅く、そして軽かった。

「くっ！！こんな時に斗詩さんと猪々子さんがいてくれたら…。」

「その二人を失うきっかけを作ったのは、お前自身だろうか？」

「きっかけはどうあれ、殺したのは貴方なのですから、悪いのは貴方ですわ!!！」

「ふざけるな！！俺は、止めを刺さないことを条件とした一騎討ちという選択肢を提示した。それを選んでおけば、顔良や文醜だけでなく、諸侯達の信頼や多くの兵を失わずに済んだはずだ。」

「うっ！？」

一瞬怯んだ袁紹を、間髪いれずに畳み掛ける。

「でもお前は、人の話を全く聞こうとない。自分の思うように事が運ばないと、そうやってすぐ他人に責任を押し付ける。大切な部下を失い、周りの信頼を失い、そしてそのくだらない自尊心のせいで兵士までも失ったのは、当然の結果だな。」

「…言いたい放題言ってくれますわね？でも、それももう終わりですわ！！もうじきここに美羽さんの「袁術の軍なら、とつくに雪蓮達が壊滅させた。」えっ！？」

「聞こえなかったか？袁術と張勳は、すでに捕えた。で、残る連合軍はお前と、怪我人を合わせたところでたった数百の懦弱な兵士のみ。それに比べて、こっちは武将4人に数万のそれなりに屈強な兵士。こりゃ、確実に詰んだろ？さっさと負けを認めろ、この能無し高飛車屑女…。」

「私には大義が…。逆賊董卓を討つという大義が…。」

「私達の主を、逆賊逆賊と言わないでもらおう。それとこんな言葉を知っているか？」

今まで沈黙を貫いてきた柳花が、袁紹に精神的止めを刺した。

「勝てば官軍、負ければ賊軍。貴様がどんなに喚こうが、この戦に勝利した私達が正義。そして、貴様ら連合軍は不義。つまり、連合のやるうとしていたことは、その辺にいる賊と、何も変わりはないのだ!!」

「そん、な…。名家であるこの私が賊と、一緒…?」ガクッ

「誰か!!こいつを縛っておけ!!」

茫然自失となっている袁紹を柳花の命によって兵達が捕らえ、虎牢関へとのおんびり帰還した…。

虎牢関に着いた早々、各軍の党首と護衛数人を洛陽へと連行する準備を始めた。

「はい、じゃあ…まずは劉備ちゃんの所は誰が来るんだ?」

「えっと、私と愛紗ちゃん、じゃなくて関羽ちゃんと諸葛亮ちゃんの3人です。」

「次、曹操のとは?」

「うちは、一刀と荀?よ。」

「で、公孫賛のとは党首のみで、西涼は娘の马超だけ。それと袁家の3人だから合計で、11人か。霞、護送用の馬車って何人まで乗れるんだ?」

「そやな。4人くらいだったと思うんやけど。」

「わかった。じゃあ、一台目は劉備ちゃんのこと張勳。二台目は曹操のところと袁術。三台目には、残りの3人が乗ってくれ。異論は無しだ。さ、早く乗れ。」

全員が馬車に乗ったことを確認し、一応扉を外から鍵をかけて出発させた。ちなみに、先頭は案内役として霞達と俺が、最後尾は逃亡阻止のために呉の軍勢が固めている。まあ、連行している武将達の武器は没収して虎牢関に置いてあるし、何か行動を起こそうものなら、容赦しないと伝えてあるから問題ないだろう…。

途中、馬のために小休止を取りながら洛陽入りしたため、着いた頃にはすっかり日が落ちて夜になっていた。まあ、そんなことはお構いなしに、今から玉座の間で戦後対談だ。

城に入り、適当な部屋に諸侯達を案内した後、近くにいた侍女に声を掛ける。

「ただいま。連合軍の諸侯達を連行して来たんだけど、月ちゃんと詠ちゃんの居場所知らないかな？」

「お帰りなさいませ。お二人でしたら、今は董卓様の私室におられますよ？」

「わかった、ありがとう。」

居場所がわかったので、早速二人に会いに行った。

部屋の扉を軽くノックする。

「誰ですか？」

月ちゃんがノックに反応した。

「俺だよ、月ちゃん。」

そう答えると、勢いよく扉が開き、月ちゃんが飛び込んで来た。

「お帰りなさい、邦祐さん。お怪我はしませんでしたか？」

「ただいま月ちゃん。大丈夫、皆怪我してないよ。」

「今戻ったで、月。」「ただいま戻りました。」「…ただいま。」

「ただいまなのでぞ。」

「霞さん、柳花さん、恋ちゃん、ねねちゃん、皆お帰りなさい。」

「どうしたの、月？……あんた達、いつ戻ってきたの！？」

「今さっきだよ。ただいま、詠ちゃん。」

「…よく無事に帰って来てくれたわ。」

「そうだ詠ちゃん、今から二刻くらいしたら戦後対談を開くから、月ちゃんの準備してあげてくれないかな？霞達は、連合の人達を先に玉座の間に連れて行っておいて。」

「了解や。ほら、皆も行くで？」

霞達4人は、連合軍の諸侯達に割り当てられた部屋へと向かった。

「ほら月、こつちも早く準備しないと!」

「う、うん!」

「あ、詠ちゃんだけちょっと待って!」

「…月、先に用意してて。」

月ちゃんは先に部屋に戻り、慌ただしく準備を始めた。

「で、ボクを残したってことは、噂のことに關してでしょ?」

「その通り。で、どんな感じ?」

「このまま洛陽の太守としてここに居続けるのは、噂のせいで難しいと思う。」

「…なら、詠ちゃんが信頼できる文官の中で、一番優れてる人に新しく太守になってもらうのはどうかな?」

「良いけど、ボク達はどうすればいいのさ?」

「流石に兵全部までは無理だけど、少し兵を連れて、全員揃って建業に来ないか?その代わり、月ちゃんと詠ちゃんには、真名以外の名を捨ててもらわなきゃいけない……。」

「…ボクはそれでもいい。皆と一緒にいられるなら!」

「…わかった。月ちゃんにも聞いておいてくれ。それじゃ、またあ

とで。」

話すべきことは終えたので、他の皆の手伝いをするために部屋を後にした…。

第三十四話 終戦、捕獲、連行、そして戦後対談へ（後書き）

コメントやアドバイス・誤字などがありましたら、よろしくお願
い
します。

第三十五話 処分という名の要求（上）〜一刀の不幸な日の開始〜

「月ちゃんの部屋を後にし、玉座の間に向かう。連合軍の方は霞達に任せてあるから、こっちはこっちで別の奴を連れて行かないとな。」

「フュンフ、いるか？」

声を掛けると、何時ぞやと同じように天井裏が軋む音がした。あいつ、天井裏好きなのかな…？

「よっこらせつと。御主人、今度は何の用ですかい？」

「今から連合の諸侯達と戦後対談を玉座の間でするんだけど、そこに張譲を連れて行きたいんだ。今どこにいる？」

「それでしたら、地下牢の一番奥にぶち込んでありますぜ。一応ぶつ倒れない程度に飯は食わせておいたんで、くたばっちゃいねえとは思いますが。」

「わかった。それと、アインス達にも玉座の間に来るように伝えておいてくれ。」

「了解しやした。」

「さてと、どんなお仕置きがいいかなあ…。とりあえず歩きながら考えるとするか。」

フュンフと別れ、地下牢に向かう。会ったこと無いから、どんな顔してるのか分からないけど、どうせード アスに出て来た宦官み

たいな顔してんだらうな…。

言われた通りに地下牢の一番奥を確認すると、想像通りの顔がそこにはあった。

「お前が張讓か？」

「そうじゃ。どこの馬の骨か分からぬが、何か用か？」

「出る。今からお前を連合軍と一緒に処分を下してやる。」

有無を言わず、後ろ襟を掴んで牢から引つ張り出す。

「ええい、放せ！！放さぬか！！私を誰だと思っている！！」

何か叫んでいるが、無視してそのまま玉座の間へと引き摺って行った。中に入ると、全員が顔を揃えていた…。

話し合いが始まった…。

「これより董卓軍と連合軍の戦後対談を始める。でも先に、黒幕が誰で何をしたのか、それによって洛陽がどうなったのかを話しておこうと思う。」

後ろ襟を掴んで拘束していた張讓を、諸侯達の前に投げ捨てた。

「今回の戦の黒幕は、この張讓っていう宦官と、俺が始末した道士二人だ。」

「そんな馬鹿な！？左慈と于吉がやられるだなんて…。」

張譲を見ると、共犯の二人が知らないうちに死んでいたことに、動揺を隠せないようだ。

「こいつの目的は、月ちゃんを追い出して洛陽の実権を握ること。二人の道士の目的は、俺と一刀を殺すことだった。そのために悪い噂を流して、今回の戦に至ったわけだ。そのせいで、民のために頑張って来た月ちゃんの信用は失われ、ここに住む人達も、道士の一人が月ちゃんを操り無理やり課させた重税で、一気に生活が苦しくなった。多分真実を伝えたとしても、月ちゃんはもう太守には戻れない。」

月ちゃんは自身の責任じゃないのに、責任を感じて落ち込んでしまっていた。これが、董君雅さんの言っていた自虐的な所ってやつか…。でも裏を返せば、それだけ月ちゃんが優しい子だとも言える。

「だからまずは各軍、『董卓』と『賈馱』は死んだという噂を流せ。これは、どこの軍にも必ずやってもらう。」

「私達はその噂を流した後、董卓達はどうするんだ？」

「董卓軍に所属する武将も含めて、全員揃って呉に来てもらう。雪蓮、構わないか？」

「ええ、構わないわ。優秀な人材が手に入るんだもの。拒むはずが無いでしょ？」

「よし、決まりだな。」

これで、董卓軍は誰一人欠けることなく呉に来ることが決定した…。

先に話しておくことはもう無いから、次は処分という名の要求を聞いてもらおうとしよう。

「それじゃあ、各軍への処分を発表する。」

いきなり処分と言われて、空気が一変した…。

どこからにしようか考えていると、劉備ちゃんが質問して来た。

「あの…：処分って、もしかして殺されちゃったりするんですか？」

「ん〜、色々とやってもらいたいし、月ちゃんが嫌がるだろうから、殺しはしない。」

「はあ、良かったあ〜…。」

「だが張讓、お前は別だ。お前には、それ相応の罰を既に用意してあるし、必ずそれを受けて貰う。良いな？」

「…：くっ！！」

何か文句を言いたそうな顔をしてたけど、ここもあえて無視する。

それと、最初に処分を言い渡すのは、劉備ちゃんからにした。理由は特に無いけど、遅いか早いかの違いしか無いし、別に良いだろ。

「まずは、劉備ちゃんのところから発表する。心の準備は良いかな？」

「…はい。」

何だか物凄く不安そうな顔をしてる。まあ、そんな大した罰は科さないんだけどね…。

「劉備ちゃんと配下の武将達には明日から一カ月間、洛陽の復旧活動に従事してもらう。当然、費用はそちら持ちだ。」

「…えっ!?!」

負けた自分達に、どんな厳しい処分が下されるのかと身構えていた関羽と諸葛亮ちゃんの二人は、ポカンとした顔をしていた。しかし、劉備ちゃんは違った。民のためと聞いて、目がキラキラしている…。

「復旧活動って、私達は何をすれば良いんですか?」

「炊き出しや、この戦で親を失い孤児になってしまった子供達の相手とかだ。劉備ちゃんの軍の処分は以上。何か異論は?」

「いいえ、ありません。私達、みんなのために精一杯頑張ります!」

もともと力のない民のために旗揚げした劉備ちゃんと、彼女の思想に賛同した人達で出来た軍だし、これじゃ金銭面以外は大した罰にはならなかったかな…。

次に処分を下すのは、何となく魏にした。

「次は魏だけど、良いか？」

「ええ。一体どんな処分なのかしら？」

「劉備ちゃんの所と同じく洛陽の復旧活動に一月月従事してもらうけど、この辺りの警護とこの戦を機に出没した賊の討伐を主にやってもらおう。費用に関しては、劉備ちゃんと同様だ。」

「…わかったわ。」

「それとは別にもう一つ、魏への処分とは別に、一刀に命令する。」

一刀は、急に名前を呼ばれてびっくりしていた。まさか呼ばれるとは思わなかったんだろう…。

「……一刀、いくらこの世界の女性が強いからって、守られてばかりでいるなんて、情けないとは思わないのか？ 爺さんが知ったら、本気で泣くぞ？」

「そりゃあ、多少はそう思うけど…。仕方ないだろ？ 周りは強いし、俺が戦に出ても足を引っ張るだけだ。」

「戦に出なくても、自分の身くらいは守れんだろ？ 夏侯惇も言ってたぞ？ お前はなかなか強くならないくせに、女を口説き落とす腕だけはどんどん上達してるって。」

「うげっ！？ 春蘭、あいつ…。」

「たしかに、一刀ったら色んな子に次々と手を出してるものね？」

「ちよつ！？華琳まで！！」

「曹操が言うなら間違いないだろうな。そこでお前に命じるのは、まぐれじゃなくお前自身の実力で夏侯淵に勝てるようになるまで、女性に対するフラグを立てることと女性に手を出すの禁止な。」

「ふらぐ？それは、天の国の言葉なのかしら？」

聞き慣れない言葉に、曹操が反応した。

「ああ。とりあえず、女の子を惚れさせるためのきっかけ作りとでも思ってくれ。それと、もし一刀がそのきっかけ作りをしたとしても、夏侯淵よりも強くない限り、手を出すのは許されない。そのため曹操達には、夏侯淵に勝てるまで、一刀の見張りを行い続けてもらう。いいな？」

「…ええ。この曹孟徳の名に掛けて、ちゃんと見張るから心配しなくても大丈夫よ。」

「だってよ？良かったな一刀、部下思いの主で。」

「ちよ、邦祐！！いくら何でも、秋蘭には勝てないって！！それだけは勘弁してくれ！！」

ん、敗者なのに文句を言うとは、さすが魏の種馬を拝命しただけのことはある。でも、然うは問屋が卸さない。

「念のために、俺の部下の隠密にも一刀の監視をさせる。もしこの命令に背いたのが俺の耳に入ったら、冗談抜きで去勢させるか、張譲と同じ罰を与えるから。それでも良いなら、堂々と人生最後の一

人を抱け。」

「俺の、俺の青春が…。」

流石の一刀も、何も言えなくなったか。さっさと次に行こう。

「次は公孫賛と西涼の軍についてだけど、劉備ちゃんと曹操の補助に回ってもらう。以上。」

あまりの処分の短さに、何も言い出せない両者だった…。

第三十五話 処分という名の要求(上)〜一刀の不幸な日の開始〜(後書き)

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしくお願います。

第三十六話 処分と言つ名の要求（下）〜妥当とやりすぎ？共に二名〜

ようやく、袁家だ。まずは、呉の再興のために袁術の方からしよう。

「さあ、次は袁術達の番だ。何を言われるか、楽しみでしょうがないだろ？」

「出来れば、皆さんみたいな優しめの処分にしていただけませんか？」

ぶりっ子ポーズと上目使いで、張勳がお願いしてきた。

「そうだな。じゃあ張勳に免じて、優しめにしてあげよう。」

「ちょっと邦祐、何言ってるのよ!？」

張勳達まで処分を甘くさせると思ったのか、雪蓮が抗議して来た。勿論、甘くする気は一切ない。

「やった、ありがとうございます。それで、処分は何ですか？炊き出しですか？それとも、賊の討伐や街の警護ですか？」

「一つ目、雪蓮達を客将から外して、呉の独立を認めること。二つ目、お前達は今すぐに軍を捨てること。三つ目、呉の全員に頭を下げて謝罪すること。四つ目、これからは俺達の部下として働くこと。もし働かないなら、呉の土地に踏み入ることを一切禁じる。五つ目、これら全てが聞けないのなら、二人揃って奴隷市場行き。ちなみに、どの選択を選んだとしても、真名以外の名前は捨てて貰う。どうだ、

かなり優しいだろ？」

「全っ然、優しさの欠片も無いじゃないですか！？そのどこが優しいんですか！！」

さっきのぶりっ子はどこにいったのか、いきなり張勳が叫び、雪蓮達はくすくすと笑い声を零している。

「殺されないだけ優しいと思え。それに俺は、意外とお前の手腕を買ってるんだぞ？頭が切れる人間がいれば、それだけで主に冥琳辺りの負担が減るからな。それとも、自ら進んで奴隷市場行きを望むたいのか？」

「うう…。それだけは、絶っっつ対に嫌です。」

一刀を除けば、敗戦した軍への処分としては、どう考えても甘いものだった。だからこそ、張勳も期待したんだろうな。

「で、返事は？」

「わかりました。貴方達の部下になります…。」

「賢い選択だな。」

「…妾はどうなるのじゃ？」

「袁術には、俺が考えている制度の実験台になってもらう。まあ、実験台と言われると良い気はしないが、悪いようにはしないから安心しろ。」

「分かったのじゃ…。」

張勳の能力は、決して低いわけじゃない。むしろちゃんとした軍におけば、なかなか優秀な能力を発揮して、結果を出してくれるはずだ。袁術の方はというと、呉に学校の制度を導入した際のテスト生をやってもらうつもりでいる。呉の人達には、袁術と張勳は疎まれるだろうけど、こればかりはどうしようもない…。

「袁術達への処分は以上だ。」

呉に連れて帰れば、主に雪蓮が袁術を、冥琳が張勳をこき使いまくって、自分達が一体何をしていたのかを、その身で理解させられるだろう…。

残す連合軍は、総大将である袁紹ただ一人…。

「さて袁紹、お前の番だ。」

「…どうにでもなさい。」

「…そんなこと言っても良いのか？」

「どうせもう、斗詩さんも猪々子さんもいないのですから、どんな処分を下されようが構いませんわ…。」

死体の工作と柳花の言葉が、少々効き過ぎたらしい。無駄に自信過剰だったのが、無駄に自暴自棄になって、何だか調子が狂うな。

「そうか…。なら一つ目、お前の統治する領内は、民に課される税

が高くて生活がきついと聞かされている。そこで、民が圧迫されない程度まで、課す税を減らすこと。二つ目、他領への侵略行為を一切行わないこと。三つ目、戦で亡くなった人達の慰霊碑を、自腹で建てること。四つ目…四つ目はどうしよう？雪蓮達は、何か良い案ある？」

迷った時は、聞いてみるに限る。しかし、雪蓮達に聞いたことが、袁紹にとっての不運だった。

「のう邦祐、いつその事丸坊主とかどうじゃ？どうにでもしろと言ったんじゃし。」

「ちょ、ちょっと祭！？いくらなんでも、それは可哀想じゃない？」

「いや権姫、こういう場面でははじめの一つも重要なのじゃ。」

髪は女の命と言われているのに、それを剃らせるとは…。祭もなかなかえげつないこと考えるけど、何となく見てみたくもある。

「雪蓮は「私も丸坊主に賛成」どう見ても、丸坊主見たさで言うてるだろ？」

自分が楽しめることに、雪蓮は本当に敏感だな…。

「じゃあ、今回の謝罪の意味も兼ねて、袁紹は丸坊主ってことでとりあえず、袁紹への処分は以上…じゃなかった。」

「…まだ何かあるって言うんですの？」

「とりあえず、処分じゃないから安心しろ。二人とも、入って来て

くれ。」

声を掛けると、玉座の間に入って来たのは、囚人服から元の服に着替えさせた顔良と文醜の二人だった。流石に、服は屍に着させた物じゃなく、新たに新調したものだ…。その後、全員から新しい服をねだられて大変な思いをしたのは、秘密だったりする。

「お前の部下の顔良と文醜だ。」

「う、嘘、嘘ですわ……。だって私、この目でしかと見たもの。斗詩さんと猪々子さんが、死んでいるのを…。」

「お前に送ったのは、全く別人の屍の顔を二人そっくり整形し、身に着けていた物を着せただけの別人だ。」

「麗羽様!!」「姫!!」

「斗詩さん!!猪々子さん!!」

3人は涙を浮かべながら、抱き合っていた。まあ、あのポリューミナ金髪縦ロールから丸坊主になるんだから、せめてこれ位は嬉しいことがあったって、誰も文句は言わないだろう…。

「とりあえず感動の再会中みたいだから、丸坊主はあれが終わってからということだ。」

それからだいたい一刻程が経過して、感動の再会が終わった。

「それじゃ袁紹、感動の再会も終わったことだし、そろそろその髪の毛とさよならする時間だ。」

「…貴方は一体何を言ってるのですか？どうして私がこの美しい髪の毛と別れを告げなければなりませんの？」

ん？何だか落ち込んでた時と、雰囲気が違うような気がする…。

「話を聞いてなかったのか？さっき、処分を伝えたんだが…。」

「は？処分？そんなの知りませんわ！？」

顔良達に合わせるタイミングを、間違えたみたいだ。元氣を取り戻して、いつもの傲慢キャラが復活してる…。

「私が聞いてもないことを、いきなり言い出すだなんて…。全く、これだから庶民は嫌なんですわ…。」

…俺、怒っても良いんだよね？そうだよ、うん。

「アインス、ツヴァイ、ドライ、フィア、フუნフ。分かっている…？」

「……御意。」「」「」

部下の隠密達が一斉に袁紹に飛び掛かり、5人掛かりで手足を抑えつけ、俺はどこから取りだしたバリカンを手にした。

「こら、放しなさい！！こんなことをされる筋合い、私には無くてよ…！」

「あの傲慢なお前が、すんなり言うことを聞くから会わせてやった

のに、元気に戻った途端に聞いてませんでしたあ！？そんな考え、修正してやる！！」

バリカンのスイッチを入れ、一気に剃り始めた。最初は真ん中から一気に剃り、そのまま容赦なく全体を剃り上げる……。髪の毛を全部剃り、鏡で袁紹の姿を映し出した。

「大分すっきりした髪型になりましたね。人の話を聞かない貴女様には、最適な髪型だと思いますよ？最初で最後のお客様。」

「い、い、やぁぁー！ー！！」ボタン……

あまりのショックに、袁紹は気を失ってしまったようだ。顔良と文醜は、主が気を失い倒れたにも関わらず、もう一生見ることはないだろう袁紹の丸刈り姿に、腹を抱えて爆笑していた。だけど、この状況で笑っていたのは、この二人だけじゃなかった。雪蓮達は勿論、劉備ちゃんや公孫贄達まで、笑いすぎだろと思うくらい爆笑していた。曹操に至っては、キャラ被りがいなくなり、高笑いしていた……。

全員が笑い止み、袁紹が玉座の間の端で床に『の』の字を書いていた。何だろう、この何とも言えない不思議な空間は……。それはともかく、最後は黒幕である張讓だ。やることは決まっているんだから、サクッと終わらせよう。

「さて張讓、お前に言うことは何も無い。刑の執行に移らせてもらうぞ。」

久々登場のポストンバッグから、花束状にした植物を取りだす。

「…覚悟は良いな、張讓？」

少し殺気を放ちながら、張讓に近づく。

「ひ、ひいいー！？」

ちよつとと言っても、武人じゃない人間ならば、さしずめ蛇に睨まれた蛙だけど。それでもなお、ゆっくり後ずさりしながら逃げようとする所に、往生際の悪さを感じるな…。

「そう逃げるな。一瞬で終わる…。」

花束を張讓に向けると、中に入れられていた植物が張讓に襲い掛かり、寄生し始めた。

「うわぁ！？こ、これは一体…！？」

最初こそ振り払おうとしていたが、次第に寄生が進んで行き、次第に身体が動かなくなっていくた…。

「邦祐、あれは一体何なのじゃ！？」

「あれは、人間に寄生するヒトモドキっていう植物だ。あれに寄生されたらどうなるかと言うと…。」

祭の質問に答えるために、愛銃の照準を張讓の腹部に合わせ、引き金を引いた。弾丸は、確実に腹を貫いていった。

「ぎゃあぁあつ！？」

「邦祐さん、何をしてるんですか!？」

月ちゃんが慌てて駆け寄って来る。

「月ちゃん、あいつの腹をよく見てごらん？」

「え?……あつ!！」

銃で撃たれたはずの張讓の傷が、徐々に塞がって行く。それどころか、血が一滴も流れていない。撃たれた本人も、この事態に驚いていた。

「貴様あ、この身体は一体どうなっているのじゃ!？」

「今のお前の身体は、脳が破壊されない限りはどんなに傷付いても、お前に寄生したヒトモドキがすぐに再生させてしまう。でも、痛みは普通を感じる。つまりお前は、どんなに斬られようが、弓矢で射抜かれようが、死なせてもらえない身体になったんだよ。」

「ふざけるな!!早く元に戻せ!!！」

「…黙れ。」ダーン!!」

再び、張讓の腹部をぶち抜く。

「ひぎゃあ!？」

新たに作られた弾痕が、すぐに治っていく。

「お前には、罪もない人々が受けた痛みを、その身で知ってもらおう。」

切り刻み、射抜き、殴り、お前が殺してほしいと頼んで来ても、絶対に死なせてやりはしない。少なくとも、お前の心が完全に壊れるまではな…。」

「あ…ああ…。」

張讓の顔が、絶望一色に染まっていく。死ぬことすら許されず、ただ与えられるのは痛みのみ。

「これが、俺がお前に用意した罰だ。自分の犯した罪と代償は、その身で償ってもらおう…。」

これで、処分が全て完了した…。

第三十六話 処分と言つ名の要求(下) ～妥当とやりすぎ? 共に二名? (後書き)

*話の中に出てきたヒトモドキとは、遊白書に出てくる魔界の植
物です*

コメントやアドバイス・誤字等があれば、よろしくお願いします。

第三十七話 伏竜鳳雛くええい、蜀の二大口リ軍師は化け物か！??

洛陽の復旧が始まってから、一週間が過ぎた。基本的に復旧活動を行うのは、連合の人達だけだ…。俺がやれることと言えば、主に文官方面の手伝いや兵の鍛錬くらいしかなく、それもすぐに終わるため、暇な時間帯がどうしても増えてしまう。こういう時はいつもの事、街にくり出して、何かやれることは有るか、探すに限る。というわけで、街に出かけた…。

街の大通りに出ると、警邏中の魏の将達がいた。たしか、于禁と楽進と李典とか言ったか？生真面目な感じの楽進が、他の二人に振り回されているのが遠目からでも見える。彼女もきつと、冥琳や顔良と同じような苦労性なんだろう。俺まで行くと余計にややこしくなりそうだから、そのままスルーすることにした。

次に見かけたのは、炊き出しを行っていた劉備ちゃん達だ。長い行列が出来てるってことは、美味しいものを提供できているんだろう。やることないし、近くまで行ってみようかな…。

近くに行くと、何故か見慣れた姿が、確認できた。

「霞、今日は警邏の当番だろ？何で炊き出しの列に並んでるんだ？」

「確かに今日はうちの番やけど、魏の子達もやっとなるんやし、うち一人さぼっても大丈夫やる。それにな、ここで出してくれる料理が、めっちゃ美味しいねん！！なあ、時間あるなら、一緒に食べへん？」

「そうだな。ちよつど昼飯時だし、たまには外で食べるのも良いか

もな。」

そんなわけで、霞と昼飯を共にすることになった。そういえば、いつも大人気で過ごして来たから、こうやって霞と二人で過ごす機会って全然取れてなかった気がする。霞を見ると、どこか嬉しそうな顔をしていたから、きっとそうなんだろう。

「やあ、すごい人気みたいだね。」

「あ、楊昴さんに張遼さん!!」

「…楊昴は偽名だ。真名はないから、沖原でも邦祐でも、好きな方で呼んでくれて構わないよ。そう何度も偽名で呼ばれるのも何だかね…。他の子達にも、そう伝えておいてくれ。」

「わかりました。ちゃんと伝えておきます。よかったら、お昼食べて行きませんか?」

「今日はそのつもりで来たんだ…って言っても、さつき霞に誘われただけなんだけどね。美味しいって評判だし、頂くよ。」

「はい!! 鈴々ちゃん、楊昴さん、じゃなかった、邦祐さんと張遼さんの分を持って行ってあげて〜。」

「わかったのだ〜。」

邪魔にならない場所で待っていると、張飛ちゃんが2人分を運んできた。

「お待たせなのだ〜。」

「御苦労さま。…美味しそうだな。」

出されたのは、ご飯に汁物と煮物、それと何故か刻まれたメンマだった。それでも、あっさりした感じの料理で内心嬉しかったりする。

「美味しそうじゃなくて、本当に美味しいのだ。」

そう言われたので、煮物を一口食べてみる…。

「……やばいな、箸が止まりそうにない。」

文句なしに美味かった。

「これは誰が作ったんだ？」

「朱里と雛里なのだ。」

「それは真名だろう？誰なのか、俺には分からないんだが…。」

「鈴々達の所にいる、諸葛亮と鳳統ならわかる？」

なん…だと…？

「…ああ、それならわかる。それにしても凄いな。軍師でありながら、ここまでものを作るなんて。霞も作ってもらってばかりじゃなくて、少し見習った方が良くぞ？」

「うちやって、流石にこれには勝てへんけど、料理はけっこう出来る方や。そういう邦祐は、料理出来るんか？」

霞がジト目で見てくる。ここは正直に答えよう…。

「まあ、人並み程度にはな。」

「なら、天の国の料理食べさせてくれへん？」

「良いけど…。最近やってなかったから、腕が落ちてると思うぞ？
それでも良いなら、そのうち作るよ。」

「そんなの、構へんって約束したんやから、ちゃんと食べさせて
な？」

「良いなあ。鈴々も食べてみたい…。」

「なら、ここまで運んでくれたご褒美として、これをあげるよ。」

上着のポケットから出てきたのは、紙に包まれたどら焼きだった。
最近わかったことだけど、どうやら爺さんから貰ったバッグと上着
のポケットは、某ネコ型ロボットのスペアポケットと同じように、
繋がっているらしい。

「これは…何なのだ？」

「これはどら焼きっていう、天の国のおやつだよ。おやつにしては
早いけど、食べてごらん？」

「んん〜、何だか食べたことない甘さだけど、とっても美味しい
のだ〜」

「気に入ってもらえたかな？」

「うん！！またこれ食べたい！！」

「じゃあ、また今度な。それじゃ霞、仕事の邪魔しちゃ悪いから行くでしょうか？」

「そやな。次はどうするん？」

「時間はあるし、適当に街の中をぶらつくとするか。それじゃ張飛ちゃん、ごちそうさま。またその内、お昼食へに来るよ。」

「バイバイ！！」

その後、適当に街をぶらつきながら、霞と二人でのんびりと過ごしながら、城に帰った…。

その日の夜、劉備ちゃんの所にいる二大ロリ軍師から、話がしたいから城の中庭に来て欲しいとの手紙が届いた。もちろん、断る必要は無かったから、中庭へと向かった…。

中庭に着くと、月明かりに照らされた、ベレー帽と目深なつば付き帽子のシルエットが見えた。どうやら、既に到着していたらしい。

「待たせて済まない。」

「いえ、私達も着いたばかりですし。ね、雛里ちゃん？」

「…うん。それに、私達が呼んでおいて、後から来るわけにもいか

ないですし…。」

「だとしても、こんな時間に女の子を待たせてしまったと思うとね…。」

「そ、そんな…！そのお気遣いだけでも、嬉しいでしゅ／／／／／／
／……あうう。」

相変わらず、諸葛亮ちゃんは緊張しいなんだな…。

「とりあえず、改めて自己紹介をしよう。昼間に劉備ちゃんから話が行ったと思うけど、俺の名前は沖原邦祐だ。真名が無いから、沖原でも邦祐でも、好きに呼んでくれ。」

「改めまして、姓は諸葛、名は亮、字は孔明です。」

「…私の名は、姓は鳳、名は統、字は士元です…。」

「はい、改めてよろしく。……早速本題に入るけど、俺にどういった話があるのかな？」

「はい…。もし邦祐さんが、私達の軍にいたとしたら、今後、どのような展望をお持ちになるのかと思ひまして…。」

「私達の所は、未だに軍としての力が他の皆さんよりも劣ってますし…。」

「まずは、二人の考えた予測を聞かせて貰えないか？」

二人から聞かされた話を、簡潔に纏めるところだ。数カ月もしたら

袁紹はきつと、俺の下した処分を無視して、公孫贖の治める幽州に攻め入り、勢いそのままに徐州の自分達を狙って来るはずだから、危険が伴ったとしても、逃げ切るために曹操の治める領内を抜ける許可を貰い、劉璋の治める益州へと抜けるというものだった…。

「これが、私と朱里ちゃん考えた予測です。…もし良ければ、意見を聞かせては頂けませんか？」

「…俺も、二人と同じことを考えた。ただでさえ兵の少ない軍で袁紹と当たるものなら、確実に数の暴力で負けるだろう。賭けの要素は強いが、被害を少なくするのなら、二人の考えが一番安全な方法だと思う。」

「…そうですか。」

「力になれなくて済まないな…。」

「いえ、私達の方こそ自分達のことしか考えずに呼んでしまって、申し訳ありませんでした…。」

一礼して、残念そうな顔をして二人は去って行ったから、何だかいたたまれなくなつて、雪蓮や冥琳に相談した。この時、俺は気付いていなかった。あの二人が俺に背を向ける瞬間、口元が笑っていたことを…。これが伏竜鳳雛の切り札だと気付いていれば、俺は大変な思いをしなくて済んだのかもしれないと、後々知ることになる…。

第三十七話 伏竜鳳雛くええい、蜀の二大口リ軍師は化け物か！?? (後書き)

コメントやアドバイス・誤字等があれば、よろしくおねがいます。

第三十八話 徐州へくこれも孔明の畏なのか？（前書き）

なかなか話が纏まらず、投稿するのに一週間もかかってしまいました。

なのに、このクオリティとは。何も言えない……。

サブタイムも、だんだん何を書こうかわからなくなって来てしまったこの頃……。

第三十八話 徐州へ〜これも孔明の畏なのか？〜

ロリ軍師との話し合いがあつた夜以降、特に変わったことが無いまま、一カ月による洛陽の復旧作業が終わつた。月ちゃんと詠ちゃんの方は、新しく太守に着く人に上手く引き継ぎが出来たと言つていたし、兵の何割かは建業へ連れて行くけど、鍛錬方法を身体で覚えてる兵が大勢いるから、新しく兵が入つて来たとしても大丈夫だろう…。

各諸侯達は既に洛陽から出発した後で、残る呉軍も最終確認をしている所だ…。

「一先ずこれで、当分は建業でゆっくり出来るかな…。」

その思いは、後ろから声を掛けて来た雪蓮によつて打ち砕かれた…。

「そんな邦祐に、残念なお知らせよ。」

雪蓮は今、何て言つた？

「……雪蓮、今残念なお知らせつて言つた？しかも楽しそうに。」

「ええ、言つたわ。邦祐、誰でも良いからこの子なら戦力になりそうだなつて子を、一人選んでちょうだい？それと、私と冥琳と祭は駄目よ？」

「分かつた。にしても、戦力ねえ？誰だろう…。」

挙げられるのは、霞・柳花・恋ちゃん・思春・明命辺りだろうか。

でも、戦力になりそうな子を選べってことは、これから向かうのは戦地なのか？

「ところで雪蓮、戦力になりそうな子を選ぶのは良いが、それに何の意味があるんだ？」

この質問をしてすぐに思った。聞くべきじゃなかったと……。

「邦裕には、選んだ子と一緒に劉備ちゃんとのこの手伝いに行つて欲しいの。」

「…もしかして、俺が諸葛亮ちゃん達とこのことを話したからか？」

「ええ、そうよ。おかげで良い関係が作れたわ」

話さなければ良かった…。いや、俺が話すことまで見越した、孔明の罠だったのか？

「ま、そういうわけだから。で、誰を連れてくの？」

ここはもう、俺は仕事熱心な頑張りやなんだと開き直すことにしよう。

……誰を連れて行つても、心強いことに変わりはない。でも霞を連れてくと、酒浸りになりそうだし、主に俺が二日酔いになってばかりになりそうだ。柳花は関羽がいるから、何だか連れて行きづらい。蓮華の護衛役である思春を連れていくのはまずいし……。そうなるに残るは、蓮華の親衛隊の一人ではあるけど単独行動も出来る明命と、恋ちゃんか。でも、恋ちゃんには家族として過ごしている犬や猫達がいる。それを、ねねちゃんだけに任せられない……。誰か呉に動物

好きがいれば良いんだけど…。

「なあ雪蓮、誰か身近に動物好きな子はいないか？」

「動物好き…？それなら、シャオがいるじゃない。」

「あ……。」

シャオのこと、完全に失念してた。そういや、パンダとか白い虎とか何かしら一緒にいたもんな…。恋ちゃんの家族がシャオに懐いてくれれば、恋ちゃんを連れて行けるかもしれない。

「雪蓮、劉備ちゃんのことって、すぐに行かなきゃ駄目なのか？」

「ええ。なるべく早く来て貰いたいって、お子様軍師ちゃん達は言ってたわ。それとシャオには、私から言っておいても良いわよ？」

「そうしてくれると助かる。……それと、俺が試したかった制度を雪蓮達でやって貰いたいんだけど、良いかな？」

「どんな制度なの？」

雪蓮の疑問に答えるため、俺は学校について説明を始めた。そこは、子供達に字の読み書きや和・差・積・商の簡単な計算等を教えたりする場所だということ。ここで言う天の世界では、保護者は子供に教育を受けさせなければならぬという義務が法で定められていること。国が資金を負担することによる利点と欠点など、様々なことを話した。最初こそ驚いていたものの、話を聞いていた顔は真剣そのもので、これが王たる者なのかと感じさせられた…。

「…やってみる価値は、十分ありそうね。魏以外はどこを探しても、試したことのある場所は無い筈だし。それで、私達はまず何をすればいいのかしら？」

「これはまだ試験的なものだけど、とりあえず私塾程度の大きさの建物を造って貰いたい。教える側は、基本的に月ちゃん和詠ちゃんにやってもらって、たまに手が空いてて子供好きな文官にも手伝ってもらえば良いと思う。あと、美羽もここに行かせてくれ。嫌がったら、蜂蜜水をあげないぞとも言えば、通ってくれるだろ？」

「わかったわ。なら早く、冥琳にも伝えておかなくちゃ。驚く顔が目に見えかわわ」

その後雪蓮の話聞いた冥琳が来て、「なぜ私を、そんな興味深い話の時に呼ばなかったのかしら？」と軽い説教を受けた後、二刻ほど小言を並べられ続けた…。

……ようやく冥琳の小言が終わったが、俺の（精神的）ライフはもう0だ。これから劉備ちゃんの所に出発しなきゃいけないってのに…。世のサラリーマンもこんな感じなのかな？

「…お前達、いるか？」

「全員いますが、何か御用でしょうか？」

「ああ、今からまた出かけなきゃならなくなつた。疲れてると思つが、お前達にも動いてもらいたい。行けるか？」

「大丈夫です。問題ありません。」

「それなら、アインズとツヴァイは今から魏に潜入して、定期的な情報を流してくれ。ドライは、恋ちゃんを俺のところに呼んで来てくれ。その後は劉備ちゃんのことにもついて来てもらう。フィアとフュンフは呉に待機して、月ちゃん達の警護と兵の鍛錬の補助をしておいてくれ。それと、いつでも動ける準備もな。」

「了解しやした。」

「よし。それじゃ、行動開始!!」

言葉を発すると同時に、5人全員が一斉に動き出す。いやあ、本当に万端な部下達に成長したもんだよ…。いつそのこと、隠密だらけの軍団でも作るのかな。分隊長は、今の5人に任せればいいわけだし。でも、実現するのは当分先だし難しいよな…。

そんなことを考えていると、10分もしないうちにドライが恋ちゃんを連れて来た。

「…邦祐、恋に、何か用？」

「恋ちゃんはまだ疲れてない？」

「…うん、大丈夫。」

「実はね、今から劉備ちゃんのことの手伝いに行かなきゃならなくなっただ。恋ちゃんが良ければ、一緒に来て手伝ってほしいんだけど、駄目かな？」

「…行く。セキト、連れてっても、いい？」

「良いよ。俺も皆に挨拶しに行かなきゃ…。セキトを連れて、先にここで待ってて?」

「…わかった。」

恋ちゃんはセキトを迎えに行き、まずは月ちゃん達の下へ挨拶をしに行った。

「皆、聞いてくれ。またしばらく会えないことになった。」

「邦祐、それはどういうことだ?」

「雪蓮の命令で、劉備ちゃんのとこに行かなくちゃならなくなった。多分また、二ヶ月は会えなくなると思うけど、なるべく早く帰って来れるようにする。恋ちゃんにも協力してもらえることになったし…。」

「ええ!? 恋殿も行っちゃうのですか!?!」

「ごめんね、ねねちゃん。」

恋ちゃん大好き軍師としては、恋ちゃんと会えなくなるのは辛いのだろう。かなり落ち込んでしまった。

「…まあ、決まったもんはしゃーないわ。でも邦祐、新しい女作ったら、許さへんからな?」

割り切ってはいるものの、霞は少し拗ねていた。こういうちょっとした、独占欲と言えるような言えないようなものが、嬉しく感じる。

「大丈夫だ、問題ない。」

「何だかその台詞だと、信憑性に欠けるのだが…。」

柳花は心配していたが、きっと大丈夫だろう。たしかに俺の言ったことは、エル、○ダイに出てきそうだけど、恋ちゃんも一緒なのだから、その可能性は限りなく低いはずだ…。

「心配ないって。それじゃ、行ってくるよ。」

「いってらっしゃい。怪我に気を付けてくださいね？」

「ありがとう、月ちゃん。」

月ちゃん達に挨拶を済ませた後、蓮華達にも挨拶を済ませ、恋ちゃんの下に戻った。

「お待たせ。それじゃ行くつか、恋ちゃん、セキト？」

「…うん。」 「ワンツ!!」

セキトが安全に乗れるように、今回は次元バッグから取り出したサイドカーを取り付け、恋ちゃんと一緒にそっちに乗ってもらい、劉備ちゃん達のいる徐州へと出発した…。

第三十八話 徐州へ〜これも孔明の畏なのか?〜 (後書き)

コメントやアドバイス・誤字等があれば、よろしく願います。

第三十九話 劉備軍へ侵入してからお邪魔します

時間と距離は一気に進んで、現在は劉備ちゃん達がいる徐州の街に到着した。街の中を散策しながら奥へと進み、城の前に到着した。とりあえず、門番の人に話して取り次いでもらおう…。

「すみませ〜ん。こちらにいる諸葛亮さんに用があるので、取り次いでもらいたいですけど？」

「お前のような奴が諸葛亮様に用だと！？嘘を吐くんじゃない！！ほら、帰れ！！」

番兵が俺のことを思いつき突き飛ばし、その光景を見た恋ちゃんの不機嫌そうな顔をしていた。俺の後ろにいる人物が誰なのかに気付いた番兵は、顔を真っ青にしながら後ずさって行き……。

「り、りり、りよ、呂布だぁー！！！！」

脱兎の如く、城の中へと全速力で逃げて行った…。いくら何でも、ちよつと臆病過ぎやしないか？確かに得物を背負ってはいるけど、セキトを大事に抱えてるし、街中なんだから戦うわけないのに…。

「とりあえず、勝手に入っちゃおうか？」

「…邦祐。」

「…どうかした？」

「…皆、恋のこと見ると、逃げ出す。そんなに、怖い？」

恋ちゃんは、悲しそうな顔をしていた。そりゃそうか…。見ただけで、あんな風に逃げ出されるんだもんな…。

「全然怖くなんかないよ？現に俺は恋ちゃんと一緒にいるだろ？ああいっ奴は、ほっとけば良いんだ。俺の知ってる恋ちゃんは、とっても優しい女の子だよ？」

これ以上不安がらせない様に軽く抱きしめた後、頭を撫でてあげてそう呟いた。

「…うん。」

「さ、行こうか？」

逃げて行った兵の後を追ひ、城の中へと入って行った。もちろん、礼儀としてお邪魔しますくらいは言ったよ？侵入してる時点で、礼儀も何もあつたもんじゃないけど…。

軍議で今日やるべきことを話し合っていると、何だか急に部屋の外が騒がしくなってきた。何か起こったんだろうか？

「皆さん、実はお話しておかなくちゃいけないことがあるんです。」

「どついつた内容なんだ？」

「洛陽で復旧作業中に、同盟を結ばせて頂いたんですけど、その相手というのが「し、失礼します！！劉備様、りよ、りよ、呂布が！

！」「…あう。」

「一旦落ち着け!!」

朱里の話していた同盟相手が誰なのか気にはなつたが、私は先に慌てふためいている兵士を制して、落ち着かせることにした。

「それで、一体何があつた？」

「はっ!!何やら長身の男が諸葛亮様に用があるとのことだったのですが、嘘を吐いてるのだと思ひ追い返そうとしたところ、その男と共に呂布もおりまして…。」

「呂布だと!?!なぜこんな所に奴がいるんだ!!」

「分かりません。関羽様、どういたしましょう?」

「兵に戦闘の準備をするように伝えておけ!!行くぞ、鈴々、星!!」

「「おう(なのだ)!!」」

もし戦わなければならないのなら、今度こそ負けはしない…。

どうしよう…。長身の男性って、多分邦祐さんのことだ。まだ皆に同盟のこと話せてないのに…。

「はわわ!!雛里ちゃん、どうしよう。このまま戦ったら同盟が決裂しちゃうかもしれないよ!?!」

「…あわわ、早く皆に事情を説明しないと。行こう、朱里ちゃん。…桃香様も早く。」

私達も愛紗さん達の後が続いて、部屋から飛び出した。

私達が駆け付けると、邦祐さんと呂布さんが愛紗さん達と向かい合い、周りを兵士の人達が固めてました…。

「貴様ら、ここに何の用で来た!!」

「諸葛亮ちゃんと鳳統ちゃんに用があつて来たんだけど、それらしい話を聞いてないのか？」

「そんな話は聞いてない!!どんな理由で来たかは知らんが、ここに乗り込んできた以上は覚悟してもらうぞ!!やあぁっ!!」ヒュンッ!!

「うわ、危ねっ!!…ちっ、掠つてたか。」

どうしよう…。愛紗さんが偃月刀で、邦祐さんに攻撃しちゃったよ。邦祐さんは避けたけど、刃先が当たっていたみたいで、頬の少し上の部分に切り傷が出来ちゃったし…。

「…邦祐、セキト、頼んで良い？」

呂布さんが抱えていた犬を手渡し、武器に手を掛けてしまった。もう私じゃ、止められないよ…。

虎牢関の時とは、明らかに雰囲気が違う。どうやらこれが、呂布

の本気のようだ…。

「…お前、邦祐、傷付けた。ただじゃ、済まさない!!」

「っ!？」

いつの間にかすぐ近くまで接近され、そこからの攻撃は熾烈というか怒涛というか、とにかく味わったことのない激しさと重さの連続だった。

「…お前、絶対に、許さない。」

「くっ!!まずい、このままでは武器が…。」

私は防戦一方であるのに対し、呂布の攻撃はさらに早さと重みを増していった。そして…。

「はああ!!」「ブオンッ バキッ!!」

「なっ!？」

偃月刀の刀身が破壊され、ただの棒にされてしまった。それでも呂布はそんなことはお構い無しに攻撃してくる。そして、柄の部分も真っ二つにされてしまい、身を守る武器を完全に失った。

「駄目、愛紗ちゃん!!」

すいません桃香様、今度は無理みたいです…。

「死ね。」

無慈悲とも言つべき刃が、私に振り下ろされようとしていたが…。

「恋、やめろ！！」

沖原が呂布の方天戟を掴み、振り下ろすのを阻んでいた…。

「…邪魔しちゃ、駄目。」

「殺す必要までない！！！」

「…でもこいつ、邦祐、傷つけた。」

あの呂布が、目をほんの少し潤ませていた…。

「いや、俺達も勝手に入ったんだから、これぐらいは仕方ないさ。」

「…わかった。」

呂布から先程までの鬼気迫る感じが消えていく。私は二度も見逃されたのか。そう思った瞬間…。

「でもやっぱり、一発は殴っておいて？」

「…うん。」

呂布が方天戟を振り上げ、倒れてる私の鳩尾目がけて、

「…くらえ。」

「ま、待つてく「煩い。」ぐふっ……。」

思いつきり、得物の石突を突き立てた…。私はあまりの痛さに、一瞬で意識を失った…。

とりあえず関羽は恋ちゃんが黙らせたので、やっと諸葛亮ちゃん達と話が出る。

「さて、無断で入った俺達も悪いけど、將軍達に話が伝わってないのはどういふことなのかな？見た目幼女な女の子様ロリ軍師1号2号？」

「…何ですか？その1号2号って…。」

「何、気にすることはない。それで、何で話が伝わってないんだ？あんまり変な理由だったら、久々に『あれ』の犠牲者になってもらおうかな……。」

「まさかこんなに早く来てもらえるとは思わなかったんです。それで、今さっき同盟のことについて話そうとしたら、急に騒がしくなっ……。」

どンドン言葉が尻すぼみになっていき、言い終えたころには完全にしょんぼりしていた…。どんよりとした始めた空気の中、話を切り出したのは趙雲だった。

「まあまあ、軍師殿もそう落ち込まずとも良いではないか。それで、今日は何用でここに来たので？」

「俺達は雪蓮、孫策からの命令で、劉備ちゃん達の軍の手伝いに来た。」

「なぜ呉の人間である貴殿らが、我らの助太刀をするのか教えて頂けますかな？」

「諸葛亮ちゃん達が、雪蓮と同盟を結んだからだ。もちろん、俺もここに来る前までは知らされてなかった。」

「…軍師殿、我らはそのようなこと、一言も聞いてはおりませぬぞ？」

「…ごめんなさい。皆さんを驚かせようと思って…。」

話さなかった理由が理由だけに、ちょっと溜息を吐きそうになった。

「…驚かせようとしたことについては解せぬが、人中の呂布と、夏侯惇ですら敵わなかった武を持つ沖原殿の力を借りられるように尽力したのもまた事実。桃香殿、この件はいかがするおつもりで？」

「うーん、私としては不問で良いと思うよ？朱里ちゃんも雛里ちゃんも、同盟を結ぶの頑張ってくれたんだし…。でも、今度からはこういうことは無いようにしてね？」

「…はい…！」

何だか判断が甘いような気もする…。でもこういう優しさこそ、劉備ちゃんが多くの人を惹き付ける理由の一つなのかもしれない…。

「そういえば邦祐さん達は、どのくらいの間、私達のことを手伝っ

てくれるんですか？」

「とりあえず二ヶ月くらいは、恋ちゃん共々ここで世話になると思
う。」

「じゃあ、新しく部屋を二つ用意」…一つで良い。「えっ!？」

「…一つで良い。恋、邦祐と、寝る。」

「ちょ!?!恋ちゃん、何言っちゃってんの!?!」

とりあえずツツコんだけど、恋ちゃんは首をかしげるだけだった。
そして趙雲から、雪蓮や霞と同じような雰囲気を感じ取った…。

「おやおや、呂布殿は武もさることながら、そちらの方もなかなか
どうして大胆なのですなあ?これは私も、一度ご相伴に与りたいも
のだ。」

趙雲がにやついた顔で、俺の方を見て来る。あの顔は、からかつて
いる顔だ。そして趙雲の発言に釣られるかのように…。

「しゅ、朱里ちゃん!!この前読んだ本の中みたいなのが、起き
ようとしてるよ//////」

「う、うん。私達も後で、もう一度あの本を読もう!!色々勉強
し直さなきゃ//////」

頬を朱に染め上げながら、こそこそと喋っているロリ軍師達。てか、
2人はどんな本読んでんだよ…。あれか?昼ドラみたいなのドロドロ
なやつか…?」

「良いな。そういう人がいて、羨ましいよ。」

何だか知らんが、恋ちゃんを羨ましがる劉備ちゃん。ん、よく分からん…。

「ん？皆どうしたのだ？」

純粹なのか、まだそういうことを知らないだけなのか、周りと反応が違ったのは張飛ちゃんだだけか…。

「いや、どうもしないよ？とりあえず、少しの間だけどよろしく頼む。」

恋ちゃんの色事パニック？もあつたものの、その後劉備ちゃん達と交流を深め、真名を交換し合うことになった。…まあ、気絶させられたあげく放置プレーまでされた関羽がそれを知る筈もなく、翌日劉備ちゃんのことを真名で呼んだ際にまた襲い掛かって来て、再び恋ちゃんに沈められるという珍事が起きたことを、ここに記しておく…。

第三十九話 劉備軍へ侵入してからお邪魔します（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

第四十話 幽州へ潜入×救出×逃げるが勝ち

光陰矢のごとしとは、よく言ったものだと思う。桃香ちゃんのことに来てから、早くも二ヶ月が経った。いい加減、建業に帰りたくなって来たけど、ここのう時に限って…。

「邦祐さん、恋ちゃん、今すぐ軍議を開くので来てください!!」

「…了解。恋ちゃん、行くよ?」

「……………」

最近困ったことがある。『ちゃん』付けすると、いくら呼んでも反応しなくなったことだ。愛紗に攻撃しようとしたのを止めようとした時に、つい呼び捨てにしてしまったんだけど、何故かそれ以来『恋ちゃん』ではなく『恋』と呼ばないと返事しない…。理由を聞いてみたところ、呼び捨てにされる方が良いんだとか…。それが嘘か本当か、俺には分からない。

「…恋、早く行くぞ?」

「…わかった。」

部屋に着くと、既に全員が揃っていた。

「やっと来たか、遅いぞ2人共?」

「済まない。それで、今から軍議にかけるのはどういった内容なんだ?」

「それについては、私達の方から説明します。」

朱里ちゃんと雛里ちゃんの方に、全員が視線を向ける。

「袁紹さんが、約7万から8万もの兵を引き連れて白蓮さんの領地に攻め込んでいると、斥候から報告が入りました。」

周囲に緊張が走る…。あの無能な金髪縦ロールは、約束を破ったよ。うだ。顔良と文醜も、話を聞いていたはずなんだけど…。

「どうしよう、早く助けに行かないと白蓮ちゃんが!！」

「…朱里ちゃん、雛里ちゃん。」

「何でしょうか?」

「この先は、2人が考えた展望と同じことになると思う。だからさ、皆に説明して、徐州から出る準備を始めておいてくれ。公孫贄は、俺だけで助け出しに行く。その方が、被害が最小限で済むし…。」

「そんな…。無茶です!!いくらお強いからと言っても、それは危険すぎます!！」

「じゃあ、このまま公孫贄を死なせるつもりか!？」

「うう、それは…。」

語気を少し強め過ぎたか。後で謝っておかなくちゃ…。

「桃香ちゃん、決定権は君にある。…公孫贄を助けるか、それとも死なせるか、それは君の判断次第だ。」

桃香ちゃん次第とは言ったけど、答えなんて初めから分かっていた。

「正直に言っと、邦祐さんに全てを任せてしまうのは心苦しいです…。でも、白蓮ちゃんを助きたい気持ちも変わりません。…お願い、出来ますか？」

「了解。じゃあ早速、公孫贄を助けに行くとしますか。」

部屋を出た後ドライも呼び、幽州へと向かった…。

ミッション5・公孫贄を救出せよ

幽州にある、公孫贄の治める街の近くに到着した。公孫贄の軍は、圧倒的な数の相手を前にしているにも関わらず、何とかその猛攻を耐え凌いでいた。しかし、それも時間の問題だろう。早速行動しないとい…。

「最終確認するぞ。最初は公孫贄を迎えに行き、城から無事に連れ出す。次は兵士達を安全な位置まで誘導、公孫贄と合流させる。最後は、撤退用の道の確保だ。邪魔するやつは、誰であろうと片付けるぞ。」

「了解です、御主人。」

「じゃ、行動開始だ！！」

俺達は袁紹の兵達に気付かれない様に城の中へと侵入した…。

まさか、麗羽がここを攻めて来るだなんて思わなかった。私は大した力も無い、地方領主だったのに…。民の避難も済ませて、今は兵士達が何とか耐え凌いでくれてはいるが、こんなに圧倒的な人数差じゃすぐに私の下に敵が来て、殺されるのも時間の問題だろう。

「こんな時、敵だったとはいえ楊昂みたいな奴がいたらな…。」

どうせ来ないとは分かっているけど、あれだけの強さを持っている奴が仲間にくれたら、何とかなつたかもしれない…。

「落ち込んでいるな？そんな貴女に朗報だ。」

「誰だ!？」

「失礼するよ。」

気の抜けた声と共に、天井裏から楊昂と、真っ黒な外套を来た麗羽と同じ髪色をした女が現れた。

「あんた達、どうしてここに!？」

「桃香ちゃんに頼まれて、君を助け出しに来た。」

「ほ、本当か!？」

「ああ、本当だとも。早く逃げる準備をしろ。」

連合じゃ影が薄かったからどうなることかと思っただけど、とりあえず助かりそうだな…。

「あー！ちよつと待つてくれ。まだ領内に、出陣してない白馬隊の一部と私の馬がいるんだ。連れて来れないか？」

「ドライ、行つてくれるか？」

「愚問ですよ、御主人？」スツ！！

「っ！？」

ドライと呼ばれた女性は返事をした後、一瞬でどこかへと行つてしまった…。

「ほら、良い女が大口開けてポーっとしてるな。行くぞ？」

助けに来てくれた楊昂に続いて、私も天井裏から城外へと脱出した。何だか、泥棒にでもなった気分だね…。外に出ると、さつきいなくなつたばかりの彼女が残されていた白馬隊と私の馬を連れて、既に待機していた。

「彼女は…あんたの部下なのか？」

「ああ。俺が手塩をかけて育てた、5人の隠密の中の1人だ。今じや成長して、出来すぎた部下だけだな…。」

「いえ。御主人に比べたら、私達など大したことはありません。」

「…だつてさ？」

「言つたる？出来すぎた部下だつて。こいつら、全員揃つて謙遜しすぎなんだよ。…雑談はこれくらいにして、さっさと徐州に戻るぞ？」

楊昂という心強い武將と、共に逃げて来た白馬隊に守られながら、桃香達のいる徐州へと馬を走らせた…。

籠城していた兵達を倒し、ようやく城の中へと入ることが出来た。城の中が静かすぎるのが気になる。もしかしたら何か策を張り巡らせてるのかもしれないから、慎重に進まない…。

「文ちゃんは東側から探して。私は西側から探すから。」

「わかつたぜ斗詩。」

…その後、一日かけて城や街中を隅々まで探したが、策の一つどころか公孫贇さんすら見つけることが出来なかった…。

とりあえず現在は、城の外に建てた天幕で今後どうするか等を話している。

「それにしても、どこに行っちゃったんだろ？」

「本当だよな？」

「まったく…。たかが3万程度の相手に手こずっていたから、こんな面倒なことになるんですわ。」

麗羽様は、相変わらず無茶な注文が多いです。籠城戦は、そんな簡単に攻略出来るものじゃないのに…。？水関での出来事を、もう忘れてしまったんだろうか？口には出せないけど、そんなことを考えていた。すると、1人の兵が天幕の中に入って来た。

「失礼します！！公孫贄と思わしき一団の情報を入手いたしました！！！」

「それで、今はどこに！？」

「現在、数百騎の騎兵と共に徐州目前まで、進んでいるとのことです！！！」

「徐州というと、劉備さんの所だね？」

「良い機会です。このまま進軍して徐州も落としますわよ？そうすれば私の河北統一も、すぐそこですわ。斗詩さん、猪々子さん、徐州に進軍しますわよ！！！」

私達は、徐州に向けて進軍し始めた…。

何とか無事に徐州まで帰って来れた。今は、桃香ちゃん達がいる城に向かうところだ。

「いや、良かった。とりあえずここまでは順調だな…。」

「ここまではってことは、まだ何かあるっていつのか？」

「あの馬鹿のことだ。君が徐州に向かっているって知ったら、劉備ち

やんごと潰そうとしに来るだろう。だから皆と合流出来たら、すぐに徐州を発つ。」

「…それで、どこに行こうってんだ？」

「…曹操の領地を無理やりにも突破して、劉璋の治める益州に逃げ込む。」

徐州から幽州、戻って来てから次は益州へ…。ちよつとした旅行だよな、これ…。

「曹操の領地だって！？無事に通してもらえなくても思ってるのか？」

「ん〜。曹操の所の武将は全員負かしてるし、俺には勝てないと思わせることは出来るはずだ。まあ、とりあえず潰されたくなきや通行を許可しろって脅せば、何だかんだで通してくれんだろ？」

かなり楽観的だけど、恋もいるから出来そうな気がする。

「…たく。あんたみたいのがそんな楽観的で「白蓮ちゃん!!」」

…桃香。」

「良かった〜、無事だったんだね!!」

無事に親友と再会できた喜びからか、桃香ちゃんは公孫贇を抱き締めた。それを少し離れた所から見守る他の将達。

「桃香達のおかげで助かったよ。」

「うっん、私達は何もしてないよ。白蓮ちゃんを助けたのは邦祐さんだもん。」

抱き締めていた手を緩め、俺の方を向いた。

「…あんだ、彼女を会わせてないのかい？」

「ふえ！？まだ誰かいたの!？」

そんなことは聞いていないと、皆が視線で訴えかけて来る。これはもう、隠しようがなさそうだ…。

「…ドライ、出て来い。」

「…はっ。」

どこからともなく俺の横に現れたドライを見て、皆は警戒し始めていた。

「そう警戒しないでくれ。彼女は俺の部下の隠密だ。」

「はじめまして、ドライと申します。以前？水関で、皆様の兵糧を焼き払った者でございます。」

外套の裾を少し摘まんて持ち上げ、片足をもう片方の後ろで交差した状態で挨拶をする。…俺、こんな挨拶の仕方教えたって？

「あれは、貴殿の仕業だったのか!？」

「ええ。正確にはもう一人隠密がいましたが…。御主人、挨拶はと

りあえずこんなものでよろしいですか？」

「ああ、わざわざ済まないな。下がっていいぞ。」

「御意。」スツ……

返事と共に、また姿を消した。それを見た桃香ちゃんと鈴々ちゃんは、戦隊物でも見てる子供のように瞳を輝かせていた。

「部下の紹介はこれくらいにして…。朱里ちゃん、雛里ちゃん、準備は済んでるか？」

「は、はい。もう完了してましゅー!!」

「じゃあ、袁紹が来る前にさっさと出発しよう。何時ここに来たっておかしくない。」

合流した俺達は、一路益州へと軍を進め出したのだった…。

第四十話 幽州へ潜入×救出×逃げるが勝ち（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

第四十一話 いざ益州へその前に、通行許可を貰わなきゃ

徐州の街を発った私達は、あと数時間で曹操さんの領地に入れる所まで進んだ。その分、兵の疲労も酷く今日はもう日も落ちたため、これ以上進むのは止めて野営することになった。邦祐さんが、てんとだっけ？とりあえず、天の世界で使われる簡易式の天幕を出してくれたので、各自でそれを建て、今は雛里ちゃんと一緒の天幕で横になりながら、今不安に感じていることを話している所だった…。

「ねえ雛里ちゃん、曹操さんが何も対価を要求せずに、領地を通してくれると思う？」

「…それはないと思う。曹操さんは愛紗さんのことが気に入ってたみたいだから、きっとそれを交換条件で出して来ると思うの。」

？水関での戦いの際、私達の天幕に曹操さんが直々に来て、愛紗さんをよこせと言って来た。桃香様も愛紗さんもそれを拒否したけど、曹操さんは諦めていないと思う。

「こつという時は、邦祐さんにも相談しに行こう？」

「…うん。もしかしたら、私達じゃ考え付かないことを言ってくれるかもしれないし。」

邦祐さんと恋ちゃんの天幕に行くと、中に2人はいなかった。

「…いないね。」

「うん。どこに行っちゃったんだろう？…ねえ雛里ちゃん、もしか

してあの焚火の所にいるんじゃないかな？ちよつと行ってみよう？」

焚火に近付くと邦祐さんの姿が確認出来たから声を掛けようとしたら、そこには私達にとつて衝撃的な光景が繰り広げられようとしていた。邦祐さんは手を後ろに付き、足を伸ばした状態で座っていて、その膝の上に恋ちゃんが跨り向き合った格好で座って何かを話していた…。

「は、はわわ、どうしよう雛里ちゃん。何だか出づらいよ？／／／／／／」

「…あわわ、と、とりあえず一旦深呼吸して落ち着こう／／／／／／／／朱里ちゃん、鼻血出てるよ？はあ、はあ、はあ、はあ…。」

「そういう雛里ちゃんこそ、凄く息が荒いよ…？」

それから私達は、とてもじゃないけど深呼吸とは言えない速さで呼吸を整えて、再度二人の様子を見（観察し）始めた…。

誰かに見られている気がする。それに一体、この状況は何なんだ…？

「あの、恋？何で俺の膝の上に座ってるの？」

「…気にしちや駄目。」

気にしちや駄目と言われても、恋の頬が少し紅潮してるし、やっぱり理由が気になる。

「いや、気にしちゃ駄目って言われて…んうっ！？／／／／／」
喋ろつとしたら恋に頭を両手で掴まれて、唇を塞がれた…。

「んっ、ふあっ、あふっ、んあ、んん…／／／／／」

恋が懸命に、舌を絡ませて来る。一体、こんなどこで覚えたんだか。…って、そんなこと考えてる余裕が…だんだん無くなって来た…。

「んん…ん…ふはっ、はあ／／／／／」

恋が唇をゆっくりと離すと…。唾液が光る糸となって、2人の間に銀色の橋を紡ぎ出していた…。

パキッ

「誰だ！？」

殺気を込めて、音がした方をじっと見つめる。すると出て来たのは…野生のリスだった。

「なんだ、リスか…。」

音の正体はリスだったけど、まだ見られている気が…いや、確実に見られてる。

「まだ誰かいるのか？いるなら出て来い。出て来ないなら…。」

ホルスターから銃を取りだし、気配の感じられる方へと向けた。

「ま、ま、待つてくだしやい！！私達でしゅ！！／／／／／」

草陰の中から出て来たのは、鼻血をドボドボ出してる朱里ちゃんと息の荒い雛里ちゃんだった…。

摩訶不思議な状況だけど、とりあえず質問してみよう…。

「…何やってんだ、2人共？」

「…え、いや、その、あの…！！」

「この、その、あの、どの…！！」

しかし見事にテンパっている。朱里ちゃんに関しては、こそあど言葉だし…。

「はいはい、一旦落ち着いて深呼吸して。」

2人に深呼吸をさせて、落ち着かせる。ついでに朱里の止血も済ませた。

「落ち着いた？」

「…はい。」

「なら、どうして隠れてのか教えてもらえるか？」

「ちょっとお聞きしてみたいことがあります、邦祐さんの天幕に

行ったんです。でも

中にいなくて、探していたらこの焚火の明かりが見えたから見に来たら…その…／／／／／

「俺と恋が、口づけをしていたと…。」

顔を真っ赤にして、朱里ちゃん達が俯く。どうやら、これが返事のようなのだ。

「それは悪かったな。それで、何を聞きたかったんだ？」

膝の上に恋を乗せたまま質問をすると、曹操の領地を通る際の通行料についてのことだった。あの女大好き我が儘娘は、愛紗のことを甚く気に入ったらしく、以前自分の物になれと言って来たらしい。そういえば、あいつは霞も手に入れようとしてたからな…。今はその話は置いて…桃香ちゃんが愛紗を手放すはずが無いから、最悪戦闘に発展するかもしれないとのことだ。

「邦祐さんなら、どうしますか？」

「俺なら、迷わず愛紗を差し出す。…戦で高い功績を挙げたら返してもらってという条件を付けるけどな。」

「それに関しては、私達も考えました。桃香様が許さないと思えますけど…。」

さすがは軍師。九を生かすために、一を切ることを理解してる。でも主がそうさせないとなると、考える方も大変だろうな…。

「じゃあ、もし俺達が曹操だとしたら、どんな手段を取るかな？」

「私達が曹操さんだったらすか!？」

「そうだ。もし曹操だったら、そんな条件を出されたらどうする？」

普段とはまた違った視点だからか、真剣に考え出すロリ軍師達…。

ここは先に、自分の意見を出しておこう。

「もし仮に俺が曹操で、恋が愛紗だとしたら…」

2人が食い付いて来た。

「身の回りの世話をさせて戦闘に参加させないか、賊の討伐しかさせないな。ずっと手に入れたかった武将が、せつかく手に入ったんだ。下手に戦場に出して、誰よりも高い功績を挙げられたら堪ったもんじゃない。最低限の仕事として賊の討伐はしてもらうが、敵軍の総大将の首を取るのに比べれば、功績なんて明らかに低い。これなら高い功績も挙げさせず、武人の矜持にも一応は反しないはずだから、愛紗を手放さずに済むはずだ。」

「なるほど。」

「まあ、これはあくまで俺の考えだけだな。本物の曹操だったら、こんな回りくどい方法は取らないだろう。」

「でも、色々な局面を想定しておけば、それだけ多くの対処法が考えられます。ありがとうございました!…行こう雛里ちゃん、これ以上邪魔しちゃいけないよ?」

2人は礼をして足早に去って行った…。帰り際の「頑張って下さ

野営した場所から出発した私達は今、曹操さんの領地に入るか入らないかの瀬戸際の所で軍を止め、曹操さんのいる陳留へと早馬を送るのに、誰が使者になるのかを話し合っていた。

「ねえ、曹操さんの所に行く使者って、誰が良いのかな？」

「行くなら愛紗さんでしょう。その方が、曹操さんへの説得力が増すと思います。」

「そうか…。なら桃香様、私が先方へ赴き、通行の許可を貰って参ります。」

「愛紗ちゃん、気を付けてね？」

「はい。…では、行って参ります。」

愛紗さんは単騎、陳留へと馬を走らせた…。

「…朱里ちゃん。愛紗さん、上手くいくかな？」

「多分、無理だと思う。」

「軍師殿、その根拠をお聞かせ願いたいのだが？」

「曹操さんはきつと、軍を引き連れて自ら桃香様自身を見定めに来る気がするんです。そこできつと、何かしらの対価を要求して来るのではないかと…。」

「して、その要求というのは…やはり愛紗か？」

星さんの発言に人一倍反応したのは、やっぱり桃香様だった。

「え！？どうして愛紗ちゃんが対価にならなくちゃいけないの!？」

「…曹操さんは可愛い女性に目が無いという話をよく聞きますし、現に愛紗さんは気に入られてしまっています。曹操さんは、愛紗さん一人で私達全員が助かるのだから、十分安い通行料だと考えられますし、軍師としても、非常に安い通行料だと思います…。」

「そんな…。そんなの駄目だよ!!愛紗ちゃんが、私達の前からいなくなるなんて!!何か良い方法は無いの?」

私達は目を伏せるしかなかった。曹操さんもただで通してくれて、袁紹さんの追撃も振り切れるような、都合良い道なんて存在しない。なぜなら、そんな道が存在してるのなら今頃そこに向かっているから。何かしらの通行料を払って、曹操さんの領地を抜ける。これが最も安全で、私達が生き残る最善の方法だったのだ…。

「…そんなあ……。」

桃香様が座り込んでしまった。そんな桃香様を見かねてか、恋ちゃんとの事の成り行きを見ていた邦祐さんが、私と雛里ちゃんを呼び出した。

「…何でしょうか?」

「益州に入れば、とりあえず安全は保障される。これに間違いはないね?」

益州に入れば一先ずは安全だろうと思ひ、私達は頷いた。

「…俺と恋は、もともとこの軍の人間じゃない。だけど、今はこの軍に所属している武將で、君達はこの軍師だ。自軍にあるもので使えるものは全て使え。俺達を、通行料として切り捨てることも躊躇うな。それがたとえ周りに非道な行いだと言われようと、軍師なら最善を尽くせ。そして、甘いけど心の優しい主の願いを叶えてあげるんだ。」

「でもそれじゃ、お二人が!!」

愛紗さんの代わりに、お二人を切り捨てると言うんですか!?

「心配しなくていい。最低でも二ヶ月は、建業に帰れないことぐらい覚悟してたんだ。今さらその期間が延びたところで、どうってことないよ。雪蓮達には、手紙を送っとけば大丈夫だから、ね?」

邦祐さんはそれだけ伝えて、恋ちゃんの下へ戻って行った。私達は何も言えず、ただその場で立ち尽くしていた…。

第四十一話 いざ益州へその前に、通行許可を貰わなきゃ（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

第四十二話 交渉、通行料は如何に

俺達は、今後どうするべきかを決めるための軍議を開いている。なんでも、斥候からの

報告によると袁紹が徐州へと攻め込んでいるとの事だからだ。

「それで桂花、貴女はどう考えるのかしら？」

「はい。袁紹は大軍ではありますが、所詮は小物。放置しておいても、特に問題は無いと思われます。しかし劉備は別。今は弱小でも、いずれ華琳様の前に立ち塞がるであろう可能性があります。危険の芽を摘むという意味でも、我らも徐州に攻め入り、劉備を討つべきではないかと存じます…。」

「稟、貴女はどう？」

「…袁紹軍の主力である顔良と文醜が徐州に攻め入っている今、私達は南皮へと進軍し、袁紹を叩いておくべきかと。」

また綺麗に意見が割れたな…。

「風はどうかしら？」

「…ぐう〜zzz」

「」「寝るな！」「」

「…おおっ！！」

何でこの雰囲気です眠り出来んだろうな？風はすごいけど、やっぱり不思議な子だ…。

「改めて聞くけど、風はどう思うかしら？」

「そうですね。ここは静観しておくべきかと思います。南皮に攻め入ろうとも、徐州に攻め入ろうとも、そこには正当性が存在しませんし…。それでは、民の反感を買ってしまう可能性があるでしょう。」

「そう…。ならこの件は静観するとして、今は国力を付けるとしましょう。でも、各自準備は怠らない様に。以上！！」

軍議が終わり、俺達は解散した。そしてその晩、事態は変化していく…。

「北郷、起きろ。」

「…んん。秋蘭、どうしたんだ？」

「今すぐ軍議を開く。身支度をして、早くお前も来い。」

「ふあ、わかった。」

秋蘭が俺の部屋から出て行く。それにしても、こんな真夜中に軍議を開くなんて…。何かあったんだろうか？俺は服を着替えて顔を洗い、軍議の間へと急いだ…。

部屋に着くと、既に皆が席に着いていた。

「全員揃ったようね。一刀も早く座りなさい？折角こんな夜更けに、珍しい客人が来たのだから。」

「客人つて、一体誰なんだ？」

「今し方、徐州から我が軍の国境を越えたいということで使者が送られて来た。」

秋蘭が言つてた、使者つて一体…？

「とりあえずは、見てからの楽しみよ。…入りなさい。」

「…はつ。」

部屋の中に入って来たのは、関羽だった…。

本当、こんな時間に珍しい客人が来たものね…。

「知っている人も多いと思うけど、一応は名乗って貰えるかしら？」

「我が名は関雲長、劉玄德が一の家臣。」

「それで、貴女が直々にここへ来た理由を教えて貰えるかしら？」

「…今日私がここに来たのは、曹操殿の領地を通行する許可を求めするために参りました。」

私の領地を通りたいということは…。

「劉備は逃げるつもりなのだな？」

秋蘭の一言に、関羽は凶星を突かれたような表情になった。

「ちよ、ちよっと良いか？」

「どうしたの、一刀？」

「劉備達は華琳の領地を抜けて、どこに逃げようって言うんだ？」

「…益州です。」

たしかに、私の領内を抜ければ一番安全に益州まで抜けられはする。でもそれは、同時に無謀とも言えること。まあ『皆仲良く』を地で行く劉備は、無謀だなんて思うはずが無いのでしょうけどね…。

「たしかに、兵数の少ない劉備さんが袁紹さんと一戦交えるよりは、はるかにマシだとは思いますが…。」

「だがな流琉、我らとて劉備と同盟を結んだわけではない。通したところで、何の得がある？」

「春蘭様…。そうですね、うん。」

その後も話し合っても、部下の口から出るのは無謀という言葉のみ。ここは少し質問を変えて、関羽に直接聞いてみようかしら。

「時に関羽、貴女もこの案には納得していないように見て取れるけど、なぜ貴女がこんな危険を冒してまで使者を買って出たのか、聞かせて貰える？」

「…私が使者として赴いた方が、曹操殿への信憑性が高くなると我が軍の軍師も言っておりましたし、私もそう思いましたので。そして何より、我が主の願いを叶えるためです。これが私達にとって、最善の方法でした…。」

「そう…。なら今から、劉備にこの件の返答をしに行きたいのだけれど…。」

「華琳様、我らもお供いたします。」

全員が付いて来る意思を見せてくれた。ふふつ、流石は私の信頼出来る家臣と言ったところかしら。

「そう、ありがとう。なら、今すぐ出発するわ。」

念のため護衛として、春蘭・季衣・風、それと一応一刀も連れて行くことにした。それから一刻後、私達は少数ではあったものの、劉備の元へと夜通しの行軍をした…。

朝早くに、曹操から使いが来た。内容は…通行の許可の返答をしに、もう直ぐこちらに着くというものだった。にも関わらず、俺は天幕の中で恋とのんびりお茶を飲んでいた。

「それにしても、まさか曹操自ら来るとはな…。肝が据わってると言えば良いのか、それが霸王たる故の行動だと言えば良いのか…。」

まあ、どちらにしても流石と言っべきか…。」

まあ、そんなことを気にしてもしようがないか…。

「桃香様！！ただいま戻りました。」

「あつ、愛紗ちゃん！！おかえり〜！！」

「久しいわね。連合以来かしら、劉備。」

「曹操さん！！あの時はどうもお世話になりました。」

桃香ちゃんは、いつもと変わらぬ笑みで、愛紗と曹操達一団を迎え入れた。さて、曹操はどう出る事やら…。とりあえず、出て行くのはもう少ししてからにしよう…。

「さて、早速本題に入らせて貰うけど…。私の領内を抜きたいだなんて、随分と無茶なことを言ってくれたものね。」

「す、すいません。でも、誰も欠けずにいるためには曹操さんの領内を通るしか方法が無くて…。お願いします、私達に通行の許可を下さい！！」

桃香ちゃんが頭を下げた後、曹操の目をじっと見る。曹操は、桃香ちゃんの意味を見定めるかのように、見つめ返す。そして……。

「…いいわ。私の領内の通行を許可してあげる。ただし、街道や経路はこちらの指定に従って貰うわ。それともし、私の領内にいる民から米の一粒でも盗んでごらんなさい？その時は、貴女の軍を捻り潰してあげるから。」

「ありがとうございます！！」

とりあえず、許可は貰えた。…問題はここからだ。十中八九、曹操は愛紗を通行料として指名するはずだ。

「それとそうね……。通行料は、関羽で良いわ。」

「っ！？どうして、愛紗ちゃんなんですか…？」

「別に私が通行料として、何を指定しても関係ないでしょう？私は許可を与える側、貴女は許可を貰う側。許可を貰っておいて、通行料を払わないなんて、行商人でもやらないわ。でも、あえて理由を言うなら…私が欲しいからよ。それに、貴女を追って来る麗羽達の対処も受け持つてあげるのだから、かなりの破格じゃないかしら？」

王たる者なら受け入れるべき提案だけど、桃香ちゃんは…。

「……ごめんなさい曹操さん、折角ここまで来ていただいたのに…でも、愛紗ちゃんがいなくなったら意味が無いんです。私達は誰一人として欠けたら、この策の意味が無いんです。だから、ごめんなさい…。」

桃香ちゃんの謝罪に、曹操は肩を震わせた。この甘さが曹操には理解できず、同じ王としてこの判断は許せないんだろう

「劉備。…甘つたれるのも大概になさい！！」

急に上げられた曹操の怒鳴り声に、桃香ちゃんは身を竦ませた。

「貴女は、関羽一人のために張飛や諸葛亮、それに信じて着いて来てくれた兵達が皆死んでも良いと言っの！？」

「で、でも、愛紗ちゃんは私の妹でとっても大切な人だし…。」

「なら、逆だつて良いのよ？貴女の中では、関羽一人と他全員を天秤に掛けたら関羽の方が重いのでしょ？なら貴女と関羽を通す代わりに、他の全員を私にくれたって私は一向に構わないわ。」

「それも駄目です…！」

まるで駄々をこねる子供の様な桃香ちゃんのことを、曹操は呆れた様子で見つめる。流石にこの展開になれば、同盟を組んだとはいえ呉の皆も呆れるだろう…。俺も呆れ果てているし。

「あれも駄目。これも駄目。なら、何なら良いって言うのかしら？…まさか、ただで通せなんて言い出さないわよね？」

曹操の追撃に、桃香ちゃんは言葉を無くす。事情を話せば、ただで通してくれるとでも思っていたのだろうか？

「そ、それなら、朱里ちゃんと雛里ちゃんに、どうにかなりそうな経路を探れば…！…！」

「言っておくけど、我が軍は領内にある街道に関しては全て把握しているつもりよ？通行料も払わず、麗羽の追撃からも逃れられる、そんな都合良い経路が見つけれられるのなら、逆に教えて貰いたいくらいよ？」

もう駄目だ、これ以上は埒が明かない。俺は、恋を連れて天幕から出ることにした…。

いい加減、劉備との会話も終わらせたい。この子の現実を見ない
甘い考えには、辟易させられる。誰か、この子を黙らせてくれない
かしら？

「桃香ちゃん、その辺で終わりにしておけ。」

天幕から出て来たのは、ここにいるはずのない沖原と呂布だった…。

「…どうして、劉備の下にいるのかしら？貴方達は呉の人間のはず
でしょ？」

「いや、色々と訳有りだね。まあ雑談はその辺にしておいて…話は
天幕の中から聞かせて貰った。この件に関しては、曹操の方が明ら
かに正論を述べてるよ、桃香ちゃん？通行料を払わずに通して貰お
うだなんて、それはあまりにも自分勝手が過ぎるな。もし俺が君だ
つたら、間違いなく愛紗を引き渡して、ここを通して貰うのを選ぶ
ね。君は王として、もう少し現実をきちんと受け止めるべきだ…。
二度と会えないわけじゃ無いんだから。」

劉備の真名を呼ぶものだから、向こうの肩を持つかと思えば…。ま
さか、こちらの肩を持つとは思わなかった。

彼が一度、諸葛亮達の方を見やる。彼と呂布を見る諸葛亮達の目は、
申し訳無さで一杯だったように見えた。

「曹操…。提案があるんだが、構わないか？」

「良いわ。言ってみなさい？」

さあ、この男はどんな提案をして来るのかしら？

「条件付きでも良ければ、愛紗じゃなく俺と恋、呂布が通行料代わりになる。…どうだ、悪い話じゃないだろ？」

「へえ…。私達と敵対する貴方が、どういう風の吹きまわしかしら？」

「これ以上話していても、お互い時間の無駄だろ？愛紗が欲しいなら、もつと桃香ちゃん達が力を付けてから、霸王らしく堂々と打ち負かして奪えばいい。違うか？」

この男、わざと挑発的な態度で話を振るだなんて…。

「良いわ。貴方の提案に、乗ってあげようじゃない。劉備、とりあえず関羽は貴女に預けておいてあげる。でもいずれその時が来たら、貴女ごと関羽を奪ってあげるから。2人共可愛らしいし、閨でまとめて可愛がったらさぞ楽しいでしょうね。」

「そんなことはさせません!!」

「口でなら何とでも言えるわ。そうならない様、この機会にせいぜい力を付けておくのね。…皆、帰るわよ。」

沖原と呂布、どんな条件が出されるか分からないけど、なかなか面白い拾い物だったわ…。城に残っている部下達が見たら、驚くでしょうね…。

劉備に通行の許可を与え、私達は陳留へと引き上げることにした…。

第四十二話 交渉、通行料は如何に（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等があれば、よろしくお願いします。

第四十三話 成り行きでの士官／＼サラリーマンの後ろ姿と食べ物の恨み／＼

太陽が真上に登る頃、私達は陳留に着き、早速軍議を開くことにした。

「昨日に引き続きまた珍しい客が来たから、皆にも顔見せしておくわね。さあ、入ってらっしゃい。」

「…失礼する。やあ、どうも。」

「っ!?!」

部屋へと入って来た人物に、言葉にはしなかったものの、秋蘭達は明らかに混乱していた。

「とりあえず、名乗るだけ名乗って頂戴。」

「全員顔見知りだと思っけど、俺は沖原邦祐。そこにいる一刀と同じ世界の間人だ。真名は無いから、沖原でも邦祐でも、好きなように呼んでくれ。」

「…呂布。字は奉先。」

「か、華琳様、何故この者達がここへ!?!」

「落ち着きなさい桂花。…彼らは自ら劉備達の国境越えの通行料として、私の下に来たのよ。…条件付きだけどね。さてと、貴方の言ってた条件とやらを聞かせて貰おうかしら?」

どんな条件を提示して来るのだろうか？

「…まず一つ、ここに仕えるのは長くても四ヶ月にしてもらいたい。二つ、俺達が仕える間は桃香ちゃんの軍と呉には攻め入らない事。もし攻めた時は、悪いが遠慮なく攻撃させて貰う。この二つだけ守って貰えるのなら、兵の鍛錬でも賊の討伐でも街の警邏でも曹操の執事でも、何でもこなそう。」

「へえ、何でも？」

「あゝ、やっぱり出来る範囲でならって追加しても良いか？」

「却下よ。貴方が何でもって言い出したのだから、約束は守りなさい？その代わり、こちらもその条件を飲んであげるわ。」

さて、この2人には何をして貰おうかしら？いつそのこと、やらせてみたいことを全てやって貰うのも面白そうね。

「…そうね。じゃあ来たばかりだし、まずは警邏をしてもらいながら街を見て貰おうかしら。あと桂花、侍女達に新しく部屋を二つ…一つで良い。」…だそうよ？とにかく、用意するように伝えておいて。」

「了解しました、華琳様。」

「華琳様、今日は我らが警邏の当番ですので、彼らは我らが案内いたします。」

「そう。じゃあ凧、真桜、沙和、頼むわね？」

「了解です(や・なの)。「」

こうして、街へと繰り出すことになった…。

街に出たは良いが、3人のうち2人は早速いなくなった。

「…3人別々で見回りしてるのか。効率良さそうだ。」

ここに来たばかりの俺が真面目に感心していると…

「あの、感心して頂いてるところ恐縮なのですが…私達は、別々で警邏を行っているわけでは無いのです。」

「なら何で、あの2人はいなくなったんだ？」

「歩いていけば分かります。…はあ〜。」

こんなのはいつも通りだと言わんばかりだと、俺達を先導する楽進の背中が語っていた。

「…苦労してるんだな。」

疲れたサラリーマンの様な楽進の後ろ姿に追いつき、とりあえずいなくなった李典と于禁を探すことにした。

まず先に見つけられたのは、李典だった。楽進の後について行くと、何やら絡操が多々置いてある店の前で、あっちこっちと忙しく動き回っていた。

「こら真桜！！警邏に戻らないと、隊長に言い付けるぞ？」

「…別に、今日はええやんかー。今のうちの仕事は、警邏をしつつ兄さんに街を案内することなんやから。凧がいれば事足りるやろ？」

「馬鹿言つな。私だけでこの街全部回れるわけ無いだろ。ほら、早く行くぞ。」

李典の耳を引つ張り、店の前から無理やり引き剥がす。うん、あれは痛そうだ。事実…

「痛い痛い！！あかん凧、耳、耳が千切れてまう！！」

「大丈夫だ。これ位で千切れる真桜の耳じゃないだろう？…すいません、このような恥ずかしいところをお見せしてしまって。」

「いや、これくらいなら呉じゃ日常茶飯事だから慣れてるよ。それじゃ、于禁も探しに行くでしょう。」

今度は于禁を探しに、また街中を歩きだした。数分ほど歩いていると、楽進がどうやら于禁を見つけたらしい。怒りを隠さず、どんどん近付いて行く。

「阿蘇阿蘇の最後の一冊、残ってて良かったの。」

「ほう、それは良かったな、沙和？」

「うん、良かったの…って凧ちゃん！？いや、あの、これはね…。」

「まったく…。警邏もやらずに雑誌を買いに来るなんて。何かいざこざが起きたらどうするつもりだ？ほら、行くぞ。」

李典の時同様、耳を引っ張りその場から無理やり連れ出していく。その時に、さつきまで于禁が見ていた雑誌を、若い女性が購入して行った…。その様子を見た于禁は

「あー、最後の阿蘇阿蘇が！もう凧ちゃん、何で邪魔したの！？」

「邪魔も何も、今は警邏の最中だろう！買うのは警邏を終えてからにしろと、何度も言っているじゃないか。早く仕事に戻るぞ？」

ようやく全員揃い、改めて警邏兼街の案内が始まった。けどその後は、人気の屋台やお菓子屋など、警邏とはあまり関係ないところへ引っ張り回されただけだった…。

城に戻って来た時には既に黄昏時になっていて、楽進達は一刀に警邏の報告をしに行った。恋と2人、その場に残されていると…。

「華琳様の治める街はどうだった？」

夏侯淵が話しかけて来た。

「街も民も活気が満ち溢れてて、良い街だと思う。建業とは、また違った良さがあるかな。」

「そうか…。まあ、これから短い間だがよろしく頼むぞ。」

「こちらこそ、よろしく頼む。手を借りたい時は、気軽に呼んでく

れ。」

軽い挨拶を交わし、割り当てられた部屋で休むことにした…。

次の日から俺と恋だけで警邏に出ることになり、数日もすれば恋共々顔を覚えられていた。街の中には様々な飲食店や屋台があり、今では毎回決まって警邏というよりも屋台巡りにすり替わっている状態だ。そして今日も、最後の難所が待っている…。

「よお嬢ちゃん、今日は寄ってかないのかい？」

恋に、食べ物誘惑が襲い掛かる…。

「…今は、お仕事中。」

「そりゃ残念だ。せつかく、シウマイが蒸しあがったところだつてのよ…。」

「…シウマイなら、話は別。適当に、お願い。」

恋は適当というが、その適当が半端じゃない。

「40個くらいで良いかい？」

「…うん。小腹を満たすなら、そのくらいが調度良い。」

「あいよ。…しかし、兄ちゃんも毎回大変だな〜。」

「大変だと思うなら、5個くらいおまけしてくれないか？」

「そいつぁ出来ねえ相談だ。はいよ、嬢ちゃん。」

出来たてのシユウマイを恋に手渡し、俺がそのお代を払う。何だろ
う、最近財布の風通しが良くなつて来たな…。

歩きながらシユウマイを頬張り始めた恋に、次の誘惑が襲い掛か
つた。

「あ、お姉ちゃん！！今日はうちの店に寄ってつてくれないの？」

「…今は、お仕事中。」

「そつかく、残念。今肉まんが出来たばかりなのに…。」

「…邦祐。」

恋が視線で訴えてくる。肉まんも食べたいのだと…。

「…済まない、これでいつも通り頼む。」

「はい、毎度あり〜」

店の看板娘にお代を渡し、10個の肉まんを渡された。今さらだけ
ど、恋カモとか認識されてないよね？何か食べてる時の恋に癒さ
れるからこそ、こんなにも色々と売って来るんだよね？そうだ、そ
うに違いない…。

両手に大量のシユウマイと肉まんを抱え、街中を歩いて行く俺と恋。
すると突然後ろの方から…。

「泥棒だー！ー！誰か捕まえてくれ！！」

振り向くと、盗んだと思われる袋を持った男が、すぐそこまで接近して来ていた。

「邪魔だ、そこを退きやがれえ！！」

叫び声を上げ、恋を強引に押し退けた……。

「…あ。」

食べ物に集中していた恋のことは、倒れる前に抱き止めることが出来た。だが、恋の持っていた大量のシユウマイや肉まんは、全部地面にぶちまけられた……。これは、非常にまずい。主に泥棒の身の安全が……。

「…あいつ、恋の敵。捕まえて、絶対にフルボッコにする。」

食べ物を台無しにされた恋は明らかに殺気立ち始め、泥棒を全速力で追いかけ始めた。

「いや、食べ物への恨みとは、げに恐ろしきかな…って、そんなこと言ってる場合じゃない！！」

それに今、恋の口から聞こえちゃいけない言葉が出た気がする。その前にフルボッコって、この時代の人知らないよね！？

閑話休題。恋の後を必死で追うと、街から出るか出ないかの所で恋を見つけた。その手には、何かを引き摺っているのが見える。

「…恋、それは？」

「…恋の敵。さっきそこで、叩きのめした。」

放りなげられたそれは…白目をむいたまま手足を痙攣させ、顔を腫れあがらせた泥棒の末路だった…。

「恋、いくらなんでもこれはやりすぎだぞ？」

「…でもこいつ、食べ物、駄目にした。まだ、お仕置きしたりない。」

あれだけフルボッコにしておきながら、未だに怒りが治まらないらしい。これ以上やったら、流石に危険だ。

「もう一回買い直してあげるから、それで機嫌を直してくれ。な？」

「…わかった。」

泥棒を詰所に引き渡し、再び飯店で買い直した。その結果、大好物を前に上機嫌の恋と、財布が空になり項垂れている俺という光景が、街の人々に目撃されていた…。

第四十三話 成り行きでの士官／サラリーマンの後ろ姿と食べ物の恨み／

(後

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

第四十四話 官渡の戦いゝ学ぶことを忘れた本物の馬鹿ゝ

日々は淡々と流れ、ここに仕官してから二ヶ月が経った。そんなある日…。

「あ、いたいた。ちょっとあんた!!」

「…どうした荀?、何か用か?」

「華琳様の命令で、あんた達を軍議に参加させるために呼びに来たのよ。」

「俺達が軍議に?何か問題でもあったのか?」

「それは着いたら、説明してあげるわ。早く行くわよ!!」

荀?の後に続き部屋に到着した。

「これで全員ね?それじゃ、軍議を始めるわ。」

「何があつたんだ?」

「麗羽達が、官渡に兵を集結させつつあるという報告が入って来たの。その数は、実に数十万。これに対し、我が軍はどう事に当たるべきかを今から話し合うのよ。もちろん、呼んだからには貴方達にも戦に参加してもらおうわ。」

「構わないよ。」

そういう条件でここにいるんだから、それくらいはお安い御用だ。それに、約束を破ったことについての制裁が必要だったしな…。

「それで桂花、他に情報は？」

「今の所報告が上がってるのは、袁紹軍は城壁の周りに大量の高楼を建て、周囲に土塁を築いているとのです。」

荀？の話の中に、いまいちピンと来ない言葉があったのか、一刀が俺に質問して来た。

「なあ、邦祐。土塁だの高楼だのって、一体何なんだ？それに、作って何か意味があるのか？」

「そうだなあ。土塁ってのは、平たく言えば土手みたいなもんだ。一刀、土手の上にいる人と下にいる人でぶつかりあったら、基本的にどっちが勝つと思う？」

「下の人は登らなきゃいけないわけだから、普通に考えて上だよな。で、それがどうしたんだ？」

「つまりだ、相手より高所を確保することが出来るってわけだ。敵は攻めやすく逆に味方は攻めづらい状況を、あの馬鹿に作り出されたってことだ。」

袁紹のときの軍師辺りが作らせたのか…？いや、軍師がいるなら、連合の時みたいな馬鹿はやらかさないか…。

「それだけじゃないぞ、北郷。弓を扱う者から言わせてもらえば、高楼…まあ沖原のように平たく言えば櫓やぐらのような物だ。高所から弓

矢で攻撃などされたら、状況によっては一方的に攻められかねん。早めに潰すなり占拠するなりせねば、かなり厄介な代物になる。」

「まったく…。この程度のこと知らないなんて、本当に使えない種馬ね。同じ男でも、まだこいつの方が使えるわ。」

最近知ったことだが、苟？は男が嫌いらしい。だから、一刀に対する言葉の一つ一つに棘を感じる。過去に何かあったのだろうか？まあ、どうでも良いことだ。

「なあ秋蘭。そんなに厄介ならば、壊してしまえば良い話ではないか？」

「姉者…。口で言うのは簡単だが、それを実行するとなると一苦労だ。」

「それなら、投石機を作れば良いんじゃないか？」

これには、李典が反応した。

「なあ兄さん。その投石機ってのは、どんな物なんや？」

「梃子と木材の弾力を利用して、遠くに大きな石を飛ばす攻城兵器の一つだ。片方に飛ばしたい物を乗せて、もう片方には紐を取り付けるんだ。その紐を引くことで、石を投射できるって寸法だ。ちゃんと改良すれば、弓矢と同等以上の距離を飛ばせるようになる。これが、だいたいの設計図だ。」

分かりやすいように設計図に書いて、李典に手渡した。…まあ、書いたのは初めて歴史に登場した時の物だから、そこまで大した物じ

やないということとは秘密にしておくか。

「真桜、すぐにその製作に取り掛かってちょうだい。期限は…そうね、改良も含めて一ヶ月で済ませて。」

「了解や!」

李典は、脱兎のごとく部屋から飛び出していった

「…あの男の提案でというのは気に食わないですが、とりあえず一番決めておきたかった土塁や高樓辺りの対策は出来ました。策の方は、そんなに大それたものは必要ないでしょう。我が軍が油断さえしなければ、袁紹如きに負けるわけがありません。」

そんな感じで軍議は終わり、時間は一気に一ヶ月後にまで進む…。

官渡に到着し、布陣を整えていた。李典と夏侯淵、郭嘉の隊が石機の近くで待機・護衛し、工作兵の指揮を執る。右翼は楽進と于禁、それと程?が配置された。正面及び本陣の護衛は夏侯惇と許緒、典韋が担当することになった。そして左翼は…。

「左翼は、邦祐と呂布をお願いするわ。早く制圧できたら、他の所の手伝いに行つてちょうだい。」

「了解。…荀?、この辺一帯の地図を見せてもらつても良いか?」

「はい、これがそつよ。」

地図を見せてもらつ…。ん、余裕が出来たら『あそこ』を強襲し

てみるか。

「もうそろそろ、返してくれない？あまり触られてると、間接的に孕みそうだわ。それと、早く配置に着きなさい。」

「いや、それはまず無いから安心しろ。地図を触られただけで孕むなんて、まずあり得ないから。ほら、地図は返すよ。」

荀？に地図を返し、恋と左翼の配置に着いた。曹操の号令が掛かる。

「聞きなさい！！この戦、数ではこちらが圧倒的に不利な状況だけど、相手は統率の取れていない寄せ集め共よ。格の違いというのを見せつけてやるのよ。我が覇道の足掛かりを、この戦で彩りなさい！！！」

曹操の鼓舞で兵達の士気は高まり、戦の幕が開けた。

戦が始まると、投石機がその威力を發揮した。放たれた大きな石は高樓に直撃し、次々と破壊していく。結果的に残存している高樓にいた袁紹軍の兵士は、見慣れぬ兵器とその威力の前に次々と逃げ出していった。

「とりあえず、高樓は何とかなつたみたいだけど…。」

土壘の方は、何とかなってないみたいだ。騎馬隊が土壘に阻まれて、攻めあぐねている。そして寄せ集めとは言ったが、大兵力から受ける威圧感から逃げ出す兵士がちらほら見受けられ始めた。これではジリ貧になりかねない。何より…。

「何で俺達の方に、敵がないんだ？」

そう、大兵力の威圧感の原因の一部は俺と恋にあった。俺と恋が左翼に展開するやいなや、俺達の事を覚えていた敵兵を中心に一気に撤退して行った。その兵達が、右翼と正面に新たに配置されたため、その皺寄せが行ってしまったのだ。結果、数十万もの兵が二分した形になり、少なくとも片方に十数万は存在することになる。片やこちらは、どちらも十万に届かない程度だ。各武将が仮に数万の兵を倒したとしても、その間に兵達がやられてしまっただけは元も子もない。それに将達の体力が持たないだろうから、逆に討ち取られるという危険もある。それならば、もう『あそこ』を強襲するしかない。それから顔良達にお仕置きすればいいことだ。

曹操の下に急ぎ、事情を説明することにした。

「曹操、左翼にいた敵兵なんだが、俺達が行った途端に撤退してしまった。それで今、その皺寄せが君の部下に行ってしまったている。」

「どうにかできないかしら？例えば正面と右翼に、2人別々に救援に行くとか。」

「いや、俺達は地図にあった烏巢を強襲しようと思う。あそこを落とせば、大軍を支えるための兵糧を失うことになり戦意を喪失できるし、もしかしたら袁紹のこの兵も捕虜に出来るはずだ。」

「なら、私の可愛い部下が傷付く前に強襲して、兵糧を焼き払ってちょうだい。」

「分かった。行くぞ、恋。」

今さら隠す物でも無いので、普通に兵の前でバイクに乗り、烏巢へと突撃した…。

烏巢に着いたが…？水関の頃から、袁紹は全く成長していない。烏巢を守る守備隊の警戒は薄く、その兵も数百人しかない。これは、落としてくれと言ってるのだろうか？ともかく、そんな薄っぺらい警備に苦戦する筈も無くあっさり烏巢を落とし、火を放って帰還した。

本陣に着き状況を確認すると、兵糧を失ったことにより敵の士気がかなり低下しているとのことだ。すでに我が身可愛さに、投降する者まで出始めたらしい。これはお仕置きする絶好のチャンスと思い、恋と共に前線へと進軍した…。

前線には、必死に兵を纏めようとしている顔良と文醜の姿があった。

「皆落ち着いて！！早馬を送れば、明日には補給が出来るから！！
あ、その人達、待ちなさ〜い！！」

「お前ら、斗詩の話聞いてんのか！？落ち着けて言ってるだろ
！！こら待て、逃げるな！！」

兵の陰に隠れながら、徐々に接近して行く。2人の背後に立ったところで、あえて声を掛けずに振り返るのを待つ…。

「どうしよう文ちゃん、結構兵の人達いなくなっちゃったよ？」

「仕方ないって斗詩。ここは気持ちを切り替えて、残った兵達を纏

めるのに専念しようぜ?」

顔良の肩を軽く叩き、まずは文醜が振り返る。そして俺達を見た途端に、動きが止まる。

「そうだね…。うん、ここから頑張れば良いんだよね?さ、そうと決まれば早く戻んぶつ!?!…いたたたあ。」

振り返った時に目を閉じていたからか、顔良は俺がいるのに気付かず、鼻を俺の胸にぶつけた。

「ごめんなさい、気付かなくて。怪我はありません…。」

「よお、お前ら。よくも虎牢関での決め事を破って公孫贖の領地に攻め込んでくれたな?」

「…約束は、守らなきゃ駄目。」

「……。」

返事が無い。ただの屍のよう。「生きてます(るよ)!!」「…考えを読まれたのは久しぶりだ。」

「…生きてたんなら、きちんと返事をしろ。」

「だ、だって、こんなところにいるなんて思わなかったから…。」

「人のせいにするな。さて、さつき恋が言った通り、約束は守らなくちゃいけない。そしてお前達は、その約束を破ったんだ。どうなっても、文句は言えないよな?」

2人のトラウマであろう銃を、ホルスターから取り出し、わざと見える様に構える。すると2人は、抱きしめあつたまま地面にへたり込んでしまった。

「…文ちゃん、今度こそ私達、お終いかもしれないね？」

「…うちの人生、苦勞ばかりだったよな？」

「それは主に私の台詞だよ、文ちゃん…？」

何だかもう諦めてる2人に、今さら袁紹の所に連れて行けと言いつらくなつて来た。いやでも、殺すんじゃなくてお仕置きするだけなんだし、別に気にすることないか…。

「あゝ、何だかもう人生終了みたいな雰囲気出してるよこ悪いんだけど、別に殺すとかそんな気はないから。ただ、袁紹のところに連れて行ってもらって、3人揃って軽いお仕置きするだけだから。」

「ほ、本当ですか！？私達、死ななくても良いんですか！？」

「んゝ、別に死にたいならその辺で勝手に自分でやってってくれって感じだから。で、案内するの？しないの？」

「…案内させていただきます！！！！」

その後はあっさりと事が進んだため、ダイジェストでお送りすることにしよう。まず、袁紹のいる本陣まで案内された。そこで袁紹と一悶着あったものの、文醜と顔良が主の鳩尾に拳を叩き込んで黙らせるというハプニング？によって無事に解決した。3人揃って捕虜

として曹操の下に連れ帰った結果、官渡の戦いは魏が勝利し、袁紹の下にいた多くの兵達は魏が吸収することで落ち着いた。

余談だが袁家はこの戦で没落し、あっという間に滅亡したことも、ここに記しておく…。

第四十四話 官渡の戦い、学ぶことを忘れた本物の馬鹿（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等があれば、よろしくお願いします。

第四十五話 官渡の戦い・終結と結果、袁紹さん、スタイリッシュです(笑)

本陣に着くと、部下達の手によって気絶させられた袁紹が目を見ました。

「んう、ここは？…そうですね、斗詩さん、猪々子さん！よくもこの私を…って、どうして華琳さんがいるんですの！？」

「…貴女は捕虜として、私の下に連れて来られたのよ。」

「な、何ですってー！？」

自らの状況が信じられず曹操に掴みかかろうとしたが、顔良と文醜が2人掛かりで羽交い絞めにして、袁紹の暴走を止めた。

「ちょっと麗羽様、落ち着いて下さい。」

「そうだよ姫、こちらは負けたんだ。兵糧も無いし、兵達の大半は魏に吸収された。今さらこの状況を、どうこう出来るもんじゃないって…。」

文醜の言葉で少し落ち着いたのか、袁紹は暴れるのは止めたが納得いかない表情は崩さなかった。

「ちなみに、お前の領地は曹操の支配下に変わったから、帰る場所は無いです？」

「……………」バタツ

どうやら、今の一言が原因で、袁紹はまた気絶してしまっただけだ。

「さて、煩いのが黙ったことだし、今度は洛陽での決め事を破ったお仕置きをしないとな。」

黒い笑みを、2人に向ける。

「あ、あははは。じゃあ斗詩、後は任せたらー!!」

文醜は、脱兎の如く逃げ出した。しかし…。

「逃いーげえーるうーなあー!!」

「ふぎやつ!?!」

顔良が自身の得物である大槌を、ジャイアントスイングよろしく振り回し始め、文醜に向かって放り投げた。ブーメランのように回転しながら飛んで行った大槌は、見事としか言いようのないくらいに、文醜の後頭部に直撃した…。

「ん〜、文ちゃんにいい…ジャストミート!!」

…なぜ今、一瞬溜めたし!!つつか、今度は福 朗かよ!?

「駄目だよ、文ちゃん?また1人だけ逃げようだななんて…。」

「だからって、大槌を投げてくんなく。いたた…。」

いたた…で済ませてるけど、文醜は頭に大槌をくらったのに大丈夫なのか?普通なら、重体でもおかしくはないような一撃だったか

ら、つい心配になって聞いてみた…。

「お、おい文醜、頭に怪我とかないのか？」

「おお。全然平気だし、どこも痛くないよ？斗詩になら、何をされてもあたいは平気だぜ？」

「ああ、そう…。じゃあ、そろそろお仕置きをしようと思う…」

ごくりと生唾を飲み、少しだけ顔を引き攣らせる顔良と文醜…。

「…はい、気を付けして、ちょっと頭下げて。」

2人は指示に従い、軽いお辞儀みたいな形になった。

「これがお仕置きだ。」コツンツ　コツンツ

「あう！！」「いったあ！！」

2人の頭目がけて、ちよつと強めに拳骨を落とした。

「これがお仕置きだ。これに懲りたら、もう迷惑かけんじゃないぞ？」

「「はあい。」」

顔良と文醜のお仕置きを終えた俺は、気絶している袁紹に近付き…。

「…これはお情けだ。半分で済ませてやるつ。」

無機質なバリカンの機械音が、袁紹へと近付いていき、袁紹の髪の毛を極度のアシシメトリーに変えた。どう変えたかというところ、左は手を加えずに、右側だけを剃り上げたのだ。左右非対称にも程がある。再び目を覚ました袁紹が最初に気付いたのは、自らの髪の毛の違和感。そして直に触って、髪の毛が片方無いことに気付いた。急いで手鏡を要求し、渡されたそれを覗くと、やけにすつきりした右側と、ポリユーマーな左側。そんな自分の姿を見て、袁紹は三度気絶した。

…自分でやっておいて言うのもあれだけど、何だかあまりにも不憫だったから、最低でも3日は困らない程度の路銀と育毛剤を袁紹達に手渡し、3人は放浪の旅へと出て行った。

陳留に帰還した後、すぐに軍議が開かれた。

「皆、まずはお疲れ様。此度の戦によって、私達は河北全域を統べる一歩手前まで来たわ。あとは北伐を行えば、我が軍はようやく河北全域を占めることが出来る。その為にも、今日はもう休んで英気を養ってちょうだい。また明日から我が覇道のために、皆には尽力してもらおうわ。…他に何か、報告とかある子はいるかしら？」

見渡すが、誰も報告することが無かった。

「誰もいないようね。なら、軍議はここまでよ、解散！……邦祐と呂布は残りなさい。少し話があるわ。」

…。一先ず席に座り直し、曹操の話聞くことにした。

「それで、何の話があるって言うんだ？」

「…貴方達、そろそろ呉に帰りたいとか思ってたりするのかしら？」

「帰りたいつて言ったら、俺達は帰れるのか？」

ちよつと冗談つぼく、曹操に聞いてみることにした。多分、「あら、そう。でもまだ一ヶ月残ってるのだから、それまではしっかり働いてちょうだい。」みたいな返答がオチだろう。

しかし、曹操から返つて来た答えは…。

「良いわよ、帰っても？」

「だよな……って、本当に帰っていいの!？」

「ええ。当分の間は北伐に力を入れることになるでしょうけど、貴方達の力を借りるまでも無いだろうし、通行料として十分な働きもしてくれたから、帰りたいなら帰っても良いわ。ただし、私の気が変わらない内にね…。」

何だかんだ言つて、もう半年近く蓮華達の顔を見てなければ、声も聞いてない。帰つても良いと言つのなら、ここは曹操の気が変わらないうちにお暇するでしょう。

「…恋、部屋に戻つて、急いで荷物を纏めるぞ。」

ここは曹操の計らいに、甘えさせてもらつとしよう。荷造りを済ませてから皆に挨拶をし、建業へとバイクを走らせて行った…。

建業に着くと既に真夜中になっていた為、辺りは暗く静まり返っていた。バッグからランプを取り出し、城までの夜道を歩いていく…。

城の前に着くと、見張りの兵が篝火の明かりによつて照らされていた。ランプの灯を付けたまま見張りに近付き、声を掛けた。

「夜遅くまで、見張りご苦労さん。」

「誰だ！？…邦祐殿ではないですか！！いつお帰りに？」

「今さつきだ。驚かせて悪かったな。」

「いえ。それよりも、孫策様や孫権様をお呼びした方がよろしいですか？」

「いや、それじゃ俺達がこんな時間に帰つて来た意味が無くなる。恋、呂布はまだ新しい部屋が分からないから、案内してあげてくれるだけで良い。」

「了解しました。誰か、少しの間だけ見張りを頼む。」

「それじゃ恋、お休み。」

「…お休み。」

恋と見張りをしていた兵士が、一足先に城の中へと消えて行った。

「さて、俺もそろそろ部屋に戻ろう。さすがに疲れた…。」

自室へと戻り寝台に横になると、今までの疲れがどっと押し寄せて来たのか、泥のように眠った…。

目が覚めたのは、翌日の昼頃だった。

「見慣れた天井…に決まってるよな。とりあえず、帰って来たこととか色々報告しておかないと…。」

部屋を出て、まずは雪蓮の部屋に向かった。扉をノックして、入れるかどうかを確認する。返事が返って来ない…。どこにいるんだろ？

城の中を探し回ったけど、結局どこにもいなかった。

「「まったく、雪蓮はどこにいるんだ(のよ)?…え?」」

廊下の曲がり角で、絶妙とも言えるタイミングで冥琳と鉢合せた。

「邦祐じゃないか!!!いつ戻って来たんだ!?!」

「夜中に戻って来て、今さっき起きたとこ。雪蓮に報告することとか有ったから、さっきから城の中を探してるんだけど、どこにも見当たらず…。」

「私も、城は隅々まで探した。いないとなると、また街に出てる可能性が高いな。はあ、ちょっと見て来てくれるか?私は部屋でやるのが残ってるから。」

「了解。」

街に繰り出した俺を出迎えたのは、前と変わらぬ賑やかな街の喧騒だった。そんな喧騒の中、雪蓮の姿を捉えた。雪蓮は祭と共に買い物をしていたのか、手には荷物がある。きつと、今晚の酒のつまみでも買ってたのだろう。

「本当に街に出てたとは…。探したぞ雪蓮。」

「あれ、邦祐じゃない！！いつ建業に戻って来たの？」

「夜中に帰って来た。俺も皆に報告しなきゃいけないことがあるから、城に戻って欲しいんだけど…。」

「わかったわ。じゃあ祭、邦祐の話は玉座で聞くから皆を集めておいて。」

「うむ。それじゃ邦祐、また後でな。ついでにこれも頼もうかの？」

祭が俺に手渡したのは、買い込んで来た酒とつまみだった…。量のせいもあってか、地味に重く感じる。よく平気だったな、祭…。

それから雪蓮と共に城に戻り、冥琳を呼びに部屋へ行くと、案の定…。

「また政務をほっぽり出して…。木簡が一向に減らないじゃない！今日中にこの量の木簡を片付けなければ、本当に禁酒させるぞ！」

冥琳のお説教が待っていた。

「だって「だって何も無い!!」「うゝ…。」

「ま、まあまあ、話は一旦その辺にして、玉座に行かないか？俺も報告しないといけないし、祭が皆を招集させてる頃だから…。」

「…そうね。雪蓮、邦祐の報告が終わったら、すぐ政務に取り掛かってもらうぞ?。」

有無を言わせぬ冥琳のプレッシャーは凄まじく、雪蓮はただただ頷くことしか出来なかった…。

第四十五話 官渡の戦い・終結と結果、袁紹さん、スタイリッシュです(笑)

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

第四十六話 再開と報告ㄿねえ、どこからその自信が湧いて来るのㄿ

玉座の間に着くと、祭が既に皆を集めて待っているところだった。顔を見るからに、皆元気そうで良かった。中に入り、帰って来たことを報告した。

「皆、ただいま。やっと戻って来れたよ。」

「邦祐さんじゃないですかㄿ！思ってた以上に帰って来るのが遅かったから、皆心配していたんですよㄿ？」

「それは済まないと思ってるよ。…今日集まって貰ったのは、帰って来たのは伝えるためと、帰って来るのが遅れた理由を話すためなんだ。」

一日間を置いて、改めて話し始めることした。

「まずは…俺が桃香ちゃん、劉備ちゃんところに手伝いに行ってたのは知ってるよな…ってあれ、何か俺まずいこと言った？」

「…へえ、邦祐ってば劉備と真名を交換したんだ？ふん…。」

何だか、蓮華達の視線が怖い。まさか、真名を交換しただけなのに関係を持ったか思われたりして……ないよね!?

「あの蓮華、何か勘違い」邦祐、そういうのは報告を済ませてからにしる。「…はい。」

機嫌の悪い冥琳に逆らえるはずもなく、報告を再開することにした。

「え、桃香ちゃん達は当初の目的通り、益州に抜けることが出来た…のは良かったんだけど、曹操の領地を通ろうとしたもんだから、通行料を要求されてな…。その通行料に愛紗、関羽を要求したもんだから、桃香ちゃんはそのを拒否して、話し合いがいつまでも平行線を辿りそうだったんだ。だから曹操に、関羽の代わりに俺と恋が期限付きで仕官するからそれで勘弁してやって欲しいって頼んだ結果、二ヶ月で戻れるはずだったのに、半年近くまで延びちゃったんだ。」

「そうだったの…。それで、魏にいる間はどんなことをしてたの？」

「兵の鍛錬の手伝いに、将達との手合わせ、警邏に時々文官の手伝い。あとは…袁紹達を官渡での戦で、倒したくらいかな。」

「…ちょっと！！袁紹を倒したって、曹操が河北を統一したってことじゃない！？敵国の力を増やしてどうするのよ！！！」

「…まあまあ、落ち着けよ雪蓮。魏が力を付けたところで、今の呉は簡単には負けないと思うぞ？俺や恋を毒殺とか方法問わずに殺せれば、話は変わって来るかもしれないけど…。」

恋は身の危険が迫って来るのが本能的に分かるから毒殺は無理だし、戦って倒そうものなら返り討ちに会うのが関の山だろう…。でも、俺には前例があった。それは、料理が壊滅的だった頃の愛紗の即席手料理だ。今は特訓の末、食べられる物になったけど、過去のあれはポイ、ンクツキングと言っても過言じゃない。いや、愛紗のは異臭が漂って来て、身の危険が迫ることが分かるからまだマシか…。ともかく、あれを食べてから数日間、俺は生死を彷徨いかけたことがあった。

「とりあえず、報告することはこれくらいかな。こっちは何か変わったこととかある？」

「邦祐が留守にしている間に、揚州を制圧して新たに軍備を整えた。変わったことと言うなら、私達の方もこれくらいだろう。」

「じゃあ、これでお互い情報交換は終了したってことで良いのかな？」

「…そうだな。これにて、軍議を終わる。皆、解散して仕事に戻ってくれ。…では雪蓮、行くぞ？」

ずるずると冥琳に引き摺られていく雪蓮を横目に、辺りを見回す。
…そいえば、美羽と七乃の姿が見えない。何かあったのか？月ちゃんなら、何か知ってるかもしれない。

「ねえ月ちゃん、美羽達はどうしてる？」

「美羽ちゃんなら、お部屋にいますよ？」

「わかった、ありがとう。じゃあ、あの2人にも顔見せておくか。」

2人の現状を知るために、部屋に向かうことにした…。

玉座の間から出た後、たまたま見かけた侍女に部屋の場所を聞き、教えてもらった部屋へと進んだ。

コンコンッ

「はい、どちら様でしょうか？」

「俺だけど、今大丈夫か？」

なんかオレオレ詐欺みたいだな、これ…。あ、扉が開いた。

「あらー、邦祐さんじゃないですかあ。お嬢さまあ、邦祐さんがいらっしやいましたよ？」

「おお。邦祐、久しぶりじゃのお！！さあ、早く入るのじゃ。」

「それじゃ、失礼するよ。」

扉を閉め、近くにあつた椅子に腰を下ろす。

「それで、今日は何の用なのじゃ？」

「いや、これとって大した用は無いんだけど、半年近く建業に戻つてなかったから、2人の状況を知らなくてね。それを聞きに来たんだ。美羽、学校の方はどうだ？」

「うむ。妾は勉強が嫌いだったのでな、最初はつまらなくて仕方なかったのじゃ。でも、ここで侍女として働いてて、先生とやらもやっつておる…えーと、大人しい方の名は何じゃったかな？」

「月ちゃんのことか？」

「おお、そうじゃそうじゃ。その月とかいう者の教え方も良いが、何より妾の頭の良さもあつてか、最近では分かるようになって来た

から、今はなかなか楽しいのじゃ。」

そう言うと、机に置いてあった木簡を手にしてこちらに見せて来た。

「ふふん。どうじゃ、妾は麗羽と違って賢いからのお。4つも当たったのじゃ。」

「どれどれ……。」

美羽が自信満々に、持っていた木簡を差し出す。木簡に書かれていたのは、小4でやるような二桁の割り算の問題だった。しかも、まだ初歩の辺。4つ当たったと言うから出来が良いのかと思いきや、まさかの10問中4問……。ってこれ、半分以下じゃん！！

「さっすがお嬢さま。たかが4問しか当たってないにも関わらず、どこから湧いて来るのか分からないその自信、どんなことでも良い方に考えるお気楽思考は、まさに三国一ですねー！！」

「ふふ、そうじゃろそうじゃろ。じゃが七乃お、そんなに褒めても何も出ぬぞ?」

「えへへー。」

えへへーじゃないだろ……。それと美羽、皮肉と褒め言葉の区別が付いてないぞ。月ちゃんに教えて貰いたいけど、これ以上の負担は掛けられないから、暇な時に俺が教えることにしよう。

「まあ、美羽が楽しく過ごせているなら良いか。それで、七乃はどんな感じだったんだ?」

「私ですかー？私は、毎日大変な思いをしてましたよ。」

「…そんなに冥琳にこき使われたのか？」

「ええ、それはもう。どっかの誰かさんは諸国漫遊してただけなのに、私ばかり朝から晩までボロ雑巾のように政務だの内政だのこき使われて…。」

別に俺、諸国漫遊してたわけじゃないんだけどな…。

「一応言っておくけど、お前達の下にいた時の雪蓮達は、それ以上にこき使われてたからな？何なら、今から冥琳に進言してやっても良いぞ？もっと厳しくしても、七乃は平気だって…。」

「そんなことしたら、私達は出て行きますよ？それでも良いんですか？」

「別に構わないけど？その代わりに、お前達は呉の事情を知ったんだから、情報を守るために討伐させてもらうけどな。それが、本当に奴隷市場でも良いんだぞ？」

「い、嫌ですねー。冗談に決まってるじゃないですかあ？」

冗談だと言い張る七乃には、冷や汗がダラダラと流れていた…。

その後もたわいない雑談を交わし、気付けば窓の外に夕日が見えていた。

「結構話し込んでたんだな。じゃあ、俺はこの辺で失礼するよ。」

「うむ。邦祐、また来るのじゃ。」

2人の部屋から退室した後、俺は自室へと向かった…。

先に早めの夕食を取り、部屋に戻ると……中に蓮華達が待ち構えていた。

「あの、どうして皆さんお揃いなんでしょうか？」

理由は、一つしか思い浮かばない。真名の交換について、聞いただしに来たのだろう…。

「そんなこと、邦祐が一番分かってるでしょう？さて…玉座では聞けなかったけど、劉備達と真名を交換した経緯と、誰に手を出したのか、ここできっちり吐いてもらおうじゃない。」

「そやな。じゃあまずは、真名を交換した経緯から、もそつと詳しく聞かせてもらおうか？」

「いや、経緯と言われてもそんな大したことじゃないんだ。徐州に着いた時にいざこざ（愛紗が斬りかかって来て）があつて、それを解決した（恋が鎮圧した）後、宴席を設けてもらった時にたまたま（皆と）意気投合したから、真名を交換しただけなんだよ。別に他意は無い。」

「ふむ、真名については概ねそれで良いだろう。では、誰に手を出したか答えてもらおうか？」

「……恋だけだ。」

「恋、それは本当か？」

恋が上手くフォローしてくれることを祈ろう…。

「…本当。だから、皆の分の見張りも兼ねて、邦祐とずっと一緒にいた。」

…見張りも兼ねてたんだ。まあ、恋が証言してくれたおかげもあってか、張り詰めていた部屋の中の空気が少しずつ和んでいくのが分かる…。

「…うちの約束、ちゃんとしてくれたみたいやな。恋も見張り、ご苦労さん。」

「ええ、安心したわ。恋は想定内だったから良いとして、これ以上邦祐の周りに女の子が増えたりでもしたら困るもの。」

「……………」。「コケッ

いやはや、何とか誤解も解けたようで何よりだ。皆も満足したのか、部屋へと帰って行った。今日は久しぶりに、穏やかな夜が帰って来る気がする。…ん、今まで穏やかじゃなかったのだったか？この約半年間、恋が俺の隣で眠っている時は、常に布団を全部持って行かれた。これはまだ可愛い方だ。寝ている時に恋に蹴飛ばされて寝台から落とされたりした時は、尋常じゃない痛さで堪ったもんじゃなかった。こんなことが4日に一回は起きていたが、恋は無意識なのでそんなことがあったなんて知る筈もないだろう…。

「さ、ちょっと早いけど、今日はもう休むとするか…。」

寝台に横になり、2日連続で泥のように眠りに着いた。

時期が時期だ。曹操がいつ呉に攻め込んで来てもおかしくは無い。そして数か月後、呉は魏の大軍勢と一戦構えることとなる…。

第四十六話 再開と報告ㇿねえ、どこからその自信が湧いて来るの？ㇿ（後書き

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしくお願ひします。

第四十七話 墓参り〜狙われた雪蓮とフラグを立てた曹魏〜

ある晴れた日の昼下がり、片付けるべき仕事を終えていた俺は、城の中庭で静かな時間を過ごしながら何をしようか考えていた。すると、誰かを探しているように見えなくもない雪蓮の姿が見えたから、声を掛けることにした。

「雪蓮、誰か探してるのか？」

「ああ、いた！！調度良かった、邦祐を探してたところなのよ。」

「ん？俺に何か用か？」

「うん。ねえ…今日、暇？」

もうやるべきことも済ませているから、暇と言えば暇だろう。それなら、雪蓮の用事に付き合っても良いか…。

「暇だけど、どこか行くのか？」

「ええ。ちょっと、ね…。とりあえず、ついて来てもらえば分かるわ。」

「分かった。それじゃ行くかうか。」

念のため、ドライも同行させることにした。馬に乗り雪蓮の後について行くと、着いたのは城外の森の中にある川のほとりだった。そこで目にしたのは、何だか威厳を感じさせる一つの石…。

「これね、母様のお墓なの。」

「…そうだったのか。」

墓石の前に片膝を付き、墓石を見つめる。

「はじめまして、孫文台殿。沖原邦祐と言います。貴方の御息女には、お世話になっております。」

「あははっ！！邦祐ったら、そんなに畏まらなくても良いわよ？母様はそういう堅苦しいの、あまり好きじゃなかったから。」

「…そうなのか？でもまあ、俺にとっても母親になるだろう人だし、最低限の礼儀はわきまえておかないと。」

「そういうのは、平和になった時に蓮華と一緒に来てから、母様に伝えれば良いわ。それじゃ、最近は忙しくてなかなか来れなかったし、いつも以上に綺麗にしますか。邦祐、手伝って貰える？」

「ああ。」

雪蓮と共に、墓石とその周辺を綺麗にし始めた…。

これから俺達は、呉へと攻め込む。河北を統一した今、その兵数は膨大なものにまで膨れ上がっていた。

「華琳様、全軍揚州に入りました。相手が相手ですので、すぐにも作戦を展開出来ませんが、どういたしますか？」

「相手は英雄である孫策。すぐにでも動きましょう。…春蘭。」
「はっ!?!」

「凧と真桜、稟を連れて敵本城に向かいなさい。秋蘭は、廬江より東進して、敵本城の背後を脅かすために兵を配置して来なさい。合図と共に仕掛けさせるわ。沙和は騎馬隊を指揮して、国境線の各所から放たれる敵の伝令兵を全て捕殺しなさい。それが終わったら、春蘭達に合流するように。」

「……………御意!?!……………」

「私は周辺の拠点を制圧した後、春蘭達に合流する。桂花、季衣、流琉、風は、私の補佐をするように。」

「……………御意!?!……………」

「一刀、貴方も私について来るように。」

「わかった。」

「大軍を幅広く展開し、この揚州に英雄との戦いを刻み込みましょ
う!?!」

全軍が、華琳の指示通りに軍を展開させて行く…。

「…さあ、孫策。私と同じく、世に英雄と謳われし者として、正々堂々と戦おうではないか…。」

それから一刻後、部隊の準備が完了した。今は本陣で、華琳と桂花

と風が話し込んでいる。

「華琳様、部隊の準備が全て整いました。しかし、幾つか気掛かりが…。」

「その気掛かりとやらは、どのようなもののかしら？」

「まず先鋒の部隊には新兵が多く、意気地のない者が多く存在しているのですよ。」

「華琳様、新兵を奮い立たせるには、褒美が一番かと…。ですので、呉の将を討ち取った者にはそれに見合った褒美を取らすと、兵達に伝えておきます。これで少しは、意気地も出ることでしょう。」

たしかに、新兵じゃ先陣は荷が重いだろうな。

「それと、呉群から許昌に流れ着いた一団で構成された部隊が抜け駆けの気配を見せているので、そこも気を付けなければなりませんね。」

「なら、その部隊に数人の見張りを付けておきなさい。そのような者達に、無粋な邪魔をされたくは無いわ。桂花、お願いね。」

「御意。」

呉軍との開戦が、すぐそこまで迫って来ていた…。

建業にある城に、曹操が軍を展開して侵攻してきたとの一報が舞い込んで来た。

「周瑜様、曹魏の軍がこちらに進行して来ました！！敵先鋒は、既にこの城へと向かっております！！！」

「何だと！？国境線の兵達は、一体何をしていた！！！」

「それが、各所からこちらに伝令を放ったとのことなのですが、その悉くが捕殺されてしまい、たった1人の生き残った伝令により、この報せを入手いたしました。」

「その兵は？」

「…先程、息を引き取りました。」

「そうか…。その者を篤く弔ってやれ。その者の親族にも、十分に報いてやるようにな。」

「御意…。」

しかし、敵の侵攻具合も気になるな…。

「それで、敵はどこまで進んで来ている？」

「はっ。敵全軍は既に揚州入りし、城から数里の辺りにまで来ております。取り囲まれるのは、時間の問題かと…。」

「分かった。では下がっていきな。」

そう伝えたと、兵は下がって行った…。それにしても、曹操の考えが全く読めん。

「まさか、この時期に攻め込んで来るとはね…。」

「はい。一刻も早く、対抗する術を取らないといけませんね。私は軍部で祭様達と軍議を開きますので、冥琳様は雪蓮様を！」

「分かった。では、すぐに行動しよう。」

それから城中を探したが、雪蓮はどこにもいないどころか、邦祐まで揃っていないと来た。まったく、こんな時に限って2人はどこにいるんだか…。

「もしかして…。まずい、至急蓮華様に伝えなければ！」

本当に、世話の焼けることだ…。

孫堅さんの墓石とその周りの掃除が、ようやく終わった。そのおかげもあってか、さっきよりも威厳が感じられる気がする。

「ふう、やっと綺麗にすることが出来たわ。お疲れ様、邦祐。」

「雪蓮もお疲れさん。これならお母さんも喜んでくれるだろう？」

「んー、もしかしたら怒ってるかも。掃除してくるのも、呉の地を取り返すのも、いろいろと時間が掛かりすぎだって。」

「流石にそれはないだろ？…なあ、孫堅さんって、どんな人だったんだ？」

掃除をしている最中、ずっと気になっていたことを質問してみた。

「母様は凄い人よ。江東で旗揚げして、瞬間に江東と江南を制覇して、孫呉の礎を築いたんだもの。母様は英雄だった。でも、まだ上手に歩けない私を戦場に連れていったりしてたから、娘から見れば母親失格だったかな。」

「…何か、意外だな。でも、好きだったことに変わりはないんだろ？」

「当たり前でしょ？」

笑顔でそう答え、墓石の前に膝を付く。

「母様、私達はようやくここまで来れた。そしてこれから、孫家の悲願が始まるわよ。」

「孫家の悲願か。呉の皆と仲間達が笑って暮らせる時代を作るための天下統一…だったか？」

これらしいことを、前にも言ったような気がする。

「ええ。？水関で曹操と対峙した時に、邦祐が言っていたこととは同じよ。私達は皆を笑顔にするために、皆から笑顔を奪う戦争をする。矛盾してるのは分かってるけど、それでも戦わないと、皆の笑顔は得られないと思うもの…。」

「雪蓮なら出来るさ。何せ、俺がいるからな？」

「もう、調子に乗らないの…。」
「ペシンッ」

「いたっ!?!」

雪蓮が半分呆れ笑いを浮かべながら、頭を軽く叩かれた。

「…でも、頼りにさせてもらっわ。」

「ああ。冥琳には劣るけど、頼りにしてくれ。さて、そろそろ城に戻るとしようか。あまり遅くなると、冥琳に叱られかねないからな?」

「おー、怖い怖い じゃ、さっさと帰りましょうか。じゃあね、母様。今度は悲願を成就した時に来るわ。その時は、皆で一緒にお酒でも飲みましょ?」

孫堅さんの墓石に背を向け、俺達は城へと歩みを進めた。

……その時だった。

背後の草陰から不審な物音がし、振り返ると、数人の魏軍の兵が弓矢で雪蓮を狙っていた。

「雪蓮!?!」

「えっ?」

呼ぶと同時に、弓が放たれた。とっさに雪蓮を抱き締め、魏軍の兵の放った矢と雪蓮の間に、自分の身体を盾として割り込ませた…。

「うぐっ!?! ああっ!?!」

放たれた矢は、背中に3本、両腕と両足にそれぞれ1本ずつ、計7本もの矢が次々と突き刺さった。しかも、その矢の鏃の全てに毒が塗られていたらしく、焼けるような痛みが体中を駆け巡る。…俺と一緒に行けば雪蓮が助かるって、こういうことかよ、爺さん…!?

俺はそのまま、雪蓮に寄り掛かる形になった…。

「くっ。ドライ、奴らを…捕まえる。」

「…了解です、御主人。」

よし、ちゃんと追いかけて行った。敵兵は、すぐに捕まるだろう。問題はこっちか…。雪蓮に矢を抜いてもらい、近くにあった木にもたれかかる。

「邦祐、大丈夫!？」

「大丈夫…って言いたいけど、鏃に毒が…塗ってあったみたいだ。体中が…焼かれてるみたい。」

「何ですって!?!早く医者に見せないと!?!」

雪蓮が俺を馬に乗せようとするが…背の違いもあつてか、なかなか乗せることが出来ない。

「くっ!?!この一大事って時に!?!」

「姉さま、どこにいるんですか?…いたら返事してください!?!」

「蓮華、ここよ!!」

「良かった、探したんですよ姉さ…どうしたの邦祐!？」

「詳しくは後で話すから、今は邦祐を馬に乗せるのを手伝いなさい。一刻を争うわ!!」

2人掛かりで俺を馬に乗せ、その馬の手綱を雪蓮が握り、城まで全速力で駆け抜けた。その途中で蓮華から、曹操が大軍勢を連れて攻め込んで来ていることを伝えられた。

城に着いてからは雪蓮と蓮華に肩を貸してもらい、医務室へと運ばれた。すぐに軍医が俺を診察し始め、2人が心配そうにその様子を見つめる。

「どう? 邦祐は助かりそう?」

「…難しいですね。非常に強い猛毒が塗られていたでしょう。体力の消耗がかなり激しい。普通の人なら、とっくに死んでいてもおかしくないでしょう。今の私に出来ることは、毒の効果を弱めるのが限界です…。」

軍医の言葉に、2人の顔は青ざめていく。

「…蓮華、俺の部屋から、バッグを…持って来てくれ。その中に、薬がある、から。」

「っ!? 分かったわ!!」

はっとした顔で、蓮華は扉を乱暴に開け放ち、俺の部屋へと駆け出

して行つた。

「…済まない、雪蓮。頼りにしろって、言ったばかりなのにな。」

「そんなこと、気にしなくて良いのよ。私のことを、身を呈して守ってくれたじゃない。それでもう十分。」

「そうか…。」

再び扉が乱暴に開け放たれ、息を切らした蓮華が俺のバッグを持って入って来た。

「はあはあ、邦祐、荷物、はあはあ、持って来たわ。」

「…ありがとう、蓮華。」

毒が周り意識が朦朧とする中、手渡されたバッグから適当に引つ張りだした薬を取り出し、一気に飲み干す。どうやら取り出せたのは、チートな妙薬ではなく、解毒剤だったようだ。…運良く取り出せたこの解毒剤もなかなかの効能だったらしく、体中から猛毒が消え去って行くのが分かる。でも解毒しただけで、傷が治ったわけじゃないから、何だかだるくてしょうがない。少し血を流し過ぎたかな…。

「ふう。とりあえず毒は浄化できたけど…。この傷じゃ、曹操との戦に参加出来そうにないわ。」

「大丈夫だから、邦裕は治療に専念しておきなさい？心配しなくても、私達は負けないから。治療の方、お願いね。…蓮華、行くわよ。」

蓮華は無言で、雪蓮について行った。とりあえず今は、大人しく体力が戻るのを待つとしよう。この体さえ動けば、何かしらやることがあるだろうから…。

第四十七話 墓参り〜狙われた雪蓮とフラグを立てた曹魏〜（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしくお願ひします。

第四十八話 狩人くツンデ蓮華を飛び越してヤンデ蓮華へく（前書き）

テストがあつたためになかなか作品作りが進まず、やっとのことで
出来上がりました。これからはまた、遅くても一週間以内に投稿し
ていけるように頑張っていこうと思うので、よろしくお願いします。

第四十八話 狩人ツンデ蓮華を飛び越してヤンデ蓮華へ

邦祐の無事を確認出来た私達は、全員を玉座に集めて、事の顛末を伝えることにした。

「集まったわね？…皆、落ち着いて聞いてちょうだい。」

「どうしたと言っただ雪蓮？それに蓮華様も…。それに、邦祐の姿が見当たらんのもおかしい。」

「…実はさつき、母様の墓参りに行って来たの。そこで、魏の兵士達が私を暗殺しようと矢を放って来たわ…。ついて来てくれてた邦祐が身を呈して守ってくれたから、私自身怪我はなかったけど、その代わり邦祐に矢が刺さったの。鏃に猛毒が塗られたね…。」

猛毒と聞いた瞬間、皆の表情…特に元董卓軍の面々は、その知らせずに表情を凍りつかせた。

「な、何だと！？それであいつは、邦裕は無事なのか!？」

「落ち着きなさい、柳花!…荷物の中にあつた解毒剤を飲んだから命に別状は無いけど、受けた矢傷はそのままだから、まだちよつと動けないみたい…。」

命に別状はないと分かり、全員が冷静さを取り戻したが、すぐに攻撃的な感情を露わにする。

「怪我は無かつたとはいえ、奴らが呉の王を手に掛けようとした事実は変わらない。そして、雪蓮を庇った邦祐が毒に侵されて死にか

けた事実も…。さて、我らには奴らを攻撃…いや、殲滅するのに、余りあるほどの大義がある。ならば、やることは一つ。そうでしょう、雪蓮？」

「ええ。冥琳、全軍の出陣準備は済んでるわね？」

今の私の顔を鏡に映せば、冷たい笑みが浮かべているのが分かるでしょうね…。

「いつでも出られる。あとは雪蓮の号令を待つのみだ。」

「よし、全員配置に着け！！これより、我ら孫呉の地を脅かさんと侵攻して来た、愚かな曹魏の軍勢を掃討するぞ！！…さあ、狩りの時間よ。待つてなさい、曹操。犯した罪の重さを、その身に教えてあげる。」

霸王だの霸道だの、二度と言えないようにしてあげるわ…。

ようやく、敵軍が展開した。

「華琳様、敵陣より単騎でこちらに向かって来る者がおりますが…。あれは一体、誰だ？」

「孫策でしょうね。将兵達の士気を高めるために、前線に出て私と舌戦をするつもりなのでしょう。その舌鋒が、私にどれほど届くのか、まずは静聴してみようじゃない。」

孫策と対峙する。見る限りでは、孫策自身に何かあったようではないらしい。

「ようやくお出ましね、孫策。共に世に英雄と謳われし者同士、正々堂々と雌雄を決しようじゃない？」

「…正々堂々、ね。どの口が何を言い出すかと思えば…。ほんっと、とんだお笑い草ね。霸道が聞いて呆れるわ。」

「っ！？それは一体、どういう意味かしら？」

「…奴らをここへ。」

縄で縛られて連れて来られたのは…顔中が痣だらけで軍服もボロボロだったが、間違いなく我が軍の兵士だった。

「何故、うちの兵士が孫策の下に!？」

孫策は剣を鞘から抜刀し、一度私の方を見た。次の瞬間…。

「ふっ!!」ザシュッ

孫策はこちらの問いに何も答えず、捕らえていた兵達の首を、誰一人言葉を発する暇すら与えることなく、私の目の前で1人ずつ斬り落としていく。その時の返り血に染まった孫策の顔は、この私でさえも底冷えを覚えずにはいられないほどの冷めきった笑みだった。

そして孫策の口から語られる事实に、胸を抉られることになる…。

「聞け、勇敢なる呉の将兵よ!!我が朋友よ!!敵軍は卑劣にも、我が命を奪わんと刺客を放ち、私を亡き者にしようとした!!だが、共にいた我が友である邦祐が勇敢にもその身を呈してくれたことよ

り、我が命は事なきを得た。その代わりに、我が友はその身を毒に侵され、生死を彷徨うことになった。幸い、解毒は成功し一命を取り留めはしたが、その身に受けた矢傷により、今は床に臥している！！聞け、勇敢なる呉の將兵よ！！我が朋友よ！！共に闘えぬ友の分までその雄叫びを上げ、我らの怒りを天に示すのだ！！私欲のために孫呉の地を欲さんとした愚劣な者共に、孫呉の誇りを、正義を見せつけよ！！全軍、進めえ！！」

孫策の掛け声により、呉の軍勢が一気に押し寄せる。兵の士気はこちらよりも数段高かった。

「誰だ！？孫策の暗殺を命じたのは！！」

「我々は、そのような指示を出してはいません！！」

「華琳様、犯人が判明しました！！やったのは…。」

「一体誰だ！！早く答えない、桂花！！」

桂花の視線は、兵士だったものに向かっていた。

「犯人は…先ほど孫策に殺された、許昌の一団です。どうやら褒賞の件が災いし、先走った行動に出たようです。」

「…全軍、一時撤退するぞ。」

「しかし華琳様、あの男がいない今こそ、呉を倒す好機では？」

「じゃあ私に、誇りも何もない汚された戦をしると言うのか！！」

私の怒鳴り声に、桂花はびくついた。

「…春蘭、秋蘭、私は一度退く。」

「はっ！！」

「それと、無駄な反撃や追撃はするな。この戦、せめて無事に収束に向かわせよ。」

「「御意！！」」

殿に任命した春蘭と秋蘭が、部隊を引き連れ戦場へと駆け出して行く。

「…どうして、こんなことになってしまったの…。」

そんな私の独り言も戦場に響く怒号に掻き消され、誰にも聞かれることは無く、我が軍は呉の領地から撤退し始めた…。

魏軍が、次々と撤退し始めていく。しかし、王の命を脅かしておいて撤退するという自分勝手な、呉の土地で罷り通るはずもなかった…。

「今のうちは、かなり虫の居所が悪いんや。ただで済むと思わん方がええで？張遼隊、突撃開始！！」

霞を先頭に、数千もの騎馬隊が砂塵を上げて戦場を駆け出して行く。

「霞に遅れは取らん。華雄隊、出るぞ！！何人たりとも、逃がしは

するな!!」

「…殺す。ねね、援護して。」

「了解ですぞ!!」

霞の部隊に続かんと、柳花も部隊を率いて曹操の軍へと襲いかかり、恋も単騎で出撃した。音々音は後方から、弓兵を率いて出撃した。

音々音が率いた弓兵部隊は、戦場に矢の雨を降らして敵の撤退速度を遅らせる。その隙を見逃さず、霞が自ら率いる騎馬隊を使った神速の名に違わぬ用兵で、敵の歩兵や騎馬隊にとって厄介となる弓兵を次々と屠り、柳花が率いた歩兵部隊は、一点突破の突撃から敵陣を切り裂き、浮足立った敵の守備を瓦解させた。恋に至っては、敵が誰であろうと何人いようと関係なく、邪魔する者は容赦なく叩き潰していく、天下無双の呼び名に恥じぬ武は、他者の追隨を許すこととはなかった…。

一方、出撃前の蓮華はどうかと言つと…。

「許さないゆるさないユルサナイ。邦祐に怪我させるだなんて。絶対に殺し尽くしてやるんだから…。ふふっ、ふふふっ、ふふふふ…。」

目から光が消え瞳孔は開き、能面のように表情といったものが見取れず、負のオーラが蓮華を包んでいた。しかしこの蓮華、意外にもヤンデレである…。

「し、思春殿あ…。何だか、蓮華様が怖いです。」

「言つな明命、それは私も同じだ。まさか、蓮華様があのようになるとは…。」

普段怖いものなど無さそうな思春でも、今の蓮華は何気に怖かった。

「…思春、明命、私達も行くわよ。」

「「ぎ、御意！！」」

内心、蓮華の変わりようにビビりながらも、戦場へと向かった。それぞれの隊に分かれ、蓮華の並々ならぬ空気が解放された2人は、王を襲撃された怒りというぬ気苦勞を負わされた苛立ちを、魏の兵達へとぶつけ出した。

「敵は誰一人として、生きて返してはいけません！！王の命を奪おうとした者達に、その命で償わせるのです！！」

指示を出しながら、得物である長刀で次々と敵の命を刈り取って行く。

「降伏する者は殺せ！！許しを請う者も殺せ！！贖罪として、奴らの血をこの孫呉の大地に吸わせてやれ！！この鈴の音が、貴様らを黄泉へと誘う道標と知るが良い！！」

この声に応えるかのように、兵士達が次々と敵兵を殺し、戦場には大量の魏軍の屍と死の臭いで溢れかえっていた。他の将が率いる部隊の中でも、特に蓮華の指揮する部隊は敵軍を半壊させるという目覚まし過ぎる功績を上げ、魏軍の殿を務めている部隊を壊滅寸前にまで追い込んでいった…。

そろそろ、華琳様が安全な場所まで撤退するための時間は稼げたはずだ。しかし、いくら無駄な反撃をしてはいけないとはいえ、この戦況は一方的…いや、一方的という言葉すら、この状況では生温い。今私達の置かれてる境遇は…。

「虐殺…または、蹂躪とでも行ったところか。秋蘭、そっちは大丈夫か？」

「…まずいな。呉の兵士の錬度が、こちらよりも想像以上に高い。命令を無視して逃げる者も出て来ている。姉者は平気か？」

「私は大丈夫だが、兵に関してはこちらと同じようなものだ。」

敵の勢いに恐れをなして逃げようものなら、敵の凶刃に倒れることになる。それを見た兵達は委縮して普段の実力が出せなくなり、さらに命を奪われる。

「どうする姉者、このままではじり貧になり、壊滅は避けられん。我らもただでは済まなくなるぞ？」

「…華琳様が撤退するまでの時間は稼げた。全軍、撤退するぞ！！死に物狂いで駆け抜ける！！」

守りに徹していた兵達は反転し、全力で魏の国境線へと撤退し始めた。しかし、それを阻止せんとする一人の人物が背後から迫って来た…。

「ちよい待ちっ！！！」

振り向くと、こちらに突撃して来たのは張遼…。奴の通って来た道には、兵達の無残な姿が晒されていた。

「ええい、こんな時に厄介な奴が来てしまうとは！！」

「別にええやろ、誰が来たって。仮にうちが来んかったとしても、他の誰かが惇ちゃん達の前に来るだけのことや。」

張遼は得物である偃月刀を構え、戦闘態勢となる。

「…さあ、毒使うなんてせこい真似しくさってくれた礼、たっぷりとその身で味わってもらおか？」

「あ、あれは許昌から来た奴らが勝手に暴走しただけであって、華琳様の指示ではない！！」

そう伝えると、張遼の表情がより険しさを増した。

「うちはな、別に孟ちゃんの指示がどうだとか別にどうでもええねん。どこの誰が原因で、うちの男が死にそうになったか…。理由はこれだけあれば十分。部下の不始末の責任、きっちり取って貰うで！！」

言い終わると同時に、張遼が斬りかかって来る。

「くっ！？」ガキイン

一撃を受け止めはしたが、虎牢関で戦った時に比べて早さも重さも段違いなものになっていた。反撃に出ようにも、攻撃が速すぎて攻撃に移れない。

「でやあっ!!」「ヒュンッ ヒュンッ ヒュンッ

「うぐっ!?!」「キーンキーン ガキイーンッ

最初は塞ぎ切れていたものの、じわじわと攻撃に対する対応が遅れて行き…。

「もらったあ!!」「ザシユッ

「っ!?!」

とうとう横っ腹に一撃を受けてしまった。当たる寸前に身体を捻らせたことで、運良く傷を浅くすることが出来て助かったが、避けるのに失敗していたらと思うとゾツとする…。

「…はあゝ、何かつまらん。とつとと帰りや?」

「な…なん、だと?!」

傷を受けた腹部を手で抑えつつ、張遼に反論の意思を示す。

「うちはこんな形で悼ちゃん和雌雄を決するのは嫌やし、何かこう…手応えっていつか張り合いがないねん。だから、早よどこへでも行き?」

悔しいが、ここで退かなければ確実に痛手を負うことになる。これ以上の損害を避けるためにも…。

「くっ!?!…この借り、必ず返させてもらうぞ。…秋蘭、残存部隊を

集めて急いで撤退するぞ。」

「…了解だ、姉者。」

秋蘭が新たに部隊を再編成し、どうにか撤退することが出来た。もしここで見逃してもらっていないければ、私と秋蘭は二度と華琳様に会うことは出来なかっただろう。

こうして、40万の敵軍を相手に60万もの軍勢で攻めたこの戦いは、我らが壊滅的損害を受けたことで幕を閉じた…。

第四十八話 狩人くツンテ蓮華を飛び越してヤンテ蓮華へく（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等があれば、よろしくお願いします。

第四十九話 使者の代理を立てるなら、それ相応の人を

魏の侵攻を退けてから2週間後、曹操から使者が送られて来た。今は城外で待たせ、皆でどうするかを話合っている。使者が送られた理由は多分、先の戦で兵士が毒を使用した件についてだろう。

「それで、どうするの雪蓮？ 使者を迎え入れるの？」

「…そうね。まずは相手がどの程度の誠意を見せてくれるのか、見てみましょう。もしもそれ相応の使者でなかったり、全然誠意が感じられなかったら、その場で斬り殺したって構わないでしょ。」

「…そう。じゃあ俺が迎えに行つて来るよ。」そうか、では頼んだぞ。」

早速街に出て、使者が待つ城外へと向かう。そこにいたのは、魏にいた際、一番行動を共にしていた人達だった。

「もしかして、その使者として送られて来たのは、お前達3人か？」

使者として送られたのは、楽進と李典と于禁だった。

「…はいなの。この通り、華琳様から謝罪の文も預かってあるの。」

「まあ、文とかは別にどうでも良いんだけど…。それ相応の視線に晒されることは、覚悟しておいた方が良くもしいれない。」

「…んなもん、わかつとるわ。はあ、うちは絡繰の細かい部分の作業が、まだ残ってるいうのに…。」

「なんだ、あまり乗り気じゃないみたいだけど？」

「乗り気なわけ無いやろ？」

李典は少し面倒くさそうにしていた。今だけだとは思っけど、一応忠告しておく。

「李典。その態度で孫策の前に立つたら、連帯責任で全員殺されると思っつけ。うちならやりかねないからな？」

「っ!？」

ちよつと脅したら、李典が急にビクビクし始めた。

「そんなに怯えなくても…。3人共、ちよつとここで待っててくれ。まず雪蓮に、伺いを立てて来る。」

玉座の間の前で3人を待たせておく。中に入り、使者のことを伝えようと、中に入れるように指示された。3人から武器を預かり玉座に招き入れると、呉の将達から、まるで汚物でも見るかのような視線が浴びせられ続ける。その視線に耐え忍ぶかのように、楽進達は奥歯を噛み締めて、雪蓮の前へと並んで立った…。

まさか、ここまでの侮蔑的な視線と重苦しい重圧に晒されることになるうとは。何より、呉の王である孫策から放たれる威圧感、華琳様にも匹敵するものだ。

「まず、貴方達の名前を名乗って貰える？それと、ここに来た目的

も。」

「…はい。我が名は楽進、孫策殿から見て右手にいるのが李典、左手が于禁と申します。本日は我らが主である曹操様の命より、先の戦の件で起きたこちらの不徳の致すところについて、謝罪をするために参りました。こちらは、曹操様より受け賜りました謝罪文となります。どうぞ、お受け取り下さい。」

孫策殿の前に立ち、手紙を手渡す。孫策殿がその手紙を読んだ後、周瑜殿にもそれを手渡した。

さっきまで面倒くさそうにしていた真桜も、沖原殿の言葉が効いているのか、背筋をしゃんと伸ばして立っている。沙和は、言わずもがなだ。

「そういえば邦祐、彼女達の役職はどういったもののかしら？」

我らに聞けば良いことを、どうして沖原殿に聞く必要が…？

「彼女達の役職は、一刀…魏の御遣い直属の親衛隊であり、街の警邏隊を纏める隊長達でもある。まあ、呉で言うなら明命辺りかな？」

「じゃあ、劉備が曹操の領地を通る際は、誰が使者を？」

「愛…げぶんげぶん、関羽だ。張飛ちゃんと並んで、劉備ちゃんに最も古くから仕えている猛将であり、劉備ちゃんからの信頼も厚いから、彼女の右腕といっても過言じゃない。うちじゃ、冥琳とか祭つてところか？」

「そうなるかしらね…。それにしても、曹操はそれなりの立場の人

間を使者に来させる割に、自分が使者を送る時は大した役職の間を送らないのね。今回の使者で、よく分かったわ。」

「何だと!？」

「ちょ、ちょっと凧ちゃん、落ち着いてなの!!」

「そ、そうやで凧?今騒いだら、うちら殺されてまうやんか!？」

「…済まない。」

沙和と真桜のおかげで、落ち着くことが出来た。

「孫策さん、ごめんなさいなの。」

「いいわ、許してあげる。…でも、次は無いからね？」

肌に突き刺さる殺気にも似た重圧に、私達は首を縦に振るしか出来なかった。逆らえば、死。武器を預けている我らに、凶刃を防ぐ手立ては無い。もし2人に止められていなければ、私達は死んでいた。

「他に何か話すことは？」

特に何もないので、沈黙を返事とする。それを、孫策殿も答えとして読み取った。

「なら、あの子に伝えておきなさい。今回は勘弁してあげるけれど、次はそれなりの地位の人間を使者として送りなさいって…。さあさあ、魏の使者様のお帰りよ? 邦祐、彼女達を街の外までお願い。」

その後我らは、沖原殿に連れられて街の外まで連れて来られ、そのまま魏へと帰って行った…。

魏から使者が送られた日の晩…冥琳と穩の仕事の手伝いで、治水工事の費用やら街の状況やら農耕の途中経過やらの資料を纏めていた。そのせいですっかり遅くなり、晩飯を食いつばぐれた。これも全て、雪蓮が冥琳の追跡から逃がれてしまったが故の皺寄せと、2人に見つかってしまった自分の運の無さが原因だ。

仕事が終わりに、とりあえず食堂に行けば何かしらあるだろうと思っていたけど、食堂に余り物は一切なく、道具は全て綺麗に片付けられた後だったようで、俺の甘い考えは脆くも崩れ去った。

「あゝ、腹減ったあー！。」

「…あの、どうかしましたか？」

振り向くとそこにいたのは、他の侍女とは違う、メイド服を着ていた月ちゃんだった。今思えば、メイド服はどういう物かって、誰かに教えてないはずなんだけど…。まあ、今はどうでもいいことだ。早くこの空腹をどうにかしなくてはいけない。

「ああ、月ちゃん。実はね、文官の仕事を手伝ってたら晩飯を食べ損ねちゃって。食堂に何か無いか見に来ただけど、何も無くてどうしようか困ってたところなんだ。」

「よかったら、私がお作りしましょうか？」

「え、良いの？今日はもう仕事終わりなんじゃ？」

「大丈夫ですよ。いつか邦祐さんに作ってあげようと思って、一杯練習しましたから。」

そう笑顔で答える月ちゃんの言葉に…。

「本当に!?!…じゃあ、お願いしちゃおうかな。」

あっけなく、甘えることにした。

そういえば、董君雅さんが月ちゃんを薦めて来てたっけ。洗濯とか掃除はスムーズにやってたけど、もしかして料理までも上手かったりするのかな? まあ、悩んでも仕方ない。俺の疑問は、食堂で解決されるだろう。

食堂に着くと、俺は椅子に座って大人しく待ち、月ちゃんはエプロン…この時代だと前掛けを付けて厨房へと向かった。

「じゃあ今から作るの、ちょっと待ってて下さいね? ん、何作るのかなあ?」

そう言いながらも、次々と使用する材料を用意して行く。本当に料理できるのか、一瞬心配になったが、それは杞憂に終わった。手慣れていると言えば良いのか、明らかに料理上手と言える手つきだった。

「凄いな月ちゃん、もしかしたら食堂の料理長よりも手つきが良いんじゃないか?」

「そんなこと無いですよ? あっ、もうそろそろかな?」

月ちゃんが忙しく動き回ること数十分、ついに料理が完成した。運ばれて来た料理は、回鍋肉と芋の煮付け、それと青椒肉絲に白飯だった。

「あの、あまり時間も材料も無くて、これくらいしか作れなかったんですけど…。」

「これだけあれば十分だよ。それじゃ、頂きます。」

箸を持ち、まずは回鍋肉から口にする。

「……………っ!？」

「あ、あの、美味しく無かったですか？」

月ちゃんは、不安そうな眼差しで俺の方を見て来る。

「美味しい!!こんな美味しい料理、生まれて初めてだ!!」

「へう／＼／＼／＼。本当ですか？」

ほっとしたのか、さっきの不安な顔とは一変して、今度は花も恥じらう笑みを浮かべた。いやはや、月ちゃんの笑顔を見ると癒されるなあ。

「もちろん、本当だよ。いやー、月ちゃんは誰に聞いても、お嫁さんにしたいたい女の子第1位に選ばれそうだな。これは、董君雅さんが薦めて来たのも分かる気がするよ。」

「…何の話ですか？私、そんなこと一度も聞いたことありません。
…詳しく、聞かせてもらっても良いですか？」

じーっと、こちらを見つめて来る。これは、逃げられそうにない。

「実は以前董君雅さんに、月ちゃんをお嫁さんにどうかって言われてたんだ。でも、当人である月ちゃんの意味も聞かずに話を進めるのはどうかと思って、ゆっくりと話せる機会を窺ってたんだけど、ね。洛陽の一件からあちこちに遠征しっぱなしで、話を切り出せなかつたんだよ。黙っててごめんね？」

「いいえ、良いんです。…お父さん、お母さん、グッジョブ。」

「月ちゃん、今何が言っ「何でも無いです／＼／＼／＼。」「そ、そう？それで月ちゃん、この話はどうするつもりなの？」

「私は、その、森の中で助けて頂いた時から、ずっと邦祐さんのこと、慕ってました／＼／＼／＼。だから、その、あうう／＼／＼／＼。」

そこまで言うと、顔を真っ赤にして俯いてしまった。月ちゃんがここまで勇気を振り絞ったのだから、ここからは俺が伝える番だ。

「月ちゃんさえ良いなら、これからも俺の傍にいて支えて欲しい。
…駄目、かな？」

「…その言い方は、ずるいです／＼／＼／＼」

瞼に少し、涙が浮かんでいた。その顔を見せぬようになのか、抱き付いて来る。指先で、ちよっとだけ服を摘まんてる辺りが、また可

愛らしい。そのまま、月ちゃんの頭を撫でようとした…その時だった。

「「らそこ、何やってんの!」」

「きゃっ!?!…え、詠ちゃん?」

いきなり現れた詠ちゃんが、月ちゃんと俺の間に割り込んで来る。

「どうしたの月、泣いてるの!?!もしか邦祐、あんたが月のことを泣かしたんじゃないでしょうね?」

「違う違う!俺は泣かしてなんかいないって!」

詠ちゃんはじっと俺の目を見て、発言の真偽を見定めようとしている。

「…そう、ならいいわ。それよりも月、なかなか部屋に戻って来ないから心配したじゃない!?!さ、もう遅いし、部屋に戻るわよ?」

「う、うん。あの、それじゃ、邦祐さん…。」

「片付けはやっておくから、今日はもう休んでくれ。…お休み、月ちゃん。」

そう言うってから、月ちゃんの額に軽く唇を当て、頭を撫でてあげる。

「つつつ!?!?// // // //」

月ちゃんは顔を真っ赤にしたまま、お辞儀を一度して駆け出して行く

った…。

「さてと、片付けて早く寝よう。それと明日は無理やり椅子に括り付けてでも、雪蓮に政務をやってもらわないと。いや、それならいつその事、仕事しないなら本当に禁酒にすべきと進言するべきか…？これは明日、冥琳達に相談しないと。」

残す大きな戦は赤壁の戦いのみ。これが終われば、今みたいに何てことない日常だけに頭を悩ませるような、戦争なんかしなくても良くなる時代が到来するのか、はたまた戦争は続くのか…。それはまだ誰にも、俺にさえもわかりやしない…。

第四十九話 使用者代理を立てるなら、それ相応の人を（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしくお願います。

もしよかったら、活動報告のアンケートに意見を下さると嬉しいです。なかなか、次回作の初期設定が決まらないもので…。

第五十話 冥琳の治療〜君は、化け物を見たことがあるか？〜（前書き）

とうとう五十話（主人公設定抜けば、次回が五十話ですが…）。今回は、ちょっとした番外編的なものになります。

引き続き、活動報告のアンケートのご協力をお願いします。

第五十話 冥琳の治療君は、化け物を見たことがあるか？

今日は久しぶりの休みを貰い、今は城の中をぶらついている。街に繰り出せば何かしらあることは分かっているけど、今日は野良猫に負けず劣らずな日向ぼっこライフを、思う存分満喫したい気分なのだ。そのために日当たりの最良な場所を探していたんだけど、その場所を見つけるよりも先に、明らかに体調不良にしか見えない冥琳を発見した。

「おい冥琳、大丈夫か？」

「…邦祐か。心配ない、大丈夫…ごほっごほっごふっ。」

せき込む際に口を抑えていた手には、吐血によって付いた血が見えた。

「…冥琳、前に俺が渡した薬、ちゃんと飲んだか？」

「ああ、飲んださ。たしかに病も治って身体も楽になったし、疲れも取れた。しかし、ここ最近また体調が悪くなってな。それでも政務を休むわけにはいかなかったから、医者に見せる時間も無かったおかげで、薬を飲む前に逆戻り…ごほっごほっ。」

「分かったから、今日は大人しく寝てる。雪蓮と穩達には、俺から伝えておくから。」

「…そうさせてもらおう。」

冥琳はだるそうな身体を引き摺りながら、部屋へと戻って行った…。

一度は治った病だ。またあの薬を飲ませれば、完治するはず。そう思い、部屋へと戻り、次元バッグから薬を探しだすと、一通の手紙が入っていた。

「…これは、じいさんからの手紙…なのか？」

急いで封を開けて中を確認すると、そこには知りたくはなかったけど、それと同じくらい先に知れてよかった事実が書かれていた…。

『お主の置かれてる状況はわかっとなるから言っておくが、妙薬は一度きりしか効果を持たん。それ以上は、逆に病をさらに進行させる毒となる。この薬以外の治療方法をどうにかして見つけるのじゃ。なに、あんだけぶツ刺されても生き残ってたくらい、お主は運が良い。きつと何とかなるはずじゃ。ついでに教えておくと、あと3日以内に何とかせねば、史実に沿って周瑜は赤壁で死ぬことになるから急ぐのじゃぞ。』

あと3日…。どんな手を使っても、方法を見つけないと。冥琳は呉の柱石だ。いなくなられたら、色んな面で呉は崩壊しかねない。

「まずは、雪蓮達に状況を伝えないと…」

雪蓮の部屋に行き状況を伝えようと、雪蓮は血相を変えて部屋から飛び出して行った。行先は一つしかないから、考えなくても分かる。次に穩と亜莎に状況を伝え、軍全体の士気に影響させない様に努めてもらうと共に、文官を総動員してでも冥琳の欠けた穴を埋めて、冥琳が少しでも長く休める状況を作るように頼んだ。

それから俺は、病を完治させる方法ないし医者を探すために城を飛

び出した。そこで、思わぬ出会いをすることも知らずに…。

建業の街中を駆け抜ける。少しでも早く、手立てを見つげるために。すると、街中で蹲っている老人の男性がいた。

「爺ちゃん、どうした？気持ち悪いのか？」

「…何だか、胸が苦しくての。こうしていればその内良くなるかも思ったのじゃが、良くならんもんで。動きたくても動けんし、医者に見せようにも、金が…。」

「金なら心配するな。誰か、この辺りに医者はいないか！！いたら、この爺ちゃんを見てやってくれ！！」

しかし必死の叫びも虚しく、行商人の声に掻き消されていく。こっちは冥琳の治療方法も探さなきゃならないのに…！！

そこに、若い紅い髪をした1人の男が近寄って来た。

「その老人はどうした？」

「何だか、胸が苦しくなつて身動きが取れないみたいなんだ。必死に医者はいるかとか叫んでみたけど、街の喧騒に掻き消されてしまつて…。」

「そうだったか。だが、安心しろ。俺は華佗。大陸を旅しながら医療を行っている医者だ。その老人、診せてもらえるか？」

「ああ、頼む。」

華佗……。どこかで聞いたことがあるような……。もしかして、史実で伝説の名医と言われていたあの華佗か！？彼が本物なら、冥琳の病も治せるかもしれない。

「ふむ、たしかにこの老人の胸の部分には病魔が巣食っているな。急いで治療しなければ。どこか治療に適した場所はないか？えーと……？」

「沖原：沖原邦祐だ。俺に真名は無いから、好きに呼んでくれていい。それより華佗、治療する場所なら城に行こう。そこなら、寝台に空きがある。それと、城にもう1人診てもらいたいのがいるんだ。爺ちゃんを運ぶのは俺に任せろ。」

「わかった。では邦祐、城まで案内してくれ！！」

老人を背負い、元来た道を華佗と共に逆走して行く。城の医務室に案内し、老人を寝台へと寝かせる。

「そういえば華佗、さっき爺ちゃんの胸に病魔が巣食っているか言っていたけど、分かるのか？」

「ああ。俺は気を使うことで、身体のどこに病魔がいるのか、把握すること出来る。そして、その病魔を打ち砕くのは、これだ。」

華佗が取り出したのは、何本もの鍼だった。そういえば、史実の華佗も鍼治療においては非凡の才能を持っていたって、何かに書かれていたっけ。その鍼さばきが見えるだけでなく、冥琳の完治も夢じゃないかと思うと、俺のリアルラックもなかなかなものだ。…確実に一生のうちの半分くらいは、これで消費したと思うけど…。

「それじゃ、今から治療を始める。…はああああー！ー！ー！」

華佗の周りの空気が変わり始める。それと共に、華佗の手にしていた鍼も光を帯び出した。

「…我が身、我が鍼と一つとなり！！一鍼同体！！全力全快！！必察ひつちゆう必治癒…病魔覆滅！！げ・ん・き・に・なれええええええええええええつ！！」

手にしていた鍼を、老人の胸へと撃ち込んでいく。…てか、なんか超熱血体育会系アニメみたいなノリと叫び声だな。

「…病魔、退散。」

どうやら治療が終わったらしい。老人の顔色は、治療前と比べて段違いに良くなっていた。

「どうだ爺ちゃん、胸の痛みは取れたか？」

「おかげさまで、この通り元気になりました。…あの、お代の方は？」

「さつきも言っただろ？華佗、お代は？」

「そういう話は後だ。それより、もう1人の患者はどこにいる？」

「今連れて来る…と言いたいけど、ちょっと動かさそうにもない。来てもらっても良いか？」

流石に、重体になりかけてる冥琳を運ぶのはまずい。

「分かった。それじゃご老人、お大事にな。」

「よし、それじゃ行こう。誰か、この爺ちゃんを頼む。」

城にいた兵士に老人を任せ、冥琳と雪蓮のいる部屋へと急いで向かった…。

部屋の前に着き、入っても大丈夫かをノックして確かめる。

「冥琳、雪蓮、入っても良いか？」

「…ああ、ごほっごほっ、入れ。」

扉を開けて中に入ると、さっきより幾分かは容態が落ち着いた冥琳の手を、雪蓮が心配顔でしっかりと握り締めていた。

「…邦祐、その人は誰？」

「紹介する。彼の名は華佗、さっき街で偶然出会った医者だ。」

「…その者は、本当に私の病を治せるのか？」

「…やってみなきゃ分からない。でも俺は、完治させてくれると信じてる。」

「任せておけ。我が五斗米道ゴトドウエイドに治せぬものは、恋の病くらいだ!!」

はつきりと答え、冥琳の前に立つ。先程の老人の時と同じように気を使って、どこが悪いのかを隈なく探す…。

「見つけたぞ。彼女に巣食う病魔は、肺にいる！！…かなりデカイが、我が辞書に不治の二文字はない！！」

病を患っている原因を見つけ出した華佗は、鍼を取り出し再び集中し始める。

「…我が身、我が鍼と一つとなり！！一鍼同体！！全力全快！！必察一必治癒…。病魔覆滅！！でやあああああああつ！！」

さつきと殆ど変わらない掛け声で、冥琳の身体へと鍼を次々と撃ち込んでいった。

「…病魔お前はもう、死んでいる…。」

決め台詞を言い切ると同時に、冥琳の身体が光に包まれた。どうやら、治療が完了したらしい。てかさ、この決め台詞言ってる時点で、絶対現代っ子だよな！？

「しばらく様子を見る必要があるが、一先ずは彼女を蝕む病魔は打ち碎いた。これで苦しむことはないだろう。」

「本当に！？冥琳、気分はどう？痛いところは？」

雪蓮は直ぐさま冥琳に近付き、本人に状態を確認した。

「…大丈夫よ、雪蓮。だから、少し落ち着きなさい。華佗と言った

な。私の身体を治してくれたこと、感謝するぞ。」

「私からもお礼を言わせてもらおうわ。ありがとう。」

2人は笑顔で、華佗に礼を述べた。

「そつだ雪蓮、彼に何か恩賞を…。」

「俺は医者であり、人々を病から救うことこそ五斗米道最大の教え。当然のことをしたまでだ。それに、俺にとっては患者やその周りにいる人の笑顔と感謝の言葉こそが恩賞だ。どちらも既に貰っている。だから必要ない。」

「ならせめて、今度また建業に来ることがあつたら城に寄つてちよつだい。その時は、精一杯持て成させてもらおうから。」

「分かった。さて、それじゃあ俺は失礼させてもらう。連れがいるんでな。」

そんな話は聞いてなかったけど、勝手に連れ出したことを謝っておかないとな…。

「待つてくれ。勝手に華佗を連れだしたことについて、連れの人に謝っておかないといけないから、俺も途中まで一緒に行く。」

華佗と共に城を出て、街を歩く…。

「お、いたいた。邦祐、あれが俺の連れだ。」

指差す方を見ると街の外に2人の人物が見えた…。片方は俺よりも

背の高い、上は白のマイクロビキニに赤いネクタイ、裏地がネクタイと同じ色した紺色の上着を羽織り、下は捻り禪という格好の白髪頭のおっさん。もう片方も俺より背が高く、上裸にピンクのビキニという格好、髪の毛はもみあげ以外は禿げ、そのもみあげもピンクのリボンをあしらえた三つ編みのおっさんだった。

「お、おええええええええ……。」

余りの気持ち悪さに、街を守るための外壁の近くにリバーズしてしまった。その後、急遽その場で華佗に治療してもらうはめになったことは言うまでも無い。俺の治療を終えた後、化け物達を引き連れた華佗一行は、建業を去って行った。

今回得たものは、冥琳の健康。その代償は、化け物2体を同時に見てしまったこと……。

第五十話 冥琳の治療〜君は、化け物を見たことがあるか？〜（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

第五十一話 同盟く呉蜀と蜀呉、どっちでも良くない？

雪蓮襲撃の件についての使者が送られてから、もう半年が経とうとしていた。曹操の下から帰還させたアインスとツヴァイからの報告によると、呉との戦で受けた傷跡は既に癒え、今では40万もの大軍勢に膨張しているとのことだ。呉はどんなに兵を掻き集めても8万強が限界。鍵を握るのは、益州へと向かった桃香ちゃん達だろう。最低でも、7万はいて欲しいというのが、呉軍全員の本音だろう。

…問題は一刀だ。赤壁で戦うとなると、苦肉の策を講じても、逆手に取られて祭が殺される可能性が非常に高いから使うことは出来ない。だから必然的に、連環の計も使えないということになる。それでも、兵力差をひっくり返すためには火計を用いるしかない。問題は、苦肉の策も連環の計も使わずに、どうやって火計を成功させるかだ。東南の風が吹いたところで、燃やすための火種が無ければ、どうしようもない…。

だが、問題はそれだけじゃない。曹魏が本格的に南征を始め、現在は江陵にまで軍を進めていたのだ。今は祭と思春、それに霞の3人が防戦の指揮を執り、俺も単騎で出撃しているが、圧倒的兵力差には抗い切れず、手の打ちようが無い状態になりつつあった。

「いや、参ったねこりゃ。連合の時以上に、倒しても倒してもきりが無い。これじゃ防衛線が破られるのも、時間の問題…かもな。」
事実、3人が指揮していても、戦線が徐々に押し上げられつつある。このままじゃ洪水で決壊したダムのように、敵兵が流れ込んで来てしまう。

「そうなる前に、霞達の救援に行かないと…!!」

考えたら、即決行。反転して、今まで通って来た道を逆戻りする。今戻れば、多少は皆の負担を減らすことが出来るはず。俺は、全力で戦場を駆け抜けて行った…。

「霞、祭、思春、無事か!？」

「儂らは無事じゃ。しかし、このままでは突破されるのも時間の問題じゃろつて…。」

「皆さん!!」

声のする方に向くと、亜莎が約2万の兵を連れて援軍に来た…と思いきや。

「冥琳様からの指示です!!江陵は捨て、一度建業に退いて下さい!!」

「江陵を捨てるじゃと!?!あやつは一体、何を考えておるのじゃ!!」

「実は先ほど、劉備の下から使者が送られて来まして、劉備の軍が敵の輜重隊を叩き、私達が撤退するまでの時間稼ぎをしてくれるとのことです。」

「その使者っていうのは?」

「冥琳様は、孔明殿と呼んでおりました。」

…朱里ちゃんが使者として来たってことは、同盟の件についてだろ
う。洛陽で雪蓮が結んでおいてくれたおかげで、色々とすんなり決
まってるさ。

「それじゃ…三十六計、逃げるに如かずってね。祭！」

「分かっておる。全軍、建業へと退くぞ！」

敵が有利になってしまつのは、この際仕方が無い。建業へと撤退し
た俺達は、一日休憩を取った後、全軍で河口へと進軍した…。

河口に着いてから、半月が経った。桃香ちゃんの軍の手助けもあ
り、曹魏の侵攻速度は急速に落ちた。しかし江陵は落とされてしま
い、現在は曹魏の態勢を整えるために使われている。だが、こつち
も河口で桃香ちゃんの軍と合流することが出来た。その後両軍は、
曹魏より一足先に赤壁の地に到着し、陣を構えている。聞く所によ
ると、桃花ちゃんの軍の所持する兵数は約8万、悪くない数だと言
える。それでもまだ、到底曹魏には追い付かないけど…。

「やあ、久しぶりだね、桃香ちゃん。皆も久しぶり。」

近くにいるのは、桃香ちゃん、愛紗、鈴々ちゃん、星の4人だった。

「そうですな。我らと会うのは、かれこれ一年ぶりではなからうか。

」

「一年か…。長いようで短かったな。…そういえば、見知らぬ顔と
見知った顔が増えてるんだけど、とりあえず紹介してもらえん？」

「うん。愛紗ちゃん、皆を呼んで来て貰える？」

「御意。」

愛紗が呼びに行っている間に、俺も呉の皆を呼びに行った。戻って来た時に愛紗の姿がまだ見えなかったから、ちよつとした質問を試みることにした。

「桃香ちゃん、今はどこに城を構えてるの？」

「えへへ、今は成都のお城に住んでるんだ。劉璋さんがあまりにも酷い政治しかしなかったから、皆で協力して追い払っちゃった。今は、私が蜀の王様なんだよ？」

笑顔でそう答える桃香ちゃん。うん、強かになったね。そして腹黒くもなった。

「桃香様、呼んで参りました。」

「ご苦労様、愛紗ちゃん。」

愛紗が連れて来たのは、祭に負けず劣らずな胸の大きさの妙齡の女性と2人と小さな女の子。何だかブツクジャツクみみたいな髪の子。野性味溢れる猫みみたいな女の子とその子分らしき子達。連合にもいた馬超と、その親族らしき女の子。特徴はちよつと太めの眉毛。それと、何故いるのか分からない袁家の3人。…何ともまあ、個性豊か過ぎる。

「初めて会う人は、初めまして。そうじゃない人は久しぶり。俺の

名前は、沖原邦祐つて言います。真名は無いので、好きに呼んで下さい。」

自己紹介を簡単に済ませた後、呉の全員も自己紹介を済ませた。董卓連合の頃からいた武将達については、全員知っているの、それ以外の人達に名乗って貰うことになった。

「じゃあ、とりあえず一番左の年「年…なんですか？」年上に見えなくもない素敵なお姉さんから…。」

とても良い笑顔だったが、目だけが笑っていないかった。あのまま年増とか言っていたら、俺は死んでいたかもしれない…。

「あらあら、お上手ですね？…我が名は黄忠。それとこの子は、私の娘の璃々です。」

この人が黄忠…。ということは、関羽・張飛・趙雲・馬超・黄忠という蜀の五虎将軍が揃ったというわけか。それにしても、黄忠が人妻だったとは…。意外すぎる。

「次はわしの番じゃな。わしは厳顔。それとわしの横にいるのは、部下の魏延じゃ。」

「…桔梗様からも紹介されたが、我が名は魏延だ。だが、貴様のような得体もしれない奴と、仲良くするつも」

「この馬鹿もんがっ！！」「ゴッソッ」

魏延さんに、厳顔さんの拳骨が落ちた。あれは痛そうだ…。

「き、桔梗様あゝ、どうして!?!」

「この馬鹿者が。桃香様も真名を預けている相手に、得体の知れない奴とは何事じゃ!?!さっさと訂正せんか!?!」

「は、はい。……くっ、よろしく頼む。」

「まあ、こんなのだが、わし共々よろしく頼むぞ?」

「はい、よろしくお願いし…痛っ、痛い!!!」

挨拶するのは良いけど、背中をバシバシと叩かないでくれ。本気で痛くてしょうがない。

「おお、すまんすまん。」

まったく…。何だか、豪快な人だな。

「次は美以の番にや。美以は孟獲なの「以下省略!!!」ニヤー!?!」

名前からして、南蛮というのは分かった。何だか戦場がニヤーニヤー騒がしくなりそうだから、ルディオ直伝の以下省略で、とりあえずカット…。

次は馬超か…。会ったのは連合以来だな。

「あたしのごとは知ってると思うけど、一応名乗っておくよ。あたしは馬超、字は孟起。こっちはあたしの従妹の馬岱ってんだ。ほら、たんぼぼ?」

「はい 皆、よろしくー」

「はい、よろしく。」

そして残るは袁家の3人…。もう何度も会ってるし名前も知ってるから、再び ルディオ直伝以下省略によりカット…。

それにしても、何なんだこの武将のクオリティの高さは…。五虎將軍に、諸葛亮と鳳統。そんなでもって敵顔に魏延、何か知らないけど南蛮大王に袁家の3人…。将達の質は、どの軍よりも頭一つ飛び抜けているだろう。この軍が呉と手を組むとか、既に戦力が過剰過ぎやしないだろうか…。

顔合わせが終わった後、一度お互いの陣へと戻った。今から二刻後に合同の軍議が始まる。敵を騙すには、まず味方から。この軍議で冥琳と祭は苦肉の策の下準備として、口論をするはずだ。何としても、それは阻止しないと…。

「冥琳、ちょっと良いか？大事な話がある。」

冥琳は、何が何だか分からない顔をしていたけど、お構いなしに人目に付きにくい場所で話をすることにした。

「何だ、その大事な話とは？」

「…冥琳、これから始まる軍議で、祭と口論を始めるつもりだったる？」

「…はて、どうして私と祭殿が口論をしなくてはいけないのだ？」

あくまでもしらを切り通すつもりか…。

「…苦肉の策。祭にも話さずに、即興でやるつもりだったんだろ？」

「っ！？」

確信を突かれたからか、冥琳は驚いた顔をしていた。

「やっぱりか…。たしかに、相手が祭なら出来ると思っけど、その策は止めた方が良く。魏には一刀がいる。祭が偽りの投降をしても、疑われて逆に殺されかねない。」

「ならば、どうするつもりだ？この兵数をひっくり返すなど、敵を内部から崩壊させない限り、真っ向勝負になりかねんぞ？」

たしかにそうだろう。なら、どうするか？苦肉の策にとって代わる、奇襲策は…。

「冥琳…。屁理屈でも嘘でも、どんなことでも構わないから俺への文句を、軍議が始まるまでに挙げられるだけ挙げておいてくれないか？」

俺の言ったことについて少し考えていたが、その意図をどうやら掴んだようだ。さすが冥琳ってところか…。

「…わかった。何だがぼんやりとはあるが、お前の考えは読めたよ。それじゃ私は、とりあえず言えそうなことを絞り出しておこう。」

「よろしく頼むよ。それじゃ、また軍議の時に…。」

その場に冥琳を残し、俺はまた別の、人目の付きにくい場所に向かった。

「お前たち、全員いるか？」

「…全員揃っております。御主人、今度は何をされるおつもりで？」

「悪いが、今は詳しく説明出来ない。でも、お前達にやって貰いたいことがある。」

「…分かりました。ですが、後で話して頂きますよ？」

無理無茶を言っているのは分かってる。それでも、何を言わずについて来てくれるのは、とても心強かった。出来た部下だよ、本当に…。

「ああ、約束する。まずアインスとドライは、俺の指示があるまで待機していてくれ。それで、ツヴァイとフィーアとフュンフの3人は、兵士達に紛れ込んだる魏の細作を消しつつ、変装して魏の陣営に行つて貰いたい。時期的には、呉と蜀の合同軍議が終わつてからだ。そして、その軍議の場で起きたことを曹操達に伝えた後、敵船に兵士として潜入して、待機していてくれ…。それじゃ、行動を開始しろ！！」

「……………御意！！……………」

部下達が四方八方に散って行った。俺も冥琳に対して、有ること無

いことを言う準備をしないといけないな…。

演劇経験0のこの俺が今から行うは、苦肉の策に代わる一世一代の大芝居。敵を欺くためにも、まずは味方を欺かなければならない綱渡りな策…。そんな張り詰めたプレッシャーが隣合わせだとしても、俺は自らの不安を隠して、誰よりも大胆不敵に笑っていなければならぬ…。

第五十一話 同盟、兵蜀と蜀兵、どっちでも良くない？（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

第五十二話 仲間割れく部下の新しい一面く

私達は今、江陵で軍の再編と兵糧の確認、兵站との連絡を取り合っていた。

「華琳様。たった今、呉に放っていた細作より報告が送られて来ました。…どうやら、孫策と劉備が同盟を結んだようです。」

「…想像以上に素早いわね。さすがは、周公瑾と諸葛孔明と言ったところかしら…?」

もしくは、あの男か…。

「はい…。連合以来特に関係を持ったなどという報告が無かった両軍が、まさかこんなにも早く同盟へと漕ぎ着けるとは…。」

「それだけ、華琳様のことを脅威と感じているのでしょね。」

「さすがに2人共、単独で我らと相對するような馬鹿ではないという事か…。」

「個別で戦えば負けるから同盟を組んだ?ふん、そのような脆弱な同盟など、この夏侯元讓が粉碎してご覧にいれましょう!」

ふふつ。頼もしいわね、春蘭。

「そうは言つがな…。敵が結盟したということは、それだけ敵の数が膨らんだということなんだぞ?その辺りのこと、分かっているのか姉者?」

「多少増えたところで、我ら曹魏に敵うわけが無かるう！！我が国は、大陸で最も強く、天下に名を轟かせる国なのだぞ？劉備や孫策なんぞに負けていられるか。」

「良い心掛けね春蘭。ならば、劉備と孫策の両軍を、見事打ち砕いて御覧なさい。」

「御意！！」

あとは、敵の動向だけでも…。

「桂花、両軍の動きはどうなっているのか教えなさい。」

「現在、両軍とも本拠地を出て、長江流域の赤壁に陣を構えております。」

「そうか。ならば準備が出来次第、我らも赤壁へと向かい、そこで劉備と孫策の両名と雌雄を決し、堂々と天下をこの手に掴み取る！！」

その後、準備が整った我が軍は赤壁へと進軍した…。

もうそろそろで、合同の軍議が始まる時間だ。

「アインス、ドライ、今から呉の兵士に変装して、いつでも軍議の場に入って来られるようにしておけ。…俺は今から、軍法会議に掛けられるようなことをして来る。」

「御意。」

そして、日が傾き始めた頃に呉と蜀の合同軍議が始まった。しかし、両軍とも策という策は浮かんで来ず、集まった将達はただうんうんと唸っているだけで、徒に時は過ぎて行った。

「これが軍議ねえ…。揃いも揃ってうんうん唸ってるだけで軍議だなんて、よくもまあ言えたもんだ。」

さあ、大立ち回り第一章の始まりだ。俺の芝居、こんな出だしではれてくれるなよ…!!

「黙れ邦祐。いくら腕が立つとはいえ、我ら孫呉に拾ってもらった分際で、偉そうな口を叩くな。」

「…何だ周瑜、俺に喧嘩を売ろうつてのか？」

「口の利き方には気を付けろ、この下郎が。私は呉の大都督であるぞ。貴様は私の命令に、ただ犬のように大人しく従っていれば良い。」

「へえ、俺が犬とは、言ってくれるじゃねえか…。俺がいなきや連合の時に痛手を追っていたし、ここまで将や兵達が充実することはなかったはずだ。その俺を、犬と同類にするとはなあ…。周瑜、たかが文官のお前が俺を虚仮にするなんざ、傲慢過ぎるにもほどがあるってもんだぞ…!!」

「黙れ!! 所詮駒の一つでしかない貴様が、呉の頭脳であるこの私に盾突くな!! 己が身分を弁える…!!」

周りにいた将達はこの状況に混乱し、何が起きているのか分からなくなっていた。…よし、今んところは順調だな。

「身分だと…？笑わせんな！偏に呉がここまでのし上がって来れたのは、どう見ても俺の貢献が大きいだろ！！その俺を、その辺にいる犬と同じ扱いにすることが、お前の言う身分の違いだったのか！！」

口論は、さらにヒートアップしていく…。

「それに、俺はお前に拾ってもらった覚えは無い。俺を拾ったのは孫策だ。その孫策の寵愛に隠れて、よくもまあそんな嘘が言えたもんだな！！どうせ今の地位だって、その御自慢の身体を使って手に入れたもんだら？そんな奴が俺を侮辱するんなら、100年早いんだよ！！」

「…何だと！？」

「とつとと失せな周瑜！！お前なんざいなくてもなあ、軍師の代わりはいくらでもいるんだよ！！」

「言うに事欠いて、この私の代わりなどいくらでもいると言うか…！！もう良い。邦祐、貴様はもう呉の武官でも何でも無い！！」

「ほう…。俺の首を切るってのか…。」

この大立ち回り序章も、そろそろ終幕を迎える時だ…。

「上官に対する侮辱、命令不服従、それに主を冒瀆する発言…。貴様を武官から引き摺り落とすには、十分過ぎる理由である。」

一呼吸置き、最後の言葉を言い放った。

「失せるのは貴様の方だ、邦祐。貴様は軍規に則り、死罪に処する。鞭打ちの後に鎖で縛り上げて、小舟で長江に流してくれる。誰か、この無礼者を引っ立てよ!!」

冥琳、それはやり過ぎだと思っただけど…。まあ、こうなったら仕方ない。祭の代わりに、総攻撃のきっかけを作り出すとするか。

そして俺は、かなり乱暴に天幕から連れてかれた。もちろん、俺を引っ立てたのは部下の2人…。そして、この口論の真意に気付くのは、朱里ちゃんとやけに勘の鋭い雪蓮、良くて穏くらいだろう…。

邦祐さんと周瑜さんが軍議の場で口論を初め、邦祐さんが連れて行かれてしまった。でも私は、この口論に違和感を感じずにはいられなかった…。きつと何か意図があるはず。そう思った時、周瑜さん達の真意がわかった。これは策の一つなんだと…。でも、気付いていない人にとっては、あれはただの口論にしか見えないはず。

「周瑜、このような状態の貴様らと同盟を組んでいることに、我らはかなり危惧を抱いている。いくら何でも、あれは重罰過ぎるのではないか？」

「そうなのだ。これから力を合わせて曹操と戦おうって時に、あれは無いのだ。」

「愛紗や鈴々の言うとおりだ。…あれでは兵の指揮を削ぐこと、甚だしいと思うぞ。」

愛紗さん、鈴々ちゃん、星さんの順に、周瑜さんへと不平不満をぶつけた。それによって、軍議の場は険悪な雰囲気になっていく。でも、周瑜さんは特に動揺するでもなく、私に質問をしてきた。

「孔明、よもや貴様も同じ意見…ではなかるうな？」

「言葉を返さなくても、周瑜さんなら私の考えを分かってくれている…。そう思っています。」

「そうか…。」

私の返答に、周瑜さんは安堵した表情を見せるでもなく、視線を愛紗さん達へと向けた。

「今回の件については、呉内部のことだ。同盟を結んだとはいえ、内部の人事に関しては、一切干渉して貰いたくはないな。」

「…何っ!？」

周瑜さんの言葉で、愛紗さん達が殺気立ち始める。

「ま、まあまあ…。皆さん、今起きたことについて不安になるのも、分からなくはないですけど…。曹操さんとの戦に影響は無いと、軍師である私が保証しますから、今は抑えて下さい!!」

「ねえ朱里ちゃん、どうして影響は無いつて言い切れるの？」

「ここは尤もらしい話で…。」

「私達の絆が切れはしないように、呉の皆さんの絆も、これくらいでは切れやしないということです。それに、呉には恋ちゃんもいることですし…。」

桃香さまは、少し考え込む仕草を見せたが、すぐに普段の穏やかな表情に戻り…。

「…分かったよ。朱里ちゃんが言うなら、今のところはまだ静観しておくね。」

「はい！！詳しい説明は、後で皆さんにしますのです。…周瑜さん達も、安心して下さいね？」

「…ああ。雪蓮、一度この軍議を終わらせよう。劉備もそれで構わんか？」

孫策さんも桃香様も、特に何かを答えるでもなく、ただ頷くだけだった。それで一度軍議は終了し、私達はそれぞれの天幕へと戻って行った…。

その頃、天幕から引っ立てられた、もとい部下との連携で軍議の場から抜け出した俺は、自分の天幕にて、色々と準備をしていた。

「さてと、じゃあツヴァイとフィーアとフュンフは、伝えてある通りに魏の放った細作のふりして潜入した後、船の方へと移動してくれ。」

「細作として振る舞う際、どのように報告すれば良いので？」

「俺は呉の大都督である周瑜と激しく口論し、軍規に則り死罪が言い渡された。その内容は鞭打ちの後、鎖で縛り上げられ、小舟に乗せられ長江に流されるというものだった。こんな感じで頼む。」

「『御意。』」

返事と同時に、3人の姿が消える。さて、残った部下の2人に何をしてもらおうのかと言うと…。

「2人共、2、3発くらいずつ俺を鞭で叩け。」

「御主人、そういうのが好みなんですか？でしたら、お相手しましたのに…。」

「いや実はな…って、違うだろ！！何言ってるんだ、お前らは！！曹操の陣営に拾われた時に、鞭で叩かれた傷痕が無かったらおかしいだろ？」

こいつらは、揃いも揃って何を言ってるんだか…。まず俺に、そんな趣味はない。第一、俺には蓮華達がいるっての…。

「それもそうですな。それじゃドライ、とっとと始めましょう？」

「そうね。御主人、お召し物を…。」

「分かってる。」

ロングコートにベスト、Yシャツと脱いで行き、上裸の姿になった。

「それじゃ頼む。…なるべく優しくな？」

「それじゃ、そろそろ鎖で縛り上げられる頃だろうから、2人はこの手紙を冥琳と月ちゃんのものそれぞれに渡した後、小舟に先回りして俺の荷物諸々を運んでおいてくれ。」

「「御意!」「」」

この戦いの内容が史実と変わろうとも、俺達の勝利だけは譲ってやりはしない…。

第五十二話 仲間割れ〜部下の新しい一面〜（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしくお願ひします。

第五十三話 偽りゝ写真はいつ撮られたのか？

軍議が終わった後すぐに、私も冥琳に意見をぶつけた。

「冥琳、あれはどういうこと！？たしかに邦祐にも責められるところはあるけど、あれじゃ重罰過ぎるわ！！」

「ですが蓮華様、私はただ軍規に則っただけですよ？」

「だがっ！！」

「…蓮華様、今はただ何も仰らずに、“私達”を信じて下さい。今はそれだけしか言うことは出来ません…。」

冥琳は今、たしかに私達と言った。

「それは一体、どういう「私はまだやること」がありますので、これで失礼します。」ちよ、待て冥琳、冥琳！！」

冥琳は振り向きもせず、そのまま自らの天幕へと戻って行った。信じると言われても、何も分からないこの状況で、何をどう信じればいいと言っただ…。

それから数時間後、軍議の最中で決まった通り、邦祐が鎖で縛り上げられた状態で連れて来られた。

「…何か言い残すことはあるか？」

「特に…いや、蓮華、ちよっと。」

呼ばれた私は、とりあえず正面に立った。

「もつと近くに。…耳貸して。」

話すのはこれで最後かもしれないのに、耳を貸してだなんて…。不満に感じたけど、素直に寄り添い、耳を貸した。

「…蓮華、今からどんなことが起きても、俺と冥琳を信じ続けてくれ。それと、空を見ていて欲しい。もし曹操の下に流れ着いたなら、空に花を咲かせるから。もし見えたなら、冥琳に伝えて。」

「それってどういう…もう十分だ。」まだ話は…!

「蓮華様、お下がり下さい。思春、明命、蓮華様を。…船に乗せて流せ。」

「は、放せ!!思春!!明命!!」

「…しかし、奴は軍規に背いたのです。この事実を、お受け入れ下さい。」

思春と明命に腕を掴まれ、そのまま後ろへと下がらせられた。そしてその間に、邦裕は用意されていた船へと乗せられ、日も沈み切りすっかり闇に支配され始めた長江へと消えて行った…。

夕刻にほど近い頃、俺達は赤壁に陣を構え終えた。その時、放っていた細作が戻って来た。どうやら、重要な報告があるらしい…。全員が天幕へと集まった。

「華琳様、敵軍の陣地に放っていた細作から、報告が上がりました。」

「そう…。それじゃ、報告の方を聞かせて貰おうかしら？」

「はい。…それじゃ、そこのお前、早く報告なさい。」

3人いた中で、桂花が指名した細作が一步前に出て、報告を始めた。

「はつ。呉の大都督である周瑜と沖原が、両軍揃って行われた軍議の場で激しく口論、その後軍規に則り、男に死罪が言い渡されました。なんでも、鞭打ちの刑の後、鎖で縛り上げられて、小舟で長江に流されるとのことです。」

「…他に、何か得た情報は？」

「いえ、それ以外特には…。」

「ご苦労。ならば引き続き、敵陣に侵入し、情報を集めなさい。」

3人は敬礼して、天幕から出て行った。

「…しかし、意外なこともあるものだな。そう思わないか、姉者？」

「たしかに…。だが、奴の忠誠心も所詮はその程度だったということだ。ですよね、華琳様？」

「そうね。でも、細作の掴んだ情報が敵の罠による偽の情報だという可能性もあるから、各自警戒は怠らないように。」

「御意!!」

華琳は、この情報が偽物だった時の話しかしてない。じゃあ、これが本物だとしたらどうするのか…。

「なあ華琳、もし本当にあいつが流れて来たら、どうするつもりなんだ？」

「その時はその時よ。細作の報告と照らし合わせて、事実かどうか調べて行けばいいじゃない？それに、あれほどの武を持って余すくらないなら、この私が誰よりも上手く使いこなして見せるわ。」

人材マニアの華琳ならではの、悪い癖が出始めたな…。

「…沙和、真桜、念のため船の上から見張っておいてくれ。」

「御意なの（や）!!!」

今のところ、呉の宿老である黄蓋がこっちに下ろうとしているという報告は無い。やっぱこの世界は、三国志に似ているようで似付かない世界なのかもしれないな。何せ華雄が、関羽に勝ってしまったような世界なんだし…。それに黄蓋が来ないってことは、苦肉の策も連環の計も起きないってことだ。これで、うちが負ける要因になりそうなのは火計だけってことか。史実だと東南の風が原因だったはずだけど…。でもまあ、連環の計あつての火計って感じがしたし、大丈夫だろ…。

小舟で流されてから一刻経ったような、もっと経ってるような、

とりあえず数時間経過した。縛られているから、櫂を使って船を漕ぐことも出来ない。行先を知るは、この長江の緩やかだったたり急だったりする、河の流れのみ。照らすものも、月明かりのみ。…これで、曹操の陣営に辿り付けたりすんのかな？

「その船ー、ちょっと止まるのー。」

今、何か聞こえたような…？

「その船ー、黙つたらんと、さつさと止まりや？」

また聞こえた…？

「もうー！真桜ちゃん、あの船こつちに引き寄せようなのー！」

「おっしやー！！李典隊、誰でもええからあの船捕まえてきい。一番に捕まえた奴に…：夏侯淵將軍の寝巻姿の写真を贈呈すんでえー！！」

「うわああああー！！！！！！」

…この世界に無いはずの写真と、その一枚のために雄叫びを上げながら全力でこつちに突撃して来る兵士達^{へんたい}。…写真は一刀が教えたにしても、兵士達が怖すぎる。

「おっしやあああー！！俺が一番だー！！夏侯淵將軍の寝巻姿の写真、ゲットだぜー！！」

「くつそー、またお前かよー！！」

「ほんとだぜ。そついやあいつ、夏侯惇將軍が恐る恐る猫に触ろう

としての萌え写真も、苟？様が曹操様に怒られて恍惚だらしなの表情になつてる写真も持ってたよな？」

「マジかよ！？おい、どれでも良いから俺に一枚くれ！！なんなら、金も払うから！！」

…人の近くで、大声で叫ぶな。唾飛んでるだろ。それと兵士AとD、お前から自重しろ。お前らは変態紳士か！？…まあ、運良く曹魏の陣営の付近に流れ着いてたことだけが唯一の救いか。

「沙和ー、中身さつさと確認すんでえ？」

「分かったのー。」

于禁と李典の2人組と、仰向けで縛られてる俺の目が合った…。

「…真桜ちゃん、お兄さんが縛られてるの。」

「ほんまやなあ。とりあえず、華琳様に報告しとこか。おつしお前から、兄さんを華琳様のとこまで運ぶで。率先して運んだ奴には……。」

兵士一同、静まりかえって李典の言葉を待つ。

「沙和の下着姿の写真を贈呈したる！！」

ほれほれと言わんばかりに、李典は写真を見せつけ兵士達のやる気を引き出すとする…。

「ちょ、ちょっと真桜ちゃん、そんなのいつ撮ったの！？」

兵士の反応は…。

「……………いらね。」

「何でなのー！ー!?」

こいつら、何を呑気に漫才を繰り広げてるんだ…?

「…あのー、運ぶなら早く運んでくれないか?」

「おお、そやった。しゃあないから、うちが担いで行ったるわ。お前ら、船の中に荷物あったら、それも運んでくるんやで?」

李典に担ぎ上げられ、そのまま曹操のいる天幕へと運ばれて行った…。

曹操の前に運ばれた。船の中にあつた荷物も、すぐ近くに運び込まれている。天幕の中には、曹操・荀?・郭嘉・夏侯姉妹の5人。ここからは、大立ち回り第二章の始まりだ。…曹操には、ばれるかもしれないけど。

「久しぶりね、沖原邦祐。」

「ああ、久しぶりだな。それに他の奴も。」

「さて、どうして貴方がこのようなことになったのか、教えなさい。」

「…前にも話したが、俺はこの世界に転生させられた身だ。そして、呉に仕官するようにも言われていた。最初は言われた通りにやっていたが、だんだん呉という国に愛着を持つていった。だから反董卓連合の時のように、俺が出来るありとあらゆる手を尽くして、孫呉の再興や軍の強化、政や民政にと尽力した。戦でもそうだ。俺は先陣切つて戦つて来たたと自負してる。だが最近、呉の内部に武を軽んじる奴がいる。」

「その者の名は？」

「…周瑜だ。あいつは両軍揃つた軍議の席で、俺の武と実績を軽んじ、あまつさえ俺のことを犬だの駒だの言いやがった。そしてこの扱ひ。あいつは、呉は本当に俺を切り捨てた。もう呉には何の未練も…いや、霞達を置いて来たのが未練かな…。」

何一つ知らせずじまだったしな。恨まれ口の四つや五つと、ど突きの十や二十は覚悟しておかないと…。」

「でも、それ以外に未練は無い。この戦が終わつた後に皆を連れ出せば良いだけのことだ。だから曹操、俺は魏に下ろう。呉に切り捨てられた以上、曹操の三国統一の邪魔をする必要はない。」

「……………」

曹操の射抜くような視線が突き刺さる。まるで、見透かされているような感覚だ。でも、目を逸らすわけにはいかない。

「……………」

「…良いわ。ならば我が戦列に加わり、その力を存分に発揮なさい。」

「なっ！？華琳様！？」

「稟。沖原を案内し、他の皆と顔合わせをさせておきなさい。それと沖原、貴方は戦の最前線に立って戦ってもらおうわ。」

下って来た人間を、いきなり前線に回すか…。これは俺もやりやすいけど、逆に言えば、俺が何かしでかした時に、すぐに対処出来るようにするためだろうな…。

「貴方の働き、期待しているわよ？」

「曹操が驚くような活躍を見せることを、今ここで約束しよう。」

「ふっ。どのような驚きか、楽しみにさせて貰うわ。」

曹操は、不敵な笑みを浮かべていた。これはもう、曹操にはばれていると考えてもおかしくは無いな。

「それではこちらへ。」

得物である愛剣を背負い、バッグを手にして、郭嘉の後について行った…。

あの男の気配が遠のくと、すぐに秋蘭が口を開いた。

「…華琳様、本当によろしいので？」

「ええ。前線に配置して置きさえすれば、例え裏切ったとしても直

ぐに対処できるでしょう。しばらくは、このまま泳がせておきなさい。

「…はつ。」

「桂花、貴女は沖原の行動に目を光らせておきなさい。」

「御意!!」

それにしても、慎重な秋蘭らしいわね。でも私は、常に霸王たりえんがための、風評を得続けなければならない。そのためには、あの男に裏切りの可能性があるろうとも…。

「心配するな秋蘭。我らが全力で華琳様をお守りすれば良い話であるろう?」

「そうだな…。姉者の言う通りだ、私は何を弱気になっていたんだか…。」

「ふふつ。姉として振る舞う春蘭も可愛いわね。」

「あう////////。華琳様、おからかいにならないでくださいよ////////。」

私は負けるわけにはいかない。霸王として自らの覇道を突き進むために。そして、私の愛する者達のためにも…。

第五十三話 偽り／＼写真はいつ撮られたのか？（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

第五十四話 謀りし深夜の戦に備えて

郭嘉に連れられ、様々な所を案内され、一刀含め他の将達とも顔合わせを済ませた。その行く先々で見かけていた兵には、全員共通していることがあった。…兵士達の顔色だ。

「郭嘉、兵士達の顔色があまり良くないように見えたんだが…？」

「…はい。もともとこの軍の将と兵のほとんどが北方出身のため、船に乗った経験は訓練であっても、船戦の実戦経験がほぼ皆無なのです。なので皆、慣れない船での行軍で船酔いになってしまい、ともに動けないというのが現状です。」

「それはまずいな。呉には船戦に長けている人間がいるから、このままだと危険だ。案内は良いから、今すぐに曹操の下に行って話し合いをした方が良い。」

「…そうですね。では直ぐに、華琳様の所へ戻りましょう。」

それからすぐ、曹操の天幕に戻った。

「曹操、済まないが話がある。」

「…いいわ、入りなさい。」

天幕の中に入り、さっそく用件に入る。

「それで、何か用なの？」

「今、兵達を見せてもらっていたんだが…。兵達の船酔いへの対処はどうするつもりだ？」

「それに関しては、私も困っていたところよ。何か良い考えがあるのかしら？」

「そうだな…。船と船を、何かで繋ぐとかどうだ？例えば、鎖なんかで…。そうすれば揺れも小さくなって、兵達も陸地と同様に戦えるはずだ。」

「でもそれじゃ火を放たれたら、こちらの被害は甚大じゃないかしら？」

逃げ場がない以上、受ける被害は確実に大きい。まあそれが狙いでもあるんだけど…。

「この時期に吹く風は川上からだから、自らの失火やさらに川上から攻め込まれない限り、火計は無いと思う。今の風向きで火計を仕掛けても、仕掛けた本人が炎に包まれるだけだ。」

「…そうね。でも、肝心の鎖はどうするの？」

「それは心配いらぬ。すぐにでも用意できる。ちよつと待って、ほら出て来た。」

バッグの中から、じゃらじゃらと音を立てて鎖を出して行く。これにはさすがの曹操も驚きを隠せなかったようで、驚きの表情を浮かべていた。

「…一体、その鞆はどんな仕掛けなのかしらね…。」

「それは企業秘密だ。でもまあ、これで船同士を繋げられるから、兵士達の船酔いも治まる。ここに必要な分は用意しておくから、後はよろしくな。」

大量の鎖の山を曹操の天幕に置いて行き、俺は天幕から出て行った…。

華琳の天幕から、邦祐が出て来た。…何か用事でもあったのか？ちよつと聞きに行ってみよう。華琳の天幕に向かい、声を掛ける。

「華琳、今良いか？」

「ええ、平気よ。」

中に入ると、そこには大量の鎖の山と稟がいた。

「華琳、この鎖の山は？」

「信じられないことに、沖原が手荷物から出したのよ。それで、これを使って船同士を繋げれば、兵士達の船酔いを治められるって進言して来たわ。」

…その瞬間、俺の中で一つの可能性が浮かんだ。もしかしたら、邦祐が黄蓋の代わりに投降して来たんじゃないかと。だから俺は、華琳があまり史実のことを知りたがらないのを知っているながらも、華琳にその可能性を話すことにした。

「華琳、俺が知っている史実と今の状況を照らし合わせて考えた、

俺の予測を聞いてもらえないか？」

「一刀、私が貴方の知っている史実を知りたがらないのは知っているでしょう？」

「そんなのは百も承知だ。でもこれは、とても大事な話なんだ！」
もし邦祐が本当に黄蓋の代わりだとしたら、何の工夫もなしに鎖で船を繋げるわけにはいかない。

「仕方ないわね。話してみなさい。」

「…俺の知っている史実では、投降して来るのは黄蓋で、鎖で繋ぐことで船の揺れを抑える案を進言した。それに従った魏は、黄蓋の裏切りによって火を放たれ負けた。でも今は、邦祐が投降して来ている。でも、黄蓋と同じように鎖で繋ぐ策を提示して来た。もしかしたら、邦祐が黄蓋のように華琳を裏切って船に火を放って来るかもしれないから、注意しておいた方が良い。それに船を繋ぐのは、鎖じゃなくて、縄とか剣で簡単に切れる方が良いと思う。」

「一刀…。鎖で繋がなければ、そこでもう策は見破ったと言っているようなものよ。少し泳がせる意味でも、鎖で繋げるわ。その代わり、すぐに鎖が外せるような絡繰を真桜に作らせなさい。…沖原に気取られない様にね。」

「わかった。早速、真桜の所に行って来る！！」

華琳の天幕から飛び出し、急いで真桜の下へと向かった。

「真桜、ちよつと良いか？」

「隊長？ええよ。」

天幕の中に入ると、真桜が寝台に座っていた。俺もそれに倣い、隣に腰掛ける。

「実はな、船の揺れを抑えるのに、船同士を鎖で繋ぐことになった。そこで、真桜と工作部隊の兵士達に繋ぐのを手伝って貰いたい。」

「それは別にええけど、それなら別にうちのところじゃ無くて、ええんとちゃうの？」

「いや、真桜には早急に作って貰いたいものがあるんだ。」

「どんなもんや？」

「繋げてある鎖を、簡単に外せるようにする絡繰を作って貰いたいんだ。出来るか？」

これの有り無しで、戦況が大きく変わるはずだ。

「分かった。何かすごい無茶言われとる気がするけど、隊長からお願いやし、うちに任しとき！！」

「ありがとう、真桜！！！」

「ならうちは早速作業に取り掛かるさかい、邪魔せんとしてな。」
そう言われ、天幕から閉め出された。

その夜：真桜と工作兵により徹夜の突貫作業が行われ、船同士が鎖で繋がれた。その鎖の根元には、真桜の作った絡繰が取り付けられていた。翌朝、それを知らずに鎖に触ろうとした俺と凧と沙和の3人は、徹夜明けで機嫌の悪い真桜に怒鳴られ、真桜は寝るために天幕へと戻って行った…。

案を講じた翌朝：船を確認すると、どうやら鎖で繋いでくれたようだ。…鎖の根元にある絡繰が少し気になるけど、これでは風向きが変わるのを待っただけだ。夜になったら、蓮華に伝えてある通り、花火を打ち上げるとしよう。でも俺だけでやると疑われるし、何より寂しい奴だと思われそうだから、夜になるまでに何人が誘ってやるとしよう。

それから、夜になるまで色んな人を誘ってみた。結果、一刀と直属の部下の3人娘、後は許緒と典章のチビっ子コンビに、郭嘉と程？の軍師コンビが来た。さて、もう日も落ちたし、花火を始めるとしよう。

「一刀、これとこれ、あとそれを帆に当たらない場所に設置してくれ。」

「了解。それにしても、こっちの世界で花火が見られるなんて思わなかったぜ。」

一刀にも手伝って貰い、船の帆に当たらない所に花火を設置して、花火を打ち上げ始めた。赤や青、黄色に紫、それにオレンジと、色鮮やかな光の花が、夜空に舞い上がって行った。

「ほー、これはきれいですねー。」

「兄ちゃんの世界には、こんな綺麗なのがあったんだね。」

他の将達は何も口にせず、ただ花火に見入っていた。それだけでなく、兵士達もまた、初めて見る花火に見入っていた。…さてと、蓮華は気付いてくれるかな…？

邦裕は今頃、どの辺りにいるのだろうか？それよりもまず、生きているのだろうか？それを確認する手立てもない。もう会えないのかもしれないという一抹の不安を抱えながらも、別れ際に言われた言葉を信じて待っていた。すると…。

ひゅ~~~~~~~~……どーん、どーん、どーん…。

何事かと思いき空を見ると、そこには色鮮やかな花が、咲いては消え、また咲いては消えてを繰り返していた。

「もしかしてこれが、邦祐の言っていた花？…こうしてはいられない、すぐに冥琳に伝えないと…！」

急いで冥琳の天幕へと向かい、確認も取らずに中へと入った。

「冥琳、いるか!？」

「…どうしたのですか、蓮華様？昨日の件でしたら、お話しすることとは「そうではない!」…では一体、どうしたと言つのですか？」

一旦落ち付き、再度冥琳に話を始めた。

「邦祐に言われたんだ。空に花が咲いたら魏にいる証だから、冥琳に知らせてくれと…。」

「…そうですか。ではそろそろ、皆に事の全容を話し、そのまま軍議に入るとしましょう。誰がいるか!！」

「はっ。」

「今から軍議を始めるから、呉の船に集まるようにと、両軍の将達に伝える。」

「御意!！」

それからしばらくして、蜀の将達が我らの船へとやって来た。

「皆さん、お待ちせしました!。」

「なに、それほど待ってはおらんよ。それより孔明、説明の方は済ませてあるか?」

「はい。何とか納得して頂きました。」

「冥琳、一体何の話をしている?」

私には、何の話だかさっぱり分からない。

「お話す前に…。思春、明命、この辺り一帯の人払いを…。」

「はっ。」

人払いをするほど重要な話とは、一体何なのだろうか？考えても考えても、話の正体が掴めない。

考えを巡らせているうちに、思春と明命が戻って来た。

「それで冥琳、人払いをするほどの話とは？」

「蓮華様、実は…あの軍議の場での口論そのものが、既に策だったのですよ。」

「嘘っ!？」

あれだけ激しく罵り合っていたのが、策だったと言うのか!？周りの者を見渡すと、明命や亜沙は驚いていたが、どうやら祭と穩は薄々気付いていたらしい。思春は、表情を変えていなかったから、どうなのか分からなかった。姉さまに関しては、いつもの勘で気付いていたらしい。意外だったのは、霞や柳花達が全く驚いていなかったことだった。

「あれ、霞達は驚かないのか？」

「うちらは、月宛てに送られて来とった邦祐からの手紙を見せてもらったから、どういふことをしようとしてたんかは分かつた。…せやけど、うちらに内緒やったことに関しては、ちょっとお仕置きせなあかなあ。」

「うむ。それには激しく同意だ。」

「…お仕置き。美味しい物、いっぱい食べさせてもらっつ。」

たしかに、策だったとはいえ私達に内緒だったのは、何だか気に食わない。私も、お仕置きに参加させてもらおう。どうせだから、私も何か買って貰おうかな…。

「ごほんっ。…話を戻そう。蓮華様の仰っていた通りだと、邦祐は今、曹操の陣営にいるようだ。あ奴のことだから、偽りの投降でもしているだろう。そしてその投降を、曹操が受け入れているのであれば、戦の最前線で戦うように配置されるはずだ。」

「あの…孫権さん、そのような情報をいつ手に入れたのですか？」

「邦祐に言われていたのよ。曹操の陣営に着けたら空に花を咲かせるからと…。諸葛亮、お前は見なかったか？」

「いえ、私も見ていました。まさかあれに、そんな意味があったただなんて…。」

まあ、うちの軍にもあのような伝達手段は無いから、諸葛亮が分からないのも無理はないと思う。それにしても、あんなに派手で敵に気付かれたりしないのだろうか？

「それにしたって、どんな意図を持って降ったのかもはっきりしないのに、その人間をここの一番の戦で使うだなんて…。あのおチビちゃん、さすがの器量よね。」

「まあ、普通はしないがな。…だが、やつにはそうしなければならん事情があるのさ。」

「霸王としての評判、ですね。」

「そうだ。そして曹操は霸王であるが故に、常に天下に、民に、その大度を示し続けねばならん。」

常に世に何かを示し続ける…。口にするのは容易いが、いざ行つとなると、どれだけ大変なことか…。

「それこそが、曹操さんを霸王たらしめている、風評と言う名の無形の力…。」

「そうだ。それは曹操の強力な武器であると共に、一番の弱点ともなる…。常に風評を勝ち取らなければならんのだからな…。」

「そこをついた…ってこと?」

「そうだ…と言いたいが、正直良く分かん。」

あれだけ堂々としていた冥琳の、脱力した『良く分かん』発言に、その場にいた全員がコケた。

「お、おい!!分かんとはどういうことだ!!お主も軍師であるう!?!?」

「仕方あるまい?私の取るうとした策では、魏にいる御遣いに見破られて祭殿が殺されると言われたのだから…。だから今回の策、私が考えたのはあの口論の内容のみ。分かることと言えば、邦祐が何かしらの方法で我らが反撃するためのきっかけを作り、そこに我らが総攻撃を仕掛ける。これくらいだ。」

「じゃ、じゃあ、そのきっかけっていつのは何時になったら始まるのだ!?!?」

たしかに…。そのきっかけ作りが何時になつたら始まるのか分からなければ、私達も攻撃の仕掛けようがない。それにしても、あの関雲長ともあるう猛将が、まさかここまでそっかしかつたとは…。

「それこそ奴次第だな。だが、奴は魏の御遣い同様、史実を知っている。ならば、この戦のキモも理解しているはずだ。孔明、お前はいつ動くと読む？」

「私は…邦祐さんが動くのは深夜だと思います。ならば今は交代で仮眠を取り、深夜に備えておいた方が良くかと…。」

「私も同じ考えだ。ならば深夜、我らは第一波として呉の精鋭を率いて隠密行動をとり、曹魏の陣地に接近する。そして、邦祐が何かしらの手を打つたと同時に一斉に奇襲を掛ける。」

「では第二波は少し距離を置いた場所から、呉勢の奇襲の後、私達蜀の精鋭部隊による隠密行動で時間差奇襲を掛けて、敵への被害を拡大させましょう。第三波は蜀と呉、両軍による大軍団で一気に攻め立てるといふことで…。」

「さすが諸葛孔明。冥琳とまともにやりあえるのは、この者しかないだろう。」

「でも、私達これで勝てるのかな？」

「勝てるかどうかは分らんが、勝つための手は打ってある。」

「これ以上、他にどんな手を打っていると言うのだ？」

「我が軍には江賊出身の者がいてな。第一波の攻撃が始まり次第、敵の船を水没させるべく工作を一斉に開始する。」

思春の率いる部隊ならば、そのような工作は造作も無いことだろうな。

「四段構えか…。」

「同盟を結んでいるとはいえ、なりふり構っていられる状況ではないということだ。…では、我らは部隊を編成し、一刻後に出る。…後は頼むぞ。」

「了解です。では、私達も部隊を編成しましょう。」

深夜の戦に備えて、それぞれが最後の準備に取り掛かって行った…。

第五十四話 謀り〜深夜の戦に備えて〜（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

第五十五話 東南の風と神様のロリコン疑惑と破られた火計

夜も更けて来たけど、未だに風の変化は無い。これじゃ、せつかく鎖で繋げたのに火計が使えない。天気は自由に変えられないから、こればかりは俺の力じゃどうにもならない。そういえば、朱里ちゃんもとい諸葛亮の有名な祈祷も見てみたかったな…。

その頃、呉と蜀の陣営では…。

この戦の鍵を握るのは火計。そのためには、火も重要だけど、風向きも重要になってくる。その為には、神様にお祈りするしかない。

「むむむ、えい!!」

「頑張つて、朱里ちゃん。」

「うん!!むむむ、えい!!」

しかし、祈っても風向きは変わらなかった。いや、これはきっと私のお祈りに対する気合いが足りていないだけ。もっと気合いを入れてお祈りをしなきゃ!!

「むむむう~~~~ええい!!」

すると、川上から吹いていた風が、川下から変わった。

「はわわ!?東南の風が吹いちゃいました!!」

「やったね、朱里ちゃん。」

「うん！！それじゃ雛里ちゃん、私達も出陣の準備しよ？」

風下から吹き始めた東南の風は吹き止むどころか、一層強く吹き荒び始めていた…。

ミッション6・火計を成功させよ

深夜になり、ようやく風向きが、川上からではなく川下からに変わった。これでやっと動ける。

「お前達、いるか？」

「……はっ。」「」

「今からこの火炎瓶を使つて、船に火を放つ。各自これに火を点けて、至る所にばらまけ。すぐに火を点けられるようにライターと、火炎瓶入れて持ち運ぶための袋も渡しておく。」

「その、らいたーとは一体どのような物で？」

まずはその説明からか…。ライターを取り出し、実演しながら説明した方が早いな。

「ライターってのは俺の世界の道具で、点火するのに使うんだ。ここを押せば火が点いて、離せば消えるから。」

口で説明しながら、ノック式ライターを実際に使つて見せる。これ

なら火を点けるのも簡単だし、持ち運びも便利だろう。

「…御主人の世界の物は、相変わらず凄い物なのだな。」

「ほんとだぜ。ばいくとかいう乗り物もそうだが、今回のらいたーつてのにも、驚かされるってもんだ。」

「フイーア、フュンフ、言葉を慎め。御主人の前なのだぞ？」

「気にすんな。それよりも、使い方は分かっただろ？それじゃ、行動開始だ。」

「…御意！！！！」

部下の3人は火炎瓶を袋に詰めて、先に散って行った。俺も遅れないうようにいけない。後を追うように、魏の船へと乗り込んだ。どこに火を放てば良いかを考えていると、遠くの方で複数、火が上がり始めていた。

「お、やってんな、あいつら。…難しいこと考えずに、どんどん火を放つか。後はこの涼風が、火を煽ってくれるし。」

そう開き直ってからは早かった。一気に複数の火炎瓶に着火し、それを適当な所に次々と放り投げた。川下から吹く風の手助けもあってか、火炎瓶の爆発で起きた炎は瞬く間に燃え広がり、約半数の船に被害をもたらした。ただ、一つ問題が残っている。鎖の根元にある絡繰だ。あれがどう働くのか、少し拝見させてもらおうとしよう…。

風向きが東南に変わると、曹操の陣営から火の手が上がった。敵

は船での戦には慣れていない。今が好機と見るのが良いだろう。

「冥琳様、前方に燃えている敵の船団が見えます。」

「よし。これより我らは、魏へと反撃を仕掛ける。では第一波、出陣せよ！！」

「おおおおおおおおおお！！」

兵達の大声が戦場へと響く。第一波は、思春・明命・亜莎・祭殿・霞の5人と、それぞれが率いる部隊。役割としては、邦祐の救出・思春の率いる部隊による敵船への水没工作・敵の被害の拡大が主だ。

「甘寧隊、突撃部隊は私に続き、工作部隊は敵に気付かれぬように先行して、敵船へ工作を初める！！」

「では私と亜莎、霞さんの部隊で、邦祐さんの救出をします！！」

「皆、突撃を開始して下さい！！」

「おっしやあ！！張遼隊、気い引き締めて掛かるで！！」

「黄蓋隊、儼に続け！！ヒヨッコ共の援護をするぞ！！」

それぞれの部隊がそれぞれの目的を遂行するために、曹魏の船団へと突撃し、残る全軍は蜀と合流することにした…。

曹操さんの船団から火の手が上がったことで、周瑜さんが動いたなら、私達も連動して動かないといけない。

「皆さん、第一波が出撃したので、第二波出撃して下さい!!」

「分かった。鈴々、星、行くぞ!!」

「「おう(なのだ)!!」」

蜀が担う第二波は、愛紗さんと星さん、鈴々ちゃんの3人。うちの軍で、最も実力の高い3人を選んだ。翠さんも愛紗さん達と同じくらい強いけど、船での戦で騎馬は使えないし、やってもらわなければいけないことがある。

「良いよなあ、あたしも先陣切って暴れたかったよ…。なあ朱里、どうしてあたしは駄目なんだ?」

「翠さんには、蒲公英ちゃんたんぼほと白蓮さんの3人で、やってもらわなければならぬことがあって、それにはどうしても騎馬の機動力が必要不可欠になって来るんです。」

「それで、あたしらは何をすれば良いんだ?」

「皆さんには、曹操さんが敗走した際に備えて、取るであろう退路に伏兵として潜んでもらい、曹操さんを捕獲してもらいたいです。さすがに、劣勢の時には救援に行って貰わないといけませんけど…」

「おっしや、そういうことなら任せときな!!」

これで、少しずつだけ布陣が整って来た。あとは…。

「紫苑さん、桔梗さん、お願いがあります。」

「何でしょう?」

「小舟で部隊を編成して、第二波と共に出撃して貰いたいです。それで出撃したら、火矢を放って、火計の被害をさらに拡大させてもらいたいんですけど、構いませんか?」

「ええ、構いませんよ。そうでしょ、桔梗?」

「もちろんじゃ。朱里よ、わしと紫苑に任せておれ。行くぞ紫苑、若い奴らに負けてはおれんからな!!!」

それからすぐに、愛紗さん達第二波が出撃して行った。私達は第三波の総攻撃に備えて、周瑜さん達孫呉の方々と合流しないと…。

「それじゃ皆さん、私達は呉の方達と合流して、第三波に備えます
!!!」

数分後、無事に合流を済ませ、周瑜さんと共に総攻撃の準備に取り掛かった…。

予想していた通り、邦祐が火を放って来た。このままじゃ、華琳が負けちまう!!!

「華琳!!!」

「ええ。伝令兵はいるか!!!」

「はっ。」

「苟？と程？に、風向きが変わったことだけ伝えておきなさい。」

「御意！！」

華琳からの命令を受け、伝令兵が駆けだして行った…と思ったら、違う兵が天幕へと入って来た。

「報告します。呉の船団がこちらに攻め込んできております！！明かりが無かったために、気付くのが遅れました！！」

「他の皆は？」

「間もなく接敵する頃かと…。」

「そう。ならば私も軍を率いて、呉の本隊を迎え撃つわ。一刀、貴方もついて来なさい！！」

「分かった！！」

華琳に同行し、俺も戦場へと出た。外を見れば、自軍の船は炎によって赤々と燃えている。火計による被害は大小様々で、燃えている部分を破壊しさえすれば、まだ使えるものが多数あった。それと同時に、真桜達の声が響いているのが分かる。

「消火の間に合はん船は、鎖の根元にある絡繰を押せばすぐに鎖が外れるようになってるから、片っぱしから外に押し出し！！…それら、ぼちっとな。」

ガコンという大きな音をたてて絡繰が作動し、船を繋いでいた鎖が外れて行く。さすがは真桜、船同士を繋いでいた鎖は外れ、船が少しずつ分散して行く。

「せーので、一斉に押し出して下さい。せーのー!!」

風の指示で、鎖が一気に外れて行く。これでもう、船を繋いでいた鎖は無くなった。

「使えそうな船なら、多少壊しても構わないわ!!…風、頼むわよ!!」

「はいっ!!はあああ!!」

風の氣弾で爆発を起こし、酸素を一気に消費することで鎮火させる…よく街で火事を消す時に使っている方法だ。いわゆる、ダイナマイト消火と同じ原理で、俺が風に教えたものだ。

「…爆発の勢いで炎を掻き消すだなんて、あの変態の知識も、たまには役に立つじゃない。」

「はい。街の火事も、よくこれで消していますので。」

「なるほど…。それなら風、どんどん行くわよ、ついてらっしゃい!!」

桂花が風を連れて、次々と船の消火を進めて行く。真桜も真桜で…。

「ちよつとどきい!!そんなんじゃ何時まで経っても火が消えへん!!でえええい!!」

気を使った螺旋槍の一撃で、燃えていた船が一気に鎮火されていく……。

「こっちは鎮火完了したで！！次はどこや！！」

「真桜ちゃん、もう限界で間に合いそうにない船があるんで、穴を開けて沈めちゃってくれませんかー？」

「おっしや、うちに任しとき！！でりやあああ！！」

真桜の螺旋槍で穴を開けられた船はそのまま沈んでいき、風の活躍で燃え盛っていた炎もある程度消火されていった。このままの勢いなら、俺達は勝てるかもしれない……。

まさか、気の爆発や船を破壊して、火を掻き消していくとは思わなかった。こんな芸当、仕込んだのは一刀だろうな。それにしても、反撃の芽が殆ど摘まれてしまった。さて、どうしたものか……。

「なあツヴァイ、消火されちゃったけど、どうしようか？今からじや火炎瓶作り直せないし……。」

「あの、御主人。言いづらいのですが……。」

「何？策か何かありそう？」

「御主人は自らの武器で火を起こせるんじゃない……。」

「……………あ、忘れてた。」

そう言えば、イクシードは虎牢関で使つて以来、一度も使つてないし、チャージショットに関しては、一度も使つてない。銃弾を燃焼させて撃つたり、時間差で爆発させられる弾丸を撃てることを、すっかり忘れてた。

「それじゃ、良いこと思い出したし、敵も火計を阻止出来たことで浮かれてるだろうから、こっちは火計第二段を始めるとするか。…本気でやるから、お前達は本陣に戻つて、アインス達と合流しろ。その後は、全員雪蓮の指揮下に入れ。良いな？」

「『御意。』」

そのまま3人は長江へと飛び込むと、岸まで泳ぎ、そこから呉と蜀の連合の本陣まで駆けて行った。

「さて…良いこと思い出させてくれた御礼と、面倒なことしくさつてくれた御礼と、この後起きるであろうお仕置きに対する八つ当たり先の払いをさせてもらおうか。」

イクシードを全開まで溜め、右腕にも魔力を全開までチャージしておこう。さあ、一度潰えかけたミッシヨンの再開だ…。

第五十五話 東南の風と神様のロリコン疑惑と破られた火計（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

活動報告の方のアンケートの方も、募集を続けていますので、ご協力お願いいたします。

第五十六話 反攻し魏の三人娘対蜀の五虎將軍

部下達と別れた俺は、改めて魏の船へと目を向けた。今からもう一度、火計を起こす。そして、奪われたこの戦の主導権を握り返さないといけない。

「それじゃ、今度は勝利への炎を絶やさせないようにしますか。まずは、景気付けに一発……！」

銃を構え、全開まで溜めていた右腕の魔力を解放する。発射された弾丸は船のマストに当たった後、数秒後に爆発を起こし、船を再び炎上させた。その時、たまたま近くにいた兵士達は爆発に巻き込まれた。…悪魔だからこそ耐えられる爆発だ。人間がくらったら、良くても全身火傷だろう。さらに夕チが悪いのは、魔力のチャージが数秒で済むってことだ。

「うっし、景気付けの一発も済ましたし、そろそろ行くか……！」

助走をつけて、数メートル離れた位置にある船へと飛び移る。未だに呆気にとられてる兵士を船から蹴り落とし、さっきと同様に魔力を込めた弾丸をマストに撃ち込み、次の船へと飛び移って行く。少し距離がある時は、爆発の時に起こる爆風を利用したり、スナッチで、船の手すりを掴んだりして移動した。

それを数回も繰り返すと、呆気にとられていた兵士達もすっかり立ち直り、こちらに明確な敵意を向けて来る。

「てめえ、よくも曹操様を裏切りやがったな……！」

「死ねえええ!!」

兵士達が十数人で、一気に押し寄せて来た。でも、あまり時間を掛けてはいられない。右腕への魔力のチャージを続けながら銃を真上に放り投げ、愛剣へと手を掛ける。そして、突っ込んで来た兵士をまず横薙ぎで払い、返す刀で一閃した。その際、剣から巨大な炎も噴き出していた為、敵の兵士達は包帯ぐるぐる巻き男の斬撃よろしく、斬ると焼くを同時に味わい、声すら出せずに倒れた。それだけでなく、剣を振った際に発生した炎によって、今乗っている船にも火が燃え移った。

「ふう…。そろそろ別の船に移らなきゃな…つと!!」

愛剣を背負い直し、落ちて来た銃を掴むとすぐに構え、自分の周囲で唯一燃えていなかった船に向けてチャージショットを撃ち込む。数秒後に爆発を起こして船は炎上し、近くにいた兵士達は爆風に巻き込まれて、長江へと落ちていった。

炎上したのを見届け、次の船に移動しようとしたその時…心臓目がけて、矢が飛んで来た。それを銃で撃ち落とし、矢を放った正体を確かめる。

「…相変わらずな腕前だな、夏侯淵。」

「…二度も褒められるとはな。それよりも沖原、悪いことは言わん。投降しろ。そちらにはもう、勝ち目はない。」

「貴様の狙いは、我らが阻止した。もしも投降せずに今から再び火を放とうものなら、貴様達の勝機ごと火事を消してくれる!!」

現れたのは、矢を放った張本人である夏侯淵、彼女の姉である夏侯惇の2人だった。他の将達は、別の所にいるらしい。

「ご忠告痛み入るけど、俺は投降なんかしないし、俺達の勝機も消させやしない。なぜなら…!!」

「邦祐さん、ご無事ですかー?」

何ともまあタイミング良く、仲間達が来たからだ。面子は霞と思春、明命に亜莎、後は祭か…。

「ちっ!!こんな時に援軍か!!」

夏侯惇が愚痴を零していたが、それを無視するかのように呉の皆と合流した。すると、霞が何か言いたげな様子で、こっちに近付いて来た。その第一声は…。

「このどアホ!!何でうちらに、策のこと教えてくれなかったんや!!」

「いや、それは「その辺、後でたっぷり聞かせてもらうから、せいぜい覚悟しとくんやな。」…はい。」

駄目だ、俺には逆らえない。尻に敷かれ過ぎたみたいだ。一方、霞は言いたいことは言い終えたのか、今度は夏侯惇の方に向き直った。

「久しぶりやな、惇ちゃん。あれから、ちよつとは強くなれたんか?」

「張遼、今日こそ貴様との決着を付けてやる!!もう貴様に、遅れ

は取らん。勝負しろ!!」

「随分と熱烈なお誘いやな? ええで、その誘いに乗ったるわ!! お前ら、手え出したらあかんで。」

得物の偃月刀を構え、夏侯惇と対峙した。夏侯惇は霞に任せておくとして、問題は夏侯淵。あの弓の腕を放っておくのは厄介だ…。どうしようか考えていると、今度は思春が話しかけて来た。

「夏侯淵の相手は任せてもらおう。お前は、祭殿と共に火計を成功させる。」

「分かった。夏侯淵はかなりの弓の腕前だから、気を付けるよ?」

「ふつ。当たらなければ、どうということはない。」

「明命、私達は敵部隊の撃破を優先しよう!! 呂蒙隊、周泰隊、突撃を開始して下さい!!」

思春の部隊に夏侯淵の相手を任せ、亜莎と明命の部隊は敵兵の撃破に向かった。…思春が、ンダムネタを口にしていたことは、この際スルーしておくでしょう。

「祭、小舟は何隻ある?」

「だいたい、30隻くらいじゃ。…小舟で分けるのじゃろ? それくらい、既にやっておるわ。」

「よし。さっきは4箇所ずつしか火を放てなかったけど、今度は数十箇所同時に火を放てるな。俺は船を乗り移って火を放つから、祭

達は小舟で色んな所に火矢を放つてくれ。」

「任せておれ。黄蓋隊、付いて参れ!!!」

小舟で分散した祭の部隊と協力して火を放ち、敵の船が再び炎に包まれ始めた…。

曹魏の船から少し離れた位置から戦況を見守っていると、曹魏の船が再び燃え始めた。火が消えた時は敗戦も覚悟したが、何とか立て直せたようだ。ならば我らも突撃し、敵に致命傷を与えてやらねば…。

「よし、今が好機だ。皆の者、敵の意識が呉の第一波に向いている。我らはその隙に曹魏を叩き、呉の将達を援護する。各員、奮起せよ!!!」

「この一戦、我らが志の存亡が掛かっている。全員、気を引き締めよ!!!」

「突撃、粉碎、勝利なのだ!!!」

「紫苑、わしら別働隊も出るぞ!!!」

「ええ。」

兵士達を鼓舞し、敵軍へと突撃して行く。邪魔する者は全て蹴散らし、目指すは曹操の頸一つ…。

火計を阻止しただけで浮かれ過ぎたのは、何とも迂闊だった。消したと思った火の手が、先程よりも数倍近い速さでどんどん広まって行く。このままでは、我らの努力と勝利が水泡と帰ってしまう。火の手がこれ以上広がる前に、再び食い止めないと…!!

「真桜、もう一度鎮火「凧、後ろ!!」っ!?」ヒュンツ

「避けられたか…。なかなか鋭いではないか、楽進よ。」

「貴様は…関羽か!!」

「「愛紗だけではないぞ（じゃないのだ）!!」」

関羽から数歩後ろには、趙雲と張飛の部隊までいた。春蘭様と秋蘭様がこの場にいない今、ここにいるのは、私と真桜と沙和の部隊。将としての質は敵に劣りはするが、本陣の態勢が整うまで時間を稼がなければ…。

「ここは、我らの命を掛けてでも通しはしない!!来い、関羽、趙雲、張飛!!」

「良い覚悟だ、楽進。星、鈴々、行くぞ。」

「「おう!!」」

敵はすぐにも仕掛けて来るだろう。

「沙和、真桜!!」

私の呼びかけに、何も言わずに頷いてくれた。何だかんだずっと共

にいた仲だ、こういう時はとても心強い。

「総員、突撃いー！！」

勝負の火ぶたが、切って落とされた。鉄と鉄がぶつかる音が響き、兵士同士の激しい戦いが起こっている。その中で、我らも敵将と一戦交えることとなり、私は関羽、真桜は趙雲、沙和は張飛を相手することになった…。

私が相手にするのは李典か…。同じ槍を扱う者としては、悪くは無敵相手だ。

「行くぞ李典、神槍と謳われし我が槍、貴様に止められるかな？」

「はん！！神槍だか何だか知らんけどな、うちの螺旋槍がそんな槍に負けて堪るか！！！」

「ならば、その身でとくと知れ。」

だが、相手の実力がいまいち分からぬ。最初のうちは突きを使わず、横薙ぎと唐竹で敵の実力を推し量るのが先決か…。

「やあああ！！」「ヒュンッ

「ぐっ！！…なんや、自身満々に言っつた割に、遅いやないか。なら、今度はこっちから行くで！！！」

そう言うと、李典の得物の刃先が錐揉み状に回転し始めた。なるほど、螺旋槍とはよく言ったものだ。これは、一度受けてみる必要が

ありそうだ。

「でえええい!!」ブオンッ

「うぐっ!?なかなか重い一撃ではないか。」

だが、避けられないほど速いわけではない。むしろ遅いくらいだ。うちで例えるなら…美以だな。ちよつと、おちよくってみようか。

「だが、遅いな。これなら、我が主である桃香殿の方が良い腕をしておられるというものだ。」

「…何やて?うちがあんな頭の中に花畑でもありそうな奴に、うちが劣るって言うんか!？」

「うむ、そうだ…。だが、貴様の攻撃がこの龍牙で受け止めるにふさわしいと思わせることが出来たならば、先ほどの言を訂正しようではないか。」

「…一発で当てたるから、避けるんやないで？」

こんな安い挑発に乗るとは、所詮はその程度の者だったか…。それに避けるなど言われたら、余計に避けたくなくなってしまつてはいないか。

「でええええい!!」ギユイーンッ

「あ、よつと。」

「ちっ!!避けんなつて言うつとるやるが!!」ギユイーンッ

「さっ。」

…何ともまあ、避けやすいことだ。これでは、大した一騎討ちは望めそうもないか。

「さつきから、ちょこまかしよつてからに！！そんなちっぽけな槍うちの螺旋槍ですぐにへし折つたるからな！！」

「…それは聞き捨てならんな。ならば、我が本気の槍捌きを受けるが良い！！」

もう避けるのは止めだ。薙ぎや唐竹主体から、突きを主体に変える。この龍牙をちっぽけだと馬鹿にしたこと、後悔させてやろう。

「はあああ！！」「ヒュンッ

「っ！？さつきと段違いの速さや…。でもこれくらいなら！！」「キ
インッ

「私の槍はこんなものではないぞ？はあああ！！」「ヒュンッ ヒュ
ンッ

「また速くなりよつてからに…！！」「キインッ ガキインッ

「まだまだ行くぞ。はい、はいはいはいー！！」「ヒュンッ
ヒュヒュヒュヒュンッ

「あ、あかん、これ以上は…！！？」キインッ ガンッガンッ サシ
ユッ

捌き切れなくなったのか、とうとう李典の腕に一撃が入った。感触としてはまあまあな気もしたが、意外としぶといな…。だが、この機を逃すほど、私は甘くは無い。

「終わりにさせてもらうぞ!!」

さらに速く、突きを連続で放ち、少しずつ相手の体力と集中力をじわりじわりと削って行く。並みの兵士ならあつという間だが、腐つても将と言ふべきか、あつという間とはいかなかったが、ものの数分で完全に途切れた。その隙を逃さず、下から槍を振り上げて相手の守りを完全に崩し、喉元に龍牙を突き付ける。

「お前の負けだ、李典。なに、恥じることは無い。この趙子龍が相手だったのと、この龍牙を馬鹿にしたことが、貴様の運の尽きだっただけのことよ…。」

「くっ!! すまん、風、沙和…。」

「誰か、この者を縄で縛っておけ。ついでに、見張りも頼む。」

体中傷だらけで縄で縛られるのだから、逃げられはしないだろう。

さて、鈴々達の様子はどうか…? 確認すると、既に鈴々は戦い終えていた。

「鈴々、そちらはどうだった?」

「見ての通りなのだ。」

その言葉の表す通り、鈴々に怪我一つ無く、その足元にはふん縛られた于禁が横たわり、踏んづけられていた。愛紗は、まだ戦ってい

るようだ。まあ、愛紗ならば負けはしないだろう。我らは、敵の兵
力を削っておくとするか…。

第五十六話 反攻く魏の三人娘対蜀の五虎將軍く（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

第五十七話 総攻撃の開始〜猛虎蹴撃、言い方変えればタイガーショット〜（前

…あれ、おかしいなあ？

前回は今回も、気付けばヒロインでもない星と愛紗の戦闘シーンが、
やたら長ったらしくなってしまう…。

第五十七話 総攻撃の開始〜猛虎蹴撃、言い方変えればタイガーショット〜

星と鈴々は既に敵将を倒し、敵兵の殲滅に移っていた。なら私も早く勝負を終わらせなければならぬが、楽進相手では厳しい話だ。事実、私達の勝負だけが続いている。楽進の攻撃は全て防がれているが、逆に言えばこちらの攻撃も防がれているということだ。そのため、お互いに決定打が無い。

「やるな楽進…。まさかここまで、我が豪撃が防がれるとは思わなかったぞ？」

「我が武器は拳、我が鎧は肉体。岩をも砕き、鋼すらも通さぬ我が硬気功を、舐めてもらっては困る。」

「こ奴、武闘家か…!!」

「得物など無くとも、人を壊すことは出来る。その証拠を見せてやる。…覚悟は良いか、関羽？」

楽進の秀囲気が、徐々に鋭いものへと変化して行く。

「覚悟など、とうの昔に出来ている。だがな楽進、我が頸、そう易々取れるなどと思うなよ？」

「そんなこと、やってみなければ何も分からんさ!!」

楽進が態勢を低くして、一気に接近して来た。武器を構え直し、攻撃に備える。

「ふっ!!」シユッ

「っ!？」ガキンッ

繰り出された拳は、先ほどと比べるまでもなく速かった。いや、速過ぎた。

「まだだ!!」ブンッ

今度は、上段蹴りを放って来た。これもかなりの速さだったが、何とか捌くことが出来た。

「防ぐだけで精いっぱい、か…。」

「どうした関羽!!まさか、貴様の實力はこの程度なのか!?それとも、得物を持たないからと私を侮っているのか!？」

「ふ、得物に当てたくらいで良く言う。あまりデカい口を叩かないでもらおうか。」

「訂正させたいなら、その自慢の偃月刀で私の頸を刎ねて見せる!」

「ぬかせ!!」

振りかざした偃月刀を、楽進へと振り下ろした。手に付けている籠手で受け止められたが、一旦距離を取って、再度斬りかかる。敵は手数之多さと速さが持ち味、ならば攻撃出来ぬように、こちらの攻撃の手を緩めず連続で攻撃すれば良いだけのことだ。

「せやああああ！！！」

袈裟斬り、左薙ぎ、右斬り上げ、唐竹、右薙ぎ、左斬り上げ、斬り上げの勢いそのままに回転しての逆袈裟斬りと、連続で攻撃した。だが楽進の体捌きもなかなかのもので、軽傷程度の切り傷を、数か所付けただけだった。

「言っただはずだ、関羽。我が身体は鋼すら通さんと……！！！」

「貴様の身体が鋼すら通さぬと言うなら、私が撃ち砕いてみせよう。」

「やれるものなら、やってみろ！！！」

「我が一撃、そう軽いものではない。甘く見るなよ、楽進！！！」

全力の一撃を、楽進へと叩き込んだ。刃自体は楽進に届きはしなかったが、籠手に罅が入り、受け止めた本人も船の帆柱に強く叩きつけられた。

「……うぐっ。」

「どつだ、楽進……！！！」

「……まだまだ、まだ私は立てる。この命尽きようとも、誇り高き曹魏の将として、何より沙和と真桜を助けるため、私はお前に抗い続ける。……猛虎蹴撃！！飛べ！！我が内に燃える炎よ！！！」

「……え？」

楽進が右脚を振り抜くと、火の球のような気弾が、こちらにもの凄い速さで飛んで来た。

「…ちよっ!?!」ドゴーンッ

気弾をかるうじて避けることが出来た。気弾はそのまま進んで行き、近くにあった船に直撃して沈没させた。

「あ、危なあ…。」

「外したか…。」

「いやいやいやいや…。」「武器は拳」とか「鎧は肉体」とか言って、さっきまで近接戦闘ばかりしていた人間が、いきなり遠距離戦闘とか…。」

「空気を読めえ!?!」

「知らん!?!問答無用!?!」

とにかく今は逃げの一手を選び、機会を窺わなくては…。」

「逃がすか!?!」

近接戦闘から一変して、気弾による集中砲火が始まった。逃げる先逃げる先を気弾が襲い、今乗っている船は、いつ沈んでもおかしくないほど破壊されていた。

「くそつ。こうなったら、一か八かで突撃するしかないか…。」

覚悟を決め、楽進へと突撃した。そして楽進も、ここぞとばかりに気弾を放って攻め立てて来る。避けてばかりでは、いずれ狙い撃ちされるだけだ。ならば多少の怪我は覚悟の上で、一直線に突っ込む他ない…!!

「やああああ!!」

「血迷ったか、関羽!!だが、この勝負貰った!!」

私目がけて次々と気弾を放って来たが、こちらも紙一重で避けたり、腕や足に掠ったりしながらも、速度を落とさずに突き進む。この勢いを殺さずに一撃を放つには、沖原殿が我らの下で過ごした際に、手合わせで見せてもらった技をやるしかない。

「楽進、覚悟おー!!」ブオンッ

お世辞にも、上手くいったとは言えない見よう見真似だったが、突進からの左薙ぎを放った。

「ぐっ!?!」ガキンッ

しかし、渾身の薙ぎ払いも受け止められてしまった。だが、今の一撃、感触は悪くなかった。ならば、無理やりにも振り抜くのみだ!!

「でえやあああ!!」

「っ!?!」パキッ

強引に振り抜いた結果…籠手は半壊し、本人も吹っ飛んで行った先

にあつた船室の壁を突き破っていった。念のために近付いて確認すると、頭から血を流しながら気絶しているのが確認できた。

「敵将楽進、この関雲長が撃ち破つたりい！！」

頸は取れはしなかったが、これで一先ずは大丈夫だろう。縄で縛り上げた楽進を兵に任せした後、星達と並んで敵部隊の掃討を行うことにした。それにしても、体中が痛い…。

関羽達が戦い終えた一方で、張遼と夏侯惇は未だ熾烈な戦いを繰り広げていた。2人が戦い始めてから、既に何十合斬り合ったのかも分からない。そして今は、鏑迫り合いによる膠着状態が続いている。

「ああ、やっぱ惇ちゃんとし合うのは楽しいなあ。相手が強くないと、全然盛り上がれへんし…。惇ちゃんもそう思うやろ？」

「そうだな。たしかに相手が強くなければ、戦っている気がせん。…だがな張遼、私にとって貴様は通過点に過ぎん。それだけではない。呂布や沖原も、華琳様の覇道を成就させるための通過点に過ぎん。」

「そら無理な話うちゅうもんや。うちに勝ちきれんのに、恋や邦祐に勝てるわけ無いやろ？」

「だからまずは、貴様をここで討ち取り、いずれ奴らも討ち取ってみせる！！」

一度距離を置き、再び偃月刀と大剣がぶつかり合う。どちらも一歩

も引かずに鬨ぎ合い、勝負が一向に付かない。斬りかかっても防がれ、斬りかかれても凌いで跳ね返す。延々と、この剣戟のぶつかり合いが続いていた…。

夏侯惇と張遼が戦っている近くで、夏侯淵の部隊と甘寧の部隊の勝負も均衡が崩れずにいた。遠距離戦を得意とする夏侯淵と、一撃必殺の近距離線を得意とする甘寧。この2人の全力での一対一なら甘寧に軍配が上がっていてもおかしくは無かったが、兵士もいるとなると話は変わって来てしまう。両軍を比較すると、夏侯淵の率いる兵士は質より量、逆に甘寧の率いる兵士は量より質。どんなに個々が強くても、多数を圧倒することは難しかった。

「どうした甘寧、私の相手に名乗り出たにしては、大したことないではないか？」

「…今優先すべきことは、己が武を誇示することでは無く、我らの勝利のみ。何と言われようが、挑発には乗らん。それに、私は元より貴様を倒す気は無い。」

「…どういう意味だ？」

「直に分かる。だからもう少し、私に付き合っただ貰うぞ！！」

甘寧は隠密仕込みの速さを生かして、予想だにしない場所から夏侯淵へと接近し、避けられるであろうぎりぎりの速さの斬撃を繰り出していく。夏侯淵も何とかその攻撃を避け、逆に矢を放ち反撃するが、甘寧の振るう曲剣に悉く叩き落とされる。そしてまた、兵士達の中に紛れ込んでいく。

「流石に、あの素早さは厄介だな。それにしても、奴の狙いは一体何だ？」

どこから仕掛けて来るのか分からないため、注意深く周りを見渡す。そして、異変に気付いた。

「…これはっ!？」

目に入って来たのは、凄絶な光景だった。沈没しそうになっていた、火に包まれて、もう対処の仕様がないう軍の船、船、船…。そして、兵士達は我先にと次々と長江へ飛び込んで行く。しかし、逃げ遅れた兵士や重傷を負って逃げられなくなった兵士は、火だるまとなって苦しみながら死んで行く。夏侯淵の目には、その様がこれでもかと焼き付けられていった…。それだけではなく、舵を失った船同士がぶつかり合い、自分達の退路がゆっくりと塞がれ初めていた。

「…あ、姉者、撤退するぞ!!!このままでは不味い!!!」

「しかし、まだ張遼との勝負が…。」

「そんなものは後だ!!!このままでは、華琳様だけでなく我らも危ない!!!」

「華琳様が!?!…くう、仕方ない。張遼、この勝負預けるぞ!!!」

「はあ、好きにしい…。」

せつかくの楽しみが終わってしまいがっかりしている張遼を横目に、夏侯惇と夏侯淵は部隊を引き連れて、退路が無くなる前に撤退して

行った。これから、呉と蜀の攻撃がさらに過激さを増すことになるとも知らずに…。

一度は消えかけた炎も、祭殿が小舟に分けて引き連れた弓兵部隊と、蜀の黄忠殿と嚴顏殿の部隊の尽力により立て直すことが出来た。それから鎮火されないということは、鎮火にあたっていた兵士や将達が消火活動に専念出来ない事態が起きたということ。考えられるのは、邦祐が敵を殲滅したか、もしくは第二波として出撃した関羽達が敵指揮官を撃破したことにより、指揮系統の乱れが起きているかのどちらかだろう。ならば、我らが取るべき行動は一つ…。

「孔明よ、私は今こそ全軍で総攻撃を掛ける好機と見た。お前はど
う思う?」

「私も、周瑜さんと同じ意見です。それと、曹操さんが取ると思われる退路にも、伏兵を配置しておくのが良いかと…。なので私達の方からは、馬超さんと、馬岱ちゃん、公孫賛さんの3人を伏兵として配置しようと思います。速さが物を言うので…。」

やはり、この好機を見逃すはずはないか。問題は、伏兵の方だ。我が軍は、どうするべきか。思春や明命がない今、速さとなると…。

「雪蓮、彼らは?」

「今さつき戻って来たわよ。長江を泳いだ後、ここまで走って来ただですって。…ほんと、恐ろしい体力してるわよね?」

「まったく…。だが、帰って来てくれているのは好都合だ。退路の伏兵には、彼らに行ってもらおう。」

「各員、拔刀せよ！！狙うは曹操の頸ただ一つ。全軍、突撃開始！！！！」

火計に加え、更なる追撃を掛けるため、呉と蜀の両軍による総攻撃が開始された…。

一刀殿の知識を借りて火計を阻止したことで、少し油断が過ぎていたみたいだ…。

「華琳様、すぐにお下がり下さい！！敵はすぐに来ます！！」

「分かったわ、稟。…防戦の指揮、頼むわね。」

「この命に替えましても、必ずや華琳様を逃がして見せましょう。」

…さあ、早く行って下さい。」

「…必ず生きて、また会いましょう。」

兵を連れて、華琳様は魏へと退いて行った。多分この戦が、私の最期の戦となるだろう。だが、それでも構いはしない。とうの昔に、この命は華琳様のもの。華琳様が助かるのであれば、私の命など惜しくは無い。

「季衣、流琉、華琳様を頼む。」

「うん！！ボク達の命に替えても、華琳様は守ってみせるから安心してね！！」

「稟さんもご無事で…。」

「ありがとう。…さあ、早く行け!!」

2人も華琳様を追って駆けて行った。後は、前線にいる夏侯惇將軍達と北郷隊の3人が撤退して来るまで、ここに防衛線を敷いて、破られないように防戦を続けければ良い。

「…稟ちゃん。」

「風!?!まだ逃げていなかったのか?」

「稟ちゃんを置いて逃げるなんて、風には出来ませんよ。さ、とりあえずここで夏侯惇將軍達が退却して来るのを、ゆっくり待ちましよう。」

「…ああ。」

ここに、風が来てくれたことは嬉しかった。だが私は軍師、戦場で情に流されてはいけない。ここは、気を引き締めなければ…。

「伝令兵はいるか!!」

「はっ!!」

「残存している全艦隊へ、我が旗を中心に集まるように伝令を出せ!!」

「私達の旗を中心に、方形陣を敷きますよ。ちよっと動きづらいかもしれませんが、夏侯惇將軍達が戻るまで、守りを固めます。」

「了解です。では!!」

伝令兵が命令を各艦隊に伝えにいった。それから約十分後、私の旗の下に残存勢力が勢ぞろいし、風の命令通りに方形陣を敷いた。

「これでは守るだけです。稟ちゃん、風は稟ちゃんの指揮下に入ります。…頑張ってくださいね。」

「分かった。補佐を頼む、風。」

「了解なのですよ。」

これで、残された仲間達を迎え入れる準備も、華琳様を逃がすための時間稼ぎの準備も、最期になるであろう戦の準備も、全てが整った…。

第五十七話 総攻撃の開始〜猛虎蹴撃、言い方変えればタイガーショット〜（後

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

もしよろしければ、活動報告のアンケートの方にもご協力いただくと幸いです。

第五十八話 穴だらけ必死の方形陣く男は、あの太腿に騙されたいのだっーく

なかなか書く時間がなかつたり、パソコンにパスワード掛けられて
使えなくなったりで、遅れてしまいました。申し訳ないです…。

第五十八話 穴だらけ必死の方形陣く男は、あの太腿に騙されたいのだっ！く

方形陣による防衛線を敷いた後、敵がいつ来ても良いように臨戦態勢を取りつつ、周囲の警戒を行っていた。敵の追撃が予想される今、夏侯惇將軍達と楽進達には速く戻ってきてもらい、少しでも早く華琳様の護衛へと急いでもらわなければ…。

陣を敷いてから四半刻、ようやく將軍達が退却して来て、合流することが出来た。

「稟！！華琳様は無事か！？」

「四半刻ほど前に、季衣と流琉を護衛に付けて、桂花と一刀殿と共に魏へと撤退なされた。急げばまだ間に合うだろう。華琳様の護衛を頼む。」

「…風達はどうした？」

「分からない。何一つとして連絡が来ないのだ。それよりも、ここは私と風で抑えておくから、早く華琳様の下へ！！」

「…分かった。行くぞ秋蘭！！」

2人は再び移動を再開し、赤壁の地から撤退して行った。あの2人が護衛に付けば、とりあえず華琳様は安全だろう。これで残るは北郷隊の3人のみだが、一体何をしているというのだ…。

祭や黄忠さん達の助力も有り、敵船に火を放ち終えた俺は、総攻

撃を仕掛けるために前線へと軍を進めていた呉の面々と合流を済ませていた。周りを見ると、馬超と馬岱、それと公孫賛を除いた蜀の面々も呉の船に来ている。そんな状況で俺に待ち受けていたものは、恋、柳花、蓮華、霞による肉体的且つ精神的な公開折檻だった。

「はわわ！？孫権さん、何してるんですか！？」

「…これはこちらの問題だから、放っておいてちょうだい。」

ものの数分で、身体に受けたダメージは軽く許容範囲を超え、精神は今にも擦り切れそうだ。

「はあ、しょうがないわね…。」

そんなぎりぎりの状態の俺を見かねた雪蓮が、膝枕までして介抱してくれたおかげで少しは持ち直すことが出来た。けど、その様子を見ていた蓮華達が今度は急に拗ね始めた。

「で、今度は何で拗ね始めてんだ？」

「だって、姉さまに介抱されてる時の邦祐、すごい穏やかな顔してたから…。」

「そりゃなあ…。あんなだけ加減無しに肉体的にも精神的にも甚振られた後、雪蓮がやってくれたみたいに優しく介抱してくれたら、俺だって穏やかな顔になるし、その人の株も上がるに決まってるんだろ？」

「「「「「うう…。」」」」」

そう言われ、少しやり過ぎたと反省し始める一同。

「あら、嬉しいこと言ってくれるのね。それならいっそ、蓮華達はやめて私と冥琳に乗り換えてみない？私達なら、蓮華達みたいに苛めたりしないわよ？」

妖しい笑みを浮かべながら、そんな提案をして来た。

「ね、姉さま！？い、いい、いきなり何を言い出すんですか！！」

雪蓮の突然の提案に、今度はあたふたし始め、終いにはこちらを見つめて来た。蜀の将達も、この状況を興味深そうに見ている。そして雪蓮は、この状況をどう見ても楽しんでた。

「うん。とても魅力的な提案ではあるんだけど、止めておくわ。」

「どうして？」

「…さっきのは流石にやり過ぎだけど、あれが心配から来た不安の裏返しだっと思えば、何てこと無いってもんさ。それに、俺にとって蓮華達は誰よりも大事だから…って、こんな時に何を言わせてんだ！！」

「あら、それは邦祐が勝手に言ったことでしょ？それに、見てみなさい？」

雪蓮が指差した方を見ると、4人揃って頬を赤らめていた。そして、蜀の面々も様々な反応を示していた。

「なあ雪蓮、ここって戦場だよな…？」

「まあ、良いんじゃない？ずっと気を張ってちゃ、すぐに疲れちゃうもの。ほら4人共、戻って来なさい？」

「……………？……………」

全員の頭に手刀を落として、軽くトリップしかけていた彼女達を現実へと引き戻す。

「さて、そろそろ真面目な話するわよ。…孔明ちゃん、聞いた話だと魏の将達を捕らえたそうだけど、それ本当なの？」

「はい。愛紗さん達が、楽進さん、李典さん、于禁さんの3人を捕らえました。」

「ちなみに、愛…関羽以外に、誰があいつらを捕らえたんだ？」

「星さんと鈴々ちゃんですよ。」

挙げられた名前を聞いた瞬間、俺は思わず天を仰いでしまった。あの3人の相手がよりにもよって五虎將軍とか、運が悪いにも程がある…。手合わせした時、3人揃って夏侯惇よりも強く感じたのに、それに比べて楽進達の強さは、隠密型である明命にすら敵わないのだから、捕らえても仕方ない…。これで夏侯姉妹以外に曹魏で戦える将は、許緒と典章、あとは曹操本人くらいか。一刀は…まあ、盾にはなると思う。

「楽進達を捕らえたことで、敵の戦力は確実に落ちた。だが、兵力では未だに敵の方がまだ上だ。火計が成功したからと油断していると、戦況をひっくり返される危険もある。我らの勝利を決めるには、

ここからが正念場だ。皆、油断せぬように。」

冥琳の言葉で、改めて気を引き締め直す。

「報告します！！」

見張りをしていた兵士がこちらに近付いて来た。

「前方に、敵船団が確認出来ました！！間もなく、接敵します！！」
前方を確認すると、お互いにある程度視認出来る距離まで接近していた…。

敵を発見したのは良いが、郭嘉と程？以外の牙門旗は一つとして見ることが出来ない。妙な感じはするが、それ以上に妙なのは敵の陣形。敵は幅広く船を展開させ、指揮官を中心に据えた正方形を四重で組むという、堅牢な方形陣を敷いていた。

「敵の牙門旗が、軍師のものだけなのは気になるわ。それと、やけに守り重視な布陣は何でなのかしら？冥琳は、どう思う？」

「そうだな…。あの中心には曹操がいて、旗を掲げていない将達はその周囲の護衛として潜んでいるのか、または…。」

「既に敵本隊はこの戦場から退却し、少しでも遠くに逃がすために壁となっている…だろ？」

確認でもするかのように、冥琳に問い掛ける。

「ああ、その通りだ。だが、敵の陣形から見ると曹操はもう退却している方の確立が高いと、私は見ている。」

「俺もそんな気がする。」

少し考え込んだ後、雪蓮は口を開いた。

「…祭、明命、思春、亜莎、4人は前曲を突破して、敵指揮官を叩け！！」

「…御意！！」

「蓮華は直属部隊の半数を率いて、邦祐と穩の2人と共に祭達の援護を下さい！」

「はいっ！！」

その後もそれぞれの配置を指示していき、元董卓軍の4人は左翼へ、残った雪蓮達は後曲で一時待機となった。蜀の方も朱里ちゃんが指示を出し、右翼は廠顔さんと魏延さん、鈴々ちゃんと愛紗が配置された。桃香ちゃんや朱里ちゃん達は雪蓮達同様に後曲で待機し、何故か顔良と文醜が護衛に付いた。そして、何故か強さがインフレ気味の左翼に、星と黄忠さんが配置されることになった。…恋達と戦わなくちゃいけない部隊の人は可哀想としか言えない。そんな曹魏の兵達に哀悼の意を捧げていると、戦闘が始まった…。

北郷隊の3人が戻らぬまま、とうとう戦闘が始まってしまった。それだけでも状況は芳しくないと言つのに、伝令からの報告によると、こちらの右翼を攻める軍は董卓軍の将達に星、前曲には呉の猛

将達と沖原、左翼には関羽ら蜀の猛将達がいるとのことだ。

「なあ風、この状況って…。」

「ん〜、そうですね〜…。お兄さん風に言つと、詰んだんじゃね？」

「そうはつきりと言うな…。だが、確かに詰んだかもしれんな。」

呂布に張遼、何気に馬鹿に出来ない強さの華雄に沖原。蜀は関羽に張飛、共に旅をしていたこともある趙雲。蜀には他にも、優れた将達が数多く存在する。いくら曹魏の兵が鍛えられているとしても、先陣切つて戦う将達がいなければ、敵の強さに恐れ慄き、官渡の時の袁紹軍のように逃げ出す兵が続出してしまふことだろう。

そんなことを考えていると、新たな伝令兵が来た。

「ほ、報告します！！前線が崩され、敵の陣内侵入を許しました！

」！

「な、何い！？いったいどういうことだ！！」

いくらなんでも、それは早過ぎる。まさか、内通者でもいたと言っ
のか？

「はっ。どの船も気付かぬうちに船底に穴が開けられており、最初
は穴を埋めて凌いでいたのですが、それも不可能なほどに船内に浸
水し、次々と沈没してしまつたとのことです。」

「そんな馬鹿な…。」

だが今は、呆気にとられている場合ではない。一刻も早く、態勢を立て直さねば!!

「守りに回せる部隊や艦隊は!？」

「どの船も交戦中で、合っても数隻しかありません!！」

「くそっ!！」

「まあまあ、焦っても仕方ないですよ、稟ちゃん。」

「…そうだな。済まない、迷惑を掛ける。」

風に謝罪を入れた時、ふと鈴の音が聞こえた気がした…。

時間は、総攻撃が本格的に始まる前まで遡る。

私達は、曹操が取ると予想される退路の途中にある森に潜んで待機していると、黒の外套を纏った集団がいきなり姿を現した。

「誰だ!?!…って、あれ、あんたはたしか幽州で助けてくれた…ドライ…だったか？」

「そうですよ、伯珪さん。お久しぶりですね。」

「ああ。いやー、それにしても、あの時は本当に助かったよ。」

「いえ、あれは御主人の命でしたので。」

唯一、お互いに面識のある私達だけで話していた。

「なあ公孫贇、こいつらは？」

「こいつらは、沖原直属の隠密だ。以前、麗羽達に攻め込まれたことがあってな、その時に助けてもらったんだよ。」

「へえ〜。意外と凄いな。」

「いえ、それほどでも。ところで、皆さんはどのような命を受けているのですか？私達は、孫策様から応援として向かうようにとしか言われてないので、実際に何をすれば良いのやらで…。」

「一応朱里に言われているのは曹操の捕獲だけど、出来なければこの銅鑼を曹操の行く先々で鳴らして、兵達を分散させるだけで良いってさ。」

まあ、実際にこの戦力で捕まえるとなると、少し難しい話ではある。相手は逃げて来るとは言っても、それなりに兵を引き連れているわけだし…。

「…正直言わせて頂くと、この戦力では曹操を捕まえるのは難しいと思います。ならば、初めから銅鑼を使って兵を分散させ続け、はぐれた兵達を逐一撃破して行った方が良いかと…。」

「そうだよなあ。なら、銅鑼を鳴らす人間と撃破する人間を分けようと思うんだがどうする？」

「銅鑼を鳴らすのは、こつちでやれば良いんじゃないか？あたしらの馬なら、曹操の行く場所に先回り出来るだろうし。」

「では私達は、孤立した敵兵を片っ端から暗殺…もとい撃破する役目という事です。」

今、さらっと怖いこと言ってた気がしたけど…。私の聞き間違いということにしておこう。主に私自身のために…。

「それじゃ、私達は別の場所で待機していますので、銅鑼の方はよろしく願います。」

「あ、ああ、任せといてくれ。」

引き攣り笑いを浮かべて返事をする、向こうは軽く笑みを浮かべて、暗闇の中へと融けるように消えていった…。

第五十八話 穴だらけ必死の方形陣く男は、あの太腿に騙されたいのだっーく

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

活動報告のアンケートの方もまだ募集してますので、よろしければそちらも願います。

第五十九話 眠りの森へ主人公と部下、主役交代説浮上！？

気付かぬうちに敵の水没工作に嵌り、その隙を付かれて攻撃を仕掛けられた。その結果として、堅固と思えた四重の方形陣も容易く破られてしまい、敵の接近をまんまと許している。そして、もしも敵将と相對することになっても、私達には知略以外にまともに扱える武器などない。徒に武器を取ろうものなら、すぐに殺されてしまつたろう。だが今は、殺されてでもそうしなければならぬ状況にまで陥っていた。

「鈴が…。周りから鈴の音が…!!」

たしかに私にも鈴の音は聞こえたが、別に何とも思わなかった。だが、兵達は違っていた。まるで何かに取り憑かれたかのような状態。兵達は鈴の音のことしか口に出さず、明らかに平静を失っている状態で、引つ切り無しに視線が動き回っていた。

「ええい、鎮まれ!! 鈴の音が何だと言つのだ!! 我らの後ろには、曹孟徳様がいらつしやるのだぞ!!? 皆、命を惜しまずに敵を防げ!! ！そう易々とここを通させるな!!」

分かってなかった。私も戦場に出ていたが、それはあくまで軍師として。敵を斬る感触も、槍で貫く感触も、ましてや敵に殺されるといふ感覚も、何一つとして知りはない。だから、兵達の感じる恐怖が分かってなかった。

「…かと言って、この辺りはすでに『甘』の旗に制圧されちゃってますしね。稟ちゃん、そろそろ私達も退却して華琳様達と合流するつもりですよ。」

「しかしだな!!」

「冷静になって下さい。兵対兵なら私達の力も役立ちますけど、ここまで陣も前線も崩されてしまった以上、将にも備えておかねばなりません。ならば一刻も早く合流し、将と兵の両方に備えましょう。だからね、ここは下がりましょう?」

「…そうだな。おかげで目が醒めた。」

そしてそれを知るきっかけが、鈴の音とともに訪れることとなった…。

「…貴様らが指揮官だな?」

凜とした声を通る…。声がした方へと向くと、紅い曲刀を逆手に持った女が1人立っていた。

「何者だ!?!」

「我が名は甘寧。我が王の命により、貴様らを討ち取りに来た。」

「くっ!!もうここまで…。皆、奴を攻撃しろ!!」

態勢を低くしてこちらに駆けて来る甘寧を止めようと兵士達が迎撃に出たが、逆に斬り伏せられてしまった。見た感じ実力的には、夏侯惇將軍にも引けを取らないくらいだろう。とにかく、身を守るために何でも良いから手にしなければと探していた時だった。

「遅いつ!!」

気付いた時には既に遅く、振り向きざまに甘寧の飛び膝蹴りが私の顎を捉えた。

「ふがつー!!」

「稟ちゃ…っ!?!」

脳が揺れる様な感覚に陥った。薄れ行く意識の中、私が最後に見たものは、喉元に曲刀を突き付けられて降伏せざるを得なくなった風の姿だった。

その後、指揮官を失った味方部隊は完全に崩壊し、方形陣で構築した防衛線も呆気なく突破されてしまい、私達も囚われの身となった…。

稟と別れた後、全速力で行軍を行った我らは、無事に華琳様と合流することが出来た。

「華琳様、ご無事でしたか!?!」

「ええ。季衣と流琉がよくやってくれたわ。」

「そうでしたか。季衣、流琉、よくやってくれた。ここから先は、我らも護衛に加わるぞ。」

「やったー。ここから先は森を通らくちゃいけなかったから、ボク達だけじゃ心細かったんですよー。」

前方を見ると、たしかに鬱蒼とした森が広がっていた。

「心配するな。我らがいれば、あの程度の森など大したことない。」
そして我らは、闇夜の森へと入って行った…。

なるべく音を立てずに森の中に潜んでいると、森のあちこちに放っていた細冊が戻って来た。話を聞くと、曹操が護衛と共にこの森に入ってきたとのことだ。なら、こつちも動き出すとしよう。

「翠、蒲公英、曹操がこの森に入ってきたぞ。私達も動き出そう。」
「やっとだね、お姉さま。」

「おつさ。それじゃ、曹操の驚く顔でも拝ませてもらうとするか！」

それぞれの愛馬に乗り、静かに且つ素早く曹操の一団へと近付いて行く。まだ気付かれてはいない。

「翠、蒲公英、準備はいいか？」

「いつでも良いぜ？」

「たんぽぽも、いつでも行けるよ？」

「よし…。」

手を挙げて、銅鑼を持っている兵士に合図を送り、準備をさせる。

そして、準備が終わったのを見計らい、手を振り下ろした。

銅鑼を持っていた兵士達が勢い良く銅鑼を叩き始め、無音だった森に銅鑼の音が響く。その銅鑼の音に驚いた曹操軍は浮足立ち、急いでその場から逃げ出して行った。そして当初の狙い通り、置いて行かれた兵士や、全く関係ない方向に逃げ出した兵士が現れた。

その後も行く先々へと先回りしては銅鑼を鳴らしたり、時々後ろから追いかけるように銅鑼を鳴らしたりと、相手を精神的に追い詰めて行った。しかし、とうとう森を抜けられてしまい、曹操を捕まえるまでには至らなかった。でも、悪いことばかりじゃない。曹操の周りにいた護衛の将達は、森を抜ける間に離散して、残ったのは夏侯惇と夏侯淵、あとは軍師の荀？と2万足らずの兵士だけだった。

「作戦は成功したようだな。まだ森の中に護衛をしてた奴が残っているはずだけど、どうする？」

「どうするって…。そりゃ、出来ればぶつとばして捕まえるに決まってるんだろ？」

「よし、じゃあ私達も森に残っている敵兵の撃破に移るとするか。」

朱里に任された最低限の仕事は、何とかこなすことが出来たな…。

暗闇の中、急に銅鑼が鳴らされたことで、華琳様のいる本隊とはぐれてしまった。はぐれたのは私だけではないけど、急いで合流しない…。まずは、元来た道に戻らないといけない。

「皆、急いで華琳様の下に戻りますから、ちゃんとついて来て下さ

い。」

私はたまたま合流出来た約五十人ほどの兵士さん達と歩きだし、何とか元の道に戻る事が出来た。ちゃんと付いて来ているか気になり、何となく後ろに振り向いてみる。すると、兵士さんの数が出発した頃の半分になっていた。

「…どうしたんだろう？誰か、探しに行ってもらえますか？」

「了解しました。」

いなくなった人達を探すため、数人に頼んで探しに行ってもらった。でも、彼らも戻って来ることはなかった。

「ここにいちや危ない。皆、急いで進みましょう。」

しかし、前に進んだところで状況は変わりはしなかった。1人、また1人と、徐々に兵士が減って行く。気付いた頃には私も含めて10人しかいなかった。

「み、皆、円陣を作ってそれぞれの方向を索敵しながら進みましょう。」

これで大丈夫なはず…。そう思い、再び歩き出した。

パキッ

「誰!？」

音がした方を向き、その方向に意識を向けた。でも。誰も出て来な

い。きっと、動物か何かが小枝でも踏んだのだろう。そう思い振り返ると、後ろの方にいた3人がいなくなっていた。

「あれ！？後ろの人達は？」

「分かりません。どこに行ったのでしょうか…？」

音も無く兵士が消えていくという状況に、僅かだけ恐怖を感じずにはいられなかった。だから、急いでその場から立ち去る。すると、少し進んだ先の道端に、ついさっきいなくなった兵士の1人が倒れていた。駆け寄って確認すると、既に息を引き取っていた。嫌な予感がして振り返ると、また3人、兵士がいない。倒れていた兵士さんをこのまま放置して行くのは気が引けたから、人目に付きにくい場所へと運ぶことにした。運び終わって戻って来ると、残りの3人も消えていた。

これでどうとう、残っているのは私だけだ。今まで私の傍にいた兵達は、もう誰もいない。私も同じような末路を辿るのかと思うと、不安で仕方が無かった。

「一体、何が起こってるの！？ねえ、誰か教えてよ！！」

抱えた不安を拭い去ろうとして、無駄に大きく声を荒げる。でも、返事をしてくれる人は誰一人として傍にいない。その事実が、私の心を恐怖と不安に蝕ませ、武器も構えることすら忘れ、立ちつくしたまま身動きが取れなくなってしまった。そして…。

「…恐怖に震えて眠りなさい？」

女性のものと思われる優しい声音と共に、私の後頭部に一発の手刀

が入れられ、私は気を失った。その時ようやく、恐怖と不安、そして孤独から解放されたような気がした…。

…まずいなー、華琳様や春蘭様達だけじゃなく流琉ともはぐれちゃったよ。華琳様の親衛隊隊長なのに、そのボクが華琳様の傍を離れてるだなんて…。

「皆ー、急いで華琳様達と合流するよ!!!」

ボクみたいに本隊からはぐれた兵士達で即席小隊を編成して、森の中をただ歩いてた。月明かりだけが頼りの道を歩いていると、ボクの上に一瞬だけ影が差した。何かと思い見上げると、信じられないものが目に入った。

「…え？」

黒い外套を着た女の人が、木から木へと身軽に飛び移って行く。何一つ抵抗している様子のない流琉を、その小脇に抱えたまま…。

「流琉!?! 流琉!!!」

でも、流琉は返事してくれなかった。

「どうしたのですか!?!」

「流琉が知らない人に連れ去られてた!!! ボクは流琉を助けに行つて来るから、ここで待ってて!!!」

その場に兵士達を残し、ボクは流琉が運ばれて行った方へと駆けて

行った…。

許緒將軍が典韋將軍を追いかけて行く際、我らに待機命令が出されたため、我々はその場で待機することとなった。

「皆、疲れてんだらう？許緒將軍達が戻って来るまで、楽にしてよ
うぜ。」

赤壁での戦いが始まってから、ここまでずっと休息無しで動き続け、先ほどの敵の奇襲で、全員の疲労が頂点に達した。だから、今みにいにもやらずに済む時間は、とても有り難かったりする。早速地べたに腰を下ろし、一休みすることにしよう。他の兵達も同様に、地面に座り込む者や木にもたれかかる者、中には地べたに寝転ぶ者もいる。

「それにしても、夜の森ってのは薄気味悪いな。おまけに、寒いと来たもんだ。…っと、ちょっと用足して来るわ。」

「なるべく遠くでして来いよ？」

「へいへい…。」

1人の兵士が茂みを掻き分け、人目に付かないような場所へと向かった。だが、それからいくらか経っても、戻って来ない。

「あいつ、遅くねえか？」

「拭くもんがなくて、困ってんだらうよ？」

「はは、そりゃ大変だ。」

「笑いごとじゃないだろ？誰か様子を見て来い。」

数人の兵士達が様子を見に行つた…。しばらくすると、様子を見に行つた兵士の1人が、血相を変えて戻つて来た。

「どうした？何かあつたのか？」

「た、た、たす　　っ!？」

何か伝えようとした瞬間、力なく膝から崩れ落ち、膝立ちのまま固まってしまった。何が起きたのか分からないが、とりあえず揺すってみることにした。

「おい、どうしたんだ!？おい!！」

どれだけ強く揺すつても反応せず、頭が前後に振られるだけ…。様子がおかしいと思ひ調べてみると、鏢のない短刀が、背中の方から心臓目がけて深々と突き刺さっていた。その事実、我々是否が応にも武器を手にするしかなかった。

構えたは良いが、今までに蓄積された疲労からか兵達の動きが鈍い。それどころか敵が何者で何人なのか分からないのに、集団でいることから来る安心感からか、気を緩めている者も少なくなかった。

その時、我々のいる場所にどこからともなく声が響いて来た。

「おいおい…。奴さん、武器持って構えちまつたぜ？」

「そうだな。武器を取らなきゃ、苦しまずに逝けたつてのに…。」
「まあ、相手はその気なら、こちらもそれに応えるのみだ。それでは2人共、始めるとするか…。」

それ以降、声は聞こえなくなり、森の中は再び静寂に包まれた。そしてそれは、予想だにしなかった形で破られる。

ドサツ

不意に、誰かの倒れる音。それも、一度や二度じゃない。次々と倒れていく。それはまるで、盤上で将棋倒してもしているようだった。相手は数人で、こちらは少なくとも40人はいた。にも関わらず、この圧倒的とも言える地力の差。生き残るためには、命令を無視するしか方法が無かった。

「に、逃げるー！！！」

相手は数人。残ってるやつ全員で散り散りに逃げれば、誰かしら犠牲は出るだろうが、逃げ延びれる可能性が増えるはずだ…。

光の一切届かない森の中を、ただただ死に物狂いで逃げ回った。今が何時で、どの方角に向かっているのかも分からない。だが、そんなことなど気にする暇もないくらい、頭の中は逃げることで一杯になっていた。

「おわっ!?!」

足元が見えないせいか、木の根に足を引っ掛けて、盛大に躓いた。

その時、目の前に何かが落ちて来るのが分かった。

「よう、旦那。来るのが遅かったじゃねえか。」

「っ!？」

「ほら、元いた場所に帰ろうぜ？おたくのお仲間が、全員揃ってあなたの帰りを待ってたんだ。」

全員だと!？そんなこと、信じられるわけが無い!!

「嘘だ!？あれだけの数の人間を、この暗い森の中で捕らえられるはずが無い!!」

「信じられねえのは当たり前だ。だから、その目でしっかりと確かめてみな。」

直後、腹部に鋭い痛みが走り、意識を飛ばした。次に目が覚めた時は、逃げ出す前まで待機していた場所で寝ていた。起き上がった周りを確認すると、我が目を疑う光景があった。

「お、おい…。大丈夫か？」

返事が…いや、既に息が無い。誰1人欠かすことなく確認したが、1人として生存者はいなかった。…絶望した。

「どうだ？仲間と再び顔を会わせた感想は？」

顔を上げると、黒い外套を羽織った男が3人いた。

「貴様らは一体…？それに、ここまでやる必要は！？」

「今から死に行く者に、何一つ話すことなど無い。」

逃げる暇すら与えられず、左の肩口から斜めに斬られた。

「あ…ぐう…ああ…！！」

「ふむ、殺し損ねたか…。今、楽にしてやる。」

男が取りだしたのは、刃が無い代わりに刺突に特化したように見える短剣。

「緩慢に死に行く者に、慈悲を…。」

振り下ろされた短剣は、真っ直ぐ心臓を貫いた。もう、痛みも何も感じない。何だか眠くなって来た。瞼が重い。そしてゆっくりと、瞳は閉じられていった…。

第五十九話 眠りの森〜主人公と部下、主役交代説浮上！？〜（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

アンケートの方はまだ募集していますので、よろしければこちらもよろしく願います。

第六十話 勝利の美酒〜解説不能な翠語と役得〜（前書き）

投稿が遅れてすみません…。

第六十話 勝利の美酒／＼解読不能な翠語と役得／＼

流琉を取り戻すために追いかけていたら、周囲が木で覆われた開けた草原に出た。そこに、流琉を抱えた女性が立っていた。

「見つけたぞ！！流琉を返せ！！」

「貴女が見つけたんじゃ無くて、私の方から見つかってあげたのよ？そこ、勘違いしないようにね。それと、返せと言われて素直に返す馬鹿がいると思うの？」

「なら、力ずくでも取り返して見せる。覚悟しろ、誘拐犯め！！」

「あら、怖い怖い。なら私は、逃げさせてもらっわ。」

「させるもんか！！」

鉄球を振り回し、誘拐犯に向かって振り下ろした。でも誘拐犯は、ボクの攻撃をあっさり避け、流琉を抱えたままボクを飛び越し、今走って来た道を逆戻りして行った。

「逃がさないぞ、待てえー！！」

流琉を取り返すため、ボクももう一度森の中へ入って行った。

追いかけていると、兵達と別れた場所の近くを通っているのに気が付いた。そういえば、待機命令を出した兵達はどうしてるんだらう？流琉を急いで追いかけていけど、どうせなら皆の手も借りようかな。

追跡を一旦止めて兵達が待機している場所に向かい、その場所に着いたは良いけど、誰もいない。もしかして、場所間違えちゃったのかな？少し辺りを見回していると、茂みの向こうに兵士達が休んでいるのが見えた。

「なんだ、あんなところにいたのか…。おい、皆ー！！」

返事が無い。もしかして、皆揃って寝ちゃってるのかな？

寝ているのかどうかを近付いて確認してみても、初めて兵達が黙り込んでる理由がわかった。

「何、これ…？」

軍服に、赤黒い染みが広がっていた。こんな染み、戦場で怪我を負った人や亡くなってしまった人にしか出来ない。それは、人の血で出来たものだから…。

「皆、しっかりしてよ！！ねえ、ねえってば！！」

揺すっても起きない。頬を張っても、ぴくりともしない。

「どうしよう…。華琳様から預かってる、大事な兵なのに…。」

これじゃ華琳様にも春蘭様にも、顔合わせ出来ないよ…。

変な髪型をしたツルペタ少女の追って来る気配が無くなった。何かあったのかどうかは知らないけど、おかげでこっちは気楽に逃げ

れるからありがたい。そうこうして逃げているうちに、伯珪さん達の一団を見つけた。

「あれ、伯珪さん達じゃないですか。さっきぶりですね？何をしてるんですか？」

「ああ、ドライか。私達は今、森にいる残存兵達を…って、その抱えてるのは？」

「この子ですか？魏の兵達を指揮していたんで、適当に気絶させて連れて来たんですよ。とりあえず、捕虜にしておこうかと思いましたが…。あの、お願いがあるんですけど良いですか？」

これ以上、あのツルペタ少女の相手をするのは面倒だから、厄介事は伯珪さん達に押し付けることにしよう。あまり遅くまで働いてると、肌によくないし…。

「別に構わないけど、そのお願いってのは？」

「実はですね、この子を取り返そうとしている敵将がまだ森の中に1人ですので、その子の相手をして欲しいんですよ。あ、見つけれなくても、別に構わないんで。」

「分かった。正直、銅鑼を鳴らした以外は大した仕事してないしな。それぐらいは引き受けさせてもらうよ。で、相手はどんな奴だ？」

「鉄球をぶんぶん振り回してる、変な髪型をした怪力少女で、背はかなり低いです。それじゃ、よろしく願いしますね。」

伯珪さん達にツルペタ少女を押し付けて、私は一足先に御主人の下

へと引き上げることにした。残った雑魚の相手程度なら、他の皆が片付けてくれるでしょう…。

森の中に敵将がいるとの情報を得た私達は、話し合った結果、とりあえず二手に別れて搜索することになった。

「で、組み分けはどうするんだ？」

「この中で一番強いのはお姉さまでしょ。なら、たんぼぼと白蓮さんが組めば、戦力的に調度良いんじゃない？」

翠は愛紗達と同じくらいの高さだし、蒲公英と2人掛かりで挑んでも、数回に一度勝てるかどうかだろう。

「そうだな。じゃあ公孫贖、たんぼぼのこと任せたぜ？たんぼぼも迷惑かけるんじゃないぞ？」

「もう！！お姉さまったら、たんぼぼのこと子供扱いして。…行くっ、白蓮さん。」

蒲公英が拗ねて、先に行ってしまった。残された私達はお互い苦笑いを浮かべて、それからすぐ二手に別れた。

蒲公英に追い付いた後は、森の中を索敵しながら進んで行く。しかし、相手が1人だからか、それとも聞いていた通り敵の背が小さいからか、なかなか探し出すことが出来ない。それどころか、手掛かりすら掴めない。

「流石に無理があるな。夜の森で、たった1人を探し出すってのは

…。」

「こうなったら、朝になるまで待ってから探した方が良いんじゃない？」

「…そうだな。ドライは、別に見つけられなくても良いって言うたし、一度翠と合流して、朝になったらもう一度探すことにしよう。」

搜索を一旦止め、翠と合流した。私達が来たことに最初は驚いていたが、事情を説明すると、すぐに了解してくれた。どうやら、翠の方もお手上げ状態だったらしい。

夜が明けるまで小休止を取り、再度森の中を搜索したが、ドライの言っていた怪力少女とやらを見つけないことが出来なかった。多分、夜の内に森を抜けてしまったのだろう。これ以上ここにいっても意味は無いし、部隊を纏めて桃香達の下へと戻ることにした…。

深夜に始まった赤壁での戦いで曹魏を退けることに成功した俺達は、河口にある本陣へと軍を引き上げた。到着すると、何だかいらついで馬超とそれを宥めてる公孫賛達が出た。

どこに行つたのか話を聞くと、朱里ちゃんの指示で、曹操の退路に伏兵として待機して追撃を行つたと言う。ただ、詳しく話を聞くと、その追撃は俺の部下の役割で、実質やつたのは銅鑼を鳴らしながら曹操を追いかけたことだけだったらしい。

「それじゃあ、馬超がいらついでる理由って…。」

「ああ。今回は全然戦えなかったから、不完全燃焼でいらついでるんだ。」

どうやら、馬超は霞に負けず劣らずなバトルジャンキーのようだ。何だろつ、嫌な予感がする。ここは、逃げるが勝ちだ。そう思い立ち、一步目を踏み出した時だった。

「そつだ！なあ沖原、あたしと一戦交えてくれないか？」

「…はい？」

嬉しくも無い予想つてのは、どうつても悉く的中するんだろつな。

「だから、あたしと勝負してくれないかつて言つてんだよ。」

「何となく想像付くけど、一応理由を聞いておく。…何でだ？」

「そこにお前がいたからだ。」

なに、『そこに山があるからだ』みたいなこと言つちやつてんの！？もしかして、馬超は武人じゃなくて、槍捌きがやけに上手な登山家か何かなのか！？

「全力で却下だ。」

「えー、何でだよー！？」

「戦つ理由が無いのと、疲れてて面倒だからだ。」

「そんなの、動いてれば直ぐに消えるって。なあ、頼むよ。あたしと戦ってくれよ。」

馬超め、なかなかしぶといな。仕方ない、こうなったら…。

「分かった。その代わりに、条件がある。」

「どんな条件だ？あたしに出来ることなら、何だって良いぞ？」

「簡単なことだ。馬超の愛馬と俺の愛車、どっちが早いか勝負しよう。もし俺が負けたら、一戦交える。逆に馬超が負けたら、今回の件は諦める。これでどうだ？」

「その勝負、乗った！！言っとくけど、あたしの馬はその辺の馬とは違うからな？」

乗っちゃったよ…。一刀だったらこの勝負に乗らなかつただろうけど、バイクの事を知らない馬超なら仕方ないか。

「よし。それじゃ、四半刻後にもう一度ここで会おう。じゃあな。」

馬超達と一度別れ、自分の天幕に戻ると、何故かドライだけがいた。しかも、見覚えのある女の子を抱えている状態で…。

「…あれ、どうしてお前がここに？それに、他の皆は？」

「私だけ、一足先に戻って来ました。この子のこともありましたし。」

そう言って、俺の前に簀巻きにされた女の子を乱雑に放り投げる。

2回ほど転がって、顔がちょうど真上に来る。その正体は…。

「…典韋、お前まで捕まったのか。」

「私以外にも、捕まった人がいるんですか？」

「ああ。…この子を楽進達の所に連れて行ってくれ。あと、簀は外してやれよ？俺はちよつと、野暮用があるから。」

それだけ言い残して、バッグを片手に天幕から出た…。

天幕から出た後、特に人目も気にせずポストンバッグから愛車を取り出した。呉の人間はこのことを知っているし、ここは呉の陣営内だから、蜀の将達には見られることはない。

そろそろ時間だ。さっさと勝負を終わらせて、休むとしよう。

約束した時間に到着したが、馬超の姿が見えない。それからさらに四半刻待ったが、それでも来ない。まさか、忘れてるなんていう奇跡は…。

「おーいー!!」

起きないよな…。

馬から降りてこっちに近付いて来る馬超の顔は、何だかばつが悪そうな顔をしていた。

「いやー、その、なんだ…。遅れてすまん!!」

「まったく…。勝負しろって言った本人が遅刻するなよ？もし遅れて来たのが孫権達だったら、頼にお詫びのキスの一つくらいは要求されてもおかしくないからな？」

「きす？何だそれ？食い物か何かか？」

「キスつてのは、俺達の世界の言葉だ。言い換えるなら、口づけだな。他にも、接吻や口吸い、ベーゼなんて言い方もある。」

そこまで説明したところで馬超の方を見ると、何だか様子がおかしい。

「おい、どうしたんだ？」

馬超の肩に、手を軽く置いた。

「 @ つ！？」

…何語なのか分からない奇声を上げたかと思うと、真っ赤な顔をして馬に乗り直し、全速力で明後日の方向に走り去ってしまった。

「何なんだ、いったい？」

まあ、とりあえず勝負はせずに済んだしラッキーだと思い、自分の天幕へと引き返した…。

翌日、両軍の君主と軍師が集まって話し合いがあった。その内容は、曹操を退けた今、お互い軍の再編をする必要があるため、一度

国に戻る必要があるとのことだった。

赤壁の戦いは勝ったとは言え、損害は決して少ないわけじゃない。ならば、なるべく早い内に軍の立て直しを図るべきだということになり、桃香ちゃん達は、昼頃に成都へと帰還して行った。

もちろん、軍の再編は呉も例外ではなく、建業へと帰還した。計6名の捕虜を連れて…。

帰還中、特に何かがあったわけでもなく、無事に建業へと辿り付いた。約3週間ぶりの建業は特に変わった所も無く、街にも民にも活気が満ち溢れていた。

城に戻るなり、雪蓮が皆を玉座に集めた。今から何かするようないくともあつたかな？

「聞いてちょうだい。皆、今夜は盛大に宴を開くわ。ちなみに、全員強制参加ね。」

「…雪蓮、別に今夜じゃなくても良いんじゃないか？」

「いいえ、今夜やるわ。もう決めたもの。…もしかして、邦裕は皆と飲みたくなかったの？」

「いや、そういうわけじゃ「じゃ、決まりね。」「…はあ。」

こうして、宴の開催が決定した。

そして、その夜…。

「祭ー、飲み比べしましょ？」

「おい、酒が足らんわ！！もっと持ってこんかい！！」

「そうだ、この程度では足りん！！肴も足りんぞ、じゃんじゃん持
ってこい！！」

「うー、ひっく。ちょっと明命、私の話ちゃんと聞いているの？」

「あははははは。」

「……………もぐ。」

もう随分飲んでいるというのに、まるで今から飲み始めるかのよう
なテンションで、祭に飲み比べの勝負を挑む雪蓮。侍女達に、酒と
肴の追加を要求する霞と柳花。絡み酒の亜莎と、笑い上戸の明命。
さつきから、いっこうに箸が止まらない恋。その他にも、泣き上戸
や既に酔って寝てしまった人など、それぞれの楽しみ方でこの時間
を共有していた。

一方…下戸である俺は、隅っこの方でちびちびと自分のペースで飲
んでいた。雪蓮達に巻き込まれたが最後、記憶が飛ぶまで飲まされ
かねないと、直感が叫んでいたからだ。その甲斐あってか、今のと
ころは問題なくゆっくりと過ごせている。

「あら、あまりお酒が進んでないのね。」

「…ああ、蓮華か。」

いつの間にか、隣の席に蓮華が座っていた。皆の様子を見ながらだ

ったから気付かなかった。

「あれ、思春は一緒じゃないんだな？」

「ええ。思春だつて、人だもの。四六時中私の護衛で気を張ってるし、今回の戦で疲れも溜まったんでしょね。椅子に座ったまま寝てるわ。」

蓮華の指差す方を見ると、たしかに思春が机に突っ伏して寝ていた。しかも、珍しいことに隙だらけで…。

「なあ、あのままじゃ風邪ひいたりしないか？」

「そうね。何か掛けてあげられる物は…。」

「なら、俺の上着を掛けてあげてくれ。」

包帯を巻いた右腕を固定するための三角巾から腕を外し、ロングコートを脱いで蓮華に手渡した。

「ありがとう。」

手渡されたロングコートを思春の肩に掛けてやると、隣に座り直した。

「さつきも聞いたけど、あまりお酒が進んでないのね。もしかしてお酒嫌いな？」

「嫌いじゃないんだけど、俺は下戸だから。雪蓮達みたいに飲んじやうと、2杯目にはもう記憶が飛んでるんじゃないかな。」

「そうだったの。なら、無理に勧めない方が良くわね。」

「そうしてくれると、とても助かるよ。」

それから少しの間、蓮華と色んな話をしながら酒を飲んでしたが、肩に寄り掛かって来て静かになったかと思うと、蓮華が眠っていた。掛けてあげられる物もないし、蓮華の部屋まで運ぶとしよう。

「雪蓮、蓮華が寝ちゃったから運んで来るよ。」

「はい、いつてらっしゃい。ほら祭、まだまだ行くわよ？」

「ったく、飲み過ぎるなよ？」

宴の場から出て、蓮華を部屋へと運んだ。寝台に寝かせ、部屋を後にしようとしたら、寝ぼけているのか、蓮華が抱き付いて来て離れなかった。

「…どうしようか？」

抱き付いてる手を外せば宴の場に戻ることが出来るけど、今戻って雪蓮達の標的にされたら堪ったもんじゃない。それに、蓮華の手を外すのも、正直気が引ける。

「…失礼します。」

たまには、こんな役得があっても罰は当たらないだろう。もう一度蓮華を持ちあげ、そのまま共に寝台に横になり、眠ることにした。

翌朝、先に起きた俺は、まだ夢の中にいるであろう蓮華を起こさないように静かに部屋を後にし、宴の場へ足を運んだ。

すると案の定、酒の匂いが充満し、至る所に空になった酒瓶や空き皿が散乱していた。そして、最後まで飲んでいたのである。酒豪達が、揃っていびきをかきながら突っ伏していた。酒豪というのはもちろん、雪蓮、祭、霞、柳花のことだが…。

しかし、現実とは酷いもので…。俺の後に来た冥琳は、この現状を目の当たりにして怒りを露わにした。多分、飲み過ぎるなど忠告をしておいたのだろう。そしてその忠告を、誰一人として聞かなかった結果がこれなのだとしたら、冥琳が怒るのも無理は無い。

全員を叩き起こすと、二日酔いで苦しんでいる4人に鞭打ち、部屋の後片付けをさせ始めた。流石に大変だろうと思いつ伝おうとしたら、俺には本物の鞭が飛んで来た。

「ちよっ！？冥琳、危ないだろ！！」

「手を出すな、邦祐。これは、私の忠告を聞かなかった罰だ。ほら雪蓮、休んでないで早く片付けなさい！！貴女には、今日中に処理してもらいたい案件が山のように残ってるのよ！！他の3人も、これが終わったら兵達の訓練があるから、二日酔いを理由にさぼれるなどと思わないように！！」

「あ、あはは、ははは、はあ…。」

もう、空笑いするしかなかった。

「ちよっとな邦祐、笑ってないで」そこ、手を休めない！！」冥琳の

鬼〜!!」

それでもなんとか、片付けを終わらせることが出来た。でも、災難は終わらない。4人はその日一日、食事の時間以外一切の休みを強制的に返上させられた。改めて、冥琳の怖さを肌で実感したのは言うまでも無いだろう…。

第六十話 勝利の美酒／解読不能な翠語と役得／（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

活動報告のほうにあるアンケートの方も、まだ募集しますので、よろしく願います。

第六十一話 乱世の終わり(上)〜それぞれの天下〜(前書き)

今回は、短めになっております。

第六十一話 乱世の終わり（上）〜それぞれの天下〜

赤壁から後退した俺達は、新野城まで戻って来た。ここまで追っ
て来れるほど、相手の受けた損害は軽微なものじゃないと判断した
からだ。

でも、この戦で失ったものは多く、今まで以上に軍の再編に時間と
労力が掛かることは、想像に難くなかった。事実、部下である北郷
隊の3人、軍師の稟と風、季衣と並ぶ華琳の親衛隊隊長である流琉
が、俺達の下に帰って来ていない。

「結局、敵の追撃を振り切り、難を逃れたのは私達だけだったわね
…。」

「はい。…ですが、華琳様が無事であったことだけが、我ら家臣
にとっては不幸中の幸いかと。」

「私も、貴女たちだけでも無事で良かったわ。ところで桂花、現在
の軍の様子は？」

「現在の我が軍は、将はここにいる春蘭、秋蘭、季衣だけになり、
軍師も私のみという状況です。兵の数も、退却時に受けた追撃のせ
いで、数万程度しか残ってはいません。」

現状を聞き、普段は自信に満ちている華琳の顔が、何とも言えない
表情になっていた。

「…もはやこれまで、と言ったところなのかしら？」

「ですが華琳様!!」

「…桂花、聞きなさい?」

納得がいかないのか、桂花が反論しようとするが、その前に華琳がそれを制する。そして一呼吸置き、話し始めた。

「私達は、相手の数倍に匹敵するほどの兵力と、互角以上に戦うことの出来る有能な将達がいたにも関わらず、戦場には多くの仲間の血がまみれた。そして…我が覇道に賛同し、付き従ってくれた多くの仲間達を失った。」

そしてまた、一呼吸置く。

「これはもはや、天命は我を見離した…いや、もしかしたら、孫策暗殺の時点で、既に見離されていたというのが正しいのかもしれない…。」

「天は霸王よりも、世の均衡を求めた。そういうことですか?」

「きつと、そうなのでしょ…ね。」

そう応え、天を仰ぐ華琳の表情は、普段見る華琳の表情とは違うように見えた気がした…。

帰還した日の宴から数日後、桃香ちゃんと朱里ちゃんが護衛役の愛紗と兵を連れて建業を訪れた。何か聞きたいことがあるのだからか言ってたけど…。

「赤壁以来…って言っても、数日振りか。それで劉備、今日はどういった用件？」

「そのですね、あの…孫策さんは、天下を取って大陸を統一したいという考えは、今でもありますか？」

「私？そんなの全然ない。私は、呉に暮らす民と家族、皆が笑って暮らせる世が作れば、天下統一なんてどうだっていいわ。それに、私には既に呉という天下があるしね。それでもう、十二分に満足よ。それ以上は、私の手に負えないわ」

「呉という天下、ですか？」

「ええ、そうよ。貴女だつてもう蜀の王なんだから、蜀という天下があるでしょ？それにこれは、曹操にだって言えることよ？霸道だとか領土的野心だとかはあるだろうけど、あの子にだって魏という天下が既にある。結局は、天下の数だけ別々の考え方があってことよ。で、私に聞きたいのはそれだけ？」

念を押すかのように、雪蓮は桃香ちゃんに聞いた。その問いに、桃香ちゃんは無言で頷いた。

「じゃあ逆に聞くけど、そういう劉備こそどうなの？それこそ曹操みたく、立ち足はだかる敵を全員倒しても天下統一したいの？」

自分がした質問が返って来たことに一瞬驚いていたけど、桃香ちゃんはずくに答えた。

「私ももう、天下を取りたいだなんて思ってません。それに私、思うんです。今この大陸で大きな力を持っているのは、曹操さんと孫

策さん、そして私の3人。なら、その私達が柱となって力を合わせれば、もう争わなくてもこの大陸を平和にすることが出来るんじゃないかって…。」

そう話す桃香ちゃんの表情は、切実だった。

「劉備だけでなく、曹操ともねえ…。でも本当に、そんなことが出来たりするのかしら？」

この疑問に、今度は朱里ちゃんが口を開いた。

「大丈夫だと思います。今残っている三国の勢力は、今までは曹操さんが頭一つ飛び抜けていました。ですが今回の戦で曹操さんの戦力は大幅に下がり、私達と同等、若しくは蜀軍以下になっていることでしょう。」

たしかに、魏は多くの兵士を失った。兵に関しては、こっちも当てはまるが…。また、魏は兵を指揮する将や軍師達が捕虜として、現在建業の城の牢屋に囚われている状態だ。今戦えば、蜀の軍勢だけでもそこまで苦戦することなく勝てるだろう。だが、今の魏を相手に蜀呉で戦を仕掛けたら、それこそ軽い反董卓連合の再来だ…。

「曹操さんの力が弱まっている今だからこそ、曹操さんと交渉の機会を設け、それで和平を結ぶことが出来れば、これ以上民を苦しめずに済みます。私はこれを、天下三分の計を、桃香様の理想を叶えてあげたいんです!!」

「…冥琳は、どう思う？」

少し考える素振りを見せた後、静かに口を開いた。

「…孔明よ、もし曹操が和平を断った場合はどうするつもりだ？それでもなお、主のためと説得を続けるか？仮に私がお前の立場ならば、和平を断れば容赦なく曹操を叩き、呉と蜀で大陸を東西に二分して統治するように進言するだろう。」

どんよりと、その場の空気が重くなる。それでも冥琳は何ら変わった様子も無く、一息付いて再び話し始めた。

「だが決して、孔明の考えが悪いと言うわけではない。むしろ、実現が可能ならばそれが誰から見ても最善であろう。それに、今この大陸と勢力を二分するよりも、三竦みによって互いを監視し合わせた方が、いざという場合に対処しやすく合理的なのは確かだ。…それに、私達には江陵での一件がある。孫呉の誇りに反しないためにも、手を貸そう。そうでしょう、雪蓮？」

「ええ。そういうわけだから、今回は手を貸してあげるわ。」

「あ、ありがとうございます…！」

これで、これから何をするかが決まった。後は、肝心の曹操の居場所を突き止めるだけだ。

「あ、曹操さんって今どこにいるんだろう？」

「それなら、こっちで調べておいてあげるよ。早くても数週間は掛かるだろうけど、調べが付いたら部下をそっちに送るから。」

「はい、お願いします…！」

その後、今から城に戻るとなると夜になってしまつたのことで、雪蓮が賓客用の部屋を桃香ちゃん達に用意し、翌朝になって桃香ちゃん達が成都に戻るとの同時に、曹操の居場所探しが始められた…。

曹操の搜索が始められてから一ヶ月半が経ち、やつこのことで曹操の居場所を突き止めることが出来た。斥候からの報告によると、どうやら現在は新野城にて身を潜めているようだ。

「よし、それじゃ誰でも良いから成都までお遣い頼む。」

「じゃあ、今回は俺が行ってきやすぜ。あらよつと…。」

それだけ言うと、独特の掛け声と共に姿を消した。

「残りの4人は待機しつつ、何か起きてもすぐ動けるよう、準備だけはしておいてくれ。」

「…」
「御意。」

そして4人も、フロンフ同様に姿を消した…。

新野城に立て籠り、軍の立て直しを図ってから二ヶ月近くが経とうとしていた。呉と蜀が、何時また攻撃を仕掛けて来るか分からない以上、最低限の自衛の意味も兼ねて戦力を回復させはしたが、今のままじゃどちらにしろ大軍を退けること自体難しいだろう。戦局を見誤れば、全滅だってあり得ないことじゃない。

しかも最近の華琳は、蜀呉のことと持病と言える頭痛の2つに苛まれ、体調を崩し気味だ。なので今は私室で休み、桂花が全体の指揮

を代わりに取っている。

そんな状況でも俺は、いつか反撃の機会が訪れると、そう思っていた。でもそれは、偵察に出ていた兵達の報告によってあっさりと打ち碎かれることとなった。

偵察から聞いた報告を華琳に伝えるため、急いで私室へと向かった。部屋の前に着くなり、俺は少し乱暴に扉を叩き華琳を呼んだ。

「…誰なの？頭が痛いと言うのに、そんな乱暴に扉を叩くのは？」

「そんなこと言ってる場合じゃないぞ、華琳！！蜀と呉の軍勢が、この城に向かって来てて、取り囲まれるのも時間の問題だ！！」

「何ですって！？」

血相を変えた華琳が、部屋から飛び出て来た。

「一刀、皆をここへ集めなさい。」

「分かった！！」

来た道を戻り、戦の準備をしていた春蘭達を呼ぶ。合流してから再度、華琳の部屋を訪れた。

「華琳、皆揃ったぞ！！」

「ご苦労様、一刀。…皆も知っている通り、蜀と呉の軍勢がこの新野城を取り囲まんとしているわ。それに比べ、こちらは少数。とにかく籠城して、相手がどう動くのかだけ見ておくことにしましょう。」

「
ですが、ここは少しでも打って出るべきでは…!!」

「春蘭…。今の兵数で、打って出るのは無謀というものよ。今はこのまま、何とかやり過ごしましょう。」

「…はい。」

この場にいる全員が、やり切れない気持ちだろう。特に、春蘭や季衣なんかは、唇を強く噛み締めている。俺だってそうだ。赤壁で連環の計を完璧に破って、完全にこっちの流れに出来たと思ったのに、あっさりと覆された。それどころか、風や沙和、真桜を失っただけでなく、流琉や稟、風までも失った。なのにあいつは、周りにいる将達を誰一人失っていない。一体、俺達の違いは何だって言うんだらうか…。

第六十一話 乱世の終わり(上)〜それぞれの天下〜(後書き)

コメントやアドバイス・誤字等ありましたら、よろしく願いします。

第六十二話 乱世の終わり(下)〜穏やかな日々を〜(前書き)

これでとうとう、この作品は最終話となります。若干、強引な部分もあつたと思いますが、それでも読んで下さった方々、色々な意見を下さった方々、本当にありがとうございます。

それでは、最終話をお楽しみいただけたらと思います。どうぞ。

第六十二話 乱世の終わり(下) ～穏やかな日々を～

ついに、新野城を取り囲まれた。さつきから劉備らしき人の声が、話を聞いてくれと必死に呼びかけているが、こっちは全く反応する必要がない。籠城しているのだから、出て行かないのは当たり前だ。すると、華琳を呼ぶ声が止んだ。向こうも呼びかけるのは諦めて、実力行使で来るつもりなのだろう。気を引き締めないと…。そう思っていたら、聞き覚えのある機械音が耳に入ってきた。

「あー、あー。」

「っ!?!」

「マイクテスト、マイクテスト、本日は晴天なり…。」

機械音の混じった、あいつの声が響く。想像を超えた大音量だったからか、俺以外の全員が耳を塞いでいる。俺は避難訓練とかで聞き慣れてたから、皆と違って全然平気だった。

「お、おい北郷、何だ今のは!?! 沖原の音が、やたら大きく聞こえたぞ!?!」

「あれは俺達の世界で使ってた道具で、自分の声を遠くまで聞こえるようにすることが出来るもんだ。…真桜がここにいたら、もしかしたら作れたかもな。」

それも今となつては、無理な話だ。一旦止んだ機械音が、また聞こえて来る。

「えーと、曹操さ〜ん、聞こえてますか〜？聞こえてたら、せめて城壁のところに出て来てくださ〜い！！出て来てくれないと、寝る時間になっても、交代しながら曹操さんの名前を呼び続けますよ〜？夜中になっても呼び続けますよ〜？眠れなくなっちゃいますよ〜？それでも良いんですか〜？」

…今はまだ日が出ているから良いけど、夜中じゃこれはただの騒音だ。夜眠れないとなると、次の日に響くことになる。

「…華琳。」

「これくらい、我慢すれば何でもないわ。このまま無視しておきなさい。」

華琳の言い付け通り、呼びかけを無視し続け、ようやく夜になった。そしてここから、呼びかけはだんだんと変わっていった。

「あ〜、あ〜、犯人に告ぎます。大人しく武器を捨てて、私達の話聞いて下さ〜い。」

「曹操よ、桃香様の言う通り、いい加減に諦めて姿を見せたらどうだ！！城に籠っても、貴様らに得なことなど何も無いぞ！！そろそろ、話し合いに応じたらどうなのだ！！」

「そーなのだ！！さっさと姿を見せるのだ、貧乳！！…鈴々は、人のこと言えないけど。」

「お主が出て来ねば、酒とメンマをゆっくりと楽しめぬではないか！！早く顔を出せ！！」

「曹操、頼むよ、早く出て来てくれ！私のもう、麗羽の子守役に疲れたよ！！」

まともな呼びかけは、最初の劉備と関羽のだけで、張飛のは悪口、あとの2人は愚痴にしか思えなかった。また機械音が収まったかと思うと、再度聞こえて来る。しかも今度は、話してる人が違うらしい。

「曹操、出て来なさいよ。貴女が出て来てくれないと、宴が開けないじゃない！！」

「そうじゃ、儂らに早く酒を飲ませんかー！」

「え、猛ちゃんやなく、惇ちゃんに告ぐ！！今から一勝負せえへん？」

…何か、さつきより酷くなってないか？

「曹操、悪いようにはしないからさ、顔出して…って、おわ、何すんだよ！？」

向こうで何かあったみたいだけど、とりあえず騒音は止んだみたいだ。これでやっと静かになると思ったのも束の間…。

「おつつっほんー！華琳さあん、私の声が聞こえていて？まあ、この私の美声なら、聞こえていないはずありませんわよね？」

この高飛車な感じは、袁紹なのか？

「何時だったか、私と戦った頃と比べて、貴女も随分と落ちたものですね。今じゃ、こんな城の中に籠るのが精一杯だなんて…。今の貴女など、私の足元にも及びませんわ!!!」

間違いない。この偉そうな喋り方は袁紹だ。

「もし!!それは違うと言うのであれば、貴女のその情けない面を私に見せて下さらないこと?もちろん、情けなくて見せられないのであれば、無・理・に・とは言いませんけど?おーほっほほ、おーほっほっほっほ!!!」

あいつ…!!言うに事欠いて、言いたい放題言いやがって…。

「…言うてくれるじゃない、麗羽。良いわ、顔くらい出してあげようじゃない!!」

「華琳!?!」

どうやら、袁紹の言葉で頭に血が上ってしまったようだ。春蘭達が説得や制止を試みるも、それらを振り払い、城壁へと出て行った…。

華琳だけで敵の前に行かせるわけにもいかず、急いで追い付いた。

「麗羽、貴女の望み通り、顔を見せてあげたわよ。それと、貴女じや一生掛かっても私の足元には及ばないということを、その足りない頭にしっかりと刻み込んでおくことね。」

華琳からの挑発に袁紹が反発しようとしたその瞬間、邦祐が強制的に黙らせ、トラメガを取り上げた。

「…麗羽を黙らせてくれたこと、まずは感謝するわ。それで劉備、話とは一体何なのかしら？」

劉備は、彼女はどんな話を華琳に切り出すのだろうか…。

「私達、曹操さんと和平を結びたいんです!!」

「和平…ですって?この私と?」

「はい!!もう、私達が争う必要なんて無いんじゃないですか?私達が協力しあえば、争うことなく、大陸も平和になるし、力を持たない人達だって安心して暮らせると思うんです!!」

「…そうね、確かに貴女や孫策と和平を結べば、争う必要もなくなるし、この大陸にも平和が訪れることでしょう。それに関しては、分からないでもないわ。でもね、それは所詮一時の平和でしかない。私が選んだ道は霸道、霸王曹操としての道。」

力強く、劉備に自らの考えを説く。

「良い、劉備?国が複数存在するから、無益な争いが起きる。ならば、誰か1人が王となり国を真に治めればこそ、この大陸に本当の平和が訪れる。私は、その為に戦って来た。なのに、何故その邪魔をする?」

華琳は、劉備にはつきりと伝えた。そうだ、俺達が今まで戦って来たのは、華琳の目指す霸道を叶えるためだ。それを今さら和平を結べだなんて、出来るわけがない。華琳が三国を統一すれば、きっと平和が訪れるはずなんだ。

「ねえ曹操、霸道だか霸王だか知らないけどさ、それは結局のところ、何を前提としたものなの？」

劉備と華琳の会話に、孫策までもが加わって来た。

「民や大陸の未来のことを前提にせず、他に何を前提にしろと言うの？」

「そう…。だったら、自分の考えを曲げるのは貴女の方よ？ここで私達と和平を結んで戦を終結させた方が、より早く民の安全に繋がるわ。それに残念だけど、私は呉という国を、孫家の血が流れる者以外に治めさせる気は無いの。だからここは、今治めてる魏の領地だけで我慢してくれないかしら？」

「それは私に、自らの覇業を諦めると言うの？」

「手短に言えばそうね。私達が三竦みでお互いを監視し合えば、疑似的ではあるけど平和は訪れる。それで良いじゃない？民草にとつて大事なのは、誰が王になるかじゃなくて、一日でも早く平和が訪れ、それが一秒でも長く続くことですよ？」

そこから、孫策の雰囲気が変わった。

「それとも、今この場で捕虜も含めて、全員一緒に天に召されたいのかしら？私は別に、それでも構わないのだけれど…。」

「待ちなさい！！私の部下達は、全員生きていると言うの！？」

「ええ。全員無事に返してあげても良いんだけど、そのかわりに私

達と和平を結んでもらうわ。その条件が飲めるなら、返してあげる。飲めないのなら…分かってるわね？」

もう会えないと思っていた皆が、無事に生きていた。これは、素直に嬉しいことだ。けど、再会するためには、華琳は覇道を捨てなければいけない。

「…少し、考えさせてちょうだい。」

「良いわ、明朝まで待つてあげる。本来なら、赤壁での敗者である貴女にここまで優しくする必要など無いのだけれど、どうかの天然さんのお人好しが移ったのかしらね。」

「…皆、一度城内に戻るわよ。」

肩をすくめる孫策を横目に、華琳に従い城の中へ戻ることにした…。

改めて、全員で話し合う。

「孫策の言うことが本当ならば、まだあの子たちは全員生きているということになるけれど…。」

「華琳様がどのような判断をしても、我らは共にあり続けると決めています。ですから、華琳様の望むがままにお進み下さい。」

「そうですね、華琳様！！私達は、華琳様のお傍を離れはいたしません。」

「秋蘭、春蘭…。」

「華琳様、ボク達だってそうですよ!!」

春蘭達に続くように、季衣達も華琳に改めて忠誠を誓う。

「…華琳、俺も華琳の決定に従うよ。華琳がいなければ、俺は今頃生きちゃいなかったんだから。華琳のしたい様にすれば良いさ。」

「季衣、桂花、一刀も…。ありがとう、皆。おかげで楽になったわ。貴女達以外にも私に忠誠を誓ってくれたあの子達を、こんなところで失うわけにはいかない。」

「それでは華琳様、和平の話を…。」

「ええ。」

こうして、華琳は霸王としての衣を脱ぐことを決めた…。

明朝、曹操が護衛である夏侯姉妹と一刀を連れて城外へと出て来た。

「曹操さん、お返事を聞かせて頂けますか？」

「ええ。劉備、そして孫策。私は、貴方達と和平を結ぶことにしたわ。」

「良かったー。もし曹操さんが断ったらどうしようって、ずっと不安だったんですよー。」

「まあ、何はともあれ戦わずに済んで良かったわ。さてと、まずは捕虜を返さないかね…。明命、彼女たちを。」

「はい、雪蓮様!」

雪蓮の指示で、明命が楽進ら魏の捕虜達を曹操の前へと連れて来た。

「捕虜6名、確かに無事に引き渡したからね。」

「ええ、確かに。…風、沙和、真桜、風、稟、流琉、6人共無事で何よりだわ。」

1人ずつ名前を呼び、その無事をゆつくりと噛み締めていく。

「華琳様、申し訳ございません。我らが力不足だったばかりに…。」

「良いのよ。貴女達は良くやってくれた。それより、またこれからいろいろと忙しくなりそうなの。これからも、私に付いて来てくれるかしら?」

「もちろんです!!我らの主は、曹孟徳様を除いて他におりません。これからも…貴女の傍に、居させて下さい。」

「ええ、よろしく頼むわ。」

曹操は頬笑みながらも、その目尻にはうつすらと涙の粒が浮かんでいた。他の将達も、泣き出す一歩手前の状態になっている。何だか微笑ましいというか、良い感じの雰囲気だな。

「雪蓮…。」

「ええ。曹操、細かい話し合いは追々するから、時期が決まったら使いの者を送るわ。劉備もそれで良い？」

「ええ（はい）！！」

これでようやく、大陸に平和が訪れてくれるはずだ。これからは戦とは違う忙しさに追われるだろうけど、それはそれで悪くない。

それから数日後、許昌にて三国での対談と各国の王達による書式への調印が行われた。決められた内容は、互いに助け合いつつも、お互いの国の政に対しては不干渉を貫くこと・一国が問題を起こした際は他の2国で対応すること・貿易による国内の活性化などだ。

大陸の平和に、少しずつだけど確かな一歩を踏み出すことが出来た。これからも、いろいろと問題が起きるだろう。そうだとしても、皆が力を合わせていける限り、何度困難という壁にぶつかることがあったとしても、乗り越えていけるはずだと信じて…。

後日談という名のおまけ

各国の王が調印を終えてから数年が経った。あれ以来、これといった大きな戦は全く無く、あっても賊の討伐くらいなものとなった。だから最近の主な仕事は、政務の手伝いなどの事務仕事ばかりとなった。

ふと、扉を叩く音が聞こえた。急いで扉を開けると、まだ生まれて間もない子供と手を繋いだ蓮華と霞が立っていた。そう、2人との

間に新たな命が生まれていた。名は、孫登と張虎。どちらも母親である蓮華と霞に似た瞳と、同じ髪色をしている。

あとの3人については…まあ、先のことだから分かりはしないが、いずれ新たな息吹が舞い込むかもしれないとしか言えないが、俺の方は、蓮華達も含めて全員と仲睦まじく過ごせていた。

一方の一刀は、風の噂で聞く限りだと、結局ずっと夏侯淵に勝てないままのようで、とうとう禁断の地へと足を踏み入れてしまったらしい。その禁断の地とは、男の娘だ。女の子のように可愛らしい容姿をした男の子にメイド服などに女装をさせては、その都度襲い掛かっていると聞いたことがある。

…いい加減、月に一度くらいは女性に手を出しても良いと言うべきなのだろうかと迷う時もあるが、正直いまさら感がある。なぜなら、一刀が完全にそっちに目覚めてしまっていたら、解禁したところで意味が無いかもしれないからだ。とりあえず、そういう噂が入って来るまでは、保留でいるとしよう。

正直、一刀については何が本当で、何が嘘なのかは良く分からない。でも俺は、この乱世の終えた世で、とても充足した日々を過ごせていた。

そしてこの穏やかな日常が、一日でも永く続いてくれることを、共に幸せな日々を享受できる人達と願い続けながら、時間と言う名の目には見えない歯車は、ゆっくりとした一定のリズムでただひたすらに廻り続けていくのだった…。

第六十二話 乱世の終わり(下)〜穏やかな日々を〜(後書き)

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

それと、ここで一つお詫びをしておきたいと思います。感想にて、ダンテが少ないとあり、本編後に出しますみたいなことを書いたのですが、今考えている新作の方を考えたいので、今回は真に勝手ながら、本編後のお話は切らせて頂こうと思います。ダンテの登場を待っていて下さった方には、大変申し訳ありません…。

次回作が出来あがった際には、再び皆様の目に止まって頂けるように少しでも面白いと思っただけのような作品を書いていこうと思いますので、また読んで下さったら嬉しいです。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3622o/>

真・恋姫†無双～悪魔の右腕を得た男～

2011年3月21日03時26分発行